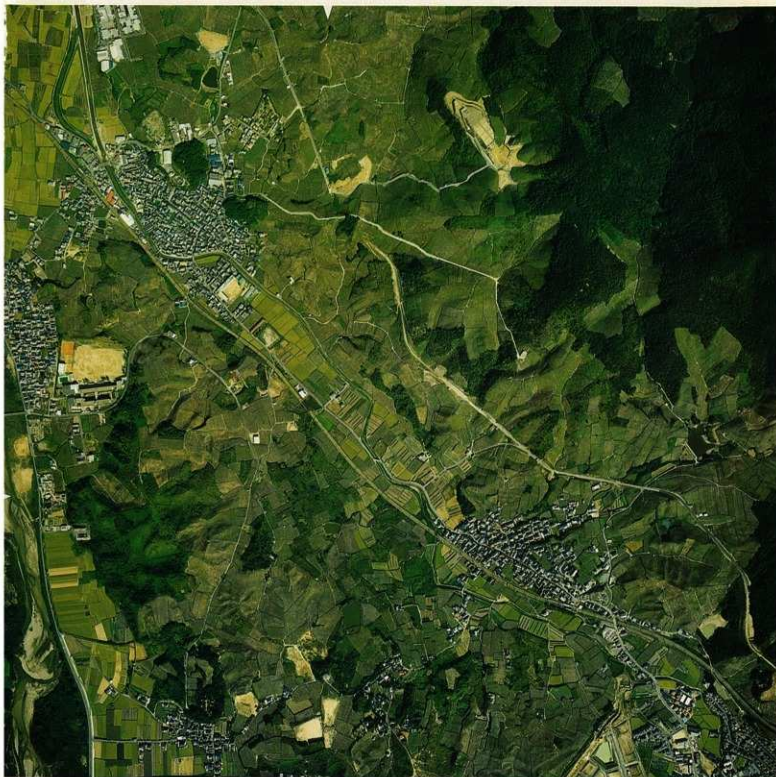


駒ヶ谷遺跡

— 南阪奈道路建設に伴う発掘調査報告書 —

1999年3月

(財)大阪府文化財調査研究センター



1. 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真（上が北、三角が交差する地域：1985年撮影）

北東に寺山と飛鳥千塚古墳群、南西に大黒丘陵と石川を望む

写真の中央を飛鳥川が流れ、それに沿って竹内街道（現：国道165号線）がはしる
飛鳥川に沿う集落のうち、写真左が駒ヶ谷の集落、写真右が飛鳥の集落であり、飛鳥
の集落内に飛鳥戸造氏の祖である毘支王を祭神とする飛鳥戸神社が所在している



2. 井戸424 下層出土 奈良三彩小壺



3. 同 奈良三彩小壺 (下から)



4. 井戸424 下層出土 柄杓



5. 井戸424 全景(南西から)



6. 井戸424 中層(9層) 製塩土器出土状況



7. 井戸424 中層(9層)出土 製塩土器



8. 井戸424 中層(9層)出土 凝灰岩切石



9. 同 凝灰岩切石 (下から)



10. 井戸424 下層出土 釣瓶として使用された土師器壺

11. 流路580 (調査区内黒い部分)と二上山



12. 流路580 出土 「古厨」墨書土器



13. 流路580 出土 「大林宅」墨書土器



14. 掘立柱建物跡 1・2 (北西から)



15. 掘立柱建物跡 3～5 (西から)



16. 掘立柱建物跡 14～17 (南東から)

17. 井戸1000石組検出状況（北西から）



18. 井戸1000水溜検出状況（北西から）



19. 掘立柱建物跡13（北から）

序 文

駒ヶ谷遺跡は、大阪府羽曳野市の中でも最東部に位置する遺跡である。この遺跡から飛鳥川や、古代における最初の官道といわれた竹内街道を東方向に見下ろすことができる。また東南方向に目を転ずれば、奈良県との県境に位置する二上山の美しい山並みを望むことが可能である。

この竹内街道は、摂津・河内と大和を結ぶ主要なルートであり、「近つ飛鳥」と呼ばれた遺跡周辺は大陸からの先進文化導入の際の門戸の一つであったといえる。だが「遠つ飛鳥」とよばれている奈良県の飛鳥に比して、この地域には考古学的な調査があまりなされておらず、その実態はほとんど不明であった。だが遺跡周辺には、飛鳥川をはさんで対岸の丘陵上に飛鳥千塚古墳群、そして観音塚古墳といった終末期古墳が点在していることが知られている。また、遺跡の南側のため池の堤から巨大な塔心礎が昭和初期に掘り出されており、歴史的に重要な地域であることは従来指摘されつづけてきた。

大阪と奈良を結ぶ南阪奈道路は、駒ヶ谷遺跡周辺では飛鳥川左岸を竹内街道と平行するような形ではしる。そのため当センターではその建設に先立って、1996年から本格的な発掘調査を行っている。

駒ヶ谷遺跡の調査は、1996年から着手している。その際に完全に埋没し、周知されていなかった古墳時代後期の前方後円墳を新規に発見した。この古墳は字名をとって蔵塚古墳と命名されている。一方駒ヶ谷遺跡からは、井戸から奈良三彩小壺や大量の製塩土器、流路から「古厨」と書写された墨書土器といった遺物が出土している。また廃棄土坑などの遺構から出土した奈良時代の土器群は、南河内における土器の一括資料を供することとなった。

最後に、発掘調査および遺物整理事業の実施にあたり、多大のご協力をいただきました大阪府教育委員会、建設省近畿地方建設局、近鉄不動産株式会社をはじめとする関係各位に深く感謝するとともに、今後とも当センターへの支援を賜るように切に希望する。

平成11年3月

財団法人 大阪府文化財調査研究センター

理 事 長 坪 井 清 足

例 言

1. 本書は、南阪奈道路の建設工事に伴って調査を行った、駒ヶ谷遺跡の発掘調査報告書である。駒ヶ谷遺跡は、大阪府羽曳野市飛鳥・大黒に所在する。
2. 発掘調査およびそれに伴う整理事業は、財団法人大阪府文化財調査研究センターが、建設省近畿地方建設局大阪国道工事事務所の委託を受けて実施した。
3. 発掘調査は、1996年12月から1997年12月の2年度にわたって実施している。
4. 発掘調査・整理事業ならびに本報告書作成には、大阪府教育委員会の指導の下に財団法人大阪府文化財調査研究センターが実施した。

発掘調査は南部調査事務所が所管し、南部調査事務所長藤田憲司、調査第2係長寺川史郎の指示の下、調査第2係技師江浦 洋・本田奈都子、専門調査員池田 武（1996年度のみ、現鳥取県大栄町教育委員会）が担当した。本書作成に関わる整理作業は、技師江浦・本田が行い、技師立花正治が写真を担当した。また、出土品の保存処理を中部調査事務所調査第3係主査山口誠治が行った。

5. 駒ヶ谷遺跡の発掘調査を行う上で、近鉄不動産株式会社には便宜をはかっていただくとともに、多大なる協力を得た。記して感謝の意を表する次第である。
6. 発掘調査および遺物整理作業の過程で、次の方々をはじめとする多くの諸氏ならびに諸機関に御指導・御教示を賜った。記して感謝の意を表する次第である。（敬称略、団体五十音順、団体内五十音順）

都出比呂志（大阪大学）、一瀬和夫・山本 彰（大阪府立近つ飛鳥博物館）、吉田 晶（岡山大学）、上原真人（京都大学）、北野耕平（神戸商船大学）、池田貴則・鍋島隆宏（太子町教育委員会）、野島 稔（四條畷市立歴史民俗資料館）、神谷正弘（高石市教育委員会）、石野博信（徳島文理大学）、清水 篤（豊中市教育委員会）、中辻 亘（富田林市教育委員会）、工楽善通・巽順一郎・館野和己・山中敏史・渡辺晃宏（奈良国立文化財研究所）、堅田 直（奈良先端技術大学院大学）、池田裕英（奈良市教育委員会）、植野浩三・酒井龍一・水野正好（奈良大学）、伊達宗泰（花園大学）、笠井敏光・河内一浩・辻 学（羽曳野市教育委員会）、上田 睦・山田幸弘（藤井寺市教育委員会）、坂井秀弥（文化庁）、山中 章（三重大学）、山尾幸久（立命館大学）

7. 発掘調査および遺物整理作業の過程では、以下の方々を中心に参加、協力を得た（五十音順）

発掘調査

市原香奈・宇川里香・片山憲子・川田嘉代子・佐藤陽子・杉村裕美・瀬戸哲也・中筋英子・林 一歩
福田優子・山本順治

遺物整理

石井 光・市原香奈・宇川里香・江口和賀・岡本悦子・川田嘉代子・瀬戸哲也・中筋英子・中村慎子
山口純枝・行川 勝

8. 本調査に係わる遺物・写真・カラースライド・実測図などは、財団法人大阪府文化財調査研究センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

凡 例

1. 挿図の縮尺はその対象によって異っており、必ずしも一致していない。各図版のスケールに縮尺率を明示しているので参照されたい。
2. 遺構および断面図中の標高は、東京湾平均海面（T. P.）からのプラス値である。
3. 遺跡発掘調査に伴う地区割は、国土座標の第Ⅳ座標系に基づく表記方法をとっている。なお、本書で用いた北はいずれも座標北を基準としている。ちなみに座標北は、磁北より東へ $6^{\circ}40'$ 、真北より西へ $0^{\circ}12'$ 振れている。また座標の記載は、全てkm単位とする。
4. 調査区ごとの地区設定は、東から西にアルファベット順で地区割りを行い、それぞれの地区を調査の工程にあわせてさらに細分し、1A、2Aトレンチというように調査に着手した順に数字を冠して表記している。
5. 遺構図における断面位置は任意に行い、その都度図面上に位置を記した。また、遺構全体図における断面位置は、「L」形によって表現している。駒ヶ谷遺跡内での遺構図の位置に関しては、図面内に個々に明示している。
6. 調査段階では遺構の性格に関係なく、通し番号で遺構番号を付している。本報告書においても、調査段階で付した遺構番号の前に遺構名称を付し、遺構番号は変更していない。故に遺構番号が重複して付されているものは存在していない。ただし溝659は蔵塚古墳後円部周濠下層に、溝555・溝882は蔵塚古墳前方部周濠に遺構名を変更している。
7. 挿図および写真図版における遺物番号は、各挿図内で完結する番号を付与している。なお、挿図と写真図版の遺物の対照は、巻末の報告書掲載遺物一覧を参照されたい。
8. 遺物の実測図の縮尺は、いずれも1/4を基本としているが、土器によっては1/8のスケールを使用している。各々の縮尺率については、各スケールに縮尺率を明示しているので、そちらを参照されたい。
9. 土色は小山正忠・竹原秀雄編1995年度版『新版標準土色帖』農林省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所票監修に準拠した。
10. 報告書掲載遺物一覧の「口径」「胴部径」「器高」にある（ ）は復元実測による計測値を示し、「器高」にあるくは、残存高を示している。
11. 本書の執筆・編集は本田が行った。

目 次

巻頭カラー図版

- | | |
|------------------------|------------------------------|
| 1. 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真 | 2. 井戸424下層出土 奈良三彩小壺 |
| 3. 同 奈良三彩小壺（下から） | 4. 井戸424下層出土 柄杓 |
| 5. 井戸424全景（南西から） | 6. 井戸424中層（9層）製塩土器出土状況 |
| 7. 井戸424中層（9層）出土 製塩土器 | 8. 井戸424中層（9層）出土 凝灰岩切石 |
| 9. 同 凝灰岩切石（下から） | 10. 井戸424下層出土 釣瓶として使用された土師器甕 |
| 11. 流路580と二上山 | 12. 流路580出土 「古厨」墨書土器 |
| 13. 流路580出土 「大林宅」墨書土器 | 14. 掘立柱建物跡1・2（北西から） |
| 15. 掘立柱建物跡3～5（西から） | 16. 掘立柱建物跡14～17（南東から） |
| 17. 井戸1000石組検出状況（北西から） | 18. 井戸1000水溜検出状況（北西から） |
| 19. 掘立柱建物跡13（北から） | |

序 文 例 言 凡 例

（財）大阪府文化財調査研究センター

第1章 調査の経過と方法

- | | |
|---------------|---|
| 第1節 発掘調査に至る経過 | 1 |
| 第2節 発掘調査の方法 | 3 |

第2章 位置と環境

- | | |
|-----------|---|
| 第1節 自然環境 | 6 |
| 第2節 歴史的環境 | 9 |

第3章 調査の概要

- | | |
|---------------------|----|
| 第1節 基本層序と遺構面 | 12 |
| 第2節 駒ヶ谷遺跡の飛鳥・奈良時代以前 | 13 |
| 1. 藏塚古墳築造時期まで | 13 |
| 2. 飛鳥・奈良時代 | 14 |
| 第3節 駒ヶ谷遺跡の平安・鎌倉時代以降 | 14 |
| 1. 平安時代 | 14 |
| 2. 鎌倉時代以降 | 15 |
| 第4節 駒ヶ谷遺跡とその周辺 | 15 |

第4章 A地区の調査

第1節 A地区 弥生～古墳時代の遺構と遺物	16
1. 遺構	16
(1)流路1237	16
(2)蔵塚古墳	16
2. 遺物	16
(1)土器	16
(2)石製品	16
第2節 A地区 古代～中世の遺構と遺物	19
1. 遺構	19
(1)堀立柱建物跡	19
(2)溝	19
(3)土坑	22
(4)土器溜まり	22
(5)井戸	23
(6)ピット	25
(7)流路1237	25
2. 遺物	26
(1)土器	26
(2)石製品	44
(3)木製品	47
(4)瓦	47

第5章 B地区の調査

第1節 B地区 弥生～古墳時代の遺構と遺物	49
1. 遺構	49
(1)土坑878	49
(2)溝886	49
(3)土器棺643	49
2. 遺物	49
第2節 B地区東半部 古代～中世の遺構と遺物	49
1. 遺構	49
(1)堀立柱建物跡	49
(2)溝	51
(3)土坑	52
(4)土器溜まり	52
(5)井戸	52
(6)ピット	52

2. 遺物	54
(1)土器	54
(2)石製品 (石材)	60
(3)木製品	61
(4)銭	61
第3節 B地区西半部古代～中世の遺構と遺物	62
1. 遺構	62
(1)掘立柱建物跡	62
(2)その他の遺構	62
2. 遺物	62
(1)掘立柱建物跡14～17出土の土器	62
(2)その他の遺構出土の土器	62
第6章 C地区の調査	
第1節 C地区 弥生～古墳時代の遺構と遺物	64
1. 遺構	64
(1)東半部の遺構	64
(2)西半部の遺構	64
2. 遺物	64
(1)溝9から出土した土器	64
第2節 C地区東半部 古代～中世の遺構と遺物	67
1. 遺構	67
(1)掘立柱建物跡	67
(2)溝	67
(3)井戸	67
(4)木組み遺構	68
(5)流路	68
2. 遺物	72
(1)土器	72
(2)石製品	80
(3)木製品	80
第3節 C地区西半部 古代～中世の遺構と遺物	83
1. 遺構	83
(1)掘立柱建物跡	83
(2)溝	87
(3)土坑	87
(4)井戸	88
(5)ピット	88

2. 遺物	90
(1)土器	90
(2)石製品	99
(3)木製品	101
(4)瓦	101

第7章 基礎分析

第1節 駒ヶ谷遺跡の変遷	104
1. 各地区の遺構の変遷	104
2. 駒ヶ谷遺跡の遺構の変遷	111
第2節 井戸424から出土した製塩土器	113
1. 井戸424と製塩土器	113
2. 分類方法と土器の特徴	113
3. 井戸424から出土している製塩土器の特徴	116
4. 消費地と生産地の関係—今後の課題—	117
第3節 井戸424下層出土の釣瓶土器について	119
1. 井戸424から出土している土器	119
2. 釣瓶土器の計測方法	119
3. 釣瓶として使用している土師器	120
4. 釣瓶として使用している須恵器	121
5. まとめ	122

第8章 総括

1. 飛鳥～奈良時代の駒ヶ谷遺跡とその後	123
(1)立地	123
(2)飛鳥～奈良時代の遺構	123
(3)飛鳥～奈良時代の遺物	124
(4)飛鳥～奈良時代の駒ヶ谷遺跡	125
(5)平安時代以降の駒ヶ谷遺跡	126

挿図図版目次

図1 南阪奈道路と調査地	1
図2 調査地の位置	2
図3 国土座標系とそれに伴う地区	3
図4 トレンチ配置図	4
図5 地区割設定図	5
図6 駒ヶ谷遺跡周辺地形図	8

図7	周辺の主要遺跡(奈良～平安時代)分布図	9
図8-1	調査地全体図(西半部)	12
図8-2	調査地全体図(東半部)	13
図9	基本層序	14
図10	A地区 弥生～古墳時代出土遺物(弥生土器・古式土師器・石器)	17
図11	A地区 流路1237等平面・断面図	18
図12	A地区 藏塚古墳後円部周辺の古代～中世遺構平面・断面図	20
図13	A地区 土坑660・815、溝679、B地区 土坑885・1124平面・断面図	21
図14	A地区 井戸672・678・1187・1189・1191平面・断面図	24
図15	A地区 古代～中世遺構出土遺物(土師器・須恵器・瓦器)	27
図16	A地区 藏塚古墳後円部周濠下層出土遺物(土師器)	29
図17	A地区 藏塚古墳後円部周濠下層出土遺物(須恵器・緑釉陶器)	30
図18	A地区 溝679出土遺物(1)(土師器(1))	32
図19	A地区 溝679出土遺物(2)(土師器(2)・須恵器)	33
図20	A地区 土器溜まり851出土遺物(1)(土師器(1)・製塩土器)	36
図21	A地区 土器溜まり851出土遺物(2)(土師器(2))	37
図22	A地区 土器溜まり851出土遺物(3)(須恵器(1))	38
図23	A地区 土器溜まり851出土遺物(4)(須恵器(2))	39
図24	A地区 流路1237出土遺物(土師器・製塩土器・須恵器・緑釉陶器)	41
図25	A地区 流路1237遺物出土地点	42
図26	A地区 漆付着土器(土師器・須恵器)	43
図27	A地区 井戸672・678出土遺物(石製品(1))	45
図28	A地区 出土遺物(石製品(2))	46
図29	A地区 井戸678・1187、土坑1188出土遺物(木製品)	48
図30	B地区東半部 古代～中世遺構平面・断面図	50
図31	B地区東半部 井戸1000平面・断面図	53
図32	B地区東半部 古代～中世遺構出土遺物(土師器・黒色土器・瓦器)	54
図33	B地区東半部 土坑885出土遺物(土師器・須恵器)	57
図34	B地区東半部 土器溜まり884出土遺物(土師器・製塩土器・須恵器)	59
図35	B地区東半部 井戸1000出土遺物(木製品)	61
図36	B地区西半部 古代～中世遺構平面・断面図	63
図37	C地区 溝9出土遺物	64
図38	C地区東半部 古代～中世遺構平面・断面図(1)	65
図39	C地区東半部 古代～中世遺構平面・断面図(2)	66
図40	C地区 井戸356・657・658、木組み638、護岸施設656平面・断面図	69
図41	C地区東半部 しがらみ654・木組み655平面・断面図	70
図42	C地区東半部 流路580等平面・断面図	71
図43	C地区東半部 中世遺構出土遺物(瓦器・緑釉陶器)	72

図44	C地区東半部	流路580出土遺物(1) (土師器(1)・製塩土器)	75
図45	C地区東半部	流路580出土遺物(2) (土師器(2)・埴)	76
図46	C地区東半部	流路580出土遺物(3) (土師器(3)・須恵器(1))	77
図47	C地区東半部	流路580出土遺物(4) (須恵器(2))	78
図48	C地区東半部	井戸658・木組み638出土遺物 (木製品)	79
図49	C地区東半部	流路580出土遺物(5) (木製品(1))	81
図50	C地区東半部	流路580出土遺物(6) (木製品(2))	82
図51	C地区西半部	古代～中世遺構平面・断面図(1)	84
図52	C地区西半部	古代～中世遺構平面・断面図(2)	85
図53	C地区西半部	溝1、土坑439・523平面・断面図	86
図54	C地区西半部	井戸424平面・断面図	89
図55	C地区西半部	古代～中世遺構出土遺物 (土師器・須恵器・陶磁器)	90
図56	C地区西半部	井戸424上・中層(9層)出土遺物 (土師器・須恵器)	94
図57	C地区西半部	井戸424中層(9層)出土遺物 (製塩土器・須恵器)	95
図58	C地区西半部	井戸424下層出土遺物(1) (土師器(1))	96
図59	C地区西半部	井戸424下層出土遺物(2) (土師器(2)・須恵器(1))	97
図60	C地区西半部	井戸424下層出土遺物(3) (須恵器(2)・奈良三彩)	98
図61	C地区	古代～中世出土遺物 (埴・石製品)	100
図62	C地区西半部	井戸424出土遺物 (木製品)	102
図63	A・C地区	出土遺物 (瓦)	103
図64	A地区	遺構変遷図	105
図65	B地区	遺構変遷図	107
図66	C地区	遺構変遷図(1) (C-1～C-2期)	108
図67	C地区	遺構変遷図(2) (C-3～C-4期)	109
図68	駒ヶ谷遺跡	遺構変遷図	110
図69		製塩土器分類図	113

写真目次

写真1	駒ヶ谷遺跡周辺航空写真	7
-----	-------------	---

表目次

表1	井戸424下層出土釣瓶 容量計測表	120
表2	報告書掲載遺物一覧	
(1)A地区		129
①土器・石器	129	③木製品 132
②石製品	132	

(2)B地区	133		
①土器・石器	133	②木製品 133
(3)C地区	134		
①土器・石器	134	③木製品 136
②石製品	136	④瓦 137
表3 駒ヶ谷遺跡 主要遺構一覧				
(1)ピット	141	(4)井戸 147
(2)溝	146	(5)その他の遺構 148
(3)土坑	147		
表4 駒ヶ谷遺跡 掘立柱建物跡一覧	151		

写真図版目次

図版1	駒ヶ谷遺跡周辺航空写真(1956年撮影)	
図版2	駒ヶ谷遺跡 全景	
	1. 調査前風景(北から)	2. 駒ヶ谷遺跡航空写真
	3. 駒ヶ谷遺跡基本層序	
図版3	古代～中世 A地区遺構(1) 2 Aトレンチ	
	1. 全景(北西から)	2. 全景(南西から)
図版4	古代～中世 A地区遺構(2)	
	1. 1 Aトレンチ全景(東から)	2. 溝1193・1195(北西から)
	3. 土坑1188木製品出土状況(北から)	4. 土器溜まり851(南西から)
図版5	古代～中世 A地区遺構(3)	
	1. 土坑660・815(北から)	2. 土坑660焼土検出状況(東から)
	3. 井戸1189・1191(西から)	4. 井戸1189(西から)
図版6	古代 A地区遺構	
	1. 掘立柱建物跡11(南東から)	2. 掘立柱建物跡12(南東から)
	3. 掘立柱建物跡11 ピット809(東から)	4. 溝679(北東から)
図版7	中世 A地区遺構(1) 井戸678	
	1. 上層断面(南東から)	2. 石列検出状況(北から)
	3. 下層木製品・土器出土状況(南東から)	4. 下層木製品出土状況(南東から)
図版8	中世 A地区遺構(2)	
	1. 井戸672土器出土状況(南東から)	2. 井戸672木製品出土状況(南東から)
	3. 井戸1187井戸枠検出状況(南西から)	4. ピット784土器出土状況(西から)
図版9	古代～中世 B地区航空写真	
図版10	古代～中世 B地区遺構	
	1. 2 Bトレンチ全景(南東から)	2. 1 Bトレンチ全景(西から)
	3. 土坑885遺物出土状況(東から)	4. 土坑1124遺物出土状況(東から)

- 図版11 古代 B地区遺構
1. 掘立柱建物跡13 (北から)
 2. 掘立柱建物跡18 (北から)
 3. 掘立柱建物跡14・17 (南から)
 4. 掘立柱建物跡14・15・16 (南から)
- 図版12 中世 B地区遺構(1) 井戸1000(1)
1. 検出状況 (東から)
 2. 水溜内土器出土状況 (北西から)
- 図版13 中世 B地区遺構(2) 井戸1000(2)
1. 水溜内下層木製品出土状況 (北西から)
 2. 水溜側面 (南から)
- 図版14 古代～中世 C地区航空写真
- 図版15 古代～中世 C地区遺構(1)
1. 1Cトレンチ全景 (北から)
 2. 2Cトレンチ全景 (南から)
- 図版16 古代～中世 C地区遺構(2)
1. 3Cトレンチ全景 (北西から)
 2. 4Cトレンチ全景 (南から)
 3. 掘立柱建物跡1・2 (北から)
 4. 掘立柱建物跡2 (南から)
- 図版17 古代～中世 C地区遺構(3)
1. 土坑439炭出土状況 (北から)
 2. 土坑439断面 (西から)
 3. 土坑523安山岩片出土状況 (北東から)
 4. 井戸356 (南から)
- 図版18 古代 C地区遺構(1)
1. 掘立柱建物跡3・4・5 (西から)
 2. 掘立柱建物跡3 (南から)
 3. 掘立柱建物跡5 (南から)
- 図版19 古代 C地区遺構(2)
1. 掘立柱建物跡4 (東から)
 2. 掘立柱建物跡5 ピット254 (西から)
 3. 掘立柱建物跡6 (西から)
 4. 溝10凝灰岩・土器出土状況 (北東から)
- 図版20 古代 C地区遺構(3) 井戸424
1. 上層土器出土状況 (北東から)
 2. 中層土器出土状況 (北東から)
 3. 中層(9層)製塩土器出土状況 (北東から)
 4. 井戸424検出状況 (南西から)
- 図版21 古代 C地区遺構(4)
1. しがらみ654・護岸施設655 (北から)
 2. 護岸施設655 (北東から)
 3. 護岸施設655断面 (北西から)
 4. 木製品(槽)出土状況 (西から)
- 図版22 中世 C地区遺構(1)
1. 5Cトレンチ全景 (北から)
 2. 掘立柱建物跡19 (西から)
 3. 掘立柱建物跡10 (南から)
 4. 掘立柱建物跡7 (南から)
- 図版23 中世 C地区遺構(2)
1. 溝1 (南から)
 2. 溝1断面 (北から)
 3. 溝591 (東から)
 4. 溝591・589の分岐点 (西から)
- 図版24 中世 C地区遺構(3)
1. 木組み638 (西から)
 2. 木組み638木製品出土状況 (西から)
 3. 護岸施設656・井戸657 (北から)
 4. 井戸658 (西から)
- 図版25 弥生～古墳時代 A地区遺物 A地区出土 古式土師器・石器

- 図版26 古代 A地区遺物(1) 藏塚古墳後円部周濠下層出土 土師器(1)
- 図版27 古代 A地区遺物(2) 藏塚古墳後円部周濠下層出土 土師器(2)
- 図版28 古代 A地区遺物(3) 藏塚古墳後円部周濠下層出土 須恵器(1)
- 図版29 古代 A地区遺物(4) 藏塚古墳後円部周濠下層出土 須恵器(2)・施釉陶器
- 図版30 古代 A地区遺物(5) 溝679出土 土師器(1)
- 図版31 古代 A地区遺物(6) 溝679出土 土師器(2)
- 図版32 古代 A地区遺物(7) 溝679出土 須恵器
- 図版33 古代 A地区遺物(8) 土器溜まり851出土 土師器(1)
- 図版34 古代 A地区遺物(9) 土器溜まり851出土 土師器(2)・製塩土器・須恵器(1)
- 図版35 古代 A地区遺物(10) 土器溜まり851出土 須恵器(2)
- 図版36 古代 A地区遺物(11) 土器溜まり851出土 須恵器(3)
- 図版37 古代 A地区遺物(12) 流路1237出土 土師器
- 図版38 古代 A地区遺物(13) 流路1237出土 須恵器・施釉陶器
- 図版39 古代 A地区遺物(14) 藏塚古墳後円部周濠下層(1~5)、流路1237(6)、溝679出土 漆附着土器
- 図版40 中世 A地区遺物(1) 井戸678中層(1~5)、下層(6~8)出土 土師器・瓦器
- 図版41 中世 A地区遺物(2) A地区出土 土師器・須恵器・瓦器
- 図版42 古代~中世 A地区遺物(1) 井戸678(1~3・5)、井戸672(4)出土 石製品
- 図版43 古代~中世 A地区遺物(2) 井戸678(1・3)、土坑1188(2)出土 木製品
- 図版44 古代~中世 A地区遺物(3) A~C地区出土 木製品
- 図版45 古代 B地区遺物(1) 土坑885出土 土師器(1)
- 図版46 古代 B地区遺物(2) 土坑885出土 土師器(2)・須恵器
- 図版47 古代 B地区遺物(3) 土器溜まり884出土 土師器・須恵器(1)
- 図版48 古代 B地区遺物(4) 土器溜まり884出土 須恵器(2)
- 図版49 古代~中世 B地区遺物 B地区出土 土師器・黒色土器・瓦器
- 図版50 古代 C地区遺物(1) 流路580出土 土師器(1)
- 図版51 古代 C地区遺物(2) 流路580出土 土師器(2)
- 図版52 古代 C地区遺物(3) 流路580出土 土師器(3)
- 図版53 古代 C地区遺物(4) 流路580出土 須恵器(1)
- 図版54 古代 C地区遺物(5) 流路580出土 須恵器(2)
- 図版55 古代 C地区遺物(6) 井戸424上層(1)、9層(2~7)出土 土師器・須恵器
- 図版56 古代 C地区遺物(7) 井戸4249層出土 須恵器・製塩土器(1)
- 図版57 古代 C地区遺物(8) 井戸4249層出土 製塩土器(2)・内面布目拡大写真(目盛りは1㎝)
- 図版58 古代 C地区遺物(9) 井戸424下層出土 奈良三彩・土師器(1)
- 図版59 古代 C地区遺物(10) 井戸424下層出土 土師器(2)
- 図版60 古代 C地区遺物(11) 井戸424下層出土 須恵器(1)
- 図版61 古代 C地区遺物(12) 井戸424下層出土 須恵器(2)

図版62	古代	C地区遺物03	井戸424下層出土	須恵器(3)
図版63	古代	C地区遺物04	井戸424下層出土	土師器・須恵器-頸部縄拡大写真 (7・8は出土直後)
図版64	古代~中世	C地区遺物(1)	流路580(1~4)、木組み638(5~8)出土	土器
図版65	古代~中世	C地区遺物(2)	C地区出土	土師器・瓦器・陶磁器
図版66	古代~中世	C地区遺物(3)	C地区出土	石製品・埴
図版67	古代~中世	C地区遺物(4)	流路580出土	木製品(1)
図版68	古代~中世	C地区遺物(5)	流路580出土	木製品(2)
図版69	古代~中世	C地区遺物(6)	井戸424出土	木製品

第1章 調査の経過と方法

第1節 発掘調査に至る経過

大阪と奈良間を結ぶ幹線道路を始めとして、東西方向を結ぶ道路の交通渋滞は既に慢性化している状況にある。特に南河内地域においては、一般国道166号線のように大型車の通行が禁止されているところがあり、この地域では交通緩和のために、東西方向の幹線道路の整備が強く望まれていた。

このような問題を解決するために、南河内地域を貫き奈良県へと繋がる南阪奈道路が計画された。昭和49年に工事開始が公示され、翌年には南阪奈道路工事事務所が設立、平成3年には事業変更が許可されて現在に至っており、建設省・大阪府・奈良県・日本道路公団の四者の合併施工によって工事が進められている。南阪奈道路は、大阪府南河内郡美原町丹上の美原ジャンクションで近畿自動車道松原ささみ線と接続し、南河内地域を横断し、奈良県北葛城郡新庄町弁之庄で国道165号線に接続する自動車専用道路である。高速自動車道の近畿自動車道と連絡することにより、広域および地域間交通を処理し、交通流動の円滑化を促し、都市機能の向上に資することを目的として計画されたものである¹⁾。

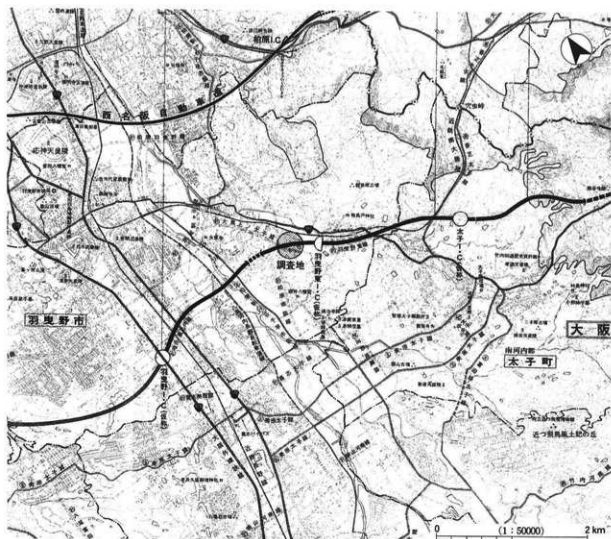


図1 南阪奈道路と調査地（『南阪奈道路』1995 日本道路公団南阪奈道路工事事務所所収図を一部改変）

この道路建設予定地には、すでに多くの遺跡や遺物散布地の存在が知られており、その取扱いについて、大阪府教育委員会、建設省、大阪府土木部、日本道路公団大阪建設局等の関係機関の間で、協議が続けられてきた。特に、当該道路が竹内街道の名残である国道166号線と平行する羽曳野市飛鳥・大黒周辺では、大阪府教育委員会が行った分布調査によって多くの遺跡が確認されている。²⁾

昭和60年には、駒ヶ谷地区全体の地域振興および整備を行う際の基準資料を作成するために、羽曳野市教育委員会によって分布調査が行われた。³⁾ 次いで、平成元年には羽曳野市教育委員会が中心となった「駒ヶ谷遺跡調査会」が組織され、試掘調査が行われている。その結果、この地域には比較的良好かつ広域に遺跡が分布していることが明らかとなっている。⁴⁾

今回の調査では、駒ヶ谷遺跡調査会が行った調査結果を踏まえて、金剛砂採掘のために遺構が破壊されている飛鳥川沿いの区域などを調査対象から除外して調査区を設定している。また、大阪府が作成した遺跡分布図で、今回の調査対象部分は、飛鳥第1・第2散布地、駒ヶ谷散布地に跨っており、⁵⁾ 遺跡名称が問題となっていたが、大阪府教育委員会・羽曳野市教育委員会・当センターの協議の結果、遺跡全体としては周知の「駒ヶ谷遺跡」に含まれることとなり、新規発見の前方後円墳については、小字名に基づき「蔵塚古墳」と呼称されることとなった。

駒ヶ谷遺跡は建設省が管轄する施工区間に該当しており、発掘調査は当センターが大阪府教育委員会の指導の下に建設省の委託を受けて1996年12月から1997年11月まで実施している。なお、調査の過程において発掘調査の成果を一般に公開するため、1997年6月7・8日には羽曳野市市民会館で調査成果展を実施、⁶⁾ 同年8月2日と9月27日には、蔵塚古墳を中心とした現地説明会を開催している。⁷⁾

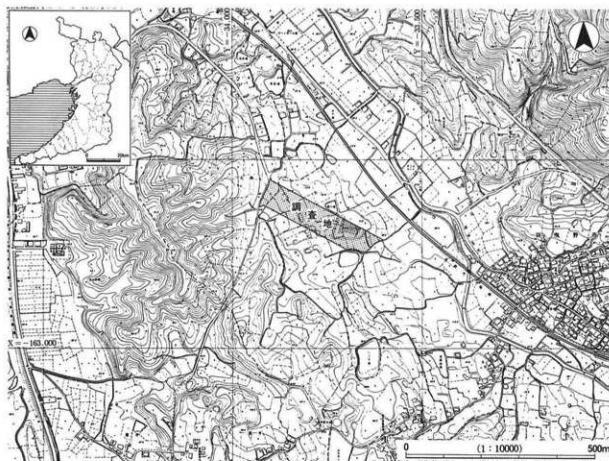


図2 調査地の位置（大阪府地域計画図1/2500を縮小して一部改変）

第2節 発掘調査の方法

駒ヶ谷遺跡の調査は、遺跡の略称など異なる部分もあるものの、基本的には当センターの前身の一つである(財)大阪文化財センターが制定した「遺跡調査基本マニュアル」に則って実施している⁸⁾。

地区割 地区割については、国土座標軸（第Ⅵ座標系）を基準線として、大阪府全域を共通の方式で区割できるように、大小6段階の区画を設定している。第Ⅰ区画は、1/10,000地形図の地区割図を利用して、縦6km、横8kmが1区画となる。南西端を基点とし、縦軸A～O、横軸0～8で表示する。第Ⅱ区画は、1/2,500地形図の地区割図を利用したもので、第Ⅰ区画を縦1.5km、横2.0kmに16分割している。南西端を1とし、北東端を16とするもので、東方向への平行式の地区名表示である。

第Ⅲ区画は、第Ⅱ区画内を100m単位で区画するもので、縦15、横20に区分される。表示は北東端を基点に縦A～0、横1～20となる。第Ⅳ区画は、第Ⅲ区画内を10m単位で区画するもので、縦・横各10に区分される。表示は北東端を基点に縦a～j、横1～10となる。通常、包含層や広範囲にわたる遺構から出土した遺物を取り上げる場合には、この第Ⅳ区画までを使用する場合が大半である。

第Ⅴ区画は、第Ⅳ区画内を5m単位で4分割する。表示は北東側がⅠ、北西側がⅡ、南東側がⅢ、南西側をⅣとする。遺物を取り上げる際に使用する区分であるが、第Ⅳ区画を面として細分する場合や、

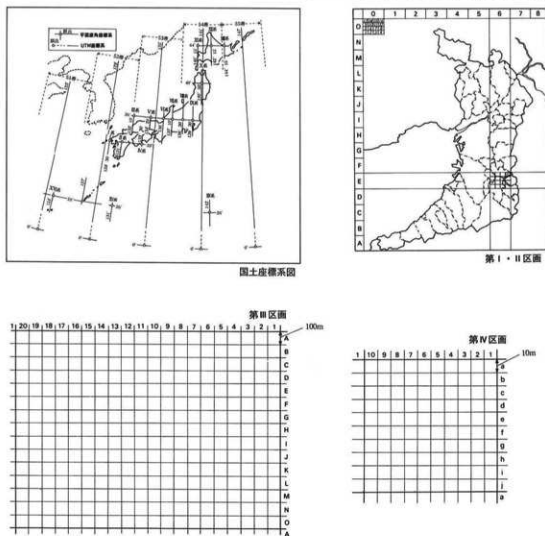


図3 国土座標系とそれに伴う地区

遺構内で出土する遺物を細かく区分する場合に使用する。第Ⅵ区画は、第Ⅴ区画を5m単位ではなく、任意に細分する場合に使用し、北東端を基点に必要な桁まで表示する。なお、調査全般にわたってこの地区割を用いており、遺構全体図のみならず、個々の遺構図に示した座標値も上記の国土座標に準拠している。

方位 方位は座標北を使用している。座標北を用いている理由としては、先述した地区割のほか測量基準線も国土座標を使用していることがあげられる。ちなみに座標北と他の方位との関係は、真北が東へ $0^{\circ}12'$ 、磁北が西へ $6^{\circ}40'$ 振っている。

水準 水準は、全国で共通基準となっている東京湾平均海面（T.P.）を使用している。大阪ではこのT.P.の他に大阪湾平均海面（O.P.）も併用されており、今も大阪府関係の土木工事などでは盛んに使用されている。過去の報告書の中には、表記がなくてどちらを使用しているか判別できない場合も少なくないが、一般的にT.P.を採用している報告書が多い。なお両者のレベル差は、 $T.P. \pm 0m = O.P. + 1.3m$ と定められている。

測量 今回の調査では、遺構全体図に関してはヘリコプターを用いた航空測量を行い、1/20の平面図とそれを縮小編集した1/100の駒ヶ谷遺跡全体平面図を作成している。また、遺物の出土状況や個々の遺構検出状況などは平板測量で図面を作成している。その他にも遺物の出土状況や立面および断面図などについては、遺跡調査区汎用システムKATATA等を用いて、その状況に合わせて実測図を作成している。

調査区 駒ヶ谷遺跡の調査では、調査地全体を地形の形状によって、東側から順にA～Cトレンチの3調査区に区分した（図4）。また、そのA～C各トレンチをそれぞれの地区の地形の形状や面積、そして調査を行った際の実情に合わせてさらに細分し、調査に着手した順に1から番号をつけた。よって調査に際する地区は1A、1Bトレンチというように数字を前にだし、調査区名を後ろに付する方式を

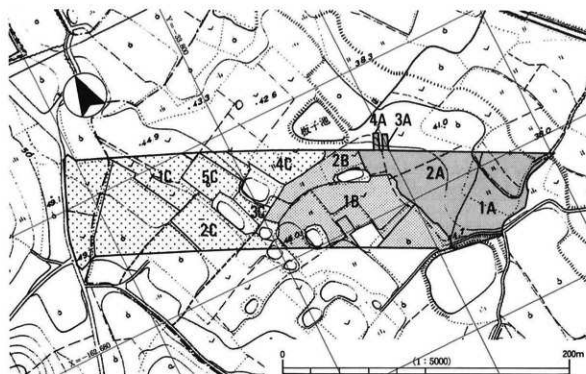


図4 トレンチ配置図

とっている。

遺構番号 遺構番号については、調査・整理段階の混乱を避けるため、遺構の種類に関わらず、調査段階では通し番号をつけている。その後整理段階で、遺構名を番号の前に付し、溝1、ピット101というように呼び表している。従って遺構によっては遺構番号が非常に大きな数字となっているものもあるが、この数字は必ずしも同一種類の遺構数を示すものではないので、注意されたい。同時に、同番号の遺構も存在していない。

写真 記録のために、全体遺構、個々の遺構、遺物出土状況、土層断面などをその状況に応じて写真撮影を行っている。使用したカメラについては、35mm（モノクロ・スライド）と6×7（モノクロ・カラー）であり、本報告書では、6×7のものを基本に使用している。

調査の開始と終了 調査にあたって、盛土および耕土を重機によって掘削した後に、人力による掘削を行った。人力掘削終了後は、遺構面の精査・測量・写真撮影などを行った。各トレンチごとに調査終了後、調査発掘深度の確認・写真用足場の撤去・埋め戻しを行った。

整理作業 出土遺物は、トレンチ・地区・遺構ごとに分類し、洗浄・注記・接合・復元を行った。その後遺構ごとに遺物を選別し、実測を行った。実測を行った遺物の大半を本報告書に掲載している。また、主に保存状態のよい土師器・須恵器・施釉陶器・瓦器などの土器、石器・石製品・木製品を選出して写真撮影を行い、本報告書に掲載している。

注

- 1) 日本道路公団 南阪奈道路公団事務所1995『南阪奈道路』
- 2) 大阪府教育委員会1971『近飛鳥遺跡分布調査概要』
大阪府教育委員会1972『近飛鳥遺跡分布調査概要II』
- 3) 羽曳野市教育委員会1986『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査概要』
- 4) 羽曳野市教育委員会1992『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財分布調査報告書』
- 5) 大阪府教育委員会1996『大阪府文化財分布図』
- 6) 財大阪府文化財調査研究センター1997『駒ヶ谷遺跡の調査』
- 7) 財大阪府文化財調査研究センター1997『蔵塚古墳の調査』
『蔵塚古墳墳丘の調査』
- 8) 財大阪文化財センター1988『遺跡調査基本マニュアル』



図5 地区割設定図

第2章 位置と環境

第1節 自然環境

駒ヶ谷遺跡周辺の地形分類については、すでに原秀禎氏が、1992年に刊行された『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査報告書』において、空中写真判読と現地調査による詳細な検討を行っている³⁾。ここでは、氏の論考を参考にして記述を進めることにする。また既刊の『蔵塚古墳』でも、地形分類について触れているので、そちらも併せて参照されたい。⁴⁾

駒ヶ谷遺跡は、羽曳野市の中でも東部側、東隣にあたる太子町に接する地域に位置している。中でも本遺跡は、大阪府を南北に流れる石川の右岸にあたり、しかも石川の東側に沿って南北方向にのびる大黒丘陵の東麓に位置している。大黒丘陵とそのさらに東側、大阪府と奈良県境に位置する二上山西麓に連なる鉢伏山を区切るような形で飛鳥川が北流しており、この飛鳥川沿いには、氾濫低地が形成されている。このように駒ヶ谷遺跡は、大黒丘陵と飛鳥川に挟まれた下位段丘上に位置している。

この飛鳥川兩岸の環境を比較してみたい。まず右岸であるが、この右岸は鉢伏山から繋がる丘陵が、飛鳥川沿いに発達している氾濫低地と接しており、段丘面の発達は見受けられない。よって集落などの立地条件としては、極めて不十分な要素しか備えていない。このために古墳時代から居住域としては開けず、飛鳥川右岸は古墳時代後期に始まる群集墳の墓域として初めて脚光をあびるようになる。

それに対して、駒ヶ谷遺跡が位置する飛鳥川左岸は、大黒丘陵と飛鳥川の間、丘陵地より一段低い段丘面が広がっており、所々に2m以上の段丘崖を形成している状況が確認できた。この段丘崖は、一様に平坦ではなく、飛鳥川へと流れ込む開析谷によって細かく分断されている。大黒丘陵の西麓側、つまり石川との間は現状では人工的な改変をかなり受けており、一部で神積段丘の名残が観察できるだけである。だが、東麓同様に細かい開析谷が多数入っていることも確認できる。今回駒ヶ谷遺跡の調査では、開析谷を2ヶ所検出しているが、その規模・深さ、埋没した時期などは異なる。また、この開析谷が位置しているところに現在では溜池が多いことも、開析谷の位置を知る上で重要なことである。

さて、このように平坦面が少なく、かつ開析谷の多く見られる地形の中に駒ヶ谷遺跡が立地しているわけであるが、図6でもわかるように、本遺跡はこの周辺で最も緩斜面で、かつ平坦面を多くとれる所に位置している。加えて飛鳥川の氾濫や洪水などの影響を受けにくい高所に位置しており、鉢伏山を前に大黒丘陵を背にしていることから、西側の世界と隔絶した一種の閉鎖的な空間を構成していることがわかる。また第2節で述べることにするが、高所に位置していることから、下方向に竹内街道を望むことが可能である。

現在は写真1でもわかるように、飛鳥川沿いには、飛鳥川右岸の氾濫低地上に飛鳥の集落、そしてその下流には駒ヶ谷の集落が位置している。対する飛鳥川左岸の下位段丘地帯は、溜池が多いことからわかるように、あまり水はけがよくない土地であり、水田耕作には適していない。よって、明治時代初期の頃から、大半の土地がブドウ畑として利用されている。そのような状況下に置かれていたこともあり、河内飛鳥について言及する際には、飛鳥川右岸のみを指し、左岸について触れられることはなかった。

図6より、今回の調査地は飛鳥川に向かって等高線に対して斜めの下っていることがわかる。まず東端から西端まで約7mの比高差があり、丘陵から派生する開析谷が2本はしる。時代ごとの遺構につい

ては後述することとして、飛鳥川に舌状にのびる尾根の先端部分およびその平坦面を利用していることがわかる。またその際に、時代ごとに同じレベルの平坦面を利用している場合がほとんどである。中でも蔵塚古墳は、その2本の開折谷に挟まれるような形で立地しており、やはり飛鳥川に向かって舌状にのびる幅約100mの段丘の最先端部に立地している。だが、駒ヶ谷遺跡および蔵塚古墳は大幅に削平を受けており、本来の地形と大きな差が生じることは否めない。

蔵塚古墳は基本的に盛土によって墳丘部が構築されており、対岸の飛鳥千塚古墳群および飛鳥川沿いにあった古代の交通路からの視覚的效果を狙ったものであろう。そして同様な理由で、駒ヶ谷遺跡における古代の遺構も同時代に使用されていた古代の交通路を意識しているものであり、一般集落ではなく公的施設がそこにあった可能性も示唆される。



写真1 駒ヶ谷遺跡周辺航空写真(1947年撮影)

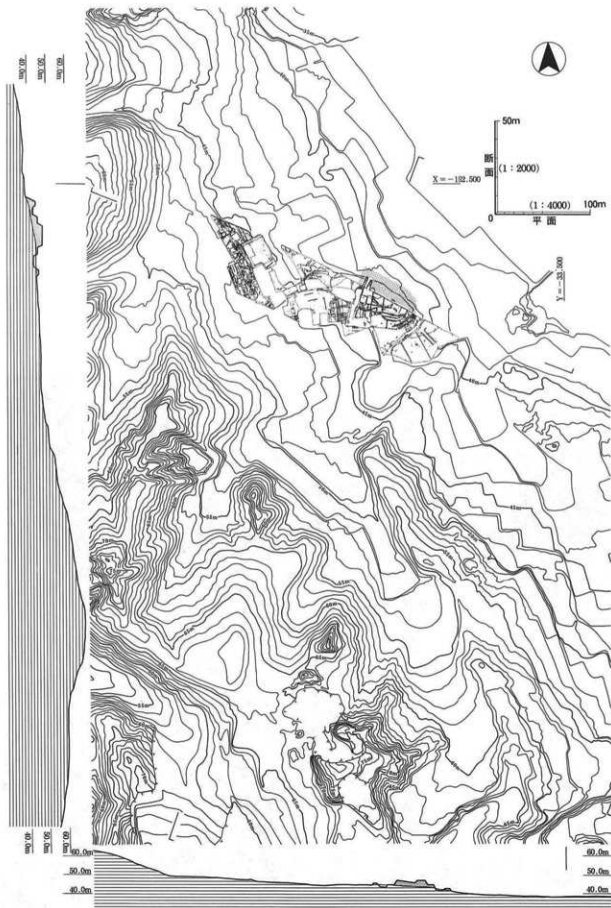


図6 駒ヶ谷遺跡周辺地形図

第2節 歴史的環境

駒ヶ谷遺跡の周辺は、旧石器時代以降、各時代の遺跡が点在している。ただ、各時代のこれらの遺跡には単発的に出現しているものが多い。

駒ヶ谷遺跡が位置する羽曳野市およびその北側にある柏原市は、古墳時代そして飛鳥・奈良時代の遺跡が数多く点在している地域でもある。また駒ヶ谷遺跡は、弥生時代の遺物は若干出土するものの、古墳時代後期、飛鳥・奈良時代、そして平安～鎌倉時代にそれぞれピークがある遺跡である。よって、ここでは視野を広く見て、羽曳野市および柏原市を通してその歴史的環境について述べることにし、駒ヶ谷遺跡周辺の詳細な歴史については別章で後述することにした。



- | | | | | | |
|------------|-------------|------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 青谷遺跡 | 2. 河内国分寺跡 | 3. 片山廣寺 | 4. 田辺遺跡 | 5. 円明遺跡 | 6. 寺山遺跡 |
| 7. 飛鳥千塚D支群 | 8. オウコ古墳群 | 9. 飛鳥千塚B支群 | 10. 飛鳥千塚B支群 | 11. 飛鳥千塚F支群 | 12. 駒ヶ谷古墳群 |
| 13. 駒ヶ谷遺跡 | 14. 叢塚古墳 | 15. 河内飛鳥寺跡 | 16. 菅田白鳥遺跡 | 17. 西琳寺跡 | 18. 下田池瓦窯跡 |
| 19. 野々上遺跡 | 20. 野中寺旧伽藍跡 | 21. 善正寺跡 | 22. 竹内街道 | 23. 奈良街道 | 24. 長尾街道 |

図7 周辺の主要遺跡（奈良～平安時代）分布図（国土地理院1/25000地形図を改変）

大和川は、江戸時代に現在のように改修されるまでは、現在の石川との合流地点より若干西側の地点で北流していた。大和で複数の小河川を一つに集めて流れる大和川は、川幅が狭い上に、流路が真っ直ぐでなかったこと、そして石川が合流することなどから通常でも水量は多かった。さらに、多量の降雨があると一ヶ所に水が集中するため、すぐに氾濫をおこし周辺に被害をもたらしていた。故に、古代以前から大和との交通路の一つであった大和川を制することは重要なことであり、ここに古墳時代前期の古墳群が出現するのもうなげける。逆に羽曳野市を東西に分断している石川は、若干の河川の移動はあるものの、ほぼ当時と流れが変わっていない。

柏原市にある玉手山古墳群と松岳山古墳群は、古墳時代前期に集中して築造される古墳群である。いずれも、大和川および石川を掌握していた権力者の墓域で、埋葬施設に畿内ではほとんど採用されていない割竹形石棺（伝：勝負山古墳）、長持形石棺（松岳山古墳）を使用している。これらの古墳群は、中期に集中して石川以西に築造される、古市古墳群につながっていくものと考えられている。

前期には石川右岸、つまり大黒丘陵の西側に丸山古墳、御旅山古墳、通法寺裏山古墳といった実態不明の前方後円墳が築造されている。丸山古墳は、その墳形から前期古墳とされているもので、御旅山古墳は、調査によって前方部に壺形土器を、墳頂部には壺形土器と円筒埴輪を並べていたことが判明している。埋葬施設は破壊されていたが、副葬品と考えられる22面の銅鏡および鉄器片が出土している。通法寺裏山古墳は、未調査で墳形も不明瞭であるが、出土している円筒埴輪の特徴から、前期古墳とされている。石川右岸にはこの3基の前方後円墳に続く時期の古墳は現状では知られていない。

古墳時代中期には、古市古墳群が最も脚光をあびる時期である。これらの古墳群は、墳丘長200mを超える前方後円墳から、一辺10mに満たない方墳に至るまで約100基の古墳を有し、4世紀末～6世紀中頃の古墳が存在している。古市古墳群では、白髪山古墳（伝清寧天皇陵）や高屋築山古墳（伝安閑天皇陵）といった前方後円墳が築造される6世紀中頃、この駒ヶ谷遺跡に藏塚古墳が築造される。石川右岸に築造されていた前期の前方後円墳とは時期に開きがあり、全く別系統の古墳であろう。この飛鳥川左岸の段丘上には、現状では確実な古墳の存在は認められていない。唯一南西約500m離れたところに御塚古墳という後期古墳があったとされるが、早い時期に全壊しており詳細は不明である。

古墳時代後期には、いくつかの群集墳が築造されるようになる。柏原市には、生駒山の南端で大和川に面する地域に、平野・大泉古墳群、太平寺古墳群、平尾山古墳群などが築造される。これらの古墳群は、ミニチュア炊飯具を埋葬する古墳が多く、渡来人との関係を考える上でも重要である。同様に、飛鳥川右岸の鉢伏山西南麓の根根に飛鳥千塚古墳群が築造されはじめる。この群集墳も、柏原市の群集墳同様にミニチュア炊飯具を埋葬する古墳が多い。だがこれらの群集墳は、後世に破壊されているものが多く、しかも民有地になっている地域が多いため、発掘調査がなされているものは少ない。

飛鳥・奈良時代には、難波宮と飛鳥を結ぶ古代の官道が作られはじめる。丹比道（竹内街道）は難波宮の大道を南下して丹比を横断、石川を越えた後、飛鳥川に沿って南下、竹内峠そして飛鳥・藤原宮に至る。この街道に面する位置に、多くの寺院が建立されるが、羽曳野市では、石川左岸に野中寺、西琳寺、善正寺が建立されている。野中寺は渡来系氏族の船氏の氏寺で、650年の紀年銘をもつ瓦が出土しており、7世紀中頃の創建と考えられている。西琳寺も渡来系氏族である西文氏の氏寺であり、鎌倉中期に著された『西琳寺文永注記』には、欽明20年（559）の建立とする説と、推古27年（619）の建立とする説があるが、発掘調査の成果より7世紀に建立されたとする説が有力である。善正寺は現存しておらず、東・西塔跡、および金堂跡と目される場所の地形の隆起が目立つのみである。『日本後記』にこ

の善正寺跡が、寺山と称する渡来系氏族集団の墓域の一角にあたることが明らかであり、渡来系氏族の氏寺とする説が有力である。また発掘調査で出土した瓦より、7世紀中葉の創建と考えられている。この地域に渡来系氏族の建立する寺院が多いことは、地域の特色といえるであろう。

石川右岸から飛鳥川に沿って存在していたとされる河内飛鳥寺は、昭和初期に塔心礎が掘り出されたとあり、現在名古屋城に移されている。だが河内飛鳥寺の推定地周辺の調査を行った段階で、飛鳥・白鳳期の瓦は全く出土しておらず、寺自体の存在が否定されている向きが強い。

大和川沿いをはする奈良街道は、古墳時代から大和川が難波と大和を結ぶ重要な連絡路であったように、重要な役割をもつ。8世紀中頃には、この街道沿いに河内国分寺・河内国分尼寺が建立されていることから明らかである。いずれも数次にわたる調査が行われており、河内国分寺は塔跡基壇の確認・整備が行われ、河内国分尼寺は寺域の確認がなされている。また青谷遺跡は、聖武天皇が使用したとされる竹原井頓宮の推定地で、実際に発掘調査で凝灰岩製の基壇建物跡や、大型の塀が出土している。他に8世紀前頃には、片山廃寺や田辺廃寺といった寺院が大和川沿いに建立される。

8世紀になると、全国各地に郡・郷・里制が施行されるようになる。柏原市・羽曳野市には大泉郡、安宿郡、古市郡、石川郡などが存在していた。大泉郡は、大和川右岸と生駒山の西麓の間に位置し、安宿郡は、大和川左岸と石川右岸にあって、玉手山丘陵から南下した地域、および飛鳥川兩岸の地域まで含まれる。駒ヶ谷遺跡は、この安宿郡の中に位置している。古市郡は、石川左岸と羽曳野丘陵の間の地域にあたり、石川郡は、安宿郡、古市郡の南、現在の河南町や太子町にあたる地域である。安宿郡の郡衙は、玉手山丘陵上に位置し、「郡田」「安宿寺」と墨書された土師器が出土している、円明遺跡と考えられている³⁾。だが円明遺跡は、安宿郡にある賀美郷、尾張郷、資母郷のうちの資母郷にあたることから、安宿郡の郡衙は、飛鳥川兩岸域にあたる賀美郷に存在すると考える説もある⁴⁾。

賀美郷は、上村主や飛鳥戸造といった渡来系氏族が主に居住していたということが指摘されており、飛鳥戸造氏は、百済王族である昆支を始祖とする氏族である。現在も羽曳野市飛鳥に昆支を祭神とする飛鳥戸神社があり、飛鳥千塚古墳群を墓域とした集団も飛鳥戸造氏と考えられている。蔵塚古墳は、飛鳥千塚古墳群の初現時期と重なっている点、飛鳥川をはさんで対峙している点、飛鳥千塚古墳群は円墳で構成されているのに対し、蔵塚古墳は前方後円墳である点などから、蔵塚古墳は飛鳥千塚古墳群と同氏族の盟主墳であったとしている⁵⁾。

今回の調査で、安宿郡賀美郷の中でも、実態が不明瞭であった飛鳥川左岸の地域に、蔵塚古墳をはじめ奈良時代の遺構が検出されたことは非常に大きな意味をもっている。駒ヶ谷遺跡は当時の官道に面しており、かつ飛鳥川沿いで大黒丘陵と鉢伏山に挟まれた一種閉鎖的な空間に位置している。地形的にも歴史的にも、この地域は軽視できない空間であることは間違いのないであろう。

註

- 1) 原秀禎 1992 「羽曳野市駒ヶ谷地区周辺地域の地形分類」『羽曳野市駒ヶ谷地区埋蔵文化財試掘調査区報告書』羽曳野市教育委員会
- 2) 江浦 洋・本田奈都子他 1997 「蔵塚古墳」『助大大阪府文化財調査研究センター 調査報告書』第24集 助大大阪府文化財調査研究センター
- 3) 古代を考える会 1976 「玉手山遺跡の検討」『古代を考える』7
- 4) 羽曳野市教委 1975 「河内の古代遺跡と渡来氏族」
- 5) 2)に同じ

第3章 調査の概要

第1節 基本層序と遺構面

駒ヶ谷遺跡の流路や井戸などの遺構についてはそれぞれ断面の実測を行ったが、遺跡全体の土層の堆積はほぼ同様であったため、今後拡張して調査を行わない地点、および遺構がかかっていない場所で、柱状断面図を作成したのにとどまっている（図9）。個々の遺構の土層断面については、それぞれの遺構図および平図面に記しているためここでは省略し、駒ヶ谷遺跡全体の土層の堆積を、2ヶ所の柱状断面図に基づいて報告することにした（図8・9）。

駒ヶ谷遺跡では、土層の堆積状況は大きく2種類に分けることができる。柱状断面図①は、古代の遺構が集中している地点の基本土層断面図である。古代の遺構は基本的に、盛土と近・現代の耕作土を除去した面で検出されている。全体に後世の削平が著しく、大半の遺構は地山の面でしか検出できなかった。柱状断面図①では1・2層が近・現代の盛土にあたり、遺物は現代のものが出土量の大半を占める。3層は近・現代の水田の床土および耕作土である。流路に近接して地域では、細砂および礫を混入するところがある。機械掘削では1～3層までを除去し、古代の遺構面を検出している。

柱状断面図②は、中世の遺構が集中している地点の基本土層断面図である。中世の遺構も基本的に、盛土と近・現代の耕作土を除去した面で、地山直上で検出されている。なお遺構面が複数面存在しているところは、流路580以外は見られなかった。4層は近・現代の盛土で、遺物は二次的に運ばれてきたものが多い。5・6層は、近・現代の水田耕作土である。鉄分・マンガンの沈着が数次に渡って認められる。7層は近世～中世の包含層にあたる。マンガンの沈着が認められる所が多く、流路580の中層で確認されたように水田耕作を行っている可能性がある。8層は遺構（溝598）の埋土である。流路580に近接していることもあり、細砂および礫を混入する。機械掘削では、4～6層にあたる近・現代の包含層を除去した後、7層を掘削し中世の遺構面を検出している。

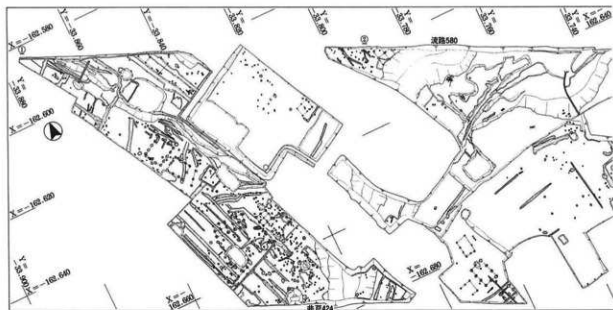


図8-1 調査地全体図（西半部）

第2節 駒ヶ谷遺跡の飛鳥・奈良時代以前

駒ヶ谷遺跡の報告の前に、蔵塚古墳築造以前と飛鳥・奈良時代以降の駒ヶ谷遺跡の状況と、それぞれの時代の土地利用について概要を記しておくことにしたい。

1. 蔵塚古墳築造時期まで

1989年に駒ヶ谷遺跡調査会が、今回の調査地の西方にある大黒丘陵上を調査した際に、弥生時代後期の竪穴住居跡9棟と方形台状墓2基を検出している。また、今回の調査地周辺の段丘上における試掘調査では、明確な遺構は検出されていないものの、石器やその剥片、未製品などが出土しており、この場所で石器製作が行われていたことが明らかとなっている。今回の調査でも同様に、この時期の遺構は検出されていないが、流路1237から弥生時代前期の甕片、蔵塚古墳周濠下層から石器・石鏃などが出土している。

古墳時代前期の遺物も数点出土しているだけである。蔵塚古墳墳丘盛土直下の旧地表面から、庄内期の壺形土器がほぼ完形で出土している。それに伴う遺構は検出されていないが、ほぼ原位置を保っているものと思われ、蔵塚古墳墳丘内から同時期の土師器片が出土していることと併せて、興味深い事実である。次いで古墳時代中期には、遺構および遺物は全く認められない。今回の調査だけではなく、駒ヶ谷遺跡調査会が行った調査でも、この時期の遺構および遺物は皆無に等しいと報告されている。

今回の調査では、古墳時代後期になると、古墳を含めて散発的に出現する遺構が多い。西北部で検出された竪穴住居跡1棟や土坑からは、円筒埴輪や須恵器が出土している。また流路580の最下層から須恵器が、ほぼ完形で数点出土している。蔵塚古墳は6世紀中頃に築造された古墳であり、南北は大黒丘陵から飛鳥川へ流れ込む開折谷に挟まれ、舌状にのびる幅約100mの段丘の先端部に位置している。この場所の築造は、対岸の飛鳥千塚古墳群を意識していることは確実であろう。飛鳥千塚古墳群が円墳を中心とした群集墳であるのに対して、蔵塚古墳が前方後円墳であること、この時期に、この地域に配置されたとする飛鳥戸造氏との関係は留意すべき点である。

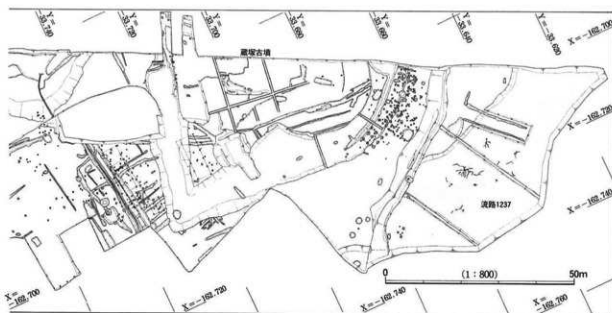


図8-2 調査地全体図(東半部)

2. 飛鳥・奈良時代

掘立柱建物跡を含む遺構からは出土遺物が少ないために、時期決定が困難なものも多く、明確に飛鳥時代の遺構ととらえることができるものは少ない。

掘立柱建物跡の大半は、方位を意識して構築されており、西端部の建物群のように区画溝を伴うものもある。建物群の中には地形に則っているものがあり、方位を意識しているものと、時期的な前後関係が生じているものと思われる。西端部の建物群の南端で検出された井戸424の最下層からは、頸部に紐を巻き付けて釣瓶として使用したと考えられる須恵器壺L、横瓶、平瓶、壺Q、土師器甕が数多く出土しており、これらの土器に混じて奈良三彩小壺や、内外面に柿渋を塗った柄杓を始めとした木製品が出土している。また中層からは、二次的に火を受けた凝灰岩の切石、埴の他、製塩土器が破片数にして約2,100点出土している。

流路580の下層では、流路と平行する木組み655やしらがみ654が構築されている。この流路にはローリングを受けていない多くの土器が廃棄されており、その中には「古厨」と書写された墨書土器も出土している。この土器は、井戸424から大量に出土した製塩土器と関連づける、重要な資料の一つとなりうる。また蔵塚古墳後円部周濠下層の他、土坑や土器溜まりといった、蔵塚古墳の周濠に一括して土器を廃棄している状況が確認できる。流路1237からは、中空円面硯を含む円面硯が数点出土している他、この時期に該当する土器が多く出土している。

第3節 駒ヶ谷遺跡の平安・鎌倉時代以降

1. 平安時代

8世紀後～9世紀には、それまでに構築されていた掘立柱建物群が一時的に衰退する時期にあたる。奈良時代の掘立柱建物群と同系列の建物群が構築されているが、9世紀中頃になって、新たに蔵塚古墳前円部外堤に掘立柱建物群が構築されるようになる。他の地区にある掘立柱建物群の規模が、奈良時代のものと比較して縮小されているのに対して、新たに構築された掘立柱建物群は、区画溝をもつ規模の大きなものである。ここで検出された区画溝および掘立柱建物跡は切り合い関係が生じており、数次にわたる建て替えがあったことを物語っている。

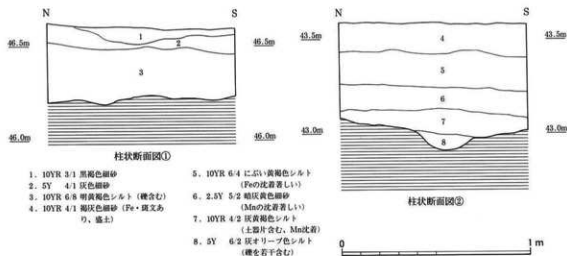


図9 基本層序 (位置については図8-1参照)

飛鳥・奈良時代と同様に、掘立柱建物跡から時期を明確に特定することができる遺物はほとんど出土していない。その中で流路580から「大林宅」と書写された墨書土器が1点出土している。また、蔵塚古墳後円部周濠下層や流路1237から、施釉陶器が数点出土している。

2. 鎌倉時代以降

10世紀以降に空白期間が生じていた当遺跡で、再び掘立柱建物群が構築されるようになるのは、11世紀末～13世紀初の時期であるが、この時期に属する掘立柱建物群は、平安時代以前のものよりも規模が小さい。他にもこの時期の遺物が出土する遺構は検出されているが、いずれも散発的なもので相互関係が見いだせず、建物および居住空間を復元するには至らないものばかりであった。

調査地の西端に掘削されている溝1は、鎌倉時代以降に掘削されたものと推定できるが、これと同時期にあたる遺構は今回検出されなかった。また、鎌倉時代以降の遺物もほとんど出土していない。

第4節 駒ヶ谷遺跡とその周辺

平成元年度の駒ヶ谷遺跡調査会の調査では、大黒丘陵上で検出された堅穴住居を始めとして、弥生時代後期の遺構が数ヶ所で検出されている。今回の調査では弥生時代の遺構は検出されておらず、東端の流路1237から弥生時代前期の遺物が集中して出土しているだけである。ほとんど磨滅を受けていない土器が出土したという点は、この時期の遺構が付近に存在することを示すものである。蔵塚古墳が築造された時期は、飛鳥川を挟んで対岸にある飛鳥千塚古墳群が古墳群を形成しはじめる時期にあたる。それは、飛鳥川の左岸にそれまでに古墳群が存在しておらず、蔵塚古墳が飛鳥千塚古墳群の盟主墳である可能性が高いことと、6世紀前頃に渡来系氏族である飛鳥戸造氏が、現在の羽曳野市飛鳥付近に配されたという史実との関係を考える上で貴重な一資料である。

飛鳥・奈良時代には、河内飛鳥寺が付近に建立されていたとされるが、その実態については不明瞭なままである。駒ヶ谷遺跡調査会が、河内飛鳥寺の伝塔心礎出土地周辺を調査した際でも、白鳳期の遺構は検出できなかった。今回の調査でも白鳳期の瓦の出土は皆無に等しく、周辺に飛鳥・奈良時代の寺院が存在していた可能性が低い。ただ飛鳥川沿いに当時の官道であった竹内街道が走り、それを眼下に見下ろすところに当遺跡が存在していたことは、遺跡の性格を考える上で重要なことといえよう。

駒ヶ谷遺跡の南西部、大黒丘陵の南麓は河内源氏の発祥の地とされており、長久4（1043）年源頼義によって建立された通法寺跡、康平7（1064）年に源頼義、義家父子によって建立された壺井八幡宮が知られている。駒ヶ谷遺跡調査会の調査では、平安時代後期の瓦を伴った遺構が多く検出されており、どちらかというと駒ヶ谷遺跡よりも、南側の壺井にこの時期の遺構が集中している。今回の調査では、平安時代～鎌倉時代の掘立柱建物跡を中心とする遺構を数ヶ所で検出している。平安時代には区画溝を伴う長大な掘立柱建物跡が検出されているが、時期が下って鎌倉時代中期になると、散発的で規模が小さいものになってしまう。この点も、当時の状況を窺い知る上で貴重な資料となりえよう。

第4章 A地区の調査

第1節 A地区 弥生～古墳時代の遺構と遺物

A地区で弥生～古墳時代に関連する遺構としては、調査区最東部に位置する、大黒丘陵から飛鳥川に流れる流路1237と、古墳時代後期に属する新規に発見された蔵塚古墳があげられる。

1. 遺構

(1)流路1237 (図11)

大黒丘陵から飛鳥川へ注ぐ開析谷の一つで、調査区の中では最東部に位置している。洪水砂の堆積から、弥生時代以前から流れていたことが確認できる。また、この洪水砂の上面で立木の根が多く検出しており、その際から土師器の高杯が出土していることから、数回面として落ちついていることが推定できる。

弥生～古墳時代の流路1237は、それ以降に流れていた時よりも幅が細かったことが、断面より確認できる。

(2)蔵塚古墳 (図8-2)

流路1237の西北側に位置する。全長56mを測り、後円部と比較して前方部が大きく開く特異的な形態をもつ。墳丘の上面は後世に削平されており、主体部および副葬品は不明である。だが、周濠から出土している須恵器・埴輪から6世紀中頃の築造と考えられ、現状では河内における最後の前方後円墳といえる。この前方後円墳は、小字名をとって「蔵塚古墳」と命名した。この古墳の詳細な記述については、既刊の『蔵塚古墳』を参照されたい。

2. 遺物

(1)土器 (図10-1～10)

1～8の弥生土器は、全て流路1237から出土したものである。うち1～6は、その中でも上流の方からまとまって出土している。これらの弥生土器は、内外面ともにほとんど磨耗しておらず、流路内でさほど移動していないものである。1は口縁部に刻み目の入るもので、1・2・4は体部に沈線めぐらせるものである。また5・6は壺底部である。7・8も流路1237から出土したものであるが、これは内外面ともに非常に磨耗しており、調整などは不明瞭である。原位置からかなり動いている可能性がたかい。

9・10は庄内期の古式土師器である。9は高杯である。内外面ともに非常に磨耗しており、調整などは不明瞭である。10は、完形の壺で、体部および口縁部に火を受けた痕跡がある。これは、蔵塚古墳後円部墳丘盛土直下にあたる旧表土面で、遺構を伴わずに出土している。周囲に同時期の遺構は存在しておらず、この周辺には人が居住していなかったことを示している。また周辺に木の根痕が多く、自然木が群生しているような場所に置かれていた可能性もある。

(2)石製品 (図10-11～18)

11～17は石製品である。墨で塗りつぶされているのは、現代の破損面である。11・12は蔵塚古墳を築造する際に用いた土囊列から出土した石鎌で、土囊と土囊に挟まれた状態で出土している。18は蔵塚古墳後円部の土囊列間を、埋める盛土の中から出土した打製石剣である。13はA地区の包含層から出土しているスクレイパーである。14は土坑815から、15～17は蔵塚古墳後円部周濠下層から出土している打

製石剣である。14~17はいずれも蔵塚古墳周濠内の溝から出土しているが、蔵塚古墳に帰属するものではなく、二次的に移動してきたものである可能性が高い。

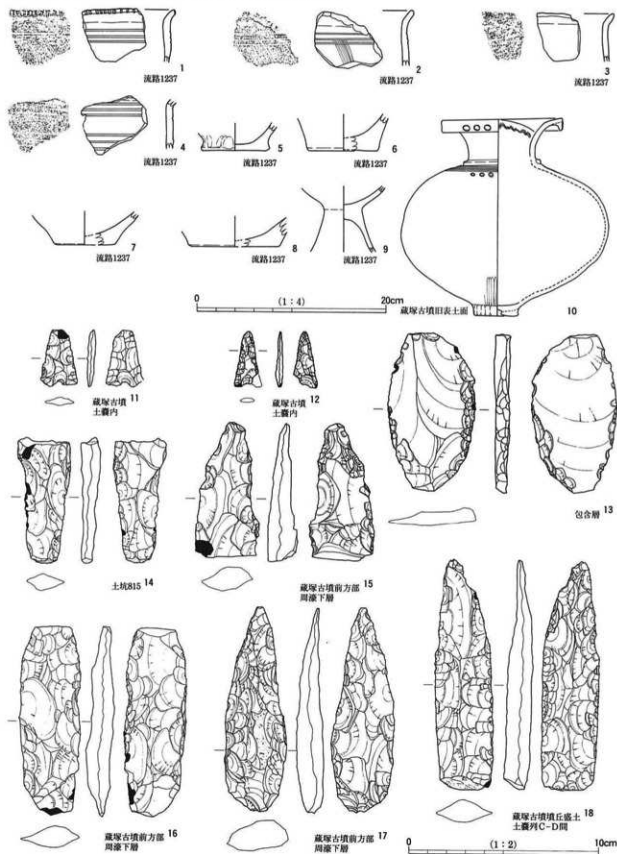
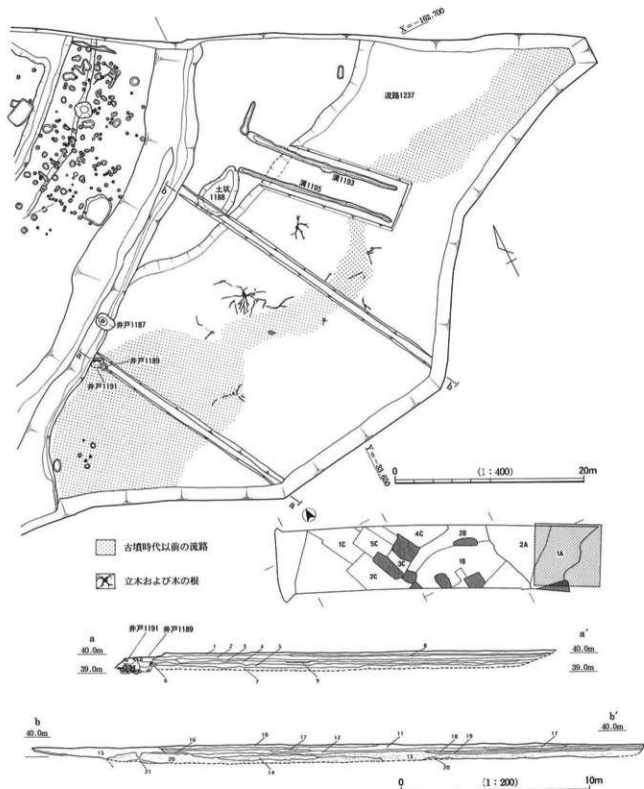


図10 A地区 弥生~古墳時代出土遺物(弥生土器・古式土師器・石器)



1. 7.SV 6.2 灰オリーブシズルト (礫を多量に含む, Feの沈着あり, 中層包含層)
2. 5Y 4.2 灰オリーブシズルト (礫砂一層を全体に含む, 土層片含む, 中層遺跡面層)
3. 7.SV 5.1 灰色シルト (礫砂プロック状に含む, 全体に礫を含む, 古代の上層片含む)
4. 3Y 5.2 灰オリーブシズルト (全体に礫を含む, 古代の上層片多い)
5. 7.SV 5.2 灰オリーブ色細砂質シズルト (Feの沈着有り)
6. 2.SY 4.2 暗灰黄色細砂質シズルト (炭化物を含む)
7. 2.SY 7.1 暗オリーブ色細砂 (炭化物を含む)
8. 2.SY 5.2 暗灰黄色細砂質シズルト (全体に礫砂を含む, Feの沈着あり)
9. 10Y 5.2 オリーブ灰色細砂質シズルト (全体に礫砂を含む)
10. 10YR 6.2 灰黄褐色シルト (Feの沈着あり, 全体に礫を含む, 中層包含層)
11. 2.SY 7.1 灰白色シルト (全体に礫を含む, 中層遺跡面層)
12. 10YR 5.1 暗灰色細砂質シズルト (5~10mmの礫を多量に含む, Feの沈着見られる, 土層片有り)
13. 2.SY 6.1 黄灰色細砂 (土層にFeの沈着あり, 下部になるとラミナが顕著に見られる)
14. 2.SY 6.2 暗灰色細砂 (ラミナ有り), シルトプロックを多量に含む)
15. 7.SV 5.1 灰色シルト (礫を多量に含む)
16. 5Y 4.1 灰色細砂一層
17. 2.SY 4.1 灰色シルト (Feの沈着無し), 礫を多量に含む)
18. 5Y 4.2 灰オリーブ色シルト (礫砂一層を多量に含む, Feの沈着あり)
19. 10Y 3.1 灰色細砂質シズルト (礫を多量に含む)
20. 5Y 6.1 灰色細砂質シズルト (下部にラミナあり, 炭化物含む)
21. 2.SY 6.2 灰色細砂一層

図11 A地区 流路1237等平面・断面図

第2節 A地区 古代～中世の遺構と遺物

1. 遺構

(1)掘立柱建物跡

①掘立柱建物跡11 (図12)

方位はN-26°-Wを測る、2間×2間の総柱建物跡である。柱痕から、建物廃絶後に柱が抜き取られていないことが確認できる。地形に則しておらず、方位を意識して建物を構築していることは明らかである。

掘立柱建物跡11は、蔵塚古墳の後円部周濠を埋めた後に構築されている。古墳の外堤および埋土上面にこの建物の柱穴がかかっていること、外堤の土が周濠および流路1237には存在していないことから、古墳の外堤を破壊せず周濠のみを埋めて建物を構築していることがわかる。周濠を埋めるのとはほぼ時期を同じくして、溝679を掘削して土器を廃棄している。溝679は建物の北辺に平行して接するように掘削されており、溝679が掘削された時期と掘立柱建物跡11が構築された時期は、ほとんど同時期と考えてよいであろう。

掘立柱建物跡11から東側の蔵塚古墳外堤上には古代～中世にかけての遺構が存続しているが、建物より西側に関しては遺構が希薄になる。それは、この場所は後世に削平を受けているために遺構の残存度が低いためで、その点も理由の一つとしてあげられるであろう。

②掘立柱建物跡12 (図12)

方位はN-8°-Wを測り、方位を意識して建物を構築している。古代～中世にかけての遺構が錯綜しているが、1間×2間の掘立柱建物跡を確認することができた。掘立柱建物跡11同様に、柱痕から建物廃絶後、柱が抜き取られていないことがわかる。

掘立柱建物跡12も蔵塚古墳後円部周濠を埋めた後に構築されているが、掘立柱建物跡11と方位が一致していないこと、溝679から離れたところに位置していることから、掘立柱建物跡11・溝679とは時期が異なる可能性が高い。また掘立柱建物跡12の周囲には中世の遺構が多く確認されており、建物および柱穴の形状から、この時期に属する可能性がある。

(2)溝

①蔵塚古墳後円部周濠下層 (図12)

蔵塚古墳は6世紀中頃の前方後円墳である。この周濠下層、しかも後円部に集中した区域から、7世紀中～8世紀後の土器が大量に出土しており、蔵塚古墳が築造されて約1世紀後に、古墳の墳丘を意識しながら、周濠を埋めるように土器が廃棄されていることが確認できる。その後、8世紀になって掘立柱建物跡11および溝679を中心とした遺構が周濠上に構築されている。よって周濠は蔵塚古墳に属する遺構ではあるが、下層の土器群に関してのみ別遺構扱いにした。周濠の埋土は水平に堆積しており、外堤や墳丘の盛土が崩落していないことから、この時期には墳丘および外堤はほとんど改変されていないことも推定できる。

周濠下層から出土している土器は、くびれ部から後円部の間に集中しており、中でも掘立柱建物跡11が構築されている周辺で多く出土している。破損しているものが大半を占めており、廃棄していることは明らかであろう。また、全体に土器の混入割合がかなり高いことから、常時土器が廃棄されている可能性が高い。



図12 A地区 蔵塚古墳後円部周辺の古代～中世遺構平面・断面図

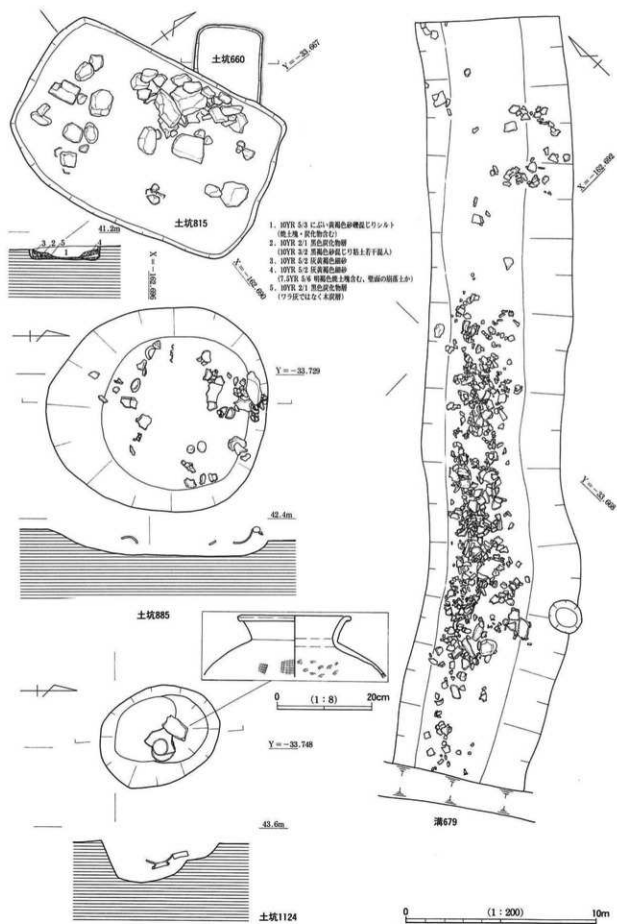


図13 A地区 土坑660・815、溝679、B地区 土坑885・1124平面・断面図

②溝679 (図12・13)

蔵塚古墳の周濠が早い時期に埋められていることは先述したが、一度埋めた後再び溝679を掘削している。この溝は周濠の下層まで達しているもので、現存しているだけでも約0.8mの深さをもつ。溝自体は後円部の墳丘に平行するような形で、墳丘と本来存在していた周濠の肩部のほぼ中間をめぐっている。溝自体の深さは、くびれ部付近で浅くなり消えてしまう。溝は2段に落ちるもので、土器はその最も下層に集中している。

この溝は墳丘のラインに平行であることから、古墳を意識して掘削していることは明らかである。また、溝と同時期の遺構が集中している区域にあることから、周濠を埋めて墓域を狭め、建物を構築しながらも、居住空間と墓域を区画するという意図をもっていただ可能性もある。周濠下層の土器と同様に土器の廃棄状況を見る限り、常時廃棄されているものであろう。また出土している遺物の中で接合する資料は少なく、破損してから廃棄している可能性が高い。

③溝1193・溝1195 (図11)

最東部の流路1237の上面にあたる。溝を検出した面は、流路1237に伴う洪水砂の上層にあたるものである。溝1193と平行する溝1195は、幅・長さともに同じような規模をもつ。この2本の溝は、レベルの変化とは無関係に南東部が不明確になっており、その機能は不明である。だが、2本の溝は平行して走っていることから、道の側溝のような機能をもっていた可能性もある。溝間の距離は約2.0mを測る。遺物が出土していないため時期を確定することは出来ないが、9世紀に流路1237が埋没していることから、それ以降に属するものであることは間違いないであろう。

(3)土坑

①土坑660・土坑815 (図12・13)

土坑660と土坑815は蔵塚古墳後円部周濠の上層に位置する。土坑660は土坑815に切られる焼土坑である。埋土は焼土塊や炭が多く含まれており、壁面も固く焼け締まっているため、この場所で長時間火がたかっていたことは間違いない。だが時期を確定することが可能な遺物が出土していないため、時期および用途は全く不明である。

土坑815は土坑660を切ると同時に溝679も切っている。平面では長方形を呈しているもので、この土坑は現状では深さがほとんどないにもかかわらず、石英安山岩や凝灰岩の切石が出土しており、かつ二次的に火を受けて廃棄されている石材が大半を占める。土坑815から12世紀中頃の瓦器が1点出土しており、土坑660はそれ以前のものであることは確実である。

②土坑1188 (図11)

溝1195の北側にあたり、土坑1188と溝1195の北西端部が接している。北東から南西方向の不定型な円形を呈する。現状では深さは0.2mと浅く、井戸枠を抜いた痕跡が見られないことから、井戸の可能性は極めて低い。だが、出土遺物には柄杓の底板などの木製品が見られ、水を汲むための施設の一つであった可能性もある。

(4)土器溜まり

①土器溜まり851 (図12)

土器溜まり851は蔵塚古墳後円部周濠内に位置している。調査区外にまでその範囲が広がっているため規模は明らかではなく、出土遺物も全てではない。また調査区内でも、遺構の検出している面のレベルが等しくて溝679と接しており、遺構の境界が明確ではない。溝679と同様に土器の廃棄場所の一つで

あろう。遺構間の境界が明確でないのは、藏塚古墳後円墳周濠下層や溝679から出土した土器のように常時廃棄されていたわけではなく、土器溜まり851へは一括廃棄されている可能性を示すものといえる。また、B地区の遺構（土器溜まり884、土坑885）と接合資料が存在している点は、興味深い事実である。

(5)井戸

①井戸672（図14）

井戸672は、藏塚古墳の後円部周濠外堤に集中している掘立柱建物跡およびピット群を始めとする遺構の中で、流路1237に向かって段に落ちる肩部に位置している。平面形はほぼ円形を成し、深さ約1.2mを呈する。ほとんど直に掘り下がる形態を持ち、廃絶時に抜かれたものか、井戸枠は残存していない。

最下層から自然石などの他に柄杓の一部が出土している。井戸を使用している際に落としたものであろう。また17層の上面で加工された凝灰岩を含む自然石がレベルを揃えて出土しており、一旦この深さで井戸が再機能していたことがわかる。その後は地山の崩落土を含みながら、数次にわたって埋没している。出土遺物はかわらけ、瓦器といった土器を中心として、安山岩などの石材が16・19層から出土している。

②井戸678（図14）

井戸678も井戸672同様に藏塚古墳の後円部周濠外堤に位置しており、井戸672から南西に約6.5m離れた位置で、藏塚古墳の周濠が埋没した後に周濠の肩口に構築している。平面形は不整形円形を成しており、深さは水溜まで約3.0mを呈する。本来は井戸枠および水溜が存在していたものと思われ、裏込め（21～24・28層）内の遺物は、28層下部で井戸枠を引き抜いた時の、上層の土砂および遺物が混入している。

28層は一部地山が抉れており、そこから下駄・曲物などの木製品と瓦器が出土した。これらは裏込め土から出土しているが、井戸の構築時期を示す遺物ではないことは、先述したとおりである。また他に安山岩などの自然石を多く含む。井戸678は井戸枠が少なくとも2段存在しており、2回にわたって作り替えている可能性も高い。なぜなら、28・29層の上面で一度レベルを揃えていることと、その面で自然石を環状に配している状況が看取できるからである。下部に井戸枠を設けて石材を配した後に、別の井戸枠を組んでいるのであろう。25～27層は土器および木製品はほとんど出土しなかったが、加工した凝灰岩などが若干出土している。最終的に井戸678は、20層が一度に埋没することによってその機能を停止してしまうようである。

③井戸1187（図14）

流路1237へ落ちている段の肩部に位置し、上面は後世の削平によって破壊されている。よって井戸構築時は、現状よりも高い位置に生活面が存在していたことが確認できる。現状では、平面形は楕円形を呈しており、底を抜いた曲物2個体を重ね合わせた井戸枠が残存している。1層からも曲物の一部が出土していることから、本来は底板を抜いた曲物を数個体重ねて井戸枠にしていたものであろう。

4層から曲物が1点出土している他に、曲物の側板などの木製品と瓦器を含む土器片が数点出土しており、12世紀後以降の井戸と考えるとよいであろう。

④井戸1189・1191（図14）

流路1237の上流部分にあたり、その上層に位置している。井戸1187から、南西方向に約3.0m離れた所で2基切りあっており、井戸1191の後に井戸1189が構築されていることが、確認できる。2基とも上層に廃絶時の石材が混入していることから、上面は後世に削平をうけて破壊されていることがわかる。また、2基とも井戸枠が上方向にのびていることから、現状よりも高い位置に生活面が存在していた

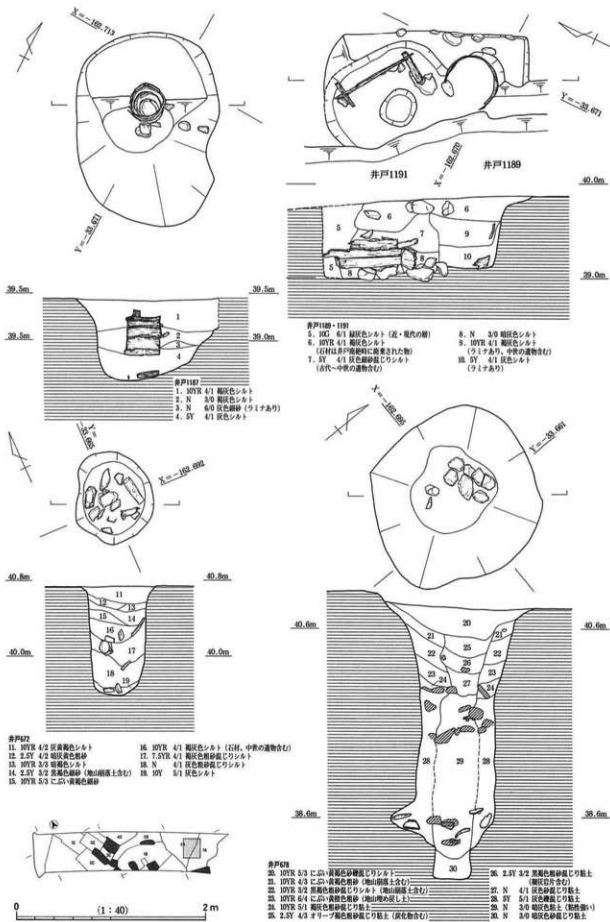


図14 A地区 井戸672・678・1187・1189・1191平面・断面図

ものであろう。

井戸1189は曲物を井戸枠に使用しているもので、2個体重なっている状況が確認された。井戸1191と重なっているため、本来の形状は不明である。上層から廃絶時に投げ込まれたと自然石と井戸枠内から瓦器片が数点出土している。

井戸1191は最下部に自然石を置き、その上に板材を組み合わせて井戸枠にしている。井戸枠はほぞと受けをもった板材を組み合わせている。上面はもちろんのこと、北西側は近・現代に境界を示す溝を掘削した際に破損しており、従来の規模は不明である。上層と下層から自然石が多数出土しており、井戸枠内から黒色土器片が数点出土している。

(6)ピット

A地区でピットが集中している場所は限られており、蔵塚古墳後円部周濠および外堤の一部でしか検出できなかった。だが、後円部からくびれ部にかけて外堤が平坦になり、遺構が非常に希薄になることから、後世に削平を受け、遺構が検出できなかった可能性が高い。よって、本来はピットを主とした遺構が存在していた可能性もある。

遺物が出土しているピットが少ないため、時期を確定できるものは少ない。だが、ピットの形状などから、ピットが集中して検出できる場所は、時期によって異なることがわかる。奈良時代を中心としたピットが、蔵塚古墳の周濠を埋めた後に、周濠内から肩部にかけて検出されている。対して、平安～鎌倉時代のピットは、蔵塚古墳外堤から流路1237への方向にかけて検出されており、居住空間が南東方向に移動している可能性がある。

ピットの中には柱痕の明瞭なピットや、凝灰岩が出土しているピットなども検出しているが、掘立柱建物跡にはならない。また1列に並ぶものもあり、棚列であった可能性も高い。

(7)流路1237 (図11)

弥生時代から継続している流路で、A地区の最東部に位置している。弥生～古墳時代、飛鳥～奈良時代の遺物が集中して出土している。だが平安時代以降遺物量が非常に少なくなり、黒色土器および瓦器は1点も出土していない。断面からも鎌倉時代には流路1237は存在していないことが確認されている。流路1237は、弥生～古墳時代より幅が大きくなり、流路1237の東側は調査区外になっており、今回の調査では底面を検出できなかったため、正確な規模については不明である。(弥生～古墳時代の遺構・遺物に関しては16・17頁参照)この流路は自然に土砂が堆積して、かつ埋没していることが断面より確認できる。

この流路1237から飛鳥～奈良時代の遺物が集中して出土している。ほとんどローリングを受けていないことや、流路1237の中でも出土地点に偏りが見られる(図25)ことから、流路1237の上流域にあたる調査区外で、そう離れていない位置に古代の遺構が存在していることを示している。加えて、その中でも円面硯が数点出土していることから、一般集落ではない公的施設や寺院といった、識字層が居住していた可能性を窺わせるものである。

2. 遺物

(1)土器

①掘立柱建物跡11・12出土の土器（図15-1・2）

掘立柱建物跡11の柱穴からは、土師器の甕・杯片などが出土している。だがいずれも細片であり、実測可能な遺物は2点のみである（1・2）。掘立柱建物跡11は、蔵塚古墳周濠を埋めた後に構築されており、かつ柱穴の大半が蔵塚古墳周濠内に位置しているため、出土した遺物の中には、蔵塚古墳の周濠を埋めた時の遺物が混入している可能性もある。だが、他の地区で8世紀前頃と考えられる掘立柱建物跡と、掘立柱建物跡11がいずれも総柱の建物構造であるという点や、溝679と平行になるように軸を併せて構築されている点から、溝679と同時期の建物であることは確実であろう。故にこれらの遺物は、掘立柱建物跡11に伴うものであろう。

掘立柱建物跡12に伴う遺物は土師器・須恵器などが出土しているが、いずれも細片であり、時期を特定することはできない。だが柱穴から平安Ⅰ新段階の土師器が1点出土していることや、周辺の遺構との関連から、9世紀前半にまで下る可能性がある。

②ピット出土の土器（図15-3～6・36）

A地区のピットから出土している遺物は細片が大半を占め、実測可能な遺物は5点であった。3・4は掘立柱建物跡12に至近するピットではあるが、蔵塚古墳周濠上面に位置しているため、蔵塚古墳後門部下層か溝679の遺物が混入している可能性もある。5は掘立柱建物跡12よりも新しい時期のもので、今回は検出することができなかったが、周辺にその時期の掘立柱建物跡を想定することができよう。

③土坑出土の土器（図15-7～14・33）

7～9は土坑1188から出土したものである。他に、土師器・須恵器などが破片ではあるが多量に出土している。流路1237の肩部にあたり、遺物の時期から流路1237が機能していた時に同時に併存していたことが確認できる。9の頸部には「十」の刻字がなされている。10は焼土坑である土坑660から出土した土師器で、他に須恵器・瓦器の細片も出土している。11・12は土坑796出土の瓦器である。暗文が不明瞭であるが、井戸678から出土している瓦器より新しい時期と考えてよいであろう。13・14・33は土坑815から出土したもので、他に凝灰岩や寺山安山岩製の石製品が多量に出土している（図28-3）。遺物の時期から考えると、土坑660と土坑815はかなり時期差があることがわかる。

④井戸出土の土器（図15-15～32・34・35）

15は井戸672の16層から出土した瓦器で、他に瓦や凝灰岩製の石製品が出土している（図27-1）。外面には暗文はなく、器高が低くなる。16～26・35は井戸678から出土したものである。他には、土師器や凝灰岩や寺山安山岩製の石製品（図27-2～5、図28-1）、木製品（図29-1～3）が出土している。主に瓦器碗が出土しており、それぞれ出土している層は異なるものの、時期は12世紀中～後に収まり、井戸672よりも遡る時期に収まりそうである。16は灯明皿と考えられ、外面全体に煤が付着している。27～30は井戸1187の2層から出土したものである。井戸1187は上部が削平されており、その規模については不明な点が多いが、これらの遺物は井戸枠内から出土しており、裏込め土からは一切遺物は出土しなかった。30の内面は密な暗文を施しているが、外面に関しては暗文の単位がなくなりつつある時期のものである。遺物の年代で考えるならば、井戸1187と井戸678はほぼ同時期と考えてよいであろう。31・32は井戸1189から出土したものであり、土師器の他に瓦が数点含まれている。また、井戸1191からは黒色土器片が数点出土している

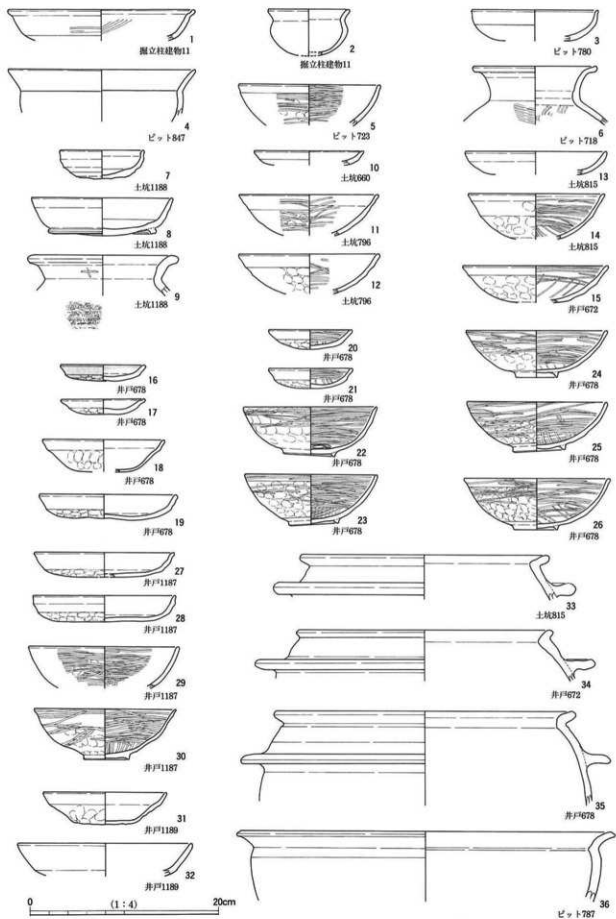


図15 A地区 古代～中世遺構出土遺物（土師器・須恵器・瓦器）

⑤藏塚古墳後円部周濠下層出土の土器（図16・17）

図16は土師器である。破片数にして11,583点、総重量は130,645g出土している。器種構成比率は破片数で、椀・杯・皿が2,860点（24.7%）、鉢・高杯・盤が261点（2.3%）、壺・甕・鍋・羽釜が3,717点（32.1%）、製塩土器が78点（0.7%）、その他・不明が4,667点（40.3%）である。

杯・皿類の中でも7世紀後の土師器（1・2）は、精良な橙色を呈する胎土を使用し、幅0.1cm以上の暗文を粗い単位で施している。全体出土量に対してその割合は少ない。8世紀前～中の土師器は、大半のものが赤色細粒を多量に混入する土師器である。化粧土が剥がれ、暗文や器表の不明瞭なものが多い。いわゆるI群の土師器は、数点しか出土していない。幅0.1cm以上の暗文を約0.2～0.3cmの間隔で施している。杯蓋はII群のものが出土している（11・12）。暗文は、幅0.1cmの工具で密に施しているものが多い。

18の小型丸底鉢は橙色を呈し、かつ石英の細粒を多量に含んだ胎土を使用している。高杯（20～23）は、7世紀後の高杯（21・22）と8世紀代の高杯がほぼ同じ割合で出土しており、杯・皿類とは逆に、淡黄褐色を呈する土師器が出土量の大半を占めている。22の内面底部には、布目痕が一部見られる。暗文は不明瞭。

甕は黄褐色を呈するものが圧倒的に多く出土しており、河内型甕は破片で数点数えるのみである。胎土は、橙色を呈した精良なもの、淡黄褐色を呈した石英細粒を多量に混入したものが大半を占める。口縁部しか出土していないものも多く、煤が付着している資料は少量である。35は内面に炭化した内容物が付着しており、体部外面に火を受けた痕跡をもつものである。全体に器表は粗い。19のミニチュア壺の中の土を洗浄したが、何も含まれていなかった。製塩土器は体部が大半を占め、実測可能なものは2点だけであった（24・25）。布目を有するものは数点しか出土しておらず、1.0cm以下の薄い器壁をもつものが大半を占める。ほとんどのものが筒型の形状を呈し、大阪湾から紀伊で生産されていた製塩を運ぶための土器と考えている。内面に布目痕をもつ軟質の瓦が数点出土しているが、かなり磨滅している。また、約2.0～5.0cmの焼土塊が十数点出土している。

図17は須恵器および緑釉陶器である。須恵器は破片数で2,962点、総重量は92,220g出土している。器種構成比率は、椀・杯・皿類が521点（17.6%）、壺・瓶類が582点（19.6%）、鉢類が6点（0.2%）、甕・大型壺類が1,647点（55.6%）、その他・不明が206点（7.0%）である。

杯G・杯Hは全て陶邑窯のもので、外面に灰釉のかかるものが多い（1・7）。蓋・身はほぼ同数出土しており、食器類全点数の3.8%を占める。8世紀前～中に該当する遺物は、青灰色を呈するもの（16・19）以外に、灰白色のものも出土している（14・17）。この時期は身の出土量が圧倒的に多い。

壺類は明らかに陶邑窯とわかるもの（34）の他に、石英の細粒を多量に混入するもの（40・41）も出土している。また破片であるが、石英の細粒を混入した灰色の須恵器で、粗い調整を施した用途不明の丸底の壺が出土している。

灰白色で精良な胎土を用いる鉢（29・30）以外に、陶邑窯のものが多い。甕類も同様に陶邑のものが多い。灰白色のもの（46）や焼成があまく軟質なものも数点出土している。

31・32は緑釉陶器で、31は軟質の胎土をもち、高台付近は緑釉を施していない。32は、硬質の施釉陶器で内外面ともに丁寧に釉を施しているが、筆を使用したのか施釉方向が明瞭に残っている。

藏塚古墳後円部周濠から出土している遺物は、多くの器種が出土していること、大きく分けて2時期に集中していることが特徴といえるであろう。

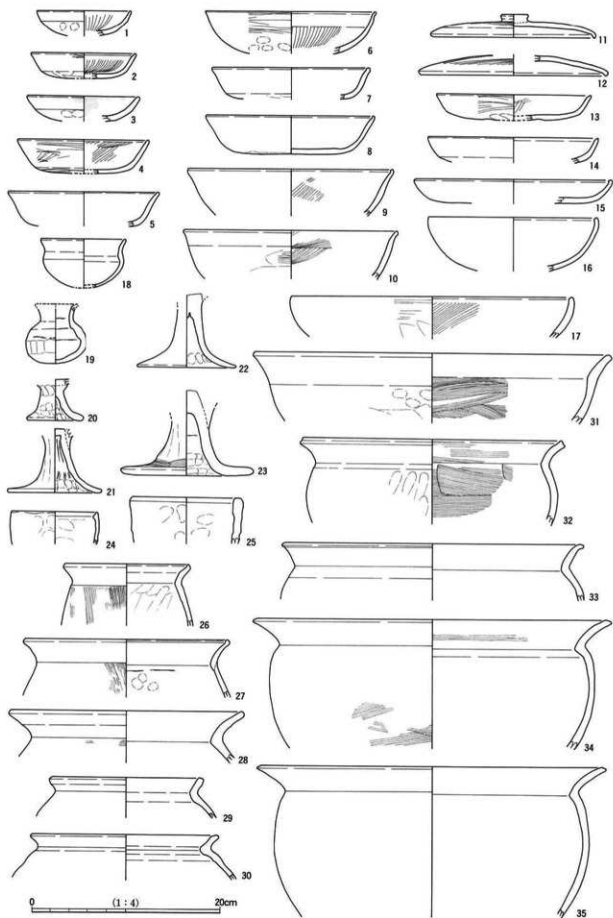


图16 A地区 藏塚古墳後円部周濠下層出土遺物（土器器）

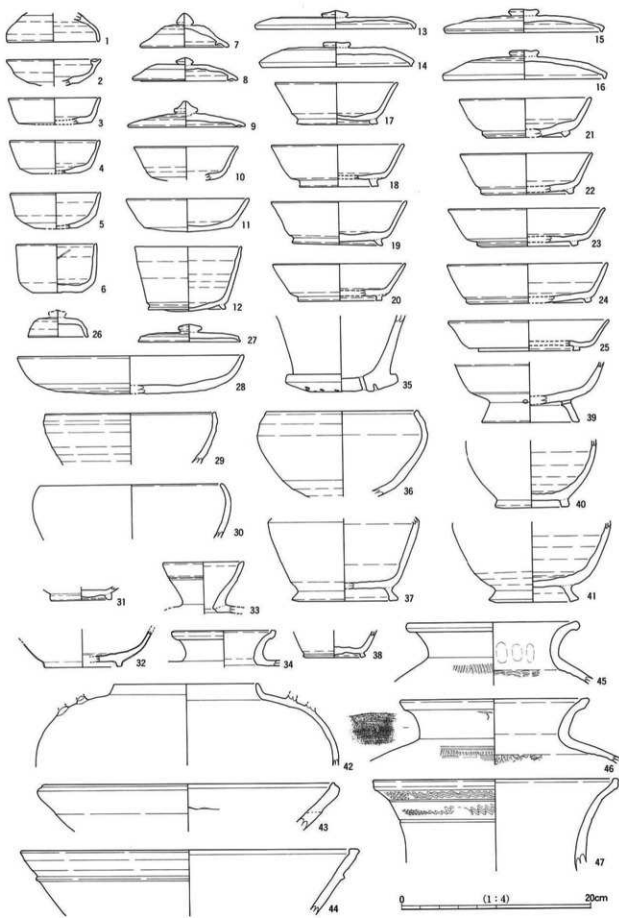


图17 A地区 藏塚古墳後円部周濠下層出土遺物(須恵器・緑釉陶器)

⑥溝679出土の土器（図18・19）

図18・19-1～17は土師器である。土師器は破片数で5,667点、総重量は43,581g出土している。器種構成比率は破片数で、椀・杯・皿類が2,834点（50.0%）、鉢・高杯・盤類が102点（1.8%）、壺・甕・鍋・羽釜が2,541点（44.8%）、製塩土器が8点（0.1%）、その他・不明が182点（3.2%）である。

化粧土が剥離し、暗文の不明瞭なものが多いが、蔵塚古墳後円部周濠下層の杯・皿類とほぼ同時期、もしくは若干時期の新しい遺物が出土している。7世紀後の杯Cは、橙色もしくは赤褐色を呈するもので、0.1cm以上の工具を用い、粗い単位で施文を行っている。8世紀前～後の杯A・杯Bは、赤色細粒を多量に混入する土師器が出土量の大半を占める（11・12）。暗文は0.1cm以上の工具で密に施文を行う。反対にI群の土器は少量で、皿類の出土が多い（24・27）。いずれも0.1cm以上の工具を用い、粗い単位の暗文を施している。身に比して蓋の出土量は少ない。

鉢は淡黄褐色の胎土を有するものが主に出土している（33）。高杯は8世紀前～中のもので、橙色の精良な胎土のものが大半を占めている（29・30）。暗文は0.1cm以上の工具を用い、0.3～0.4cmの間隔で粗い施文を行う。脚部の破片が多く出土している。盤は橙色のものが多く出土しているが、中には金雲母の細粒を全体に混入するものもある。鉢・盤ともに二次的に火を受けているものが数点出土している。

甕は河内型甕の出土量が圧倒的に多く、体部内外面に煤を有するものが多い。甕Cは、石英細粒を混入し、淡黄褐色の胎土をもつもの（図19-13）が大半を占める。壺は赤色細粒を混入するもので、実測不可能な破片が多い。羽釜は、金雲母と石英の細粒を大量に混入するもの（図19-16）で、鈔部から体部にかけて煤の付着しているものは少ない。17は甕の受け部で、受け部付近に同心円文あて具の痕跡が見られる。このようなあて具痕をもつ甕はほとんど出土せず、須恵器工人が製作していると考えられ、府下でも一定の地域しか出土しない。

図19-18～35は須恵器である。破片数で625点、総重量は17,735g出土している。器種構成比率は破片数で、椀・杯・皿類が154点（24.6%）、壺・瓶類が175点（28.0%）、鉢類が0点（0.0%）、甕・大型壺類が287点（45.9%）、その他・不明が9点（1.4%）である。

杯Gの蓋の破片が数点出土している以外は、杯Gの身および杯Hは1点も出土していない。蔵塚古墳後円部周濠下層から出土している遺物より、時期が新しいと考えてよいであろう。杯Aも数点しか出土しておらず（24）、杯Bが出土量の大半を占めている。陶器窯の須恵器の出土量が少なく、逆に灰白色もしくは白色を呈する杯Bが多くなる。同様に杯B蓋も、灰白色を呈するものが多くなる。また、外面に灰釉のかかるものや、器形の歪んだものが多く出土しており、須恵器の商品としての流通経路を考慮する上で貴重な資料となるであろう。

壺H（31）は、全体が青灰色で、断面がセピア色を呈する陶器窯のものである。壺・瓶類は、陶器窯のものが多く出土している（33）。短頸壺（30）は、石英の細粒を全体に混入する灰白色のもので、把手と体部の接合痕は丁寧ナゲ消されている。34は頸部が歪んでいるが、直線距離にして約150m離れている流路580の下層から出土した破片と接合している。甕は体部の出土量が多く、実測可能なものは1点のみで（35）、石英細粒を多量に混入する灰白色の胎土をもつものである。

溝679では、7世紀後から8世紀にかけて土器が廃棄されていることが確認でき、須恵器と比較して土師器の出土量が多いこと、またその中でも食器類の占める割合が大きい点が特徴といえよう。

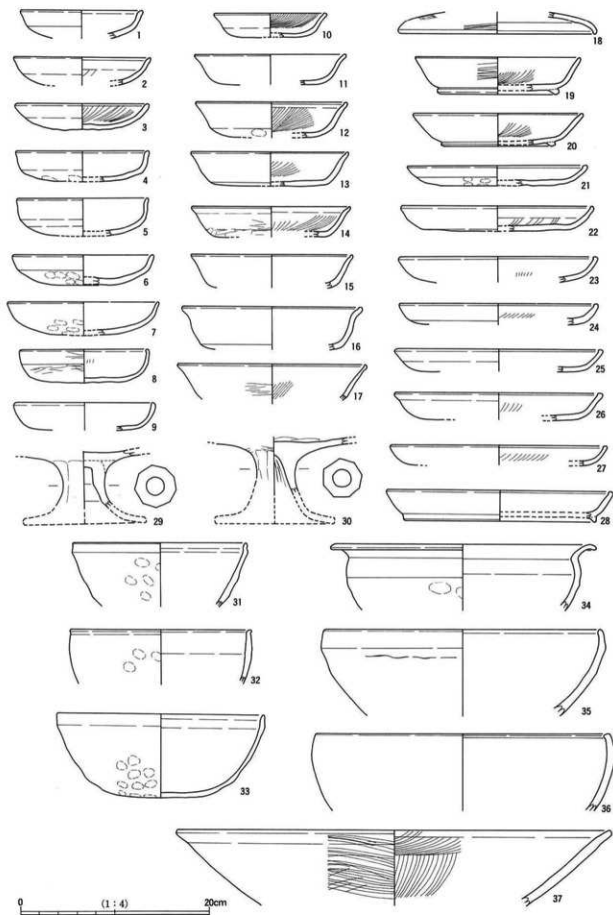


图18 A地区 溝679出土遺物(1)(土師器(1))

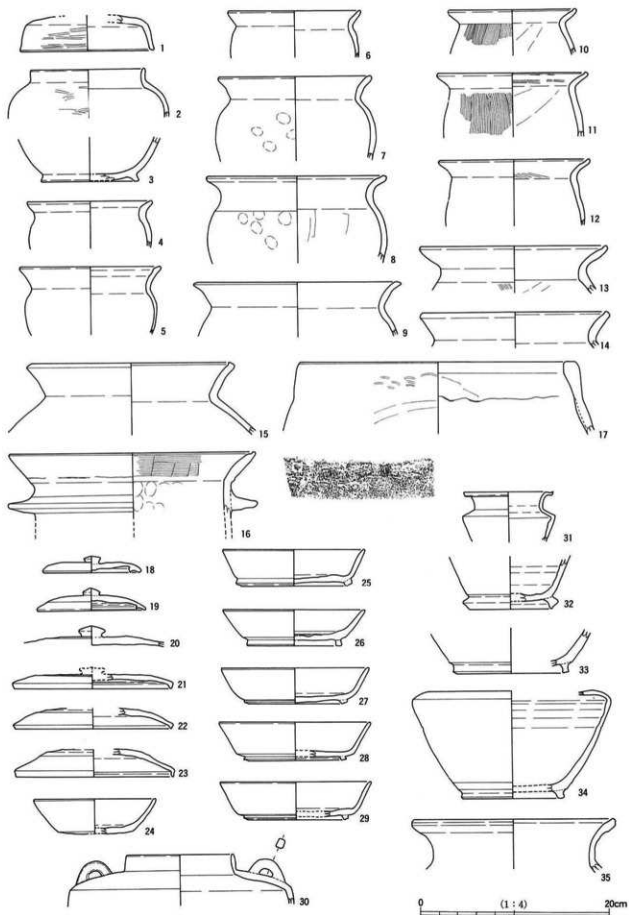


图19 A地区 清679出土遺物(2)(土師器(2)・須恵器)

⑦土器溜まり851出土の土器（図20～23）

図20・21は土師器で、破片数で3,643点、総重量は67,734 g 出土している。器種構成比率は、碗・杯・皿類が880点（24.2%）、鉢・高杯・盤類が138点（3.8%）、壺・甕・鍋・羽釜が1,557点（42.7%）、製塩土器が38点（1.0%）、その他・不明が1,030点（28.3%）である。

いわゆる7世紀代のもと考えられる杯類は1点も出土しておらず、杯・皿類は8世紀前～中に該当するものが集中している。淡黄褐色を呈する土器は1点で（図20-2）、0.1cm以下の二段放射暗文と、0.1mm以上の螺旋状暗文を施す。暗文の間隔は0.2～0.3cmとやや粗い単位をもつ。大半の杯類は、赤色細粒を多く混入し、橙色もしくは赤褐色を呈するものである。暗文は0.1cm以上の幅をもち、やや密に施している（図20-5）。また金雲母の細粒を混入し、暗赤褐色を呈する杯類が数点出土している（図20-3・10）。暗文は0.1cm以下の幅で、間隔は0.2～0.3cmとやや粗い単位をもつ。皿類はいずれも赤褐色を呈しており、0.1cm以下の幅の暗文を粗い単位で施している。杯Aと比較すると、杯Bは蓋・身ともに出土量の割合が少ない。

高杯は、8世紀中ものが集中して出土している。脚部の出土が大半を占め、杯部はほとんど出土していない。石英の細粒を混入した橙色もしくは赤褐色を呈するものが多い。暗文の不明瞭なものが多いが、杯・脚部いずれも0.1cm以上の幅をもつ暗文を施し、間隔はやや密なものが多い（図20-19・20）。また金雲母の細粒を混入し、暗赤褐色の高杯も数点出土している。土器溜まり851から出土した高杯は、総じて丁寧なつくりのものが多い（図20-20）。鉢は、長石の細粒を混入した黄褐色のものが多く出土している。盤は淡黄褐色を呈し（図20-32・33）、0.1cm以下の暗文を密に施している。33の把手は貼りつけた後に、丁寧になでていることがわかる。

27のミニチュア土器、28の小型壺といった、祭祀に関連する遺物が数点出土している。甕Cも淡黄褐色を呈するもの（図21-9）と、赤色細粒を混入するもの（図21-1）の2種類存在している。体部に火を受けた痕跡をもつものは、いわゆる河内型甕とされるものが圧倒的に多い。羽釜は、いずれも金雲母と石英を含むものであるが、茶褐色ではなく全て橙色を呈するものである。いずれも煤が付着しておらず、使用されていた痕跡を示すものが少ない。また、甕が破片で多く出土している。胎土には金雲母を含み、いわゆる生駒西産土といわれるもの（図21-10・20）と、石英の細粒を含んで橙色を呈するものなどがあげられる。いずれも煤が大量に付着している。

製塩土器は、器壁の薄いタイプのもが多く出土しており、非型作りの特徴をもつ硬質なものも大半を占めている。チャートの円礫を多く含むもの、金雲母を含むもの（図20-30）、チャート・石英の角礫を含む3種類のものが出土している。口縁部はほとんど出土していないが、筒型の器形をなすものであろう。二次的に火を受けて細片になっているものが数多く見受けられる。また布目を有するもの（図20-31）が数点出土している。いずれも石英の細粒を多く混入するもので、硬質なものも大半を占める。平織りのやや精緻な布を使用している。また、5.0cm大の焼土塊が数点出土しており、土器を廃棄する場所から出土している点は興味深い。

図22・23は須恵器である。破片数で766点、総重量は31,535 g 出土している。器種構成比率は、破片であるが、碗・杯・皿類が86点（11.2%）、壺・瓶類が171点（22.3%）、鉢類が2点（0.3%）、甕・大型壺類が503点（65.7%）、その他・不明が4点（0.5%）である。甕・大型壺類といった貯蔵具の比率が大きいが、体部が破片になる割合が高いこと、破片数が多いことが、全体比率の中で大きいということに反映しているのであろう。また遺構は調査区外にも続いているため、遺物の出土点数は増加するも

のと思われるが、器種の比率はほとんど変動がないものと見なしてよいであろう。

杯類は、身よりも蓋の方が多量に出土している。杯Gの杯蓋が数点出土しているのに対して、杯身は1点も出土していない。杯Gはいずれも陶邑の須恵器と考えてよいであろう。杯B蓋は、陶邑のものが少なく、石英の細粒を混入する灰白色を呈するもの（図22-6）、白色を呈するものが多い。杯Aは陶邑のもの（図22-7・8）の他に、赤灰色を呈する精良な胎土を使用したものも含まれている。杯Bは、陶邑窯の須恵器（図22-9・23）と、灰白色を呈するもの（図22-24・29）が出土している。また破片であるが、白色で軟質の須恵器も数点出土しており、いずれも複数の供給地があることを想定させる。溝679からも数点出土していたが、中央が凹んでいる杯蓋（図22-6）、逆に中央が出ている杯身（図22-12）などが出土している。いずれも陶邑のものではなく、このような粗悪品を使用していることに関しては、何らかの理由が考えられるであろう。また図22-10の杯身は、蔵塚古墳前方部周濠南隅の土器溜まり884から出土した破片と接合している。お互いの遺構が直線距離にして約65m離れていることから、遺物が混合する可能性は極めて低く、同時期に存続していた遺構であることがわかる。

壺類も遺構間で接合するものが出土している（図22-31・34・図23-1）。31・34はいずれも溝679と接合する資料であり、1は直線距離にして約65m離れている土坑885と接合している。壺類は壺Aが多く出土しており、次に壺L・壺K・壺Qが多く見られる。他に壺N（図23-13）といった出土例があまり見られないものが含まれるなど、多種類の壺が見られる。陶邑のもの（図23-31・36）は少なく、暗緑灰色で、黒色粒子を多く混入する胎土のものなど（図22-34）が出土している。また、灰釉を全体に被っているもの（図22-38・図23-1）も多く見られる。他に焼成があまり軟質の須恵器や、底部に置台が付着しているものなども出土している。また、漆の皮膜が残存している壺の体部片も出土しており、別項でとりあげるように、蔵塚古墳周濠内の遺構（下層一括、溝679、土器溜まり851）から、漆の使用・運搬に伴う土器が数点出土している。

瓶類はいずれも灰白色を呈し、外面に灰釉を被るものが多く出土している。また中には窯体が付着しているものもある。この瓶類の中にも、溝679と接合するものが存在している（図23-2）。このように溝679の遺物と接合する割合が大きい理由として、遺構間が至近であるために、お互いの遺物が混入している可能性もある。現状での土器の年代観を見るかぎりでは、同時期に2遺構が存在している時もあるものの、土器溜まり851の方が溝679よりも若干時期は新しいために、常時2遺構に分別して廃棄を行っているとは考えられない。鉢は2点しか出土していないが、いずれも石英細粒を混入し、灰白色を呈するもの（図22-37）で、内外面ともに灰釉を被る。孔は先端が三角形になった鋭利な刃を用いて穿っており、穿つ単位に規則性は見られない。

硯（図23-5）は中空円面硯であるが、下部の袋部分は欠損している。灰色で、精良な胎土を使用している。海部は浅く、外堤の続き方は不明。内面に粘土蓋の痕跡が明瞭に残り、棒状工具を差した痕跡が見られることから、把手付中空円面硯であった可能性が高い。硯面中央が凹面になっており、使用頻度が高かったことが判る。甕も、青灰色を呈するものが少なく、石英細粒を多く混入し、灰白色を呈するもの（図23-8・10）、ほぼ精良な胎土を使用し、白色を呈するもの（7・9・11）が多く出土している。10は頸部をナデ消し「大」を刻字している。

土器溜まり851では、8世紀前～中の土器が集中して出土していることから、一時期に一括して廃棄されている可能性が高い。そして土師器は南河内地域の特徴をもつものが多く、逆に須恵器は陶邑のものが少ない点が興味深い。

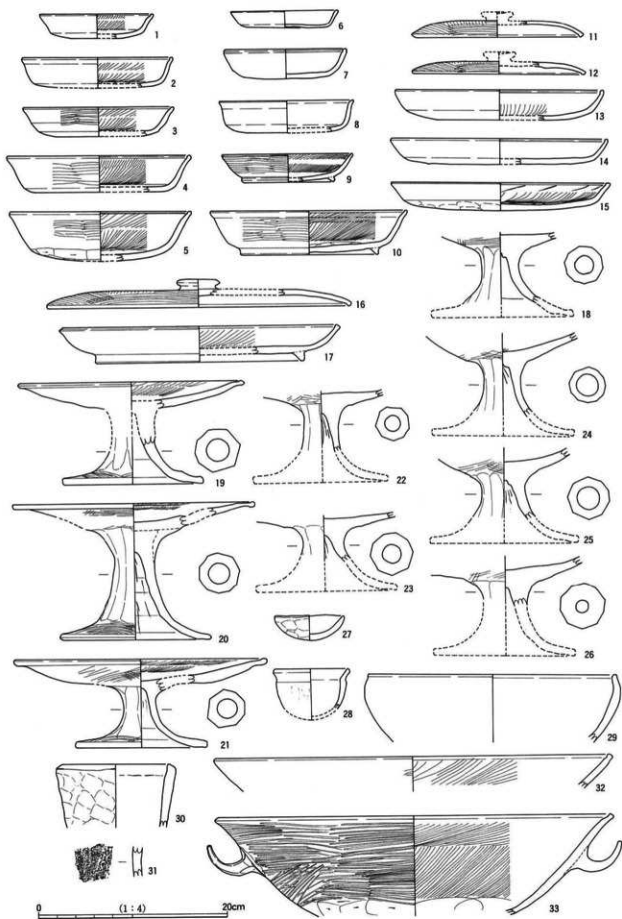


图20 A地区 土器溜まり851出土遺物(1)(土師器(1)・製塩土器)

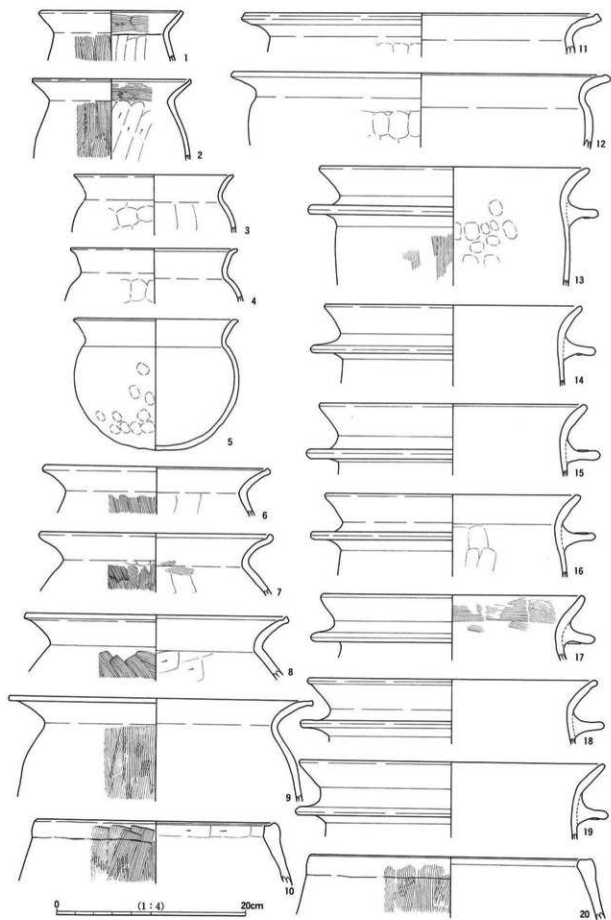


図21 A地区 土器溜まり851出土遺物(2)(土師器②)

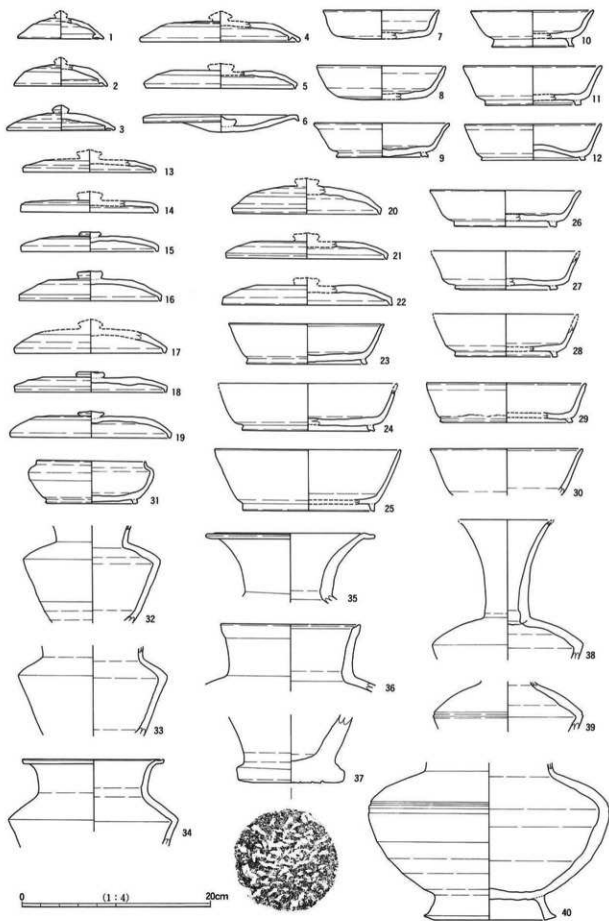


图22 A地区 土器溜まり851出土遺物(3)(須恵器(1))

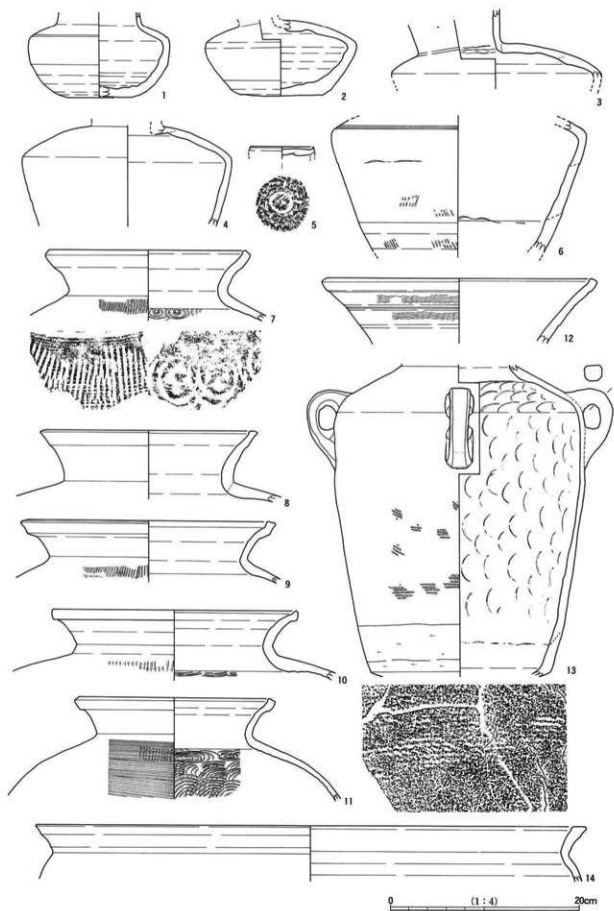


图23 A地区 土器溜まり851出土遺物(4)(須恵器(2))

⑧流路1237出土の土器(図24・25)

弥生～古墳時代の遺物に関しては前述しているので(図10)、ここではそれ以降の遺物について述べることにする。

図24-1～18は土師器である。杯・皿は、7世紀後～8世紀にかけてのものが多く出土しているが、破片が多く、化粧土の剝離しているものが多い。杯Cは淡黄褐色のものが大半を占め、0.1cm以下の暗文を密に施しているものが多い。1はいわゆるa0手法を用いているが、暗文は不明瞭。橙色を呈する杯Cは数点しか出土していない。0.1cm以上の幅をもつ暗文を、0.5cm以上の間隔で施している。杯A・皿Aは淡黄褐色のものが大半を占め、0.1cm以下の幅をもつ暗文を、0.1～0.2cmの間隔をもって施している(2)。橙色を呈するものには、b手法を施すものも存在しており、時期によって土器の供給源の異なる可能性もある。杯Bは橙色の土師器が大半を占める。杯蓋はほとんど出土していない。

高杯は多角柱の脚部をもつものは淡黄褐色を呈する1点しか出土していない。ミニチュア高杯が3点出土している(5)。いずれも淡黄褐色を呈するもの。高杯も同様で(6)、橙色を呈する高杯は数点しかない(7)。また、高杯の脚部に火を受けたものも存在している。鉢はいずれも淡黄褐色を呈するもので、0.1cm以下の暗文を施す(9)。把手との接合方法は不明瞭。また、内面に煤の付着しているもの(8)も出土している。壺(4)は橙色を呈するものである。

甕は甕Cの占める割合が大きく、河内型甕の出土量は少ない。甕Cは、淡黄褐色を呈するもの(11)と、赤色細粒を混入する橙色の胎土をもつものがあり、煤の付着していないものも出土しているが、河内型甕は体部外面に煤の付着しているものが多い(10)。甕B(17)も淡黄褐色の土器である。把手は貼りつけのものであろう。

製塩土器は、非型作りのもの(13～15)が多く出土しており、布目を有する型作りのものは体部片でしか出土していない(16)。布目のないものは全て、器壁は1.0cm以下で、橙もしくは茶色系でチャート・石英の円礫を混入する、硬質のものである。火を受けているものも数点出土している。

18は埴輪として図に掲載したが、上部内面に煤が付着していることから、甕の可能性もある。胎土は茶褐色を呈し、金雲母・石英・長石の細粒を混入するものである。甕片は金雲母を含んだ胎土を使用したものが数点出土している。また、焼土塊が十数点出土しており、中には7.0cm大のものも1点ある。

19～31・33～38は須恵器である。杯G・杯Hは、青灰色を呈するもの(19・24)、黒色粒子を含み白色を呈するもの(30)が出土している。また、22・23のように若干歪んだ器形をもつものもある。杯Aは陶邑のもので、0.5cm角の石英を混入する(27)胎土をもつ。杯Bは1点しか出土しておらず(28)石英の細粒を混入し、灰白色を呈する。杯蓋は、杯G・杯H・杯Bが出土している。いずれも陶邑のものである。

壺・平瓶は陶邑のもの(31・38)の他に、播磨産と思われる精良な胎土を使用したもの(35)、石英の細粒を多量に混入した粗い調整のものなどが出土している。口縁部は少量だが、壺Mの高台が出土している。平瓶(31・38)は把手を持たず、体部が全体に丸くなるもの。天井部にヘラ記号が確認できる。甕は体部片が数点出土している。

硯(33・34・37)は、円面硯である。33・34は青灰色を呈する精良な胎土を用いており、硯面が滑らかであるためかなり使用されていたことが推定できる。37は黒色粒子を多量に含むもので、全体に灰軸がかかり、明緑灰色を呈している。

流路1237からは施釉陶器が4点出土している(32・39～41)。32は軟質の緑釉陶器で、高台の接地面

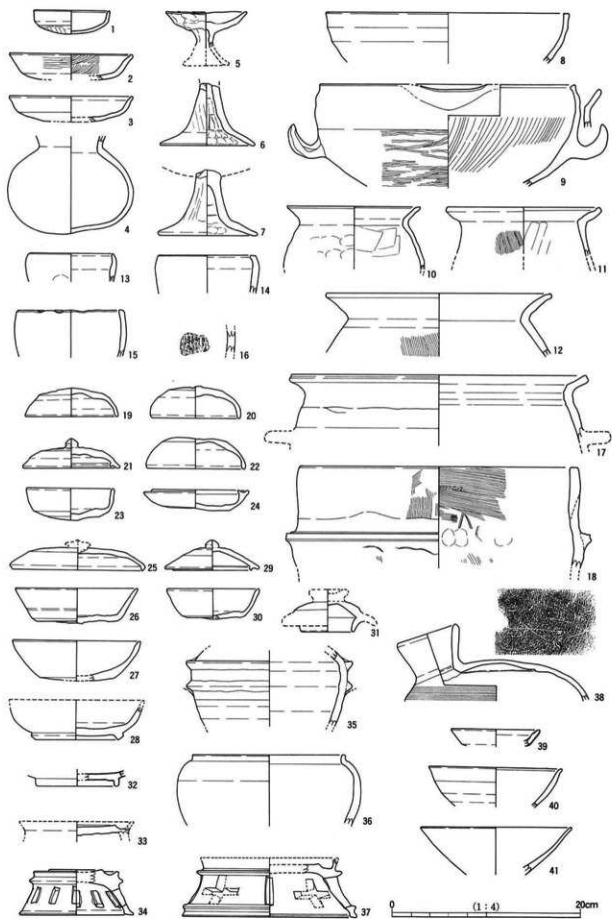
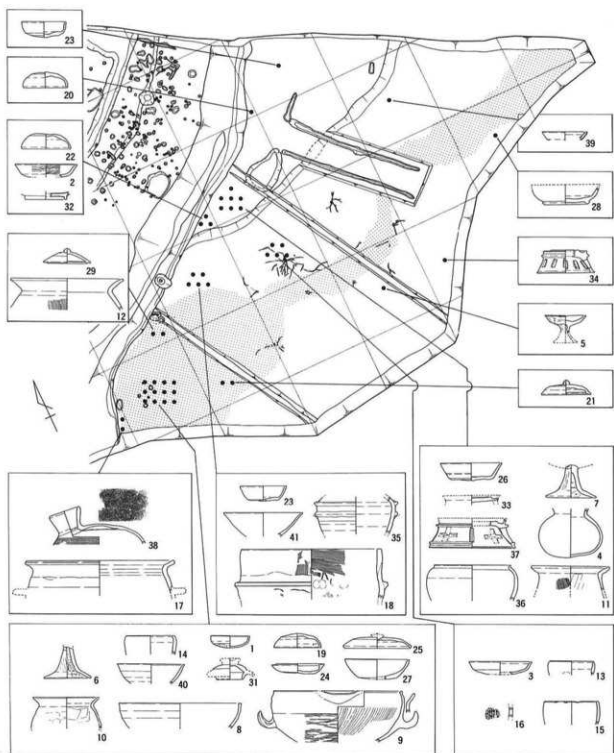


图24 A地区 流路1237出土遗物(土器·製塩土器·須恵器·緑釉陶器)



表示したドットの位置は正確な出土地点を示すのではなく、図上地盤による10×10m
グリッドの地区割内から出土したことを示している。また図の番号は図24の番号に準拠する。

図25 A地区 流路1237遺物出土地点

を削ることによって釉を削り落としている。39～41は硬質の胎土をもつものである。いずれも釉のかかり具合が均一な良品である。

図25は、図24で掲載した遺物の出土地点を示したものである。7世紀後頃の遺物は、藏塚古墳外堤に近い地区で、割合時期の新しい遺物は流路1237の下流付近に集中していることがわかる。また全体的に遺物の出土量は、流路1237の上流域で多い。

流路1237は、古代以前から流路として存在していたが、8世紀後～9世紀初頃になると上面に、井戸1187と1189が構築される。その後の時期の遺物がほとんど出土しないことから、流路1237はそれ位の時期に埋没しているようである。出土遺物は、転用硯ではなく円面硯が出土していることや、緑釉陶器など一般的に出土しないものが多く、付近に公的施設があった可能性がある。

⑨漆附着土器（図26）

図26はA地区から出土した漆附着土器である。1～5・7は藏塚古墳後部周濠下層から、6は流路1237から、8は溝679の上・中層から出土している。1～5は土師器で、いずれも杯A・皿Aである。漆の附着は、5を除いて底部に均一に残存しており、口縁部には一部附着しているだけである。5は、口縁端部の内外面に厚い膜を作った状態で残存している。いずれの土器も密閉できず、漆の乾燥に対処できない構造のものである。そのため、これらの土師器は運搬に際して使用した土器ではなく、実際に漆を使用する時に用いたものと考えられる。

6～8は須恵器である。6・7は破片であるために断定することは難しいが、いずれも皿である可能性が高い。また、いずれの土器も天井部にまで漆が附着しており、密封性もあることから、ある程度運搬もしくは保存を目的とした土器であっただろう。ただしその漆も膠着している状態で附着せず、薄い膜を張った状態になっている。8は皿の体部上半部を打ち欠いている。天井部分から底部にかけて均一に漆が残存しており、一部厚い膜を張っているところもある。欠けている断面にも漆が附着しており、打ち欠いてから内部の漆を使用したものであろう。これらの土器は、いずれもA地区からしか出土しておらず、この周辺に漆を使用する人間が存在していた可能性がある。だが、運搬に使用したものと確実に断定できる土器は出土しておらず、漆を専門に扱う工人などの存在は今後の課題といえよう。

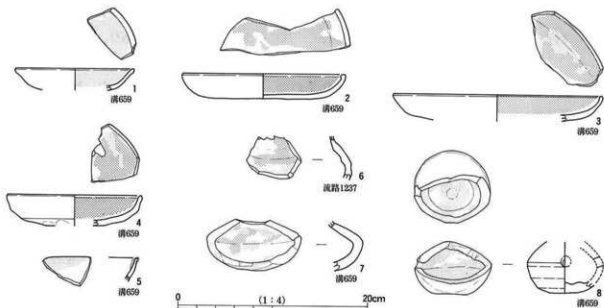


図26 A地区 漆附着土器（土師器・須恵器）

(2)石製品 (図27・28)

A地区からは加工された石製品が多数出土している。主に井戸672・井戸678といった井戸に廃棄されているものと、土坑815など蔵塚古墳後円部周濠内から出土しているものがある。だがこれらの石製品は、井戸や古墳に伴っていたものとは考えられず、他所から運ばれてこれらの遺構に廃棄されたものと考えた方がよいであろう。A地区から出土している石製品の特徴としてあげられるのは、全体に二次的に火を受けているものが多いということである。それは石材種、形状に問わず見られるもので、火災を受けたものか、常時火を受ける場所に設置されていたものかは不明であるが、高い熱を長時間受けていることは確かである。また、流路1237からは古代以降の石製品は出土しなかった。

図27-1は井戸672の16層から出土したものである。凝灰岩製で、全体に火を受けている。その形状や計測値を見るとC地区で出土している埴と似ており、建築物の基壇など、埴と同様な使われ方をしていた可能性がある。

図27-2～5、図28-1は井戸678の26・29層から出土したものである。図27-2は全体に破損が著しいが、1とほぼ同じ形状をしていると思われ、埴と同様な使われ方をしていた可能性がある。凝灰岩製で全体に火を受けているが、破損している部分には痕跡が見られず、廃棄された後に破損したものであることがわかる。図27-3・4も凝灰岩製で、やはり二次的に火を受けている。この2点はほぼ同形をしており、四隅を斜めに切った六角柱の形状をしている。いずれも粗い加工痕が残るものである。4の一方側に、破損した後に火を受けた痕跡があることは興味深い。これらの石製品の用途は不明であるが、石製構築物の柱などに使用されていた可能性がある。

図27-5は寺山安山岩製で、全体に火を受けている。基本的に図27-3・4と同じような直方柱であり、四隅を斜めに切った六角柱の石材を使用している。四面は平坦面をもち、いずれの面にも細かい工具痕が観察できる。第1面には段がついており、斜めに段を切っている部分が観察できる。第2面には先端部が破損しており、従来形状は不明であるが、縦方向に段を設けている。だが、その段は平面的にはカーブを描く形状をとる。図28-1も図27-5と酷似した形状をもつもので、やはり寺山安山岩製である。ただし図27-5に見られたような第1面の段は見られない。第2面に、縦方向の段が2ヶ所見られる。先端部が破損しているが、従来はかなり細長いものであったと考えている。この石製品も全体に火を受けており、用途は不明であるが、構築物の一部に使用されていたものであり、地覆石の可能性もある。

図28-2は蔵塚古墳後円部周濠内から出土したもので、溝679の西側に位置していた。凝灰岩製で、周濠の底面から浮いて出土しており、周濠が埋まる段階に廃棄されたものであろう。破損している部分が著しいが、工具痕は明瞭に残っておらず丁寧に仕上げていることから、構築物の中でもよく人目につきやすい部分のものである可能性がある。短辺側に段が一段ついており、さらに矩形らしき孔を設けている。この石製品も用途不明であるが、火を受けている部分と受けていない部分の境界がはっきりとしており、別石がその場所に置かれていた可能性がある。

図28-3は土坑815から出土したものである。寺山安山岩製で、出土した際には2石に分かれていた。半分以上が破損しているため従来形状は不明であるが、平面的には正方形を呈していた可能性が高い。中央に円錐状のほぞが見受けられる。形状および重量から常時移動させるような状態のものであったとは考えにくく、擦石もしくは軸受石と考えている。

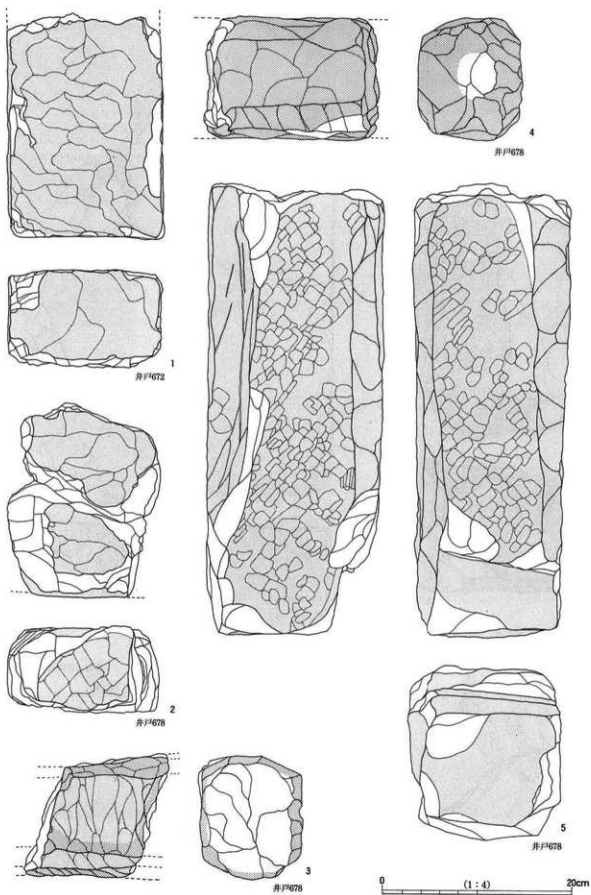


图27 A地区 井戸672・678出土遺物(石製品(1))

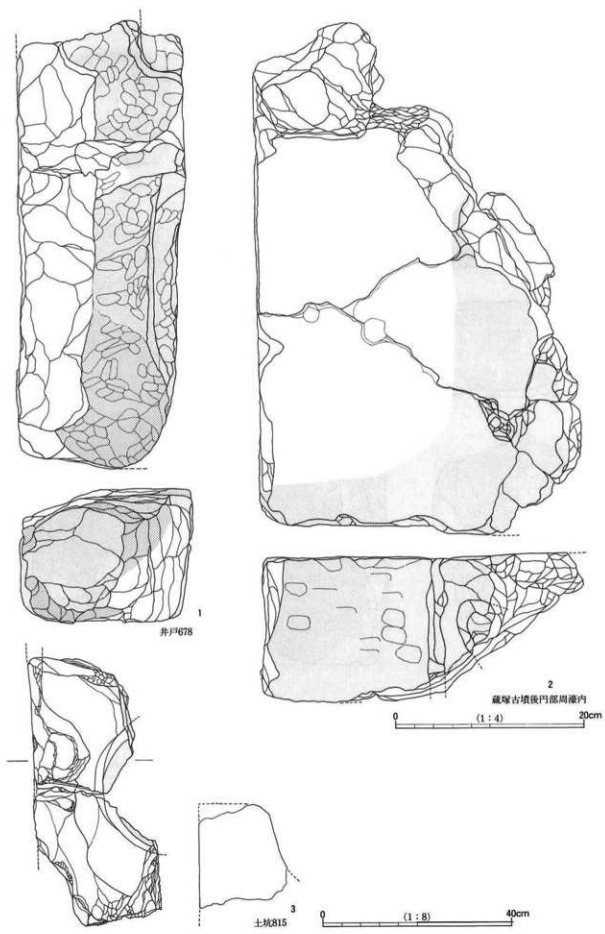


图28 A地区 出土遺物 (石製品(2))

(3)木製品 (図29)

木製品は、井戸678・1187と土坑1188から出土している。井戸から出土した木製品の大半は井戸枠などの井戸を構成する部材が主であり、井戸に廃棄されたと思われる木製品は、図29に掲げたものだけである。

①井戸出土の木製品

1～3・5は井戸678の最下層から出土したものである。1は折敷の底板の一部である。側板との接合部分に用いる木釘痕は見受けられない。2も折敷の底板と思われるが、損傷が著しく、折敷の形状などは不明である。3は下駄である。紐通し部分の紐擦れ痕や、前歯の擦り減り具合から、かなり長い間使用されていた可能性がある。表面は全体に磨耗していることもあり、左右どちらのものであるかは不明。5は曲物の底板である。片面に柿渋を塗布しており、木釘痕は2ヶ所確認できる。

4・6～8は井戸1187から出土したもので、6・8は中層から、4・7は最下層からそれぞれ出土した。4は柄杓の底板の一部で、木釘痕は3ヶ所確認できるが、木釘を打つ位置には規格性は全く見受けられない。片面に柿渋を塗布している。6は曲物の側板の一部で、損傷が著しく本来の大きさは不明であるが、側板を綴じる際の穴が残っている。7は曲物である。側板と底板は木釘で、側板自体は桜の樹皮でそれぞれ綴じている。8は板材の一部。損傷が著しいため、その用途については不明。

②土坑出土の木製品

9・10は土坑1188から出土したものである。9は曲物の底板である。内側の外縁に段があり、そこに側板をのせる構造である。側板のみならず、底板と側板の接合も桜の樹皮で行うもので、2ヶ所に方形の小孔を穿つ。また二次的にまな板として利用されていたものか、片面に細かい歯でつけられた工具痕が見られる。この工具痕は概ね2方向で、一定の長さをもつものである。10は火付け棒である。方形の断面をもつ棒状のものを使用しているが、木製品を二次的に利用したものかは不明である。両端を利用しており、いずれも炭化した状況である。

A地区で出土している木製品は、曲物など9世紀以降に属するものがほとんどである。井戸678・井戸1187から出土している柿渋を塗布した曲物、柄杓といった多種類の木製品が出土しており、当時の生活を垣間みることができる。

(4)瓦 (図63)

A地区は、駒ヶ谷遺跡の中でも最東部に位置しており、河内飛鳥寺の塔心礎が出土したとされている場所と最も近い場所にあたる。河内飛鳥寺がこの地に存在するならば、同時期の瓦が駒ヶ谷遺跡、しかもA地区で出土する可能性が高い。また流路1237が長期間存続しており、調査区外からの遺物が混入していることから、河内飛鳥寺の寺域が調査区周辺にあたるのであれば、この流路1237から白鳳期の瓦が出土する可能性が高い。だが流路1237からは、近世の瓦が、溝679および蔵塚古墳後円部周濠といった遺構からは、8世紀後以降の瓦が数点出土するだけである。実測不可能である破片にも、白鳳期の瓦は含まれていなかった。

図63-1・2はA地区から出土した瓦である。1は蔵塚古墳後円部周濠下層から出土したもので、2は溝679から出土したものである。いずれも平瓦である。1は片側の側面のみ残存しており、凹面に火を受けた痕跡をもつ。凹面の布目はやや粗い。2も片側の側面のみ残存している、軟質の瓦。凹面の布目はやや粗い。この2点は布目の形状から、いずれも平安時代の瓦であり、河内飛鳥寺が白鳳期の寺院であることを考えると、それに伴う瓦であるとは考えにくい。

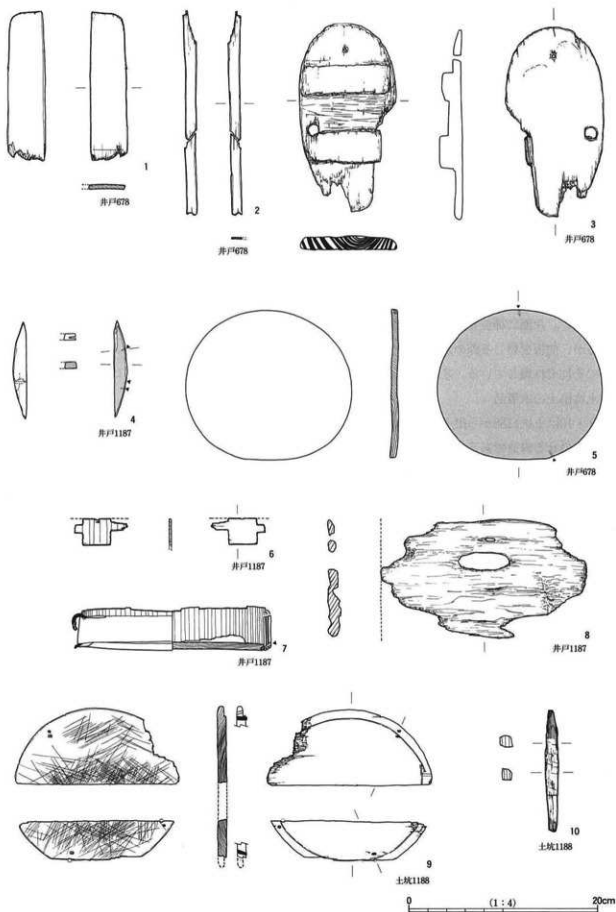


图29 A地区 井戸678・1187、土坑1188出土遺物(木製品)

第5章 B地区の調査

第1節 B地区 弥生～古墳時代の遺構と遺物

B地区では、A地区で検出した蔵塚古墳の前部および周濠が一部含まれている。よって蔵塚古墳に伴う土坑878、溝886はここではB地区の遺構としている。他に、流路580の南岸斜面から、土師器長胴甕を用いた合口の土器棺643を検出している。これらの遺構および遺物については、既刊の『蔵塚古墳』を参照されたい。

1. 遺構

(1)土坑878 (図30)

蔵塚古墳前部の南側周濠内から検出した隅丸長方形を呈する土坑で、前部側縁に直交する方位で掘削されている。底面は蔵塚古墳周濠の底面とほぼ同じで若干南側が高く、断面形は逆台形を呈している。蔵塚古墳に伴う埋葬施設を考慮したが、木棺痕跡などを見いだすことはできなかった。

(2)溝886 (図30)

蔵塚古墳の南側の外堤上で検出した溝である。周濠とほぼ平行に掘削されており、西側は削平されて消失しているものの、東側は調査区外にのびていることが確認できる。わずかしこ残存していないが、蔵塚古墳周濠と平行であることから、築造に伴って掘削された溝の可能性が高い。

(3)土器棺643 (図38)

機械掘削時に流路580の南岸斜面で検出されたものである。機械掘削時に検出されたため、具体的な出土状況を把握するには至っていない。だが検出時の状況や、周辺が大きく削平されていることから、原位置を保っていないもので、やや上方から流れ込んできたものと考えている。

2. 遺物

土坑878からは、底から若干浮いた層から須恵器甕が、溝886からは土師器高杯がそれぞれ1点出土している。時期は破片ではあるが6世紀後頃に収まるものであり、いずれも蔵塚古墳との関係を考える上で重要な遺物である。また土器棺643の周辺から、供献された可能性の高い須恵器碗と蓋杯が1点ずつ出土している。

以上が、B地区の弥生～古墳時代の遺構と遺物の状況であるが、遺構に関しては、A地区同様に蔵塚古墳を中心とした散発的なものである。

古代～中世に関しては、地区および時期ともに大きく東と西の2ヶ所に分かれる。以降、分けて報告することにした。

第2節 B地区 東半部古代～中世の遺構と遺物

1. 遺構

(1)掘立柱建物跡

①掘立柱建物跡13 (図30)

方位はN-8°-Wで、南北に軸をとっていると考えてよい1間×6間の建物である。いずれも柱痕が明瞭に残っており、建物廃絶時に柱が抜き取られていないことは明らかである。

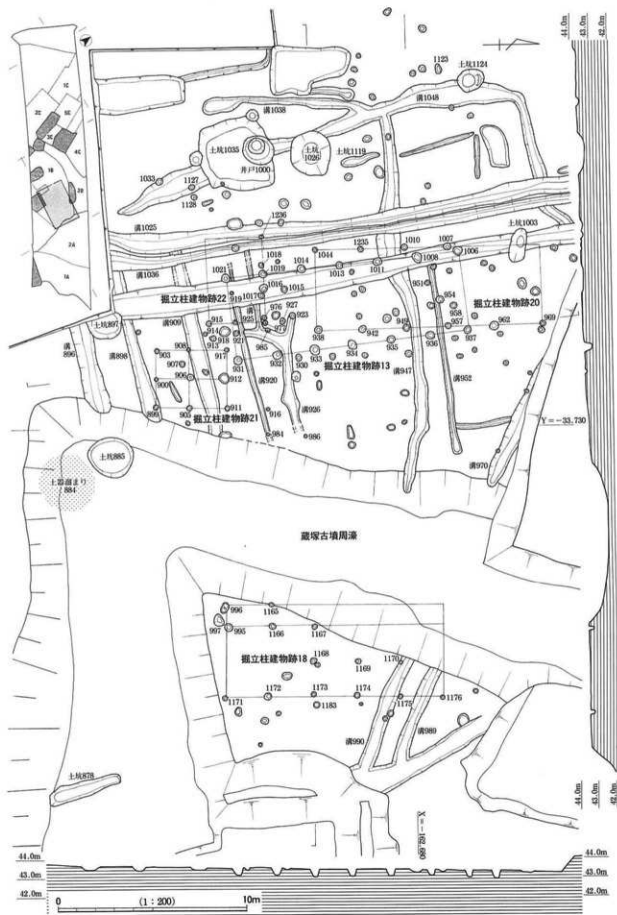


图30 B地区東半部 古代~中世遺構平面・断面図

掘立柱建物跡13は、建物の北西方向で直にまがる溝1048と軸を平行にとっており、時期的にも併存していた可能性が高い。

②掘立柱建物跡18 (図30)

方位は $N-1^{\circ}-E$ で、掘立柱建物跡13同様に南北を意識した、1間×5間に1間の庇を付した建物である。

掘立柱建物跡18は、蔵塚古墳の前方部および前方部周濠上面に構築されていることから、掘立柱建物跡18の構築時には、蔵塚古墳の周濠が既に埋没していることは明らかである。また蔵塚古墳の盛土が周濠内に崩落していないことから、蔵塚古墳の墳丘を削平せずに、掘立柱建物跡18を構築していることがわかる。蔵塚古墳周濠で隔たれているが、掘立柱建物跡13と平行して構築されており、同時期に存続していた可能性がある。

③掘立柱建物跡20 (図30)

方位は $N-2^{\circ}-W$ で、南北を軸とした1間×6間の建物であり、柱痕からは建物廃絶時に柱が抜き取られていないことが確認できる。

掘立柱建物跡13と棟が重なっている状況が見られること、建物は掘立柱建物跡18が1×5間で柱数が異なるものの、建物の床面積がほとんど同じであること、掘立柱建物跡18と平行に構築されていることから、掘立柱建物跡13の建て替えられたもので、掘立柱建物跡18と併存している可能性が高い。

④掘立柱建物跡21 (図30)

方位は $N-2^{\circ}-E$ で、南北を軸とした2間×2間の総柱建物。掘立柱建物跡18および20より規模が小さくなり、時期にズレが生じていることがわかる。また掘立柱建物跡22と軸を同じくして構築されており、同時期に存続していた可能性がある。溝1038が建物を囲むように巡っており、掘立柱建物跡21および22の区画溝として機能していたものであろう。

⑤掘立柱建物跡22 (図30)

方位は $N-2^{\circ}-W$ である。遺構が錯綜しており検出が困難であったが、2間×3間の建物であろう。掘立柱建物跡21と直交しており、同時期に併存している。溝1038、井戸1000と同時期に併存している可能性が高いが、柱穴から遺物が出土していないため、時期を確定することは難しい。

(2)溝 (図30)

蔵塚古墳の前方部周濠西側で検出した溝のほとんどは方向性を持ち、かつ掘立柱建物跡を囲んでおり、区画溝の意味をもつものと思われる。また再掘削しているためか、軸を同じくする溝が多い。

溝1048は、掘立柱建物跡群の西側に位置し直角におれる溝である。この溝は掘立柱建物跡13・18・20の軸とはほぼ平行に掘削されており、区画溝の可能性が高い。溝896・溝898・溝909も同様に、溝1048と併存して、掘立柱建物跡13・18・20の区画溝として機能していたものであろう。また溝909を切っている溝1025・溝1036は、近・現代の溝であり、溝896・溝898・溝909がそれより西方向に続かないのは、溝1025より西側はレベルをほぼ揃えて削平されているためである。

溝947・溝1038も掘立柱建物跡21・22を囲むように位置し、L字形になる溝である。これらの溝は掘立柱建物跡21・22の軸とはほぼ平行に掘削されており、区画溝の可能性が高い。また蔵塚古墳前方部にまで溝947が延びていないことから、この溝は蔵塚古墳周濠上面で方向を変えている可能性もある。また、溝969・溝970・溝990はいずれも近・現代のものである。

(3)土坑

①土坑885 (図13・30)

土坑885は蔵塚古墳前方部周濠の南隅に位置している土坑である。土器溜まり884の下層にあたるため、その境界は不明瞭であった。故に周濠の底面で規模が確認できるだけで、本来の形状および深さは不明である。埋土は全体に黒褐色を呈している。蔵塚古墳周濠の底面のレベルとほとんど同じであることから、蔵塚古墳周濠が埋没はじめるのとほぼ同時に土坑885は存在していたことになり、蔵塚古墳との関係を考える上で興味深い。

②土坑1124 (図13・30)

土坑1124は溝1048の西肩部に位置しており、2段に落ちる土坑である。底面から須恵器の甕が出土しており、溝1048を切っている点や、溝947と溝1038によって区画されている部分の外側に位置していることを考えると、掘立柱建物跡に直接関連するものではない可能性が高い。

③その他の土坑 (図30)

土坑から遺物がほとんど出土していないため、時期を確定することは困難である。だが遺構との切りあい関係で、およその時期を検討することはできる。土坑1026と土坑1035は、いずれも溝1048を切っており、溝1048より後に掘削された溝947と溝1038と併存していたものであろう。土坑1035は井戸1000と同時に掘削された土坑であり、土坑897は、近・現代のものである。

(4)土器溜まり

①土器溜まり884 (図30)

蔵塚古墳前方部周濠南端で、土坑885の上層に位置している。調査では周濠内を一括して掘削したため、正確な規模は不明である。蔵塚古墳の周濠が最終的に埋没してしまうまでの土器廃棄場所であった可能性があり、蔵塚古墳周濠上面では土器溜まり884は検出されなかったこと、黒色土器が1点も混入していないことから、前方部西側に掘立柱建物跡が構築され始める時期には、土器溜まり884は埋没していたことがわかる。

(5)井戸

①井戸1000 (図30・31)

井戸1000は溝1048を切っており、その後に掘削されたものであることがわかる。井戸1000は溝947・1038と同時期、つまり掘立柱建物跡21・22に、附属していた可能性が高い。

井戸1000の上面は削平されているため、本来の規模については不明である。3段目は石組で、1・2段目に曲物を使用しているものである。それぞれの段境には扁平な自然石を敷き、曲物もしくは石材を積んでいる。3段目の石組の石材は1点しか残存していなかったが、下に敷いた石材に対して直に立てた状態で出土しており、上にも石組が続く可能性がある。1・2段目の井戸枠内から瓦器が一括して出土している。

(6)ピット (図30)

B地区は西側に行くほど削平が著しくなり、それに伴って遺構が希薄になる。よってピット数および掘立柱建物跡数も増加する可能性はある。ピットの形状は円形で、土層も1色で柱痕も不明なものが大半を占める。遺物が出土しているピット自体少ないが、B地区東半部のピットは、平安時代以降に属するものがほとんどで、奈良時代以前の遺物が出土するピットは検出できなかった。土器溜まり884・土坑885から奈良時代を中心とした遺物が出土しているのに対して、興味深い事実といえよう。

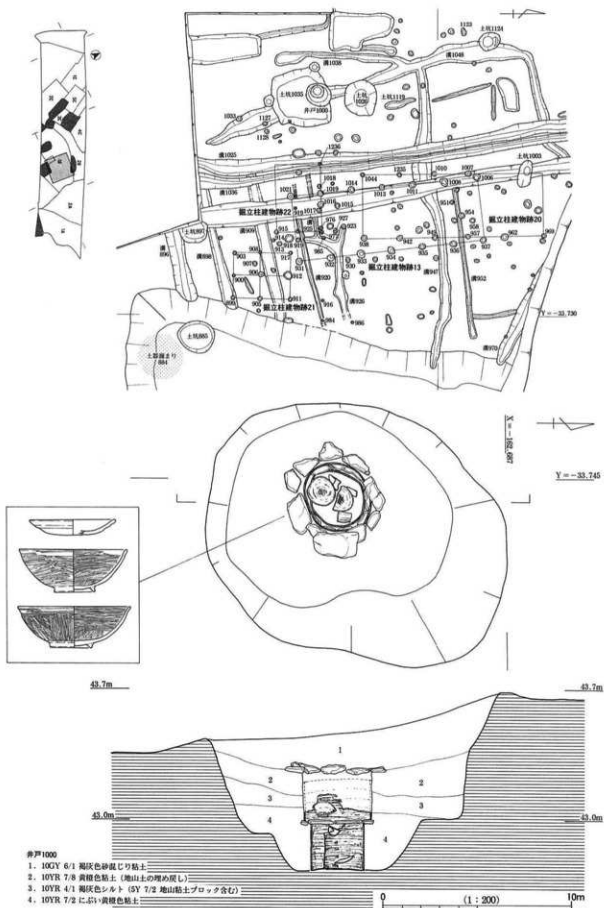


図31 B地区東半部 井戸1000平面・断面図

2. 遺物

(1) 土器

① 掘立柱建物跡13・18・20～22出土の土器

掘立柱建物跡からは、破片でしか土器は出土していない。掘立柱建物跡13からは土師器・黒色土器片が出土しており、瓦器は含まれていない。掘立柱建物跡18の柱穴からは遺物は出土していないが、上層にあたる包含層に北宋銭が入っており（図32-22）、その時期以前に廃絶していることは確実である。掘立柱建物跡20からは、黒色土器・瓦器片が出土しているが、暗文は不明瞭である。掘立柱建物跡21および掘立柱建物跡22からは、いずれも土師器片しか出土しておらず、それによって時期を特定することは難しい。

② 溝出土の土器（図32-1～13）

1～3は溝926から出土した土師器・黒色土器である。溝926は掘立柱建物跡20と軸を揃えている溝であり、土師器・黒色土器A類が多く出土している。溝926は掘立柱建物跡13が重なるなど遺構が錯綜しており、遺物が混入している可能性は高い。だがいずれにしても瓦器が出土していないことは、掘立柱建物跡の中でも、早い段階に構築されたものであることを示すものといえよう。1～3ともに磨耗は著しく、暗文は不明瞭である。4・5は溝920から出土した黒色土器である。溝926からは黒色土器A類が

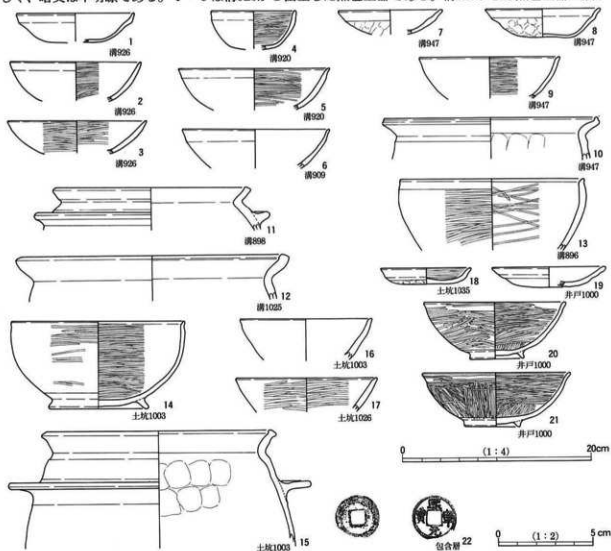


図32 B地区東半部 古代～中世遺構出土遺物（土師器・黒色土器・瓦器）

多く出土していたのに対し、溝920からは土師器・須恵器の他に黒色土器B類が多く出土している。溝920は掘立柱建物跡22などの遺構が錯綜しているため、遺物が混入している可能性は高い。6は溝909出土の黒色土器B類である。溝909は掘立柱建物跡21と重なっているため、やはり遺物が混入している割合は高い。7～10は溝947から出土した土師器・黒色土器である。溝896からは黒色土器A類の細片しか出土しておらず、13はその中でも実測可能であった黒色土器A類の碗である。

他の溝からは土器は細片でしか出土していない。溝1048からは、平安I中に属する土師器片が出土しているが、黒色土器や瓦器は出土していない。溝952からは黒色土器B類片が出土しているが、遺構が錯綜しているため、他遺構から混入している可能性もある。

③土坑出土の土器（図13、図32-14～18）

蔵塚古墳前方部周濠に位置する土坑885から出土した土器は一括資料して扱い、別項で報告することにした（図33）。

土坑1124から須恵器甕が口縁部を下にして出土している（図13）。甕は頸部に刻字のあるもので、体部は出土していない。土坑1124の中層に土器が位置していること、土坑の埋土は1層であることから、この甕は、土坑1124が埋まる時期を示すものといえよう。

図32-14～16は土坑1003から出土した黒色土器・土師器である。他にも破片では黒色土器A類が見られるだけで、瓦器は出土していない。土坑1003は掘立柱建物跡20と重なっている遺構である。15・16ともに磨耗が著しく、調整は不明瞭である。17は土坑1026から出土した黒色土器A類である。土坑1026からは遺物が多量に出土しており、黒色土器の他に破片であるが、土師器・須恵器が含まれている。18は土坑1035から出土した瓦器碗である。他に黒色土器A・B類、土師器片が出土しており、井戸1000より先行して掘削されたものであることは確実であろう。

土坑1119からは土師器・須恵器片しか出土していないが、平行する溝1048と近い時期のものであることは確実である。

④井戸1000出土の土器（図32-19～21）

井戸1000は、最下層には曲物を2段積み上げて井戸枠としていることが確認されている。図32-19～21の土師器・瓦器は、その中でも2段目の井戸枠から出土したものである。20・21ともに密な暗文を内外面に施す。特に21の底部外面の暗文は、高台を基点として口縁部に向けて放射状に時計回りに暗文を入れていることがわかる。それに反して内面の暗文は規則性がなく、不定方向に暗文を施している。

他に井戸1000からは、土師器の碗・皿などが含まれるが、破片を含めると瓦器が圧倒的に多く出土している。

⑤ピット出土の土器

掘立柱建物跡に伴うピット以外からも土器は細片しか出土せず、時期を確定することはできない。また遺構が錯綜しているため、いずれも混入の可能性が高い。掘立柱建物跡13と併存する溝909に近接するピット913や、溝926と同一の可能性のあるピット923・927・930からは黒色土器A類片が出土している。ピット1017は掘立柱建物跡13の内側、掘立柱建物跡21の柱列沿いで検出され、このピットの埋土からも、黒色土器A類片が出土している。いずれも遺構が錯綜しているところに位置しており、混入の可能性が高い。ピット1033は溝1048を切るような形で、土坑1035の近くに位置している。ピット1033の埋土中から羽釜片が出土している。溝1048より若干時期が新しいものであり、井戸1000と併存していた可能性がある。

⑥土坑885出土の土器（図33）

図33-1~17は土師器である。破片数で388点、総重量8,605g出土している。器種構成比率は、破片数で、椀・杯・皿類が52点（13.4%）、高杯・盤・鉢類が23点（5.9%）、壺・甕・鍋・羽釜が242点（62.4%）、その他・不明が71点（18.3%）であり、貯蔵・煮沸具類が出土量の大半を占めている。だが、ほぼ上層に位置している土器溜まり884との境界が曖昧であることから、この器種構成が明確に土坑885の性格を表すことにはならない。

杯Cは、いずれも淡黄褐色の胎土をもつ土器で、精良な胎土を使用しているものが出土している。内面に暗文を有するものは1のみで、2・3はa0手法を取り入れている。1は0.1cm以上の幅をもち、0.1~0.2cmの間隔で密な暗文を施している。杯Aは、淡黄褐色の精良な胎土を使用するもの（4・5・7）が出土量の大半を占める。4・5はa0手法を取り入れており、暗文は不明瞭である。7は0.2cm以上の幅をもち、0.1~0.2cmの密な暗文を施す。内面の暗文は黒色を呈しており、a3手法を取り入れている。

皿Aは淡黄褐色の土器（9・10）が大半を占め、橙色を呈する土器は破片で、しかも少量出土するのみである。暗文は、0.1cm以上の幅をもち、0.5cm以上の粗い間隔をもつ。杯蓋は、1点しか出土していない（6）。砂粒を多く含む土器で、橙色を呈する。内外面ともに化粧土の剥離が著しいため、暗文は不明瞭である。

高杯は赤色細粒を多く混入するものが2点出土しているが、実測は不可能である。いずれも多角柱の脚部をもたず、内側はしぼり目が明瞭に残る。鉢は、淡黄褐色を呈する土器（8・16）が出土量の大半を占めており、橙色を呈する土器は破片しか出土していない。16の体部外面下半には、火を受けた痕跡が見受けられ、口縁部の受け口は丁寧なナデ調整で整形されている。

甕は河内型甕は少量しか出土せず、体部にハケ調整を行う甕Aが出土量の大半を占める（11~15）。胎土は砂粒をほとんど混入しない、淡黄褐色を呈する土器である。他に破片であるが、砂粒を混入する白色の甕が1点出土している。ほとんどの甕の体部外面に煤が付着しており、使用された痕跡を示す。鍋は（17）石英の細粒を混入し、淡黄褐色を呈する胎土をもつ。内外面に、火だすきに煤が付着している。羽釜は鈔部分が数点出土している。大半のものが金雲母を多量に混入するものであるが、中には金雲母を少量しか含まず、赤茶色を呈するものも出土している。いずれも外面に煤が多量に付着しており、使用された痕跡が明瞭である。

図33-18~30は須恵器である。破片数で118点、総重量は8,665g出土している。破片数であるが器種構成比率は、椀・杯・皿類が18点（15.3%）、壺・瓶類が13点（11.0%）、甕・大型壺類87点（73.7%）である。土師器の破片数が388点であるのに対して、須恵器が118点しか出土していないことは、廃棄する際に分別している可能性を示すものであろうか。

杯類は、杯Gの杯身が割合多く出土しているのに対して、杯Gの蓋は1点も出土していない。蓋は土器を使用していたのではなく、木製品などを使用していた可能性もある。杯Gはいずれも陶邑のものである。杯Aは破片でしかも数点しか出土しておらず、実測可能なものは出土していない。杯Bの蓋が数点出土している。陶邑のものが大半を占めるが（22・23）、破片では、石英を含んで灰白色、もしくは白色を呈する軟質な須恵器も出土している。他には茶灰色の胎土をもつ硬質なもので、破断面も赤茶色を呈するものがある。杯Bの身は、灰白色を呈するもの（24）や石英細粒や黒色粒子を多く混入し、灰色を呈するもの（26）などが出土している。いずれも、底部外面の高台から体部にかけて火だすきが入

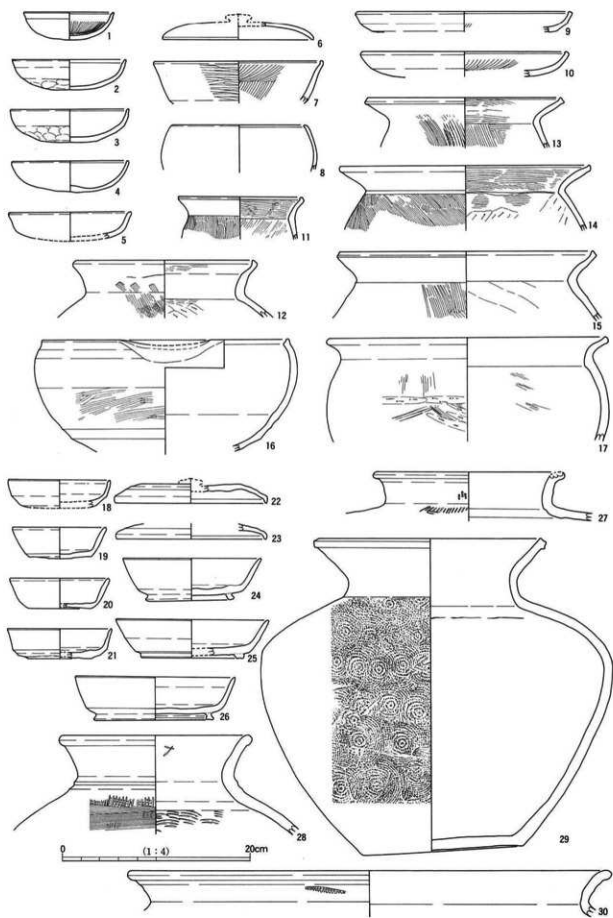


图33 B地区東半部 土坑885出土遺物（土師器・須恵器）

るものである。杯Bに関しては、蓋と身の出土量はほぼ同じである。

壺は、体部の破片が数点出土しており、いずれも黄灰色で精良な胎土をもつものである。横瓶が1点出土している。頸部以下を欠損しているが、口縁部を故意に打ち欠いた痕跡がある。胎土は灰白色を呈している。いずれも青灰色を呈するものは少なく、陶邑以外の窯から搬入されているものも出土している。

壺の実測可能なものは、口縁部だけである。体部の出土量が多いが、いずれも破片であり実測不可能であった。数点出土している口縁部は、頸部の内外面に刻字(27・28)、もしくは調整に伴う文様を有しているもの(30)、または一般には出土しない形状で、かつ文様をもつもの(29)など多種類存在している。胎土を見るかぎりでは、青灰色を呈する陶邑窯のものが大半を占めている(27)が、石英の細粒を多量に混入する灰白色のもの(28~30)なども出土している。

29は肩部の張りに比して、器高が非常に低い平底の壺で、土器溜まり884の破片が接合している。2つの遺構の時期差がほとんど存在しない状態、つまり蔵塚古墳の周濠がほとんど一度に埋没したことを示しており、遺構間の境界が存在していないことを示すものである。通常では壺の内面に施す同心円文のあて具を外面に使用しており、壺の高さと平行に規則的に施文していることから、器形を整形するためではなく、文様を施すために故意に内面用のあて具を使用したと思われる。内面はナデ調整を行い、工具の痕跡を消している。30の頸部外面の文様は、タタキ工具である、平行叩き板の端があたった痕跡であり、頸部以下は丁寧にナデ消している。

蔵塚古墳前方部周濠の底面に接している土坑885の時期は、遺物が少量であることと遺物の時期にまとまりがないことから、確定させることは難しい。だが、蔵塚古墳周濠が埋没する以前に廃棄土坑として存在していたことは間違いない、中には7世紀後の土器も含まれるが、8世紀前~中頃に集中しているものと考えてよいであろう。また、蔵塚古墳の墳丘をはさんで、後円部周濠内に位置する土器溜まり851と接合する資料が数点出土しており、同時期に併存していた遺構と考えることはもちろんのこと、離れている遺構間で資料が接合する意味を考える必要がある。

⑦土器溜まり884出土の土器(図34)

図34-1~17は土師器である。破片数が617点、総重量9,780g出土している。器種構成比率はいずれも破片で、碗・杯・皿が186点(30.1%)、高杯・盤・鉢が3点(0.5%)、壺・甕・鍋・羽釜などが423点(68.6%)、製塩土器が1点(0.2%)、その他・不明が4点(0.6%)である。土器溜まり884から貯蔵・煮沸具類が多く出土しており、土坑885と酷似した器種構成を示している。

杯A・杯B・皿Aが出土量の大半を占めており、杯Cは破片で1点出土しているだけである。杯Cは淡黄褐色の胎土をもつものである。杯Aは淡黄褐色を呈するもの(2)と、赤色細粒を混入する橙色のもの(1・4・5)が出土している。2の内面の暗文は不明瞭であるものの、0.1cm以上の幅をもち、0.3cmのやや粗い間隔で暗文を施している。内外面に火を受けた痕跡が見受けられる。他に破片であるが、赤色細粒を多く混入する胎土のものが数点出土している。5の1段目の暗文は間隔を均一にしているが、2段目の暗文は、数単位に分けて施しており、下半部がくっついて間隔が狭くなっている。暗文の幅は0.1cm以下の細かいものである。杯Aの破片の中には、茶褐色を呈するものが1点含まれており、内面に煤が付着している。

皿Aも杯Aと同様に、淡黄褐色を呈するもの(6)と、橙色を呈するもの(3)が出土している。だが破片数で見ると、赤色細粒を有し、橙色を呈する土器の方が多く出土している。いずれも幅0.1cm以上の暗文で、間隔も粗いものである。皿Aも内外面に火を受けているものが数点出土している。また杯

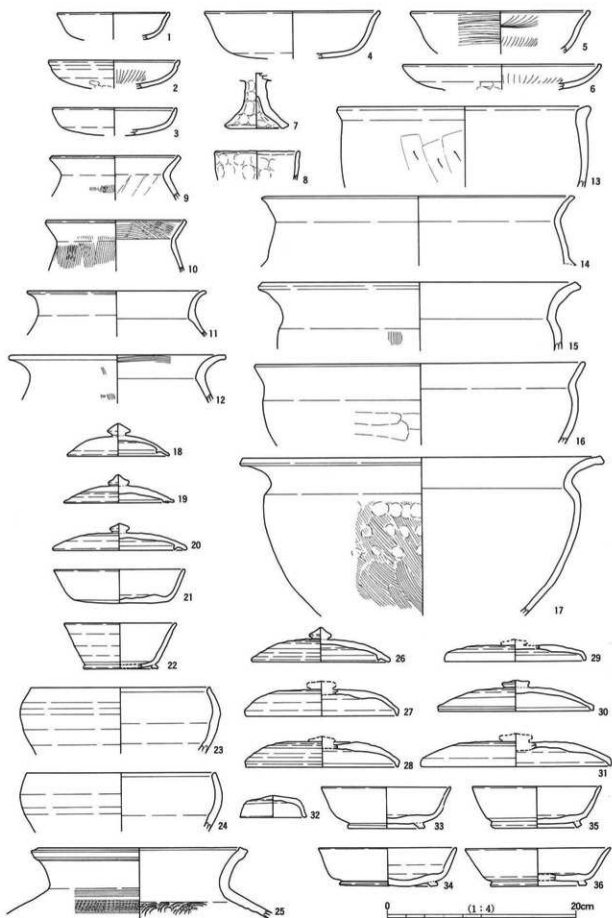


图34 B地区東半部 土器溜まり884出土遺物（土師器・製塩土器・須恵器）

蓋は、破片で数点出土しているのみで、いずれも橙色を呈する土器である。暗文は内外面ともに不明瞭である。

高杯はミニチュアが2点出土している(7)。いずれも淡黄褐色の土器で、内外面ともに指頭圧痕が明瞭に残っている。鉢は淡黄褐色を呈するものが1点出土している(15)。体部は破片が数点出土しているが、口縁部はこの1点しか出土していない。

甕はいわゆる河内型甕といわれるものはほとんど出土せず、淡黄褐色を呈し精良な胎土を使用したものが多く出土している。ほとんどの甕の体部に煤が付着し、火を受けて剥離している。その中で13の甕は、石英粒や長石粒、礫などを大量に混入した胎土をもつもので、内面は二次的に火を受けている。非常に粗い胎土で、粗雑な作りをもつものである。このような胎土と形状をもつこと、製塩を煎熬する際に甕を使用する例があることから、13は固形塩を再度煎熬する際に使用した可能性もある。14は把手を欠損している甕Bである。淡黄褐色の精良な胎土を使用するが、調整は不明瞭である。把手は、いわゆるはめ込み式のものである。

鍋もほとんどが淡黄褐色を呈しており、外面に煤が大量に付着するものである。羽釜は、金雲母を大量に混入しているものと、金雲母の細粒を混入して、茶褐色を呈するものの2種類がほぼ同量出土している。製塩土器は1点(8)である。器壁は薄く、内面には指頭圧痕が明瞭に残る。

18~36は須恵器である。破片数で314点、総重量では10,795g出土している。器種構成比率は、碗・杯・皿類が91点(29.0%)、壺・瓶類が35点(11.1%)、鉢類が4点(1.3%)、甕・大型壺が184点(58.6%)である。

杯Gは、蓋・身ともに、破片であるが数点出土している。青灰色を呈するものと、黒色粒子を混入して、灰白色を呈するものがほぼ同量出土している。杯Hは蓋片が1点出土している。灰白色を呈するもので、天井部外面に「×」のヘラ記号を有する。杯Aは1点(21)しか出土しておらず、黒色粒子を多量に混入するものである。

杯Bは蓋・身ともに杯類の出土量の大半を占める。杯蓋は青灰色を呈するもの(26・30)、灰白色を呈するもの(27・31)の他に、石英細粒を含み黒灰色を呈するものが出土している。杯B蓋は、青灰色を呈する陶器のものが少量で、灰白色のもの(33~36)が出土量の大半を占めている。

壺は体部片が出土しているだけであるが、灰白色を呈するものが大半を占めている。鉢は石英細粒を混入し、灰白色の色調を有するものである(23・24)。甕も灰白色のものが出土量の大半を占めているが、青灰色を呈する陶器の製品も数点出土している(25)。また、播磨地産の可能性のある破片も数点出土している。

土器溜まり884は、遺物の時期に幅があるものの、ほぼ8世紀前~中頃に集中して遺物が出土している。土坑885と器種構成比率が似ていること、2遺構間で接合する資料が多いことから、時期にそう隔たりにないことがわかる。ただし、土坑885には7世紀後の土器が含まれていたのに対し、土器溜まり884からは、8世紀前以降の土器しか出土していない。また土器溜まり884からは、蔵塚古墳後円部周濠に位置する土器溜まり851と接合する資料が出土している。この2遺構は同時期に併存しており、蔵塚古墳の墳丘を挟んで、対角線上に分別廃棄を行っている可能性もある。

(2)石製品(石材)

A・C両地区から火を受けた石製品が出土しているのに対して、B地区からは東・西半部いずれからも加工された石製品は出土していない。A・C両地区ともに古代と中世の掘立柱建物跡といった遺構が

存在しており、石製品は其中でも平安時代以降の井戸や土坑といった遺構に廃棄されている場合が多い。これはA・C両地区内、もしくはその周辺に、古代において石製品を使用している遺構から持ち運んできて、井戸や土坑に廃棄している可能性がある。故に古代の掘立柱建物跡が存在せず、9世紀以降の掘立柱建物跡が集中しているB地区東半部では、加工された石製品が存在していない可能性がある。

井戸1000の1段目と2段目の曲物の間から、自然石が水平に曲物に沿って円形に配する状態で出土している。この石材は、薄くてやや水平に面のとれる安山岩であり、いずれも加工痕などは見られない。凝灰岩、寺山安山岩は出土しなかった。この地区の井戸は現状では1基しか検出できず、埋土からも石材は出土していない。

(3)木製品 (図35)

A・C地区ともに、木製品は井戸から出土しているものが大半を占める。だがB地区では、東・西半部いずれも井戸が1基しか検出されておらず、木製品はこの井戸1000から出土しているだけである。

①井戸1000出土の木製品 (図35)

井戸1000は、曲物を2段積み上げて井戸枠にしている。うち2段目は破損しており、実測は不可能なものであった。図35は1段目の曲物の井戸枠である。底板は外されており、側板と底板を木釘で止めていた痕跡が残る。一般的に使用されている曲物と同じで、スギ材を使用しており、椴の皮で綴じる。表面には漆などを塗布したような痕跡は見られなかった。

他に井戸1000の最下層からは、長さ約12.0cmのマコモ類の節を抜いたものが1点出土している。これには全く加工痕が見られないが、このように竹などの節を抜いて井戸の底付近に突き刺した状態で出土することが多く、井戸を埋める際に水のカミの息抜きとして使用したものとする説がある。今回出土したものは竹ではないが、節を持っているものを故意に抜いており、同じように祭祀に使用されていた可能性も高い。他に井戸1000からは、土師器、瓦器碗が一括して出土しているが、祭祀などに使用する木製品は1点も出土していない。

(4)銭 (図32-22)

B地区の包含層から銭が1点出土している。この銭は、「熙寧元宝」という1068年鑄造の北宋銭である。掘立柱建物跡18の上層から出土しており、掘立柱建物跡18はこの銭が使用されていた頃には、すでに廃絶していたことがわかる。またこの時期には、掘立柱建物跡の四隅に銭を数枚埋納している出土例が知られており、この銭も本来はそのような状態に置かれていた可能性もある。

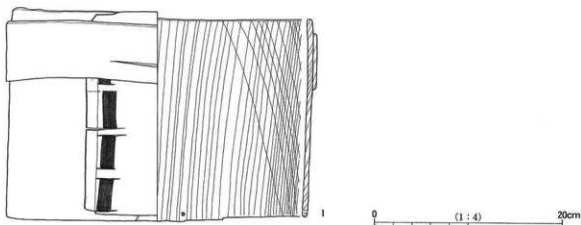


図35 B地区東半部 井戸1000出土遺物 (木製品)

第3節 B地区西半部古代～中世の遺構と遺物

1. 遺構

B地区の西半部は、後世の削平によってほとんど遺構が残存していない。故に第3節では、西半部の中でも、遺構が残存していたB地区最西部について報告する。

(1)掘立柱建物跡(図36)

①掘立柱建物跡14

方位を意識した2間×3間の掘立柱建物跡である。ピットの形状は、隅丸方形のものが大半を占めており、他の地区で検出されている8世紀代の掘立柱建物跡と似た形状をしている。周囲に掘立柱建物が密集しているが、中でも軸を揃えていることと、柱穴の形状から掘立柱建物跡15と併存しているものと考えている。

②掘立柱建物跡15

一部調査区に切られているが、ピット1114の南側に続くピットが検出できなかったため、2間×2間の総柱の建物と考えてよいであろう。掘立柱建物跡15も方位を意識して構築されており、軸を揃えていることから、掘立柱建物跡14と併存する時期のものと考えている。

③掘立柱建物跡16

調査区に切られているため、正確な規模は不明である。ピットの形状は円形のものが多い。他の地区で検出されている9世紀以降の掘立柱建物跡のピットの形状が円形であることから、掘立柱建物跡14・15より後の時期に構築されたものとみられる。軸を揃えていることや、柱穴の形状から、掘立柱建物跡17と併存していた可能性がある。

④掘立柱建物跡17

北側に行くにつれてレベルが下がるが、これはこの北側に流路580が位置しているためである。また後世に削平されていることもあり、検出できなかったピットも多い。建物の方向は方位を意識しており、軸を揃えていることから、掘立柱建物跡16と同時期のものである可能性が高い。

(2)その他の遺構

①溝

掘立柱建物跡以外に検出した遺構には、数条の溝がある。だがこれらの溝は、近・現代の水田耕作などに伴うものである可能性が高い。

2. 遺物

(1)掘立柱建物跡14～17出土の土器

掘立柱建物跡14からは奈良～平安時代の土師器杯・甕の破片が数点出土している。掘立柱建物跡16からは平安時代以降と思われる土師器甕片が出土しているだけで、いずれも時期を確定するにはいたらない。掘立柱建物跡15・17に関しては遺物は出土しなかったが、掘立柱建物跡15は掘立柱建物跡14と、掘立柱建物跡17は掘立柱建物跡16と併存している可能性があることから、各々の時期決定にほとんど問題はないといえる。

(2)その他の遺構出土の土器

遺物の全く出土していないものが大半を占め、時期を特定することはできなかった。

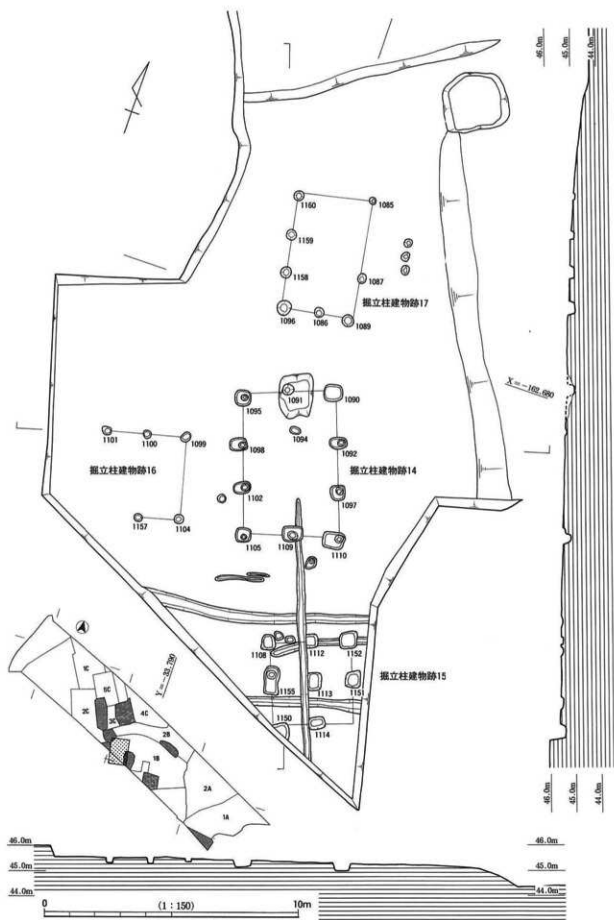


图36 B地区西半部 古代~中世遺構平面・断面図

第6章 C地区の調査

第1節 C地区 弥生～古墳時代の遺構と遺物

1. 遺構

C地区では、葦塚古墳が築造された時期と併存する遺構が検出されている。東半部では流路580最下層の遺物が、西半部では竪穴住居1などがあげられる。これらの遺構についての詳細な報告は、既刊の『葦塚古墳』を参照されたい。また弥生時代以前の遺構は検出されなかった。

(1)東半部の遺構 (図38)

流路580の最下層から、古墳時代の須恵器が数点出土している。いずれも、ほとんど磨耗していない状態で出土している。付近の遺構では、B地区で報告した土器棺643が検出されている。

(2)西半部の遺構 (図51・52)

竪穴住居は1棟検出されている。出土遺物には川西編年V期の円筒埴輪片や、陶器TK10型式の須恵器杯身などがあり、A地区で検出された葦塚古墳との関係を考える上で重要な資料である。また、土坑25・433からも古墳時代の須恵器が数点出土している。溝9は、掘立柱建物跡1・2などの7世紀代の建物群が点在する微高地の高まりに位置している。地形に則した溝であるが、溝9付近で他に古墳時代の遺構は検出できなかった。

C地区では東半部および西半部にかけて、古墳時代の遺構がいくつか検出できたが、いずれも散発的なものであり、不明瞭な点が多い。

2. 遺物

流路580、竪穴住居1、土坑25・433出土の古墳時代の遺物に関しては、既刊の『葦塚古墳』で報告を行っているためここでは省略する。

(1)溝9から出土した土器 (図37)

1は広口壺で、体部外面のヘラミガキ工具痕が明瞭に残る。2～4は甕である。内外面にハケメを有するこの時期の特徴をもつものである。1～4はいずれも胎土は赤褐色もしくは橙色を呈する。

古代～中世の遺構に関しては、東半部と西半部で遺構の時期に差が生じるため、次節より区域を分けて記述をすすめていきたい。

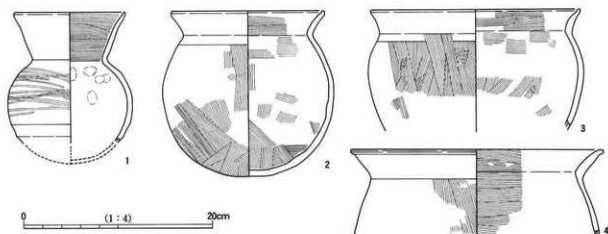


図37 C地区 溝9出土遺物



図38 C地区東半部 古代～中世遺構平面・断面図(1)

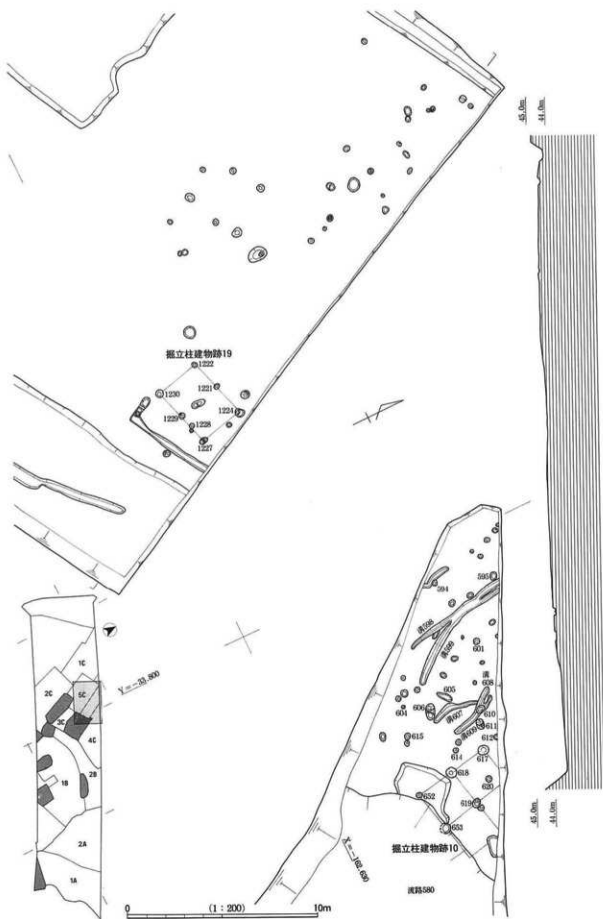


图39 C地区東半部 古代~中世遺構平面・断面図(2)

第2節 C地区 東半部古代～中世の遺構と遺物

1. 遺構

(1)掘立柱建物跡

①掘立柱建物跡7 (図51)

調査区の北端で切られているため、正確な規模については不明である。西半部において奈良～平安時代にかけた掘立柱建物跡などの遺構が密集する地域より、一段標高の低い所で検出されている。周辺は後世の削平が著しく、深い柱穴しか検出できなかった。建物は北側に庇を設け、方位を意識して建物を構築していることがわかる。

②掘立柱建物跡10 (図39)

調査区の北西端で切られているため正確な規模は不明であるが、現状で見ると2間×2間の総柱建物と考えてよいであろう。建物の南西側のピットが流路580に切られているように見えるが、これは調査時のミスであり、本来ならば流路580の中層段階に構築された建物と考えている。

③掘立柱建物跡19 (図39)

全体に北東側へ緩やかに下っていくのに加えて、周囲は後世にかなり削平を受けており、遺構が希薄な地域である。掘立柱建物跡7を検出した面よりさらに約1.0m低い地点で掘立柱建物跡19を検出した。ピットが削平されているものが多く規模は不明瞭であるが、1間×2間の建物と思われる。建物は地形より方位を意識して構築されている。

(2)溝 (図42)

溝の大半は、方向性などがなく用途不明のものであり、遺物も破片でしか出土していないため、時期も不明瞭である。溝591は南東側の微高地の縁辺に沿って流れている。この溝内から、内側を弧形に削った凝灰岩が1点出土している (図61-3)。溝589は溝591から流路580に流れ込む溝であり、溝591内の溝589との分岐点に石材を組んでダム状施設を構築していることから、これらの溝が同時期に存在していたことは間違いないであろう。石材は寺山安山岩などの自然石を使用している。

(3)井戸

①井戸657 (図38・40)

流路580の右肩部で、木組み638より北東側に一段低くなっている所に位置している。上部分は井戸658や木組み638などによって破壊されているため構造については不明である。だが、最下部に扁平な石材を敷き、その上に曲物を置いて水涵に使用していること、板材を使用した木組みの井戸枠を使用していることが確認できた。流路580を始めとする他の遺構によって、井戸657の掘方や裏込め土は削平されていた。また、遺物が出土していないため時期は不明である。

②井戸658 (図38・40)

流路580の右肩部で、木組み638の下部、井戸657の南西側に位置している。上部ないし側面は、木組み638と流路580に破壊されており、構造については不明である。現状では漏斗状の断面形を呈することが確認できている。井戸658内から出土している木製品、上層の木組み638出土の土器から、少なくとも12世紀後頃までの井戸と考えてよいであろう。

(4)木組み遺構

①木組み638 (図38・40)

流路580の右肩部で溝589が作りだす落ち込み590に、木組み638は構築されている。井戸658の上部に位置しており、断面からも井戸658が廃絶した後に構築されていることが確認できる。

使用されている木材は、建築部材の廃材など二次的な利用をしているものは検出されなかった。上部は破損しているが、杭を直に打ち込み、横に木を置いた後で、斜め方向に前後に杭を打ち込んでいることから、護岸施設と考えることも可能である。だが、ゆるやかな段が落ち込む流路580の右肩に位置していることなどから、井戸658の廃絶後に、流路580から水を汲むために構築された施設である可能性も高い。

②護岸施設656 (図38・40)

井戸657より約0.4m標高が低くなる所で検出された。ゆるやかに落ちる流路580の右肩部が、急な角度をもって落ちるところに位置している。流路580の流れにそって板材を立て並べ、杭を前後に打ち込むことによって強固なものにしている。

時期は、遺物が出土していないため確定することは難しいが、井戸657より先行するものであろう。接合する板材があることから、別の部材を二次利用している可能性が高い。流路580が急な角度をもって落ちる所に位置している点、流れに対して平行である点から、流路580の護岸施設とみられる。

③木組み655 (図38・41)

流路580の右肩部に位置しており、この木組み655の下流から川幅が広がる。使用している木材は杭のように先端を加工していない。地山を1段掘りくぼめ、その上に木組み655を直接構築している。材の組み方は、岸側では、斜めに上部で合掌形になるように木材を縦に組んだ上に、横に木を階段状に組み上げている。だが縦に組んでいる木も地山に打ち込まず、ほとんど固定していない。流路側では、最下面に板状の木材を置き、上部で合掌形になるように縦に木材を組み、その上に横方向に板状の木材を置いている。木材どうしを固定している形跡は見られなかった。構築順としては、流路側を組んだ後に岸側を組みあげている。断面を見ると、木組み内には砂およびシルトが堆積しており、岸側と木組みの間も本来は埋まっていた可能性が高い。

木組み655は、流路580の流れに対して平行である点、流路580の右肩部から木組み655へ渡れない点などから、護岸施設の一つと考えている。

④しがらみ654 (図38・41)

木組み655の東側に位置し、しがらみ654と木組み655はほぼ同時期に構築されている。流路580の流れに対して直交していることから、流れを調整する施設であろう。使用している杭は、いずれも上部が欠損しているが、先端は全て加工されたものであった。杭の先端部が地山に達しているものと、上層までしか達していないものがあり、検出した面より上から打ち込まれていることは確実である。遺物が出土していないが、全体断面図より8世紀代に構築された可能性が高い。

(5)流路

①流路580 (図38・42)

C地区西半部の南東側から東半部にかけて、調査地を縦断するような形で検出された。大黒丘陵から派生する開折谷の一つである。出土遺物と遺構から、6世紀～12世紀にかけて存続していた流路であることは確実であろう。

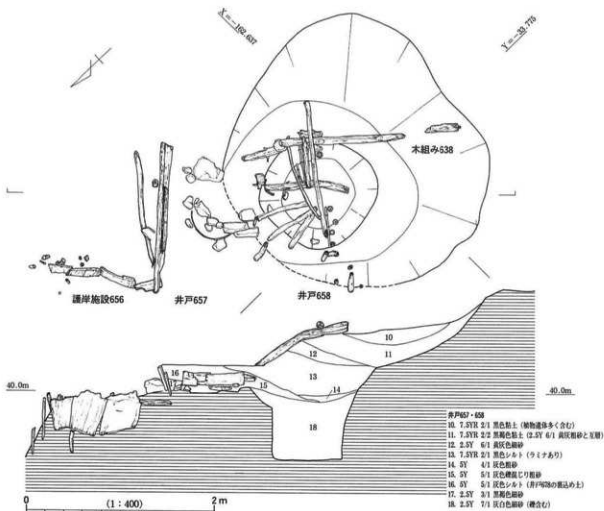
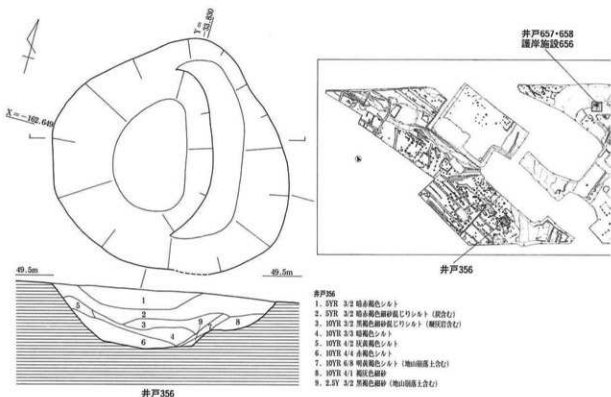
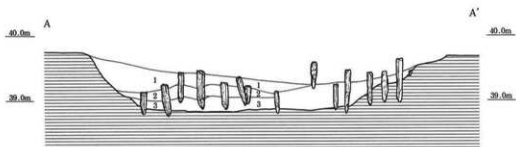
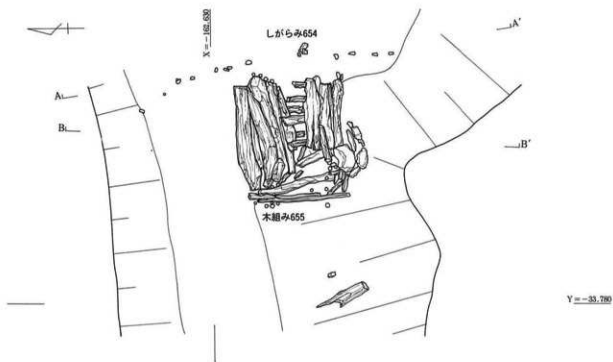
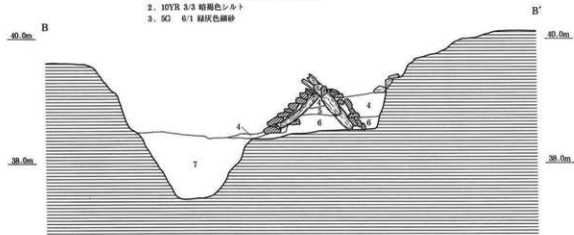


図40 C地区 井戸356・657・658、木組み538、護岸施設656平面・断面図



しがらみ654

1. N 4/9 灰色シルト礫含む (古代の遺物含む)
2. 10YR 3-3 暗褐色シルト
3. 5G 6/1 緑灰色細砂



木組み655

4. N 3/0 暗灰色シルト礫含む
5. N 5/0 灰色シルト (建物遺体層と砂層の互層入る)
6. 5B 6/1 青灰色細砂 (地山崩落土含む)
7. 5B 6/1 青灰色細砂-礫 (古墳時代の遺物含む)



0 (1:60) 3m

図41 C地区東半部 しがらみ654・木組み655平面・断面図

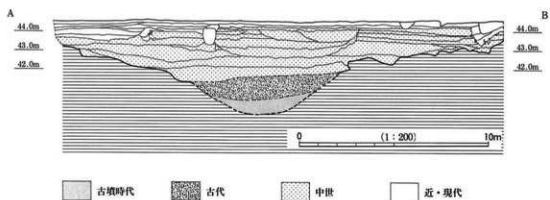


图42 C地区東半部 流路580等平面・断面図

2. 遺物

(1)土器

①掘立柱建物跡7・10・19出土の土器（図43-1）

掘立柱建物跡からは土器は破片で、かつ少量しか出土していない。また周辺の遺構からも遺物はほとんど出土していないため、時期を特定することは難しい。掘立柱建物跡7からは、土器器の羽釜片が1点出土している。他遺構からの混入は考えられず、掘立柱建物跡7は平安時代以降のものと考えてよいであろう。掘立柱建物跡10からは、瓦器片が数点出土している。図43-1は和泉型瓦器碗の特徴をもつ。高台を欠損しているが、12世紀中～後の時期に属するものであろう。また、12世紀後半の和泉型の瓦器片が集中して出土している。掘立柱建物跡19からも遺物は1点も出土しなかった。また、周辺の遺構からも遺物はほとんど出土していないため、時期を確定させることは難しい。だが立地している位置関係から、掘立柱建物跡7と掘立柱建物跡10の間におさまる時期のものであろう。

②ピット出土の土器（図43-2）

それぞれのピットからは、土器器・黒色土器A類・瓦器の破片が出土している。だが出土している遺物はそれぞれ破片であり、その遺物で各ピットの時期を確定することは難しい。だがC地区東半部のピットから出土する土器の時期は、8世紀後頃・9世紀後頃・12世紀後頃に大別することができる。図43-2は、ピット614から出土した瓦器である。ピット614は掘立柱建物跡10の北側に位置するもので、ほぼ同時期の遺構と考えてよいであろう。内面見込みの暗文は平行暗文であり、外面は指頭圧痕が明瞭に残る。

③溝出土の土器（図43-3・4）

C地区東半部の溝は大別して、2種類ある。1つは流路580に関係するものである。またその中で、さらに流路580に流れ込む溝と、流路580に平行する溝の2種類に分けることができる。溝591から須恵器・黒色土器・瓦器が数点出土している（図43-3・4）。3は高台を欠損しており、内面見込みの暗文は、格子状暗文を施す。4は底部を欠損する黒色土器A類である。口縁部内面に沈線をめぐらす。溝591は流路580と平行にはしり、自然石を用いたダム状の遺構が存在するなど、短期間の溝ではなく長期にわたって存続していたものであろう。故に、出土遺物に時期幅が生じることも何ら問題のないことといえる。

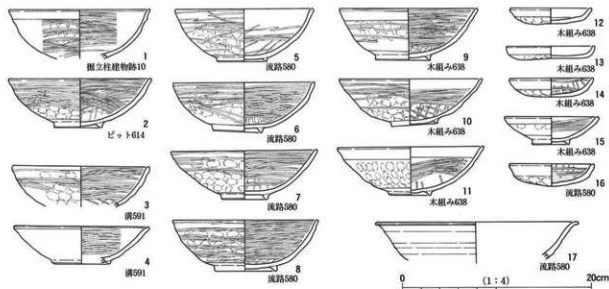


図43 C地区東半部 中世遺構出土遺物（瓦器・緑釉陶器）

もう1種類の溝は掘立柱建物跡に伴うもので、区画溝の役割を担うものもある。出土遺物には、土師器・須恵器・黒色土器・瓦器などがある。だが、遺構の上面が削平されており、付近の遺構に遺物が混入している可能性が大きい。しかしそれぞれの溝から出土している遺物は、いずれも破片であり、時期を確定させることは難しい。

④その他の遺構出土の土器

C地区東半部の遺構から出土する遺物は破片であり、完形がまとまって出土する例はほとんどみられない。その中で木組み638内のみ、土師器・瓦器がほぼ完形で出土している(図43-9~15)。

図43-9~11・14・15は瓦器であり、9の瓦器は外面に暗文が施されなくなる時期のもの、10・11の瓦器は外面に暗文が消失し、かつ器形がやや平たく、小さくなる時期のものである。内面見込みにはいずれも暗文を有する。14・15は小型の瓦器で、14は高台をもたないが15は高台を有するもの。暗文は内面の口縁部付近にしか施さないなど、簡略化された部分が多い。12~13は土師器である。底部外面に指頭圧痕が明瞭に残るもので、土師器および瓦器をみる限りでは、13世紀前頃の時期に集中していると考えることが出来る。

⑤流路580出土の土器(図43-5~8、16・17、図44~47)

流路580は古墳時代から中世まで存続していた流路である。図42の断面図にもあるように、最下層からは古墳時代の遺物が、下層からは古代の遺物が、そして中層からは中世の遺物が出土している。古墳時代の遺物は『蔵塚古墳』に詳細な報告があるので、ここでは省略することにしたい。

中層からは、破片数で土師器が492点、総重量は6,390g出土している。器種構成比率は、椀・杯・皿類が87点(17.7%)、鉢・高杯・盤類が4点(0.8%)、壺・甕・鍋・羽釜が219点(44.5%)、製塩土器が4点(0.8%)、その他・不明が178点(36.2%)であり、煮沸具類が多く出土している。それに対して須恵器は、破片数で83点、総重量で1,975g出土している。器種構成比率では、杯類は26点(31.3%)、壺・瓶類は12点(14.5%)、壺・大型甕類は45点(54.2%)であり、壺・大型甕類は破片では遺物量が增加することなどを考えると、流路580から出土する須恵器は、食器類の占める割合が大きいといえよう。

他に全て破片数であるが、白磁を含む陶磁器が5点(総重量240g)、黒色土器が17点(総重量205g)、瓦器が506点(総重量4,745g)出土している。流路580から出土している遺物の構成比率は、土師器44.6%、須恵器7.5%、陶磁器類0.5%、黒色土器1.5%、瓦器45.9%であり、土師器同様に瓦器の占める割合が大きい。

図43-5~8・16は流路580の中層から出土している瓦器である。5~8はいずれも和泉型の特徴をもつもので、内面に密な暗文、外面には単位をもたない暗文を施している。時期は12世紀後頃におさまるものであろう。16は内面のみ暗文を有するが、単位は見られない。底部内面に漆が大量に残る。パレットとして使用されたものであろうか。17は施釉陶器で、全面に丁寧に緑釉を施す。流路580から出土している瓦器片の時期は、12世紀後~13世紀前に集中しており、その時期に周辺が居住域になっていた可能性が高い。

下層からは、土師器は破片数であるが1,602点、総重量は45,755g出土している。器種構成比率は、椀・杯・皿類が444点(27.7%)、鉢・高杯・盤類が59点(3.7%)、壺・甕・鍋類が756点(47.2%)、羽釜・甕類が250点(15.6%)、製塩土器が41点(2.6%)、その他・不明が52点(3.2%)である。黒色土器や瓦器は1点も出土していない。

図44～46-1～20は下層から出土した土師器である。これらの土師器の時期は、概ね8世紀前～9世紀前頃に集中している。流路580から出土する食器類は、淡黄褐色を呈する土器が大半を占めている。暗文の明瞭に残っているものが多く、施文工具は幅が狭いもので密に暗文を施している。それに対して赤褐色を呈する土器は、施文工具の幅が広くまばらな暗文を有している。また8世紀中頃の皿類で、全体に火を受けているものが多く出土している。他に流路580の特徴として、墨書土器が出土することがあげられる(図46-3・6・9・13)。図46-3は淡黄褐色を呈する土器で、底部外面に円を3つ繋げたような文様を描いている。6は淡黄褐色を呈し、底部内面には暗文が見られない。「大林宅」と書写されており、個人の邸宅を示すものと考えられる。9は南河内の特徴といわれている、底部が丸く張る土器である。暗文の施文工具は1.0cm以下と狭く、底部内面には螺旋状暗文を施す。底部外面のケズリ調整は丁寧に行っている。文字の終わりはトメていることがわかるが、何と書写されているかは不明である。13の暗文は残存度が悪く不明瞭だが、内面の暗文は1.0cm以下の幅の狭い施文工具を使用している。底部外面中央に「古厨」と書写されているが、「古」の字の意味は不明である。

図44・45は食器以外の土師器である。甕は淡黄褐色を呈するものが多く出土しており、いわゆる南河内型の甕はほとんど出土していない。両者ともに煤が付着しているが、南河内型の甕の方が外面全体に多量に付着しており、使用頻度の違いがわかる。内面に炭化した内容物が付着しているものもある。羽釜は、金雲母を大量に混入しているもので、いずれも鈎部から体部にかけて外面に煤が多量に付着している。

高杯は淡黄褐色で脚柱部に面をもつものは、幅の狭い施文工具を使用している。逆に同じ割合で出土している橙色の高杯は、幅が1.0cm以上の広い工具を使用して、暗文を施している。ミニチュア高杯は淡黄褐色を呈するものが2点、赤褐色を呈するもの1点の計3点出土している。いずれも指頭圧痕が明瞭に残る。図44-17は淡黄褐色を呈するもので、杯部内面に火を受けた痕跡がある。

鉢は、淡黄褐色のものが多量に出土している。大型の鉢の中には、外面に煤が多量に付着するものもあり(図45-12)、甕と同じ使用方法がなされていた可能性を示す。盤類の出土量は少ないが、淡黄褐色を呈するものが大半を占めている。

破片であるが、製塩土器が41点出土している。大きく分けて内面に布目痕を有するものと、非型作りのものの2種類出土しているが、非型作りのものが大半を占める。図44-18～20は非型作りの製塩土器で、口縁部をもつものはこの3点のみである。いずれも筒型のもので、石英の角礫を混入する。布目痕を有するものは、いずれも硬質の製塩土器で、石英の角礫を混入している茶色系のものが多く出土している。全体に見て、二次的に火を受けているものが数点出土している。図45-16は埴である。図61-2と同じ形状をしており、柏原市青谷遺跡から出土した埴とほぼ同じ土器を使用していることが確認されている。

図46-21～43・図47は下層から出土した須恵器である。破片数が959点、総重量は34,490g出土している。器種構成比率は、杯・皿・碗類は215点(22.4%)、壺・瓶類は346点(36.1%)、鉢類は3点(0.3%)、甕・大型壺類は、386点(40.3%)、その他・不明は9点(0.9%)であり、食器類の占める割合が大きい。転用硯が3(21・22・33)点出土している。21は杯蓋の天井部を使用しているもので、字体は不明であるが試し書きをした痕跡がある。22・33は墨が残存しているもの。図46-36・37のように白色を呈する須恵器が数点出土している他、図46-23・30・32・34のように石英の細粒を含む灰白色のものが、出土量の大半を占めている。また、東海地域産と考えられる須恵器も出土している。図46-

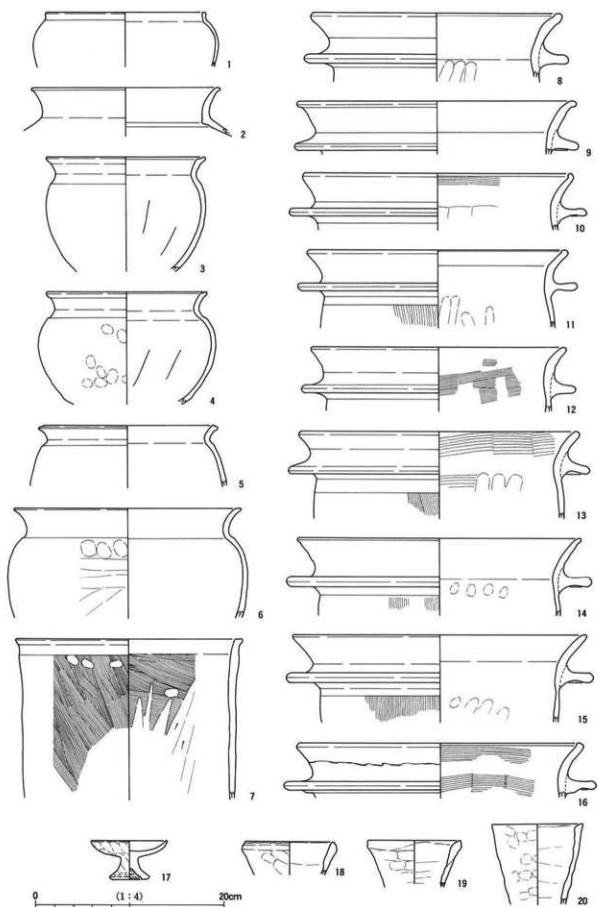


图44 C地区東半部 流路580出土遺物 (1) (土師器(1)・製塩土器)

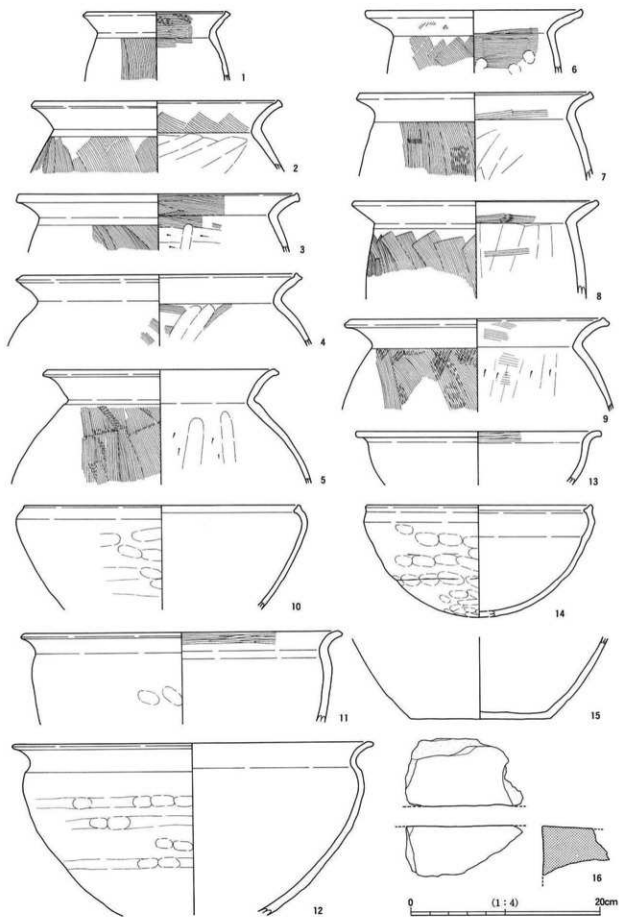


图45 C地区東半部 流路580出土遺物(2)(土師器(2)・埴)

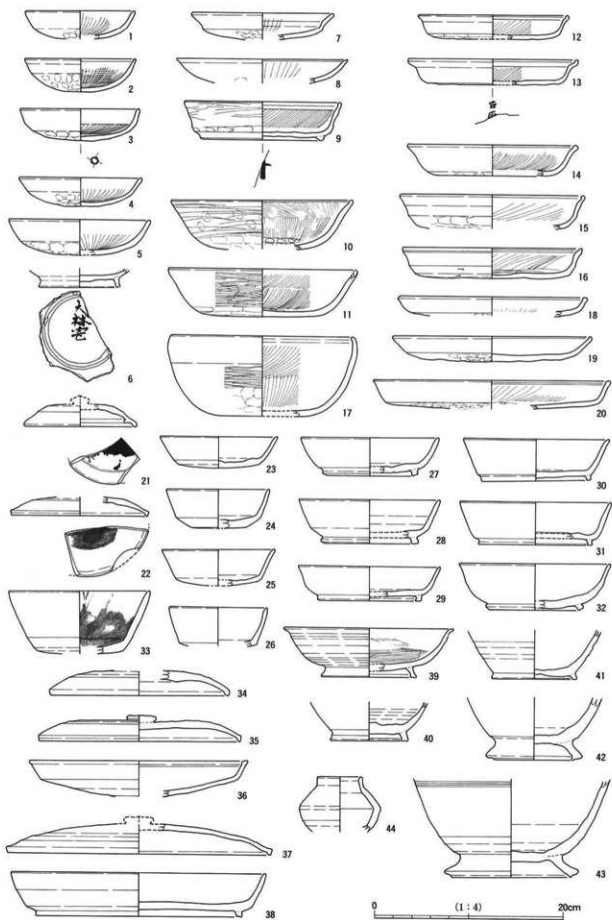


图46 C地区東半部 流路580出土遺物(3)(土師器(3)・須恵器(1))

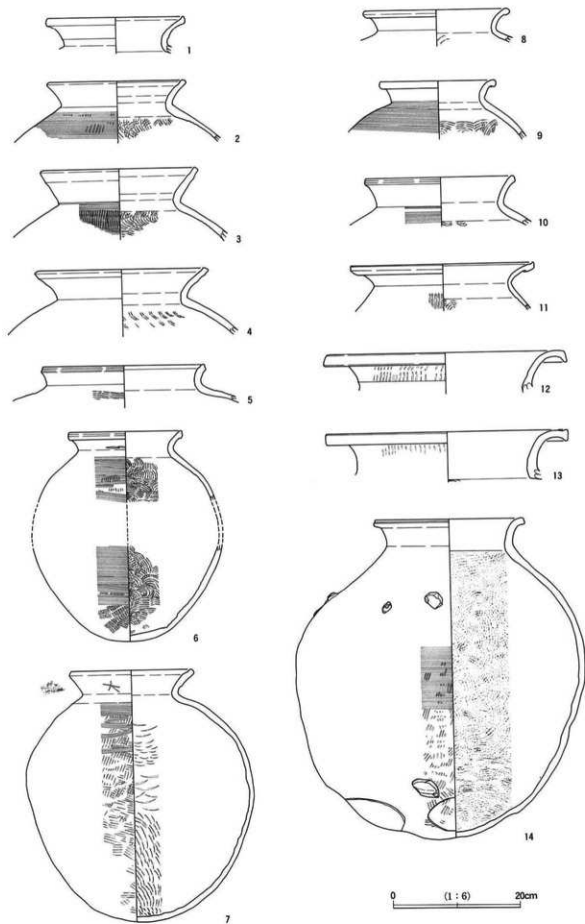


图47 C地区東半部 流路580出土遺物(4)(須恵器(2))

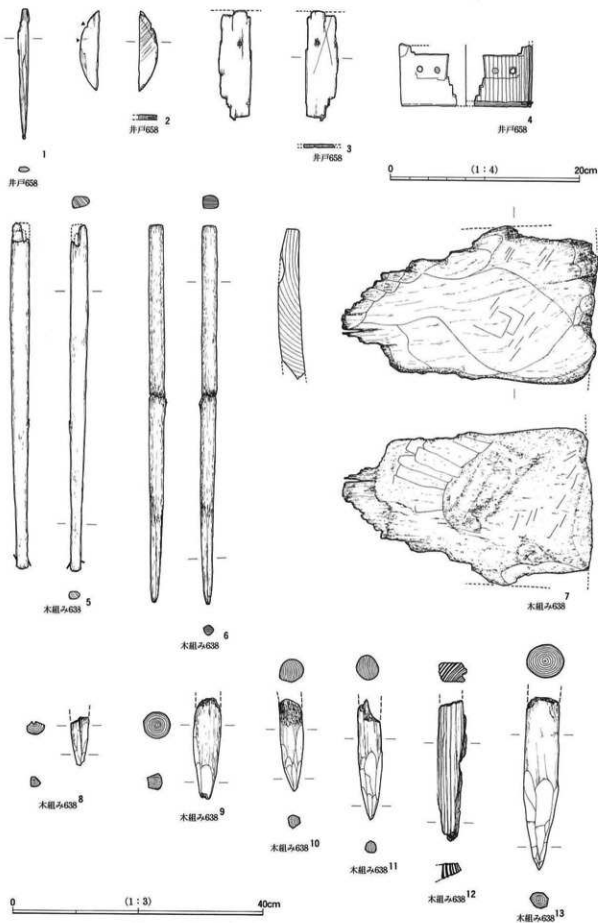


図48 C地区東半部 井戸658・木組み638出土遺物(木製品)

39は金属器を模したもので、内面にハケ状の工具痕が残る。貯蔵具類は陶器のものである。破片であるが平瓶が多く出土しており、肩部に波状文を有する特異なものや、外面に煤が付着しているものなどが含まれる。甕類は、自然軸や置き台の付着しているものが出土している。(図47-14)

(2)石製品 (図61)

C地区東半部では、木組み遺構などから、自然に流入したり故意に設置したと思われる石材が多く出土している。大半は寺山安山岩製で、人工的に加工した痕跡のあるものは少ない。

図61-3は、溝591の底面から凹面を下にした状態で出土した。凝灰岩製で水に触れていたため鉄分が付着し、一部茶褐色を呈している。凹部は緩やかなカーブが見られ、工具痕も明瞭に残る。凸面は、二次利用をする際に手を加えている。用途については不明であるが、古墳の石棺材や建物の排水施設の一部であったものを、水路などに再利用したものであろう。

(3)木製品 (図48-50)

①井戸出土の木製品 (図48-1-4)

いずれも井戸658の井戸枠内から出土したものである。1は火付け棒である。断面四角形のものを使用している。2は柄杓の底板で、まな板として再利用されたものか、内面に一定方向の刻み目が見られる。4は柄杓である。柄は欠損しているが、側板に柄の先端部が2ヶ所残存しており、柄を付けなおして再び使用していることがわかる。底板との接合部である木釘も明瞭に残る。

②木組み出土の木製品 (図48-5-13)

流路580内の木組みや護岸施設から出土している木製品には、枕や板材の他に柄杓や曲物などが含まれている。

5-13はいずれも木組み638から出土した木製品である。5・6は柄杓の柄である。5の先端部はほぼ平らであるが、6は先端部を尖らせて、曲物に貫通させていたものである。いずれも曲物と接している部分は細くなっている。7は丁寧に加工されているが、用途は不明である。8-13は木組み638から出土した枕である。いずれも先端部を加工しており、10-12は、木芯を外して利用している。

③流路580出土の木製品 (図49・50)

流路580から出土した木製品は、中層～下層にかけてのもので、まとめて廃棄されたような痕跡は見受けられない。図49-1-3は火付け棒である。1・2ともに曲物の底板を二次利用したものである。2は両端に火を付けた痕跡が見られる。図49-4-8は柄杓で、4・7・8は底板、5・6は側板である。6は紐綴じの部分で、桜の樹皮が残存している。底板に見られる痕跡から、7は側板で挟んで、8は樹皮で綴じて底板と側板を接合させていることがわかる。図49-9・10は曲物の底板である。

図49-11・12、図50-1・2は折敷の底板である。11・12はいずれも底板に側板を置いて紐で綴じる形態のものである。1・2は底板の一部であるが、いずれも先端部が丁寧に加工されており、その大きさが推定できる。図50-3は鋤で、先端に鉄製の鋤先を付した痕跡が見られる。だが、小孔はほとんど紐擦れしていない。図50-4は流路580の最下層付近、古墳時代の遺物が出土した直上層から出土している。四面および両端を丁寧に加工している。端から約33cmの位置に刻みを2ヶ所入れている点、木材を切断するための刻みではない点から、一種の慣用尺として使用されていた可能性もある。5は槽である。護岸施設656を埋める層から出土している。2材しか確認できなかったが、一方の持ち手が残存している。加工痕が明瞭に残り、木芯の残存位置から大型の木材を使用していることが確認できる。

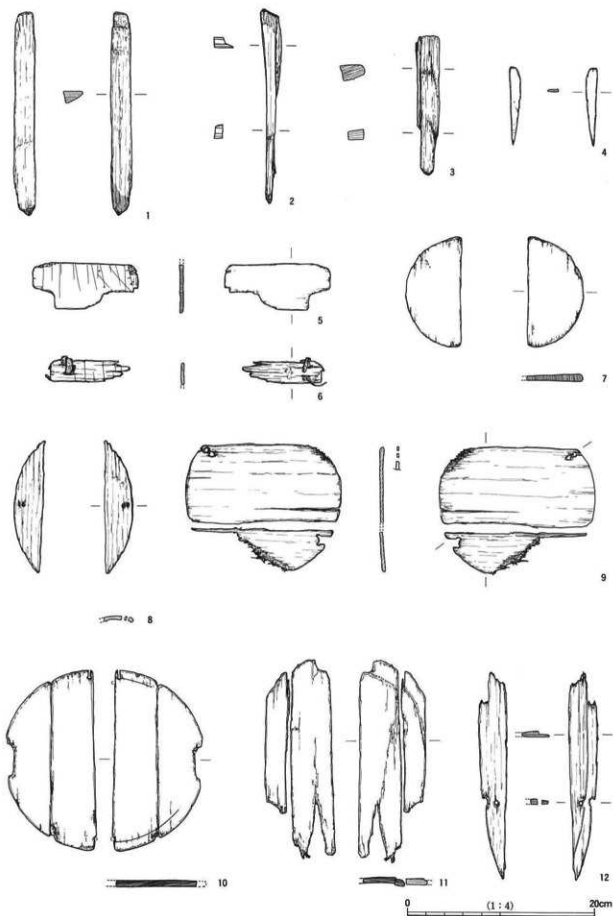


图49 C地区東半部 流路580出土遺物 (5) (木製品(1))

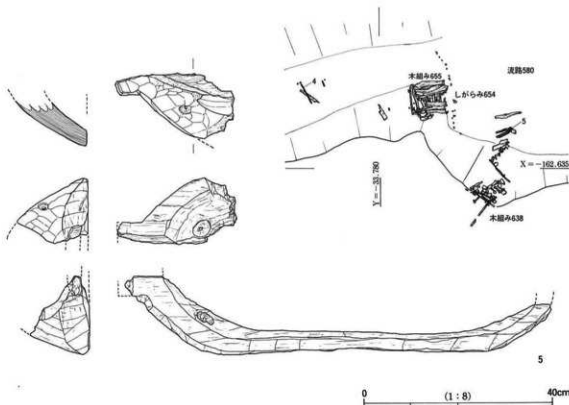
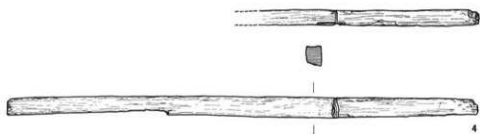
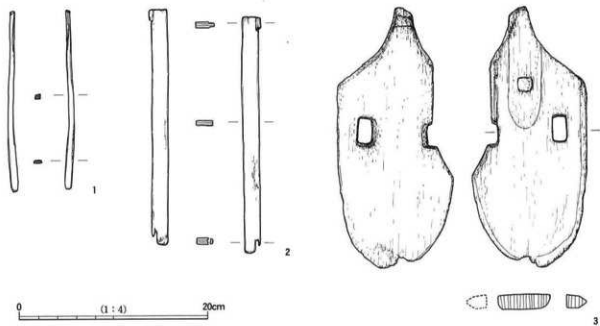


图50 C地区東半部 流路580出土遺物(6)(木製品(2))

第3節 C地区西半部古代～中世の遺構と遺物

1. 遺構

(1)掘立柱建物跡

①掘立柱建物跡1 (図51)

地形に規制されている4間×3間の掘立柱建物跡である。梁行を地形方向に揃えており、間の2本の柱が若干外側に膨らむ形態をもつ。C地区西半部では、南北方向を意識して構築されている掘立柱建物跡および溝が多い中で、地形に規制されている数少ない遺構の1つである。

②掘立柱建物跡2 (図51)

掘立柱建物跡1の南東側で、地形に規制されている3間×2間の掘立柱建物跡である。掘立柱建物跡1の梁行と掘立柱建物跡2の桁行が揃っており、同時期に構築されていると考えてよいであろう。方向性を同じくしている遺構には、溝11や溝20がある。

③掘立柱建物跡3 (図52)

掘立柱建物跡1・2の構築されている地区から、後世に削平を受けて一段下がっているところに位置している。南北方向を意識した2間×2間の総柱建物であり、落ち込み245の埋土を除去した後にピット226～228、ピット233を検出した。掘立柱建物跡3と方向性と軸が揃っている遺構には、掘立柱建物跡5・溝159・160がある。

④掘立柱建物跡4 (図52)

落ち込み245から東方向に緩やかに下がっていく、緩斜面の肩部に位置している。2間×2間の総柱建物で、南北方向を意識して構築している。掘立柱建物跡3と若干軸が異なるが、ほぼ同時期の建物と考えてよいであろう。

⑤掘立柱建物跡5 (図52)

掘立柱建物跡3の西側に軸を揃えて構築している2間×2間の総柱建物である。掘立柱建物跡3と軸を揃えていることから、同時期に構築されていることがわかり、軸が揃っている溝225と土坑182も同時期に併存していた可能性がある。

⑥掘立柱建物跡6 (図52)

掘立柱建物跡3・5の南側に位置しているが、建物の大半を近・現代に掘削されたため池によって削平されており、規模は不明である。周辺に2間×2間の総柱建物が集中していることもあり、掘立柱建物跡6も同様に2間×2間の総柱建物になる可能性が高い。南北方向を意識して掘立柱建物を構築しているが、掘立柱建物跡3・5と軸を異にしており、若干時期が異なるものと考えている。

⑦掘立柱建物跡8 (図51・52)

掘立柱建物跡1・2の南東側に位置しているが、後世に削平を受けて一段下がっている所に構築しており、建物の規模などは不明である。溝などの併存する遺構が見受けられず、軸を揃えている建物も存在していないため、併存していた時期も不明である。

⑧掘立柱建物跡9 (図52)

掘立柱建物跡6の南側に位置しており、掘立柱建物跡4と軸が異なるため、時期も若干異なるものと考えている。また、近・現代の削平によって南側が一段下がって柱穴が消滅しているため、建物の規模などについては不明である。

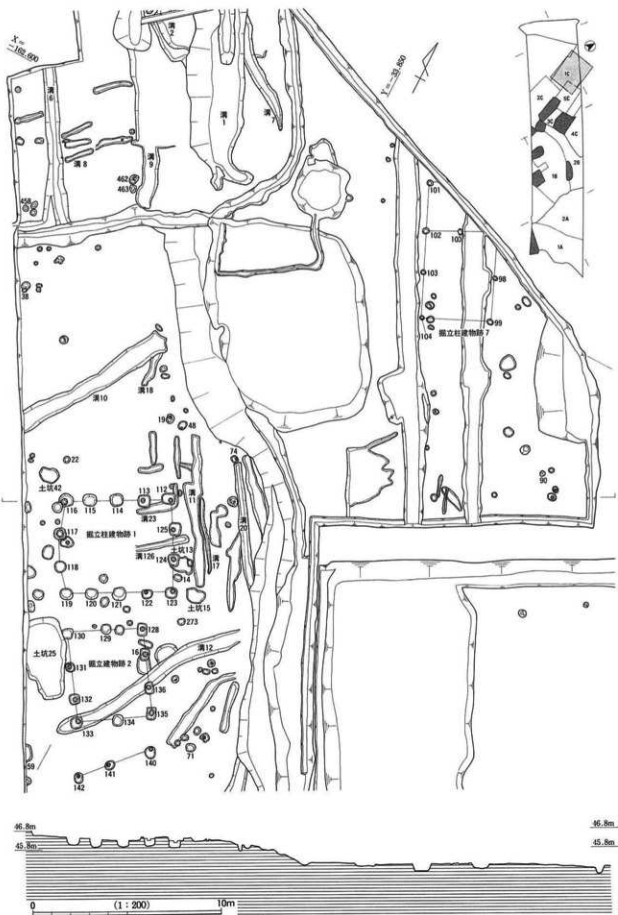
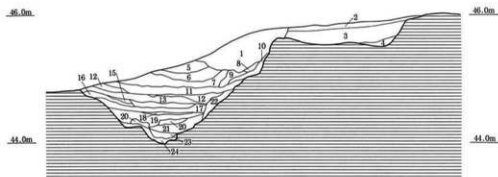
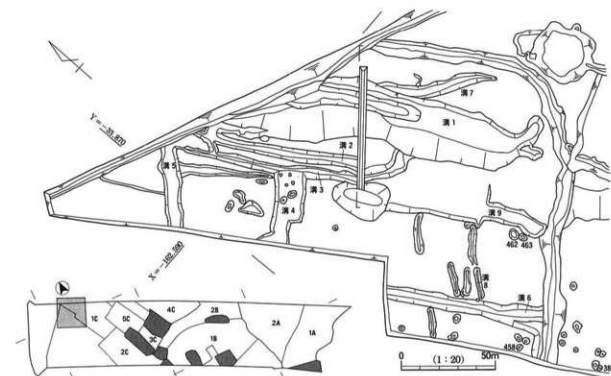


图51 C地区西半部 古代~中世遺構平面・断面図(1)

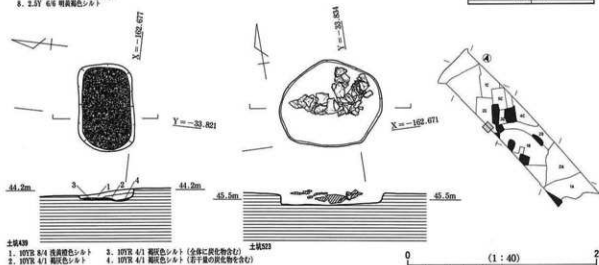


图52 C地区西半部 古代~中世遺構平面・断面图(2)



- | | | |
|--------------------------------------|---------------------------------|-----------------------------------|
| 溝1 | 9. 2.SY 6/4 にじい黄色シレト (地山崩壊土) | 17. 2.SY 5/2 暗灰黄色シレト |
| 1. 10YR 4/6 褐色細砂 (古・近代) | 10. 2.SY 7/4 浅黄色シレト (地山崩壊土) | 18. 2.SY 6/3 にじい黄色細砂 (灰含む) |
| 2. 10YR 5/4 にじい黄色中硬心り細砂 | 11. 2.SY 5/4 黄褐色シレト (中世の遺物を含む) | 19. 2.SY 5/3 黄褐色シレト |
| 3. 10YR 4/6 黄色細砂 (中・近代の遺物を含む) | 12. 2.SY 5/4 黄褐色シレト | 20. 2.SY 5/2 暗灰黄色細砂 (古代・中世の遺物を含む) |
| 4. 2.SY 4/4 オリーブ褐色細砂 | 13. 2.SY 6/4 にじい黄色細砂-粗砂 (地山崩壊土) | 21. 2Y 5/2 灰オリーブ黄色シレト |
| 5. 10YR 4/4 黄色細砂 | 14. 2.SY 5/2 暗灰黄色細砂-粗砂 | 22. 2.SY 6/2 灰黄色中硬心りシレト |
| 6. 2.SY 4/4 オリーブ褐色細砂(じりシレト) | 15. 2.SY 6/2 にじい黄色シレト | 23. 5Y 6/1 灰シレト (古代の遺物を含む) |
| 7. 2.SY 4/3 オリーブ褐色細砂-細砂 (中・近代の遺物を含む) | 16. 2.SY 5/4 黄褐色シレト | 24. 10YR 5/2 灰黄色シレト (解砕あり) |
| 8. 2.SY 6/6 明黄褐色シレト | | |

0 (1:60) 2m



土坑439

- | | |
|---------------------|-------------------------------|
| 1. 10YR 8/4 浅黄褐色シレト | 3. 10YR 4/1 暗灰色シレト (全体に灰を含む) |
| 2. 10YR 4/1 暗灰色シレト | 4. 10YR 4/1 暗灰色シレト (若干量の灰を含む) |

土坑523

0 (1:40) 2m

図53 C地区西部 溝1、土坑439・523平面・断面図

⑨掘立柱建物跡23 (図52)

落ち込み245から東側に地形が落ちていくが、そこに円形のピットが集中して存在している。そのピット群の中に位置しており、地形よりも方位を意識して建物を構築している。建物の規模については不明な点が多い。

⑩掘立柱建物跡24 (図52)

落ち込み245上に位置している2間×2間の総柱建物である。掘立柱建物跡23と軸を同じくすることから、ほぼ同時期のものと考えてよいであろう。ただし、A・B両地区を通じて円形ピットの総柱建物は検出されておらず、建物の規模等については不明な点が多い。

(2)溝

①溝1 (図53)

掘立柱建物跡1・2が位置する平地から、東方向の飛鳥川に向かって、緩やかに下がっていく肩部を利用して掘削された溝である。溝自体は調査区外にも続いており、規模については不明。だが平地に沿うような形で流れており、自然のものではなく人為的に掘削された溝と考えている。最深部では約2.0mある溝であるが、南にいくにつれ深さが徐々に浅くなり、肩部と底面のレベルが同じになってしまう。これは周辺に近・現代のため池などが存在することから、後世に削平されて無くなっている可能性が高いと考えてよいであろう。

断面で観察する限りでは、溝1の西肩部が2段階落ちになっており、上の段から順に流れ落ちる状態になっている。東肩部に関しては、削平されているため、本来の形態については不明である。だが、溝1の埋土は水平に堆積しており、溝1自体は終始穏やかな状態であったことが推定できる。

②その他の溝

大半の溝は掘立柱建物跡の軸と揃っており、遺物が出土していなくても、遺構の時期および併存する掘立柱建物跡を推測することが可能である。また、近・現代のため池がC地区西半部には多く存在しており、そのため池間を結ぶ溝も数条検出されている。

(3)土坑

①土坑439 (図53)

C地区東半部の流路580の上流で、大黒丘陵から派生する開析谷の肩部付近に、土坑439は位置している。流路の底面付近に位置しており、土砂が堆積しない段階に掘削されたものである。東西方向に軸を合わせることを意識した隅丸方形の土坑である。

土坑439の下面一面に、炭や焼土が混じる焼土坑。断面で観察できる限りでは、炭が約2.0cm堆積している状況が観察できた。遺物は全く出土していないが、土坑439の検出位置が流路の下面に位置していることから、近・現代の遺構ではないことは明らかである。

②土坑523 (図53)

C地区調査区の南端に位置し、流路580の西側で井戸424の東肩に位置している。井戸424の掘り方より上面で遺構を検出していることから、遺物は出土していないものの、時期は平安時代以降になることは明らかである。

この土坑内から赤褐色の安山岩の破片が大量に出土している。重なりあっているが、規則性などは見いだせない。上部を削平されているが、底面は平滑である。石材自体も加工痕は見られず、遺構の性格については不明である。

③その他の土坑

この地区で検出された土坑は、不定形な形状のものが大半を占める。遺物が出土している土坑が多いため、それによって併存している遺構の時期を推定することができる。土坑25は第1節で報告したように古墳時代後期の遺物が多く出土しており、当該期に属するものと考えている。また調査区外に範囲がのびているため、規模は不明である。

土坑182は同一個体の土器が数点出土することから、本来は溝225と同一の遺構であったが、上面を削平されており深い部分のみ土坑として残った可能性が高い。土坑389はあまり深くなく底面が平坦であることから、自然の地形で段になっていたところに土砂が堆積した可能性もある。

(4)井戸

①井戸356 (図40)

井戸356は掘立柱建物跡23の南側の井戸で、東へ下りていく緩やかな斜面上、平安時代以降のピットが集中している所に位置している。井戸内の東側が2段落ちになっており、階段状を呈している。井戸枠は検出されず、抜き取った痕跡も見られないことから、素掘りの井戸の可能性が高い。断面より、埋没する時期がほぼ2時期に分かれることがわかる。

②井戸424 (図54)

井戸424はC地区の南端に位置しており、井戸の南端は一部調査区外に出ているため、正確な規模は不明である。井戸424は、現地表面から約2.0mの深さまでは漏斗状の断面形を成しているが、それより約6.0mの深さまではほぼ直落ちの形状を呈する。井戸枠は検出されなかったが、13層から大型の木材が出土していること、井戸に深さがあることから、井戸枠をもっていた可能性が極めて高い。

断面を観察すると、自然に埋没している時期と、人為的に埋めている時期の2通り存在していることがわかる。13層は、井戸の壁が自然に崩落し、自然埋没しているものであろう。出土遺物の時期は、ほぼ同一時期に集中しており、短期間のうちに埋没している可能性が高い。出土遺物には釣瓶として使用されている土器以外にも、奈良三彩小壺や全面に柿渋を塗布した柄杓などが出土しており、その出土遺物の特性から、この時期には、特別な意味合いをもった井戸として使用されていた可能性が高い。

9層からは製塩土器が大量に出土している。この段階でも人為的に埋まっており、他の遺物の出土状況からも、既に井戸424が遺物の廃棄場所として利用されていることがわかる。また製塩土器が大量に廃棄されていることも、当時の胸ヶ谷遺跡の性格を表す一要因となるであろう。1層からは、9～13層の遺物よりも時期の下った遺物が出土している。1層から出土した遺物の中に穿孔した土器が含まれており、9層から自然に埋没しつつあった井戸424を完全に埋める際に、祭祀的な行為を行っている可能性がある。

(5)ピット

掘立柱建物跡を構成するピット以外にも、遺物が出土しているピットが多く検出されているが、遺構が錯綜しているため、混入の可能性が高いものもある。また後世に削平を行ったり、ため池を掘削しているため、本来は存在していたであろうピットが消滅している可能性も高い。

ただ、C地区西半部で検出されているピットは、集中して検出できる位置によって時期が大きく分かれる。西側の微高地にあるピットは、飛鳥～奈良時代に属するものが多く、東側の緩斜面上に位置するピットは、平安時代以降のものが大半を占める。また、飛鳥～奈良時代のピットは隅丸方形のものが多いのに対し、平安時代以降のピットは円形のものが多くも特徴の一つといえよう。

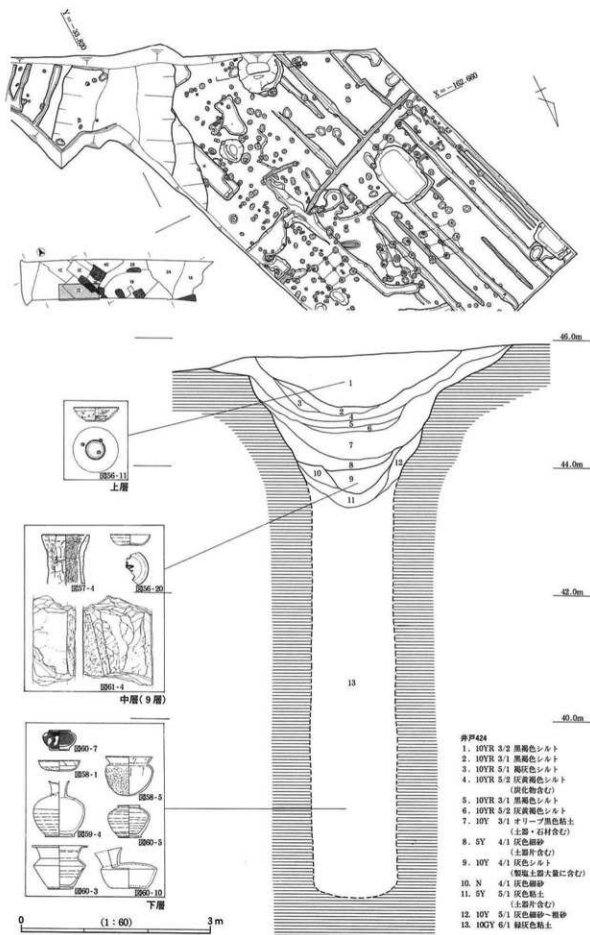


図54 C地区西半部 井戸424平面・断面図

2. 遺物

(1)土器

①掘立柱建物跡1～6・8・9・23・24出土の土器(図55)

掘立柱建物跡1・2はお互いに軸を揃えて、地形に則して構築されている点から、同時に併存しているものと考えているが、いずれの遺構からも土師器の甕片が数点出土しているだけで、それによって時期を確定することはできない。だが、方位を意識している掘立柱建物跡よりも時期が先行することは明らかであろう。掘立柱建物跡3～5からは、飛鳥Ⅲの杯C片が数点出土している。併存していた掘立柱建物跡から同時期の遺物が出土していること、建物に平行している溝225からも同時期の遺物が数点出土していることから、7世紀後頃の遺構と考えてよいであろう。故に掘立柱建物跡1・2はそれ以前で、かつ蔵塚古墳の築造時期までは遡らないものと考えている。

掘立柱建物跡6・8・9からは、遺物は土器片しか出土していないこと、遺構が大きく削平され、規模が不明確であるために時期を特定することは難しい。だが、方位を意識して建物を構築している点から、掘立柱建物跡3～5と同時期かそれ以降の時期であろう。

掘立柱建物跡23・24からは、遺物は土器片が多量に出土している。建物の軸は概ね方位を指向している。またピットの平面形が円形であること、出土遺物の中で黒色土器片の占める割合が大きいことから、9世紀以降の掘立柱建物跡と考えてよいであろう。

いずれも遺物によって時期を特定することは困難であるが、ほぼ4時期に分かれると考えている。

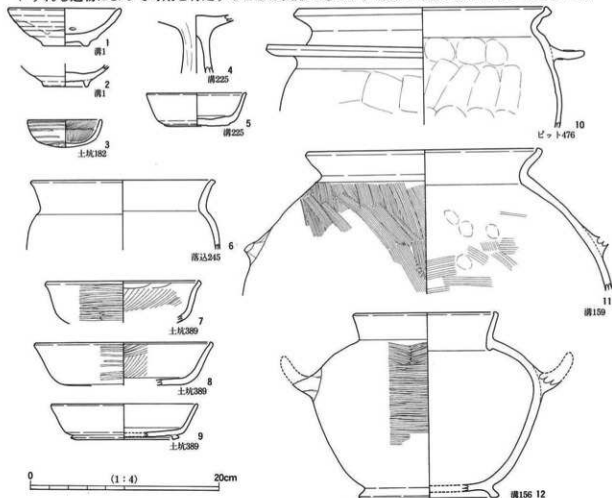


図55 C地区西半部 古代～中世遺構出土遺物(土師器・須恵器・陶磁器)

②溝1出土の土器(図55-1・2)

溝1からは、土師器・須恵器・陶磁器が多量に出土している。遺物の時期幅が広いことから、遺構の存続期間は長いものと思われるが、最も集中して出土している遺物の時期は、近世のものである。また下層から火を受けた凝灰岩の切石片や埴輪片が数点出土していることから、古代もしくはそれ以前に、既にこの場所には溝1の初期段階となるものが存在していた可能性がある。

1は底部内面の4ヶ所にトチン痕が残る陶器で、内面に白釉がかかる。胎土は礫をほとんど含まない密なものを使用している。2は灰軸陶器で、外面に透明釉が塗布された痕跡がある。また底部内面を数回なでることによって釉を掻き消している。

③その他の溝出土の土器(図55-4・5・11・12)

掘立柱建物跡3～5と併存する溝で時期を確定することができるものに、溝156・159・225があげられる。溝156から出土している壺Bは橙色を呈するもので(12)、外面はミガキを有するが、内面の調整については不明瞭である。溝159から出土している甕も、橙色の胎土を使用している(11)。いずれの溝からも、他に羽釜片や甕片が出土しており、時期はともに8世紀中頃のものと考えられる。

溝225は掘立柱建物跡3と近接し、かつ軸が揃っている溝である。この溝からは土師器・須恵器が出土している(4・5)。土師器は、飛鳥Ⅲに属する杯Cや皿A片などが数点出土している他に、外面をナデ調整している脚柱部をもつ高杯が出土している。須恵器は、底部外面未調整の杯G身がほぼ完形で1点出土しており、溝225および掘立柱建物跡3～5の時期は、飛鳥Ⅲ以降の7世紀後頃と考えることができる。また、溝10からは7世紀後の土師器片が数点出土している。同時に火を受けた凝灰岩片が出土している。

④土坑・落ち込み出土の土器(図55-3・6～9)

土坑182は溝225の続きとも考えられる遺構で、土師器・須恵器が出土している。土師器は8世紀代の羽釜・甕の他に二段暗文をもつ杯Cがほぼ完形で1点出土している(3)。色調は橙色を呈する。須恵器は青灰色の甕片が数点出土している。土坑389は調査時にピット390の遺物が混入している可能性があるものの、サヌカイトの他に土師器および須恵器が多く出土している。土師器は杯Aの他に、羽釜・甕が出土している(7・8)。杯Aはいずれも二段暗文をもつもので、明褐色と橙色の2系統が見られる。須恵器は青灰色の杯Bの他に(9)、甕が出土している。また白色を呈する杯蓋も出土しており、少なくとも2地域から遺物が供給されている可能性がある。

落ち込み245は広範囲に渡るために、周辺の遺物が混入している可能性は大きい。遺物も多種類にわたり、土師器・須恵器の他、凝灰岩片が数点出土している。土師器は8世紀前～中の遺物が出土している。甕は河内型の甕の占める比率が大きい(6)。橙色系の土師器が多く出土する中で、淡黄褐色の土師器が数点見られる。須恵器は、高台に4ヶ所穿孔している壺などが出土しているが、ほぼ陶邑のものに限定できるようである。8世紀前頃の遺物が集中して出土しているが、杯Gの蓋など7世紀後の遺物も数点含まれている。

⑤ピット出土の土器(図55-10)

ピットから出土している遺物は大半が破片であるため、この遺物をもってそれぞれのピットの時期を確定することは難しい。ピット476から出土した羽釜は、口縁部を下にした状態で出土した(10)。体部はなく、淡黄褐色を呈する。掘立柱建物跡4内から出土しているが、中世の遺構が錯綜する地域であることもあり、関連する遺構とは考えられない。

⑥井戸424出土の土器（図56～60）

図56-1～16は上層の遺物である。1～15は土師器である。破片数にして525点、総重量5,350g出土している。器種構成比率は、杯・皿・碗類が228点（43.4%）、鉢・高杯類が9点（1.7%）、壺・甕・羽釜・甕類が244点（46.5%）、製塩土器が3点（0.6%）、その他・不明が41点（7.8%）である。食器類と貯蔵・煮沸類がほぼ同比率で出土している。1～13は碗・皿・杯類である。いずれも口縁部にナデ調整を行い、底部外面に指頭圧痕が明瞭に残るものである。いずれも暗文は見られない。胎土は長石や金雲母の細粒を混入するものもあるが、精良なものが大半を占める。色調は橙色のものが大半を占め、淡黄褐色を呈するものは、1の杯と11の碗の他、数点の破片しか出土していない。11は、外面に第1関節が明瞭に残るもので、最終的に伏せた碗を両手で整形していることがわかる。この碗は一般的な形態をもつものであるが、底部を外側から3ヶ所穿孔している。各地域で、井戸の廃絶時に穿孔した碗・杯類を廃棄する例があり、11も祭祀的な意味をもつものであろう。甕は一般的に出土するものと、河内型甕がほぼ同数出土する（14・15）。

土師器が大量に出土するのに対して、須恵器の出土量が少ない。須恵器は破片数にして133点、総重量は7,650g出土している。器種構成比率は、杯・皿・碗類が18点（13.5%）、壺・瓶類が38点（28.6%）、甕類が77点（57.9%）であり、杯・碗類に対して、甕・壺類が多く出土している。須恵器は陶邑の特徴の一つである青灰色を呈するものがほとんどで、1点のみ甕で白色系のものが出土している。これらの須恵器は破片が大半を占め、実測可能なものは16の1点のみであった。

他に、実測不可能であったが、黒色土器A類が数点出土している。製塩土器は計測不可能な破片で、いずれも器壁が1.0cm以下のもの。口縁部および布目痕のあるものは出土していない。

図56-17～37、図57は中層の遺物であるが、特に遺物はこの9層にて集中して出土している。17～28は土師器である。破片数で2,295点出土している。器種構成比率は、杯・皿・碗類が73点（3.2%）、鉢・高杯類が11点（0.5%）、壺・甕・羽釜・甕類は112点（4.9%）、製塩土器は2,042点（89.0%）、不明・その他は57点（2.5%）で、製塩土器が圧倒的に多く出土していることがわかる。食器類は灯明皿をはじめ（17～19）、外面に黒斑もしくは二次的に火をうけているものが多い。胎土は精良で、色調は淡赤褐色を呈するものがほとんどである。20は墨書土器であるが、何を書写したものは不明である。胎土は長石の細粒を含み、淡黄褐色を呈する。甕は河内型甕しか出土していない（24・25）。いずれも外面に煤が付着しているものである。

ミニチュア高杯は、淡黄褐色を呈するもので、杯部に火を受けた痕跡を残す（28）。鉢も、火を受けたり、黒斑を有するものが多く出土している。羽釜はいずれも金雲母を多量に含むもので（26・27）、鈹部より下部には煤が付着している。

29～37は須恵器である。破片数にして109点しか出土しておらず、土師器に対して出土数が少ない。器種構成比率で、杯・皿類が18点（16.5%）だが、うち杯蓋が15点と出土量が多い。他には壺・瓶類が51点（46.8%）、甕類が40点（36.7%）で、食器類よりも壺・甕類の占める割合が大き（33～37）。壺Mなどの他に、壺Gといった都城や官衙遺跡で出土例の見られるものも含まれる。須恵器は壺Gが静岡岡部助宗窯のものと考えられる以外は、大半のものが陶邑の須恵器であろう。

図57-1～30は製塩土器である。破片数にして2,042点出土しているが、そのうち口縁部は595点出土している。製塩土器は大きく分けて2種類に分類できる。1～19は内面に布目の痕跡を持たないものである。破片数で1,644点、口縁部は538点出土している。いずれも筒状の形態をもつもので、底部は1点

しか出土していない。軟質な胎土をもつものの割合が大きく、石英・チャートの円礫を多量に有するものと、礫をほとんど含まないものが多く出土している他、硬質で金雲母が大量に混入しているものもある。口縁部の形状・胎土などから大阪湾から紀伊で製作されたものが多いと考えている。

20～30は内面に布目を有するものである。破片数にして389点、口縁部は57点出土している。底部は1点も出土していない。硬質の胎土をもち、器壁は1.0cm以上のものが大半を占める。石英の角礫を有するもの、金雲母を多量に混入するものが比較的多く出土している。また布目は絹織物と思われる非常に精緻なものから、粗いものまで多種類の布を使用している。口縁部は、指や板状の工具を用いて面をつくるタイプのものが多い。布目を有する製塩土器の割合は、全体に対して19.1%であった。他に外面にタタキを有するもの4点、靱痕を有するもの2点の他、内面にハケメをもつものは出土しなかった。

31は須恵器の甕で、製塩土器と同時に出土した。底部に置台をもち自立しない。水甕として井戸の横に置かれていた可能性が高い。

図58～60は下層から出土した土器である。図58・59-1～3は土師器である。破片数にして390点、総重量は16,675gである。器種構成は、杯・皿類は71点(18.2%)、鉢・高杯類は7点(1.8%)、壺・甕・羽釜・竈類は226点(57.9%)、製塩土器64点(16.4%)、その他・不明は22点(5.6%)で、貯蔵・煮沸具類が多く出土している。食器類で実測可能な遺物は1点で(図58-1)、底部に指頭圧痕を明瞭に残す淡黄褐色の杯である。胎土は石英の細粒を多く混入する。甕は完形で多く出土している(図58-2～16、図59-1～3)。いずれも河内型の甕で、胎土は石英の細粒を多く含むもの、色調は黄褐色もしくは赤褐色を呈するものである。内外面全体に煤が付着するものと、未使用と考えられるものの2種類出土している。また頸部に縄を巻いた痕跡のあるものも出土している(図59-1～3)。縄は2ヶ所で上方向に持ち上げている痕跡のあること、同じ器種が多く出土していることから、これら河内型の甕は、全て釣瓶として使用されていた可能性がある。

図59-4～12、図59-1～6・8～11は須恵器である。破片数にして158点、総重量は27,200gである。杯・皿類は19点(12.0%)、壺・瓶類は93点(58.9%)、甕類は45点(28.5%)、その他・不明は1点(0.6%)で、壺・瓶類が多く出土している。図59-4～12の壺L、図60-2～4の壺Q、8～10の平瓶、11の横瓶にはいずれにも頸部に縄の痕跡があり、土師器の甕同様に釣瓶として使用されていたものであろう。壺Lは陶邑のものと、黒色の小粒を混入する白色系の須恵器がほぼ同数出土しており、肩部に自然釉のかかるものが多い。口縁部を故意に打ち欠いており、縄は1ヶ所から持ち上げている。壺Qも口縁部を打ち欠いており、縄が掛かりやすい。外面に二次的に火をうけているものもあり(2)、内面に窯体が付着しているものもある(3)。平瓶は把手ではなく、頸部に縄を巻いた痕跡が見受けられた。下層から出土している須恵器は、全体量では、陶邑の須恵器の占める割合が大きい。

図60-7は奈良三彩の小壺である。本来は蓋を有するものであるが、井戸内からは出土していない。井戸424下層の埋土を洗浄したが、内容物などは全く出土しなかった。肩部が上方向にあり、寸胴な体部をもつ沖ノ島出土のものと酷似した形態をもつ。銀化がかなり進んでおり、褐釉は部分的にわかるだけである。底部外面に3ヶ所目痕のような澱粉質のものが残っている。

9層の遺物と13層の遺物が接合することから、埋まった時期はほとんど差がないものと思われ、井戸424は8世紀後～9世紀初に主に使用されていたものと考えている。

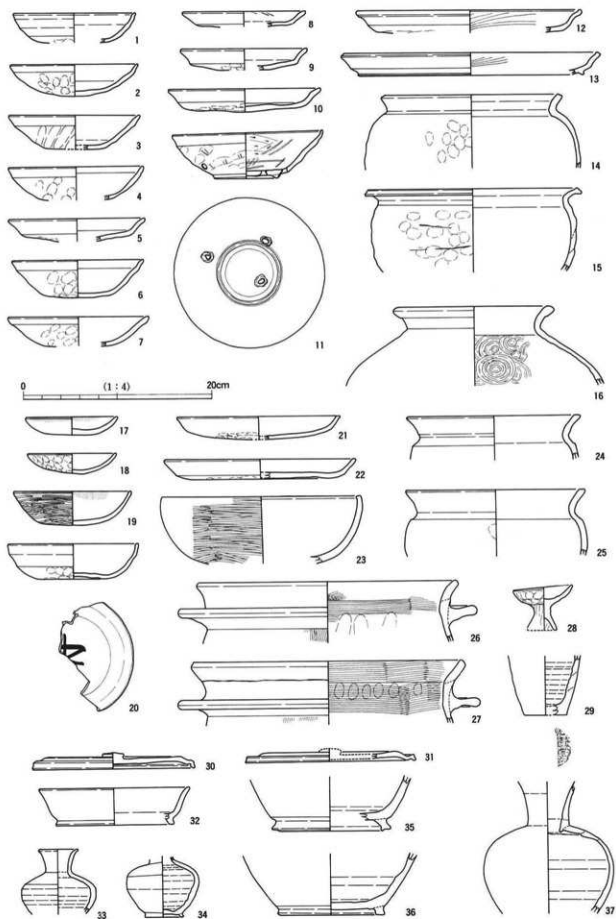


图56 C地区西半部 井戸424上・中層(9層)出土遺物(土師器・須恵器)

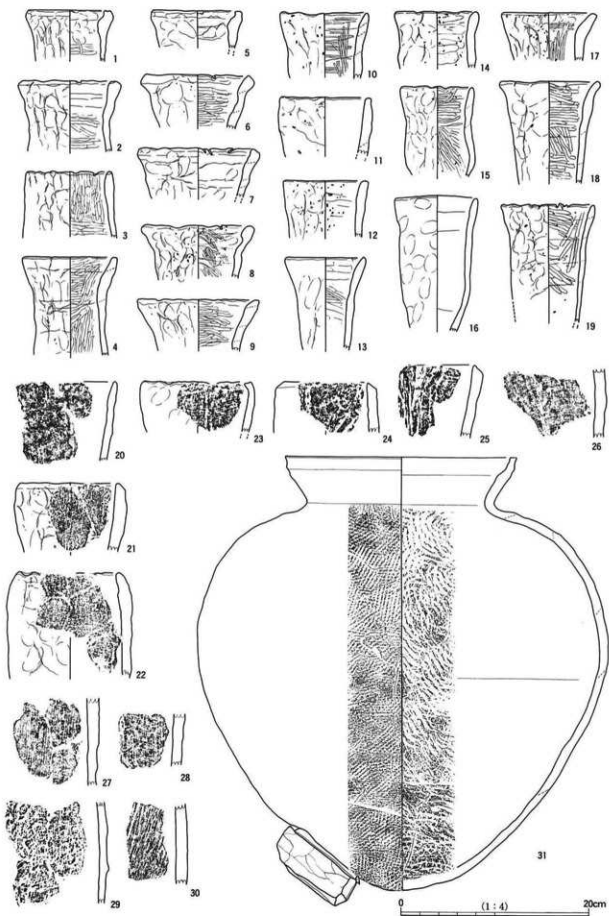


图57 C地区西半部 井戸424中層(9層)出土遺物(製塩土器・須恵器)

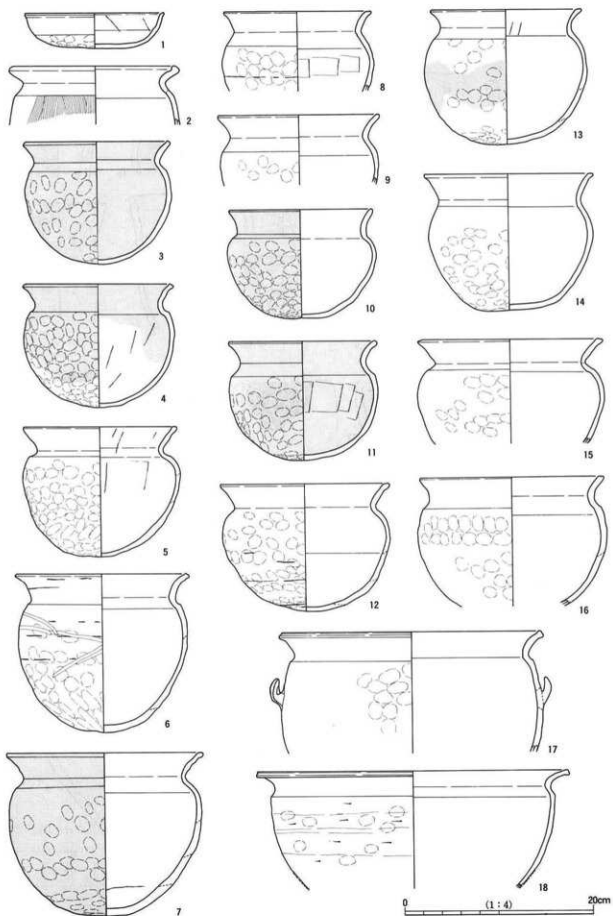


図58 C地区西半部 井戸424下層出土遺物(1)(土師器(1)) (トーンは煤附着部分)

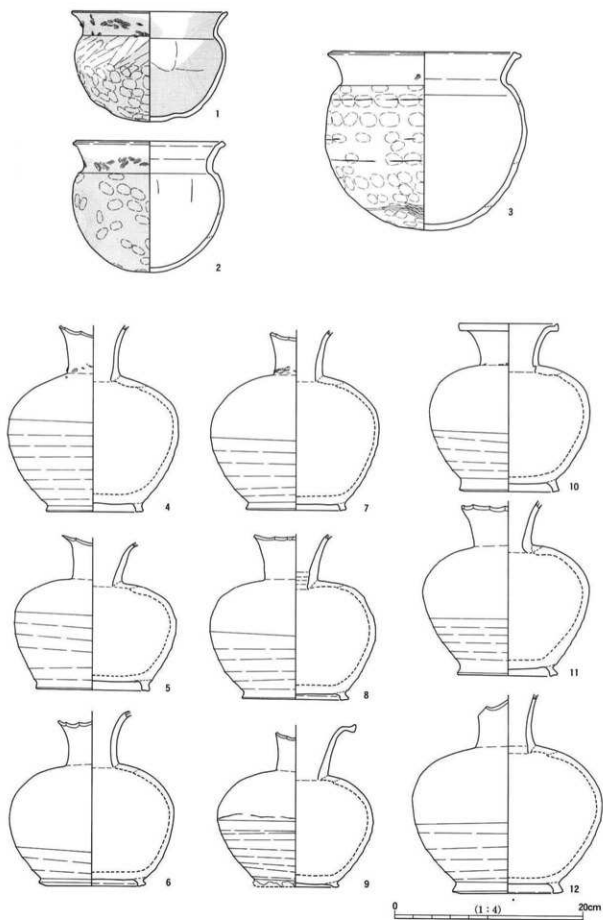


图59 C地区西半部 井戸424下層出土遺物(2)(土師器(2)・須惠器(1))

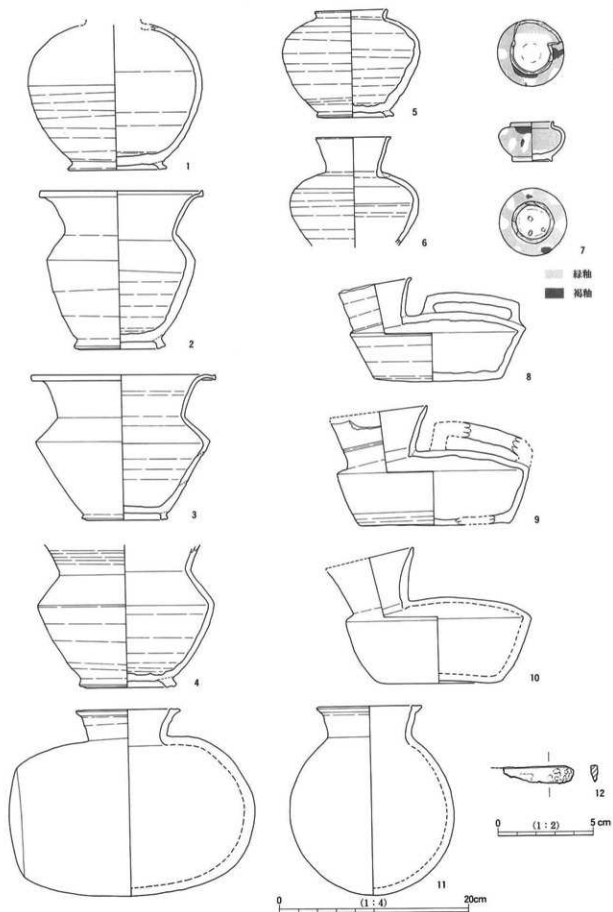


图60 C地区西半部 井戸424下層出土遺物 (3) (須恵器(2)・奈良三彩・鉄製品)

⑦井戸356出土の土器

瓦器が1点出土している。和泉型の瓦器碗で、高台の断面は三角形を呈し、底部内面には暗文を施さないものである。内外面ともに口縁部付近に単位をもたない暗文を施す。焼成がやや甘く、灰白色を呈するものも見られる。12世紀後～13世紀前頃に該当する瓦器である。

(2)石製品 (図61)

他の地区と比較すると、C地区西半部では井戸以外の遺構からも石製品が出土している。石材の種類は他の地区同様に、寺山安山岩や凝灰岩である。出土している石製品の大半は、二次的に火を受けて表面が変質している。また、凝灰岩製の石製品が出土している遺構は7世紀後～8世紀中に属するものが多く、寺山安山岩や粘板岩製の石製品が出土している遺構は、それ以降の中世にまで下るものが多い。またC地区では、埴が数点出土している。

溝10の下層からは、火を受けた凝灰岩の破片が数点まとまって出土している。いずれも、本来は加工されて面をもっていたものと思われるが、接合せず別個体のものである。溝10は調査区外に続いていく溝であるが、7世紀後～8世紀前頃の遺物が出土しており、時期については確定することは出来ない。方位を指向している溝であり、掘立柱建物跡3～5と平行する溝159・160と直交することから、掘立柱建物跡3～5と併存していた可能性がある。凝灰岩もほぼ同時期に廃棄されたものであろう。

図61はC地区から出土している埴および石製品であり、いずれも遺構から出土しているものである。そのうち3の溝591から出土した凝灰岩については、前章で述べているので(79頁参照)、ここでは省略することにしたい。

1・2は埴である。1は井戸424の下層から出土したもので、一方向から火を受けた痕跡があった。破損しているため、正確な形状については不明である。2は流路580の最下層から出土したもので、ほぼ完形に近いものである。平滑な面をもつ3面に火を受けた痕跡が見られた。また流路580からはもう1点埴が出土している(図45-16)。このような埴が何に使われたかについては不明であるが、これまで他遺跡で出土している埴と比較して、厚さがある点、大型であることが特徴といえる。今回、駒ヶ谷遺跡で出土した埴と近似した値を示し、ほぼ同形と思われる埴が、柏原市の青谷遺跡で出土している。この青谷遺跡は、聖武天皇が行幸の際に使用した竹原井の頓宮だと推定される遺跡であるが、この建物に付属する溝には、駒ヶ谷遺跡と同様の幅・長さを測る埴を使用している。青谷遺跡の埴は、周辺の遺跡でも同形のもので出土しておらず、特別な形状を示すものと考えられてきた。また駒ヶ谷遺跡で出土した埴の胎土は、青谷遺跡で出土している埴と似ており、同じく柏原市に所在する田辺廃寺の基壇に使用している埴とは、胎土も厚さも異なっている。駒ヶ谷遺跡で出土した埴は、この3点のみであるが、青谷遺跡と同様な使用方法がなされていた可能性が高い。

4は、井戸424の9層から出土した凝灰岩の切石である。本来の長さは両端が破損しているため、不明である。4面現存しているうちの1面は、水平でなく緩やかな弧を描いており、断面形は蒲鉾型を成している。工具痕は弧を描く面には明瞭であるが、水平な面にはほとんど残存していない。また、3面に焼成を受けており、煤が多量に付着している。水平に加工されている1面には、全く火を受けていないことから、この面は別の石材などに接していたものであろう。用途不明の石製品であるが、全体に丁寧に加工されていることから、構築物の一部で、かつ人の目に触れやすい部材であった可能性が高い。しかも煤が多量に付着していることから、一度に火を受けたものではなく、常時火を受けるような場所に置かれていたものである可能性もある。

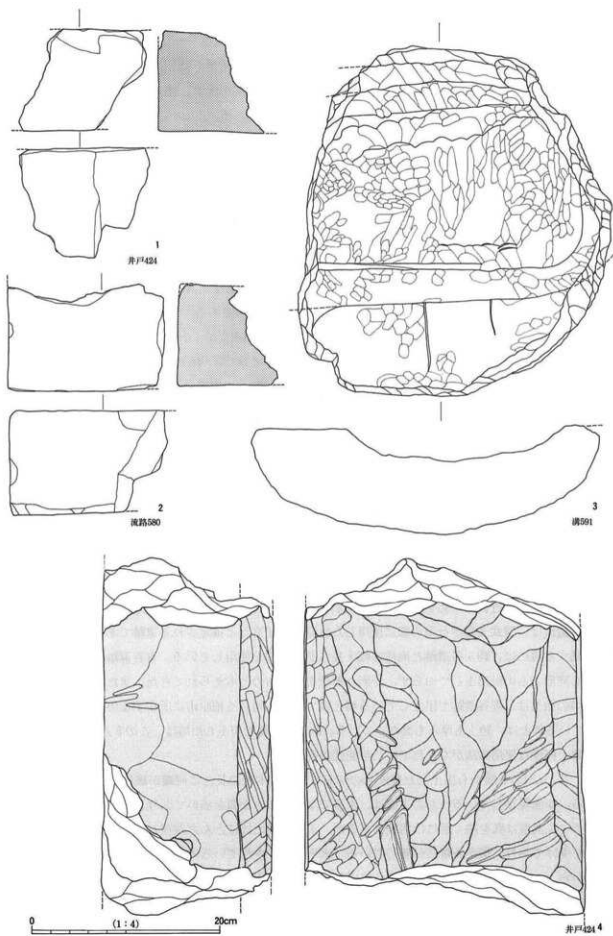


图61 C地区 古代~中世出土遗物(埴·石製品)

(3)木製品 (図62)

A・B地区およびC地区東半部では、木製品は井戸から出土している他に、流路に伴う木組みを構成している部材などの出土が大半を占めている。C地区西半部では、流路580に繋がる流路の他に井戸が2基存在しているが、うち木製品が出土しているのは、井戸424だけである。

井戸424から出土している木製品は、全て13層から出土しているものである。井戸424からは井戸枠が検出されず、出土遺物の中にもそれに該当するものは存在しなかった。また水溜に使用したと思われる曲物も出土しなかった。

1は斉申である。一方を大きく剣先状に切り、もう一方を尖らせる一般的な形態のものである。材質は杉材である。2・3は火付け棒である。2は板材を二次利用しているもので、両端に燃やした痕跡がある。3は棒状のもので、四面とも丁寧に面を整えているものである。同じ火付け棒ではあるが、2とは明らかに形状が異なり、最初から火付け棒とすることを目的として製作されているようである。一方しか燃やしていないが、炭化した状態であることから、長時間燃えているような状態にあったのかもしれない。4・5は曲物の底板の一部である。燃えた痕跡もないことから、火付け棒として再利用されたものではなく、破損して廃棄されたものであろう。

6は全面に柿渋を塗布した柄杓であり、杓の中に柄が残存しているもの。柄は杓の側板に突き刺すような形で残存しており、特別に留め具を用いてはいない。柄は持ち手側に行くにつれて径が大きくなり、抜けにくい構造になっている。側板は桜の樹皮で、二重に綴じられていることがわかる。底板と側板は木釘で5ヶ所等間隔でとめている。この柄杓は、底板・側板の内外面および柄にも柿渋が塗られている。柿渋は接着剤として使用される他、水が漏れるのを防ぐ役割をもっている。7は釣瓶である。内外面ともに加工痕が著しく、底部外面は若干外に突出している形態をもち、内面はくものす状に工具痕が見受けられる。釣手部分に一部柿渋が残存しており、この部分を強化するために柿渋を塗布していたことがわかる。底部は穿孔されており、紐をこの部分に通して、2ヶ所の釣手から通した棒状のものに結び付けて、水を汲んでいたと考えられる。木製の釣瓶では古い例の1つである。

8は折敷の底板である。半分欠損しているが、残存している部分で、等間隔に3ヶ所桜の樹皮が残存していることから、6ヶ所で側板ととめていることがわかる。9は曲物の底板で、3ヶ所に木釘の痕跡が見られる。片面に柿渋を塗布しているものである。

(4)瓦 (図63)

胸ヶ谷遺跡全体を通して瓦はほとんど出土しておらず、至近に奈良時代に創建されたとされている河内飛鳥寺の伝承地がありながら、白鳳時代の瓦は1点も出土していない。A・B両地区に関しては、破片で出土しているものが大半を占めており、実測可能なものは2点のみである(図63-1・2)。また、平安時代に遡ると考えられている瓦も数点しか出土しておらず、付近で瓦を大量に使用する建物の存在は考えられない。C地区で瓦が出土している遺構には、流路580と井戸424の他、いくつかのピットがあげられる。流路580から出土した瓦には、近・現代のものが大半を占めており、それ以前の瓦が非常に少ない。周辺に瓦を有する構造物が存在していなかったことを示すものであろう。井戸424からは、破片を含めて数十点出土しているが、ここでは実測可能なものについて掲載した。

①ピット出土の瓦 (図63-3・4)

3はピット232、4はピット462から出土した平瓦である。ピット232は掘立柱建物跡3を構成する柱穴であるが、周辺は近・現代に削平されている場所であり、後世の瓦が混入している可能性がある。3・

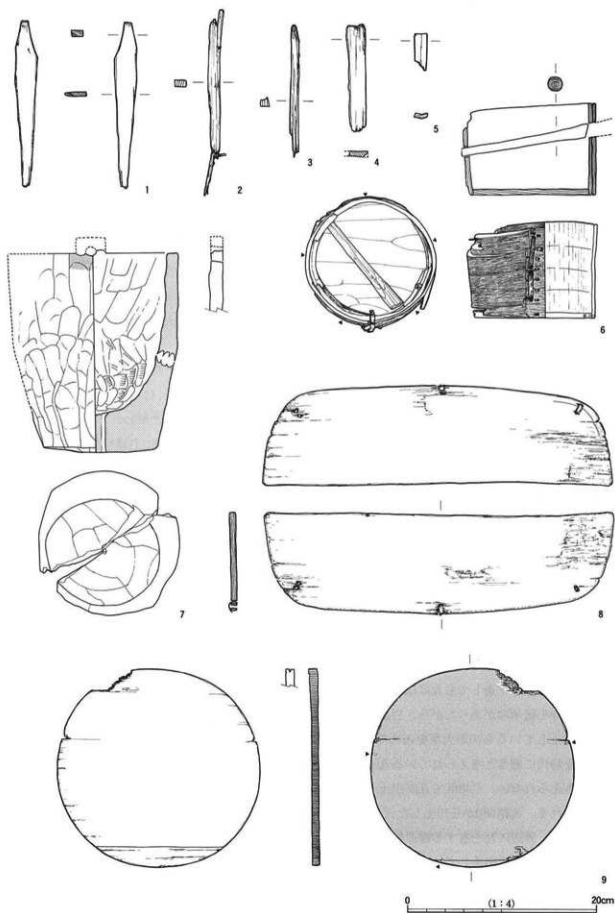


图62 C地区西半部 井戸424出土遺物（木製品）

4 いずれも凹面に粗い布目を有し、4 は最終的にケズリ調整で布目を消している。

②井戸424出土の瓦 (図63-5~7)

いずれも井戸424の下層から出土した丸瓦である。5 は瓦が厚手のつくりであったが、6・7 はやや薄手のつくりをもつ。いずれも凹面に粗い布目を有し、胎土には粗砂や礫などが大量に混入しているものを使用している。

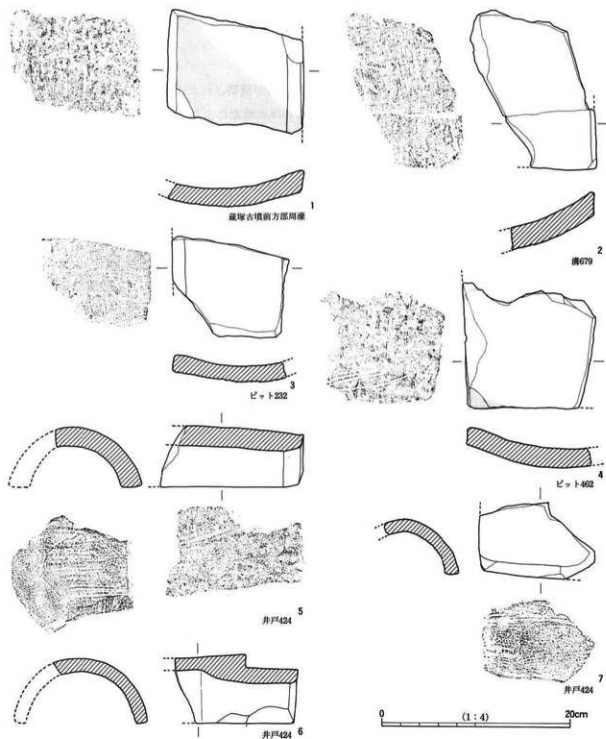


図63 A・C地区 出土遺物 (瓦)

第7章 基礎分析

第1節 駒ヶ谷遺跡の変遷

1. 各地区の遺構の変遷

第4～6章で、地区別に遺構・遺物について報告してきた。今回は、調査上地形の形状によってA～Cの3地区に区分しているが、駒ヶ谷遺跡の存続していた当時は、地形によってつながりをもたない地域もあるものの、何らかの相互関係が生じていたことは確かであろう。まずここでは全体の変遷を考える前に、各地区ごとの遺構の変遷を整理することにした。

(1)A地区 (図64)

今回調査した地区の中でも南東部に位置する。蔵塚古墳が構築された古墳時代後期を除くと、大きく分けて4期に区分される(A-1～A-4)。A地区で複数時期にまたがる遺構に、流路1237がある。弥生前期の遺物もかなり磨滅した状態で数点出土するが、概ね7世紀後頃と8世紀前～中の2時期の遺物が集中している。7世紀以降の遺物はほとんどローリングを受けておらず、遠くから流されてきたものでないことは確実である。

A-1期は、7世紀後頃で、蔵塚古墳の後円部周濠を埋めている時期であるが、掘立柱建物跡や井戸といった居住域と想定する遺構は検出していない。だが流路1237からは、円面硯が数点出土しており、識字層が周辺に居住していたことは明らかであろう。蔵塚古墳の築造時期が6世紀中頃であることを考えると、築造後約1世紀後に、次世代の人間が墓域を侵していることは興味深い事実である。

A-2期は、8世紀前～中頃にあたる。蔵塚古墳の後円部周濠はほぼ埋められ、周濠内の中程で後円部墳丘に沿って溝679と土器溜まり851が土器の廃棄場として使用される。2つの遺構は接しているが、土器溜まり851の方が若干新しい。だが中には、中空円面硯などA-1期に含まれる遺物も数点出土している。居住域を想定させる遺構には、蔵塚古墳周濠の肩部から外堤にかけて構築されている掘立柱建物跡11がある。掘立柱建物跡11は溝679と軸を揃え、方位と溝679を意識していることがわかる。また蔵塚古墳周濠肩部にかけてこの時期のピットが多く検出されている。流路1237の上層にあたる井戸1191はA-2期末のものであり、その頃には流路1237が機能を果たさなくなりつつあることがわかる。

A-3期は、9世紀前～中頃にあたる。蔵塚古墳周濠肩部に集中していた遺構が、蔵塚古墳の外堤に移動しており、外堤と流路1237の間にこの時期の遺構が集中する。また掘立柱建物跡12はA-2期末～A-3期に該当し、井戸1191の廃絶後掘削されている井戸1189はこの時期の遺構である。

A-4期は、12世紀後～13世紀初頃にあたる。流路1237からはこの時期の遺物は出土していない。A-3期に引き続いて蔵塚古墳外堤に遺構が多く集中する。この時期の掘立柱建物跡は検出できなかったが、井戸672・678・1187などこの地区に最もこの時期の井戸が集中しており、周辺に掘立柱建物跡が存在していた可能性がある。また、石材が大量に廃棄されている蔵塚古墳後円部周濠内の土坑815から12世紀中頃の瓦器が出土しており、A-4期に関連する遺構としてあげることができる。

(2)B地区 (図65)

蔵塚古墳の前方形から外堤、そしてそれより西側にかけての地区である。この地区も後世に削平を受けており、西に行くにつれて遺構が希薄になる。蔵塚古墳の築造された時期を除くと、ほぼ3～4期に区分することができる(B-1～B-4)。

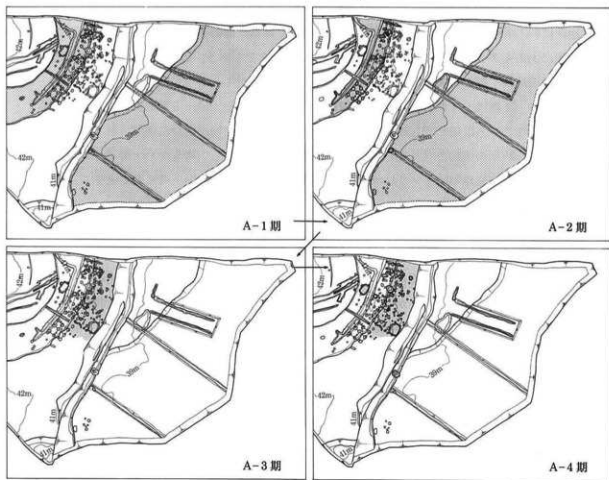
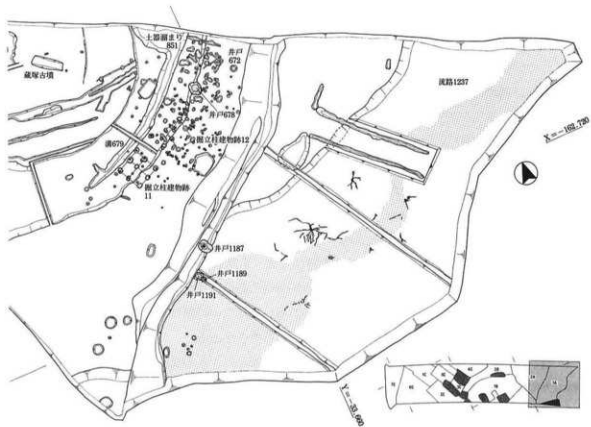


图64 A地区 遺構変遷図

B-1期は、7世紀後～8世紀中頃である。この時期の遺構には、土坑885と土器溜まり884があげられる。蔵塚古墳前方部の周濠南肩部に位置しており、土坑885の下面が周濠の底面に接することから、古墳としての意識があるにもかかわらず、土器廃棄場となっていたことがわかる。これらの遺構から、蔵塚古墳後円部周濠内に位置する土器溜まり851と接合する資料が出土しており、同時期に2つの廃棄場所が存在していることと、分別廃棄の可能性を示唆するものである。この時期、蔵塚古墳前方部外堤では、掘立柱建物跡・井戸といった遺構は検出できなかった。

B-2～B-3期は9世紀中～後頃であり、掘立柱建物跡の建て替えが見られる。建物はいずれも方位を意識している。土器溜まり884から9世紀中頃の遺物が若干出土しているが、全て上層からであり、この時期まで廃棄土坑として機能していたかは不明である。B-2期には、掘立柱建物跡13・18の他、区画する溝がめぐっている。その後B-3期には、掘立柱建物跡13を建て替える形で、掘立柱建物跡20およびそれに伴う溝を構築している。掘立柱建物跡18はB-3期まで存続していたかどうかは不明だが、この掘立柱建物跡18の上層から「黒寧元宝」という1068年に鋳造された北宋銭が出土しており、遅くとも11世紀中頃にはこの建物は廃絶していることがわかる。またこの時期に該当する井戸は検出されておらず、建物群の南、もしくは調査区外に構築されていた可能性がある。

B-4期は12世紀前～中頃にあたり、掘立柱建物跡21・22といった小規模の建物が該当する。区画溝も建物の方位に沿って再掘削している。この時期の井戸1000は、2段以上の石組みをもつ井戸で、瓦器A類がほぼ完形でまとも出土している。

(3)C地区 (図66・67)

C地区は駒ヶ谷遺跡の中で、北西部に位置する地区である。他の2地区に比して、後世に削平されている地域はあるものの、地形の変化が最も認められた地域でもある。この地区は流路580や堅穴住居1といった古墳時代中期の遺構を除くと、4期に区別することができる(C-1～C-4)。

C-1～C-2期は、7世紀後～8世紀前頃の時期に該当する。C-1期には、掘立柱建物跡1・2が該当する。ここからは破片でしか遺物は出土していないが、建物が地形に規制されている点より、C-2期より古い時期の建物と考えている。また、建物と同じ軸をもつ溝9から土師器がほぼ完形で数点出土しており、掘立柱建物跡1・2は溝9と同時期か、若干下った時期と考えることもできる。この時期に該当する井戸は検出できなかった。

C-2期以降は、方位を意識して建物を構築するようになる。C-2期は7世紀後～8世紀中と考えられる。流路580を境にして掘立柱建物跡3～6・8～9と掘立柱建物跡14・15が構築されており、それぞれの建物と平行にはる区画溝を数条検出している。流路580の北側の掘立柱建物跡群は建物の軸のズレから、2～3回の建て替えが行われていると推定できる。流路580内に護岸施設やしがらみの他に遺構は検出できなかったが、流路580の上流は深さがほとんどなく、調査区外でお互いに行き来できたようである。時期的にみて、井戸424はこの掘立柱建物群に伴うものと考えている。井戸424の埋没時期は、8世紀後～9世紀初頃である。8m以上にもなる井戸の掘削深度もさることながら、出土遺物の多様性から一般集落とは異なる性格の遺跡である可能性が高い。

C-3期も方位を意識して建物を構築している時期であるが、C-2期の建物よりも飛鳥川により近い、一段下りた平坦地に居住地を構えている。出土遺物が少ないため時期を特定することはむずかしいが、9世紀前～中頃の時期であろう。これは井戸424が最終埋没した時期にあたる。流路580を境にして、北に掘立柱建物跡7・19・23・24と南に掘立柱建物跡16・17が構築されている。それぞれの建物の周囲

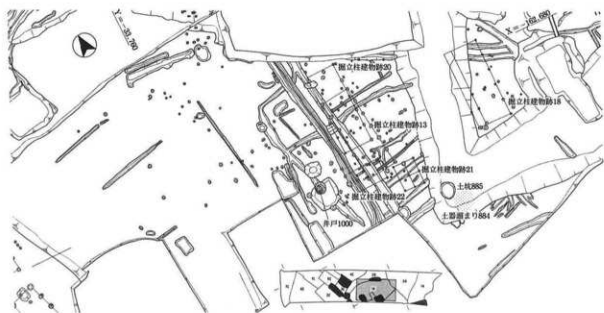
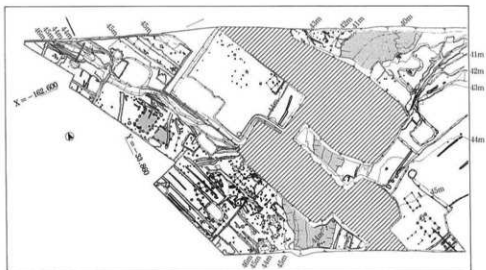
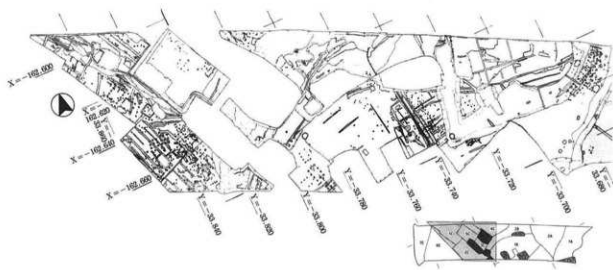
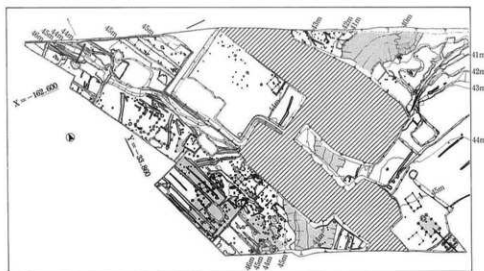


图65 B地区 遺構変遷図



C-1期



C-2期



图66 C地区 遗构变迁图(1)(C-1~C-2期)

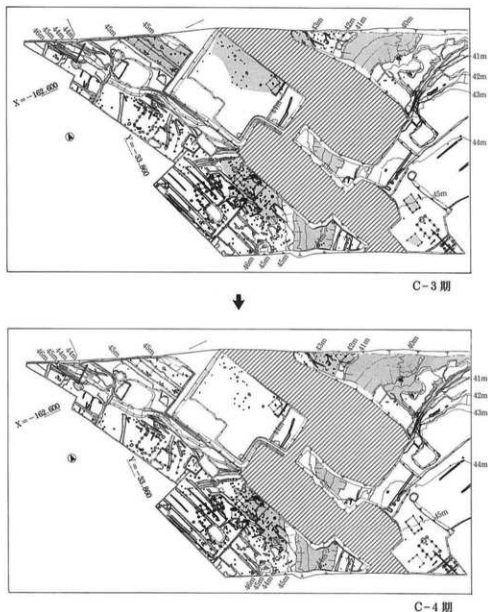
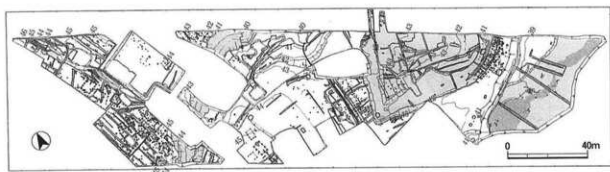


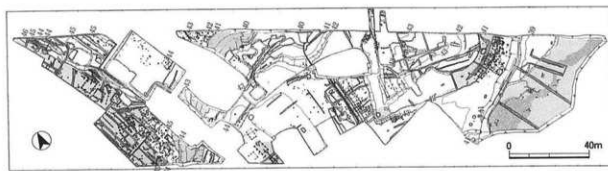
図67 C地区 遺構変遷図(2)(C-3~C-4期)

には同時期の遺構が検出できなかったが、周辺は削平されているため、本来は周辺に遺構が存在していた可能性が高い。この時期は流路580内の井戸657・658が使用されており、流路580の底面が上昇しつつあることがわかる。

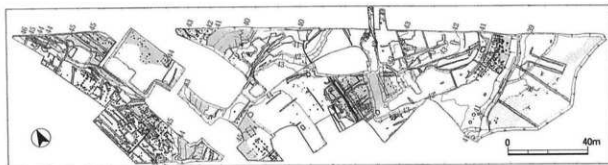
C-4期も方位を意識して、C-3期よりさらにもう一段低い平坦地に掘立柱建物跡を構築している。掘立柱建物跡10がこの時期に属しており、12世紀後頃の時期と考えている。木組み638や溝591はこの時期の遺構であり、流路580の幅が狭くなり、溝589は溝591からの水を排水するために使用していたことは、溝591内の分岐点に凝灰岩を用いてダム状の施設を用いていることから明らかである。流路580の上流に井戸356が構築されている。この井戸356は、C-2~C-3期に遺構が集中していた平坦地にある。しかし、周辺にはこの時期に該当する掘立柱建物跡は検出されておらず、調査区外に存在している可能性がある。



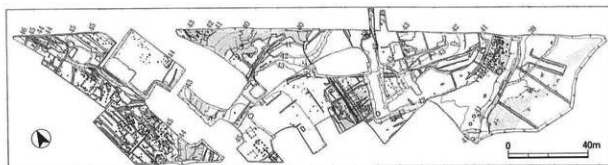
I期



II期



III期



等高線の単位(m)

IV期

図68 駒ヶ谷遺跡遺構変遷図

2. 駒ヶ谷遺跡の遺構の変遷

前章で各地区ごとに遺構の変遷を整理してみた。ここでは、それをもとにして駒ヶ谷遺跡全体の遺構の変遷について述べていくことにする。だが、各地区によって遺構の時期に若干差が生じるため、駒ヶ谷遺跡の時期の変遷を大きな流れで分け、Ⅰ～Ⅳ期の時期区分を設定した(図68)。

Ⅰ期は古墳時代後期を中心とした時期である。この時期以前の遺構は検出されなかったが、流路1237から、磨滅した弥生時代前期の甕片が数点出土しており、上流に同時期の遺構が存在している可能性がある。また流路580の下層から古墳時代の須恵器が数点出土しており、大半が磨滅していない完形品であることから、出土地点の付近で廃棄されたものと考えている。

蔵塚古墳は、6世紀中頃に築造された前方後円墳である。蔵塚古墳の墳丘下面にはそれ以前の遺構が検出されず、墳丘直下から庄内期の壺が出土しているだけであり、古墳築造前にはほとんど人の手が入っていないことがわかる。居住城を想定させる遺構は、C地区の西西部で検出された堅穴住居1棟である。柱穴内からⅤ期の円筒埴輪片が数点出土しており、蔵塚古墳とほぼ同時期の遺構である。

Ⅱ期は、7世紀後頃～8世紀後にあたる、駒ヶ谷遺跡で遺構・遺物が最も集中している時期である。それは、大阪と奈良を結ぶ丹比道(竹内街道)を見下ろす丘陵上に遺跡が存在していることも関係しているであろう。居住城は大きく分けて3ヶ所にわたる。流路580をはさんだ南北の2ヶ所の建物は、時期が下るごとに1mごと標高の低い所に下がっていく特徴をもつ。故に、掘立柱建物跡3～6・8・9と掘立柱建物跡14・15が同時期のものである可能性がある。掘立柱建物跡1・2が地形に規制されているのに対し、他の建物は数回の建て替えはあるものの、いずれも方位を意識して建物を構築している。7世紀後頃に、建物の方向に対する意識の変化がおこっていることがわかる。

7世紀後頃には、蔵塚古墳後円部周濠にすでに遺構が存在している。建物は掘立柱建物跡11しか検出できなかった。だが、同時期の遺構である土坑885が蔵塚古墳前方部周濠内に位置していることから、くびれ部から前方部にかけて削平を受けている外堤上に、掘立柱建物跡を含めたこの時期の遺構が存在していた可能性がある。蔵塚古墳後円部周濠下層、溝679、土器溜まり851などの土器廃棄施設は、蔵塚古墳後円部周濠および外堤上に構築された掘立柱建物跡に伴うものであろう。同様に、蔵塚古墳前方部周濠内に、土坑885および土器溜まり884といった土器廃棄施設が存在しており、蔵塚古墳前方部調査区外にこの時期の建物跡が検出される可能性がある。また距離の離れた遺構間で接合する須恵器が数点あり、これらの遺構が同時期に存在し、分別廃棄を行っていた可能性を示している。

8世紀になってC地区西西部にある井戸424が掘削されるが、掘立柱建物跡3～6・8・9のうちいずれの建物の時期から使用され始めるかは不明である。この井戸424の下層からは奈良三彩小壺を始めとして、木製釣瓶や柄杓などの遺物が数点出土している。中層からは約2,100点の製塩土器片の他、火を受けた凝灰岩製切石といった石製品も出土しており、埋没寸前の上層からは底部に穿孔を行なった土師器が出土している。この井戸の遺物からこの時期の遺跡の性格を推断することはできないが、都と強い結びつきのある施設が存在していた可能性を示すものである。これは、この井戸と同時期に存在する掘立柱建物跡3～6が全て総柱建物であり、全て倉庫の可能性があることも、公的施設の存在を想定させる一因である。

同様に流路1237および土器溜まり851から円面硯、また流路580からは転用硯が数点出土している。このことから付近に識字層が居住していたことがわかり、官衙などの公的施設、あるいは寺院の可能性を示すものである。また、蔵塚古墳周濠下層、溝679、流路1237から漆の付着した土器が出土しているこ

とから、周辺に漆を必要とする施設の存在、または都から駒ヶ谷遺跡へ漆を運ぶ流通経路が存在していたことを示している。他に、流路580から「古厨」の墨書土器などが出土しており、これも遺跡の性格を考える上で重要な資料である。

Ⅲ期は、井戸424が廃絶された9世紀前頃から、10世紀にかけての時期である。居住域は4ヶ所に分かれるが、うち3ヶ所はⅡ期から引き続いて居住域となっているところである。流路580をはさんで南北に存在している2ヶ所の居住域は、Ⅱ期と比較して、1m標高の下がったところを居住域として選んでいる。掘立柱建物跡23・24は、Ⅱ期の掘立柱建物跡3～6・8・9と同一氏族が居住していると思われるが、掘立柱建物跡7・19に関しては、Ⅱ期の建物群とのつながりが考えにくく、別氏族である可能性もある。いずれも周囲が大きく削平されており、同時期の遺構は検出できなかった。また、掘立柱建物跡16・17は掘立柱建物跡14・15と同氏族と考えて良いであろう。蔵塚古墳後円部周濠外堤にも遺構が集中するが、大半のものが掘立柱建物跡12のように外堤に偏っている。流路1237の上面には井戸1191が掘削されるなど、流路の機能を果たさなくなりつつある状況がわかる。

また蔵塚古墳前方部が新たに居住域となっている。掘立柱建物跡13・18・20は最低2回の建て替えを行っているが、区画溝は同じものを使用している。ここが居住域となっているという事実は、その時期にはすでに、①蔵塚古墳前方部の周濠は既に現在の高さまで埋められていた②古墳の意識が欠落しているために、墳丘上に建物を構築することが可能であった、ということを示す。古墳の墳丘盛土が周濠内に堆積していないことから、以前として墳丘は本来の形状を保っていたであろう。だがその地形に規制されることなく、掘立柱建物跡13・18・20は、方位を意識して建物を構築している。

流路580内から「大林宅」と書写された墨書土器や施釉陶器が出土している。Ⅲ期はⅡ期のように公的施設を感じさせる遺物は出土していないが、富裕氏族層がこの付近に居住していたことを示す遺物が出土している。また、流路580の南肩に井戸657・658が構築されるのもこの時期である。

Ⅳ期は12世紀後～13世紀前であり、Ⅲ期との間に時期幅が存在する。居住空間は2ヶ所であり、いずれもⅢ期から居住域となっていた地域である。1つは掘立柱建物跡7・19に続くと考えられる掘立柱建物跡10である。この建物も掘立柱建物跡7・19より標高が下がった地域に構築されている。故に調査区外にもこの時期の建物が残っている可能性は十分ある。

もう1ヶ所は、蔵塚古墳前方部西側で、掘立柱建物跡13・18・20に続く掘立柱建物跡21・22である。建物の規模が小規模になり、区画溝も建物の軸にあわせて再掘削している。この地域ではⅢ期以前の井戸は検出できなかったが、Ⅳ期には井戸1000が構築されている。この時期には、流路1237の上面にある井戸672・678・1187・1189など井戸が多く構築されている。

駒ヶ谷遺跡の遺構変遷は、大きくⅠ～Ⅳ時期に区分され、中でもⅠとⅡ、ⅢとⅣ期の間は空白時期である。だが、空白時期の遺物が全く出土しないわけではなく、周辺に移動していた可能性が高い。今後の調査によって新たな居住域、そして全時期を通じて一般集落とは異なる性格をもつ、駒ヶ谷遺跡の性格を確定することができるだろう。

第2節 井戸424から出土した製塩土器

1. 井戸424と製塩土器

井戸424は今回の調査区の中で南西部にあたる、古代の掘立柱建物跡が集中しているところに位置している。この井戸424は上面で径約4.8m、深さ約8.5mある井戸である。だが、遺物が出土している層は限られており、大きく分けて上層・中層（9層）・下層の3層から出土しているにすぎない。

下層からは、釣瓶に使用した可能性の高い、頸部に縄を巻き付けた土師器甕や須恵器壺などの他、奈良三彩小壺や柿洪塗の柄杓など一般集落ではほとんど出土しない遺物が出土している。また貯蔵具類の出土量に対して、食器類はほとんど出土していない。それに対して上層からは、食器類が多く出土している。その中に、焼成後に底部に3ヶ所穿孔した土師器椀が1点出土している。このような土器は井戸の祭祀に使用される例が存在していることから、今回の場合も井戸を最終的に廃絶する際に、使用したものだと思われる。

製塩土器は、その中でも中層（9層）から大量に出土している。破片数にして、約2,100点出土している。このように大量に廃棄されて出土する例は、平城京や長岡京といった都城遺跡の他ではほとんど見受けられず、地方では官衙遺跡などから大量に出土する例があるだけである。

これらの事項と、ほぼ同時期と考えられる井戸424の下層から出土している土器の多様性は、胸ヶ谷遺跡の性格を窺い知る一資料といえる。第2節では、この製塩土器を分類することによって、製塩土器が大量に出土している他遺跡との比較、そして現在ほとんどわかっていない、消費地と製塩遺跡との関係についての一資料になればと考えている。

2. 分類方法と土器の特徴

まず約2,100点の破片のうち、口縁部の残存しているもの、もしくは2.0cm角以上の体部の残るものを

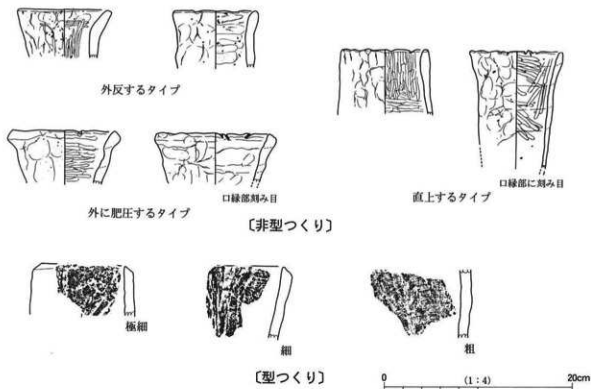


図69 製塩土器分類図

選出した。今回出土した製塩土器は複数地域のもが存在している可能性がある。選出した1,406点を胎土の色調で大きく4系統（白系・黄もしくは橙系・茶系・黒系）に分別した。ただし色調は、製塩土器が火を受けるなどの外的要因で変化していることがあり、今回の分類においても大量の土器片を大別する目安とするのに留まった。次に色調ごとに口縁部と体部を分別し、胎土の硬軟・胎土・内外面の調整（製作技法?）・器壁の厚みといった特徴ごとに分類し、それぞれの個体数と傾向をみた。

以下、各色調ごとに特徴をまとめることにしたい。

(1)白系

白系は破片数にして253点、うち口縁部は141点出土しており、これは総点数の約18%に該当するものである。チャートの細粒を大量に混入しているものが、硬軟を問わず、他の色調のものに比して多く見受けられるが、その他は石英・チャートの角礫もしくは円礫を混入しているものが見られるのみである。硬質なものには、一部外面に火を受けて変色しているものもあるが、軟質なものには火を受けているものは1点も見られない。

内外面の調整は、全て非型作りであり、内面に布目の痕跡を有するものは存在していない。外面はナデ調整を施し、指頭圧痕が明瞭に残る。同様に内面には輪積みした痕跡や、指頭圧痕が明瞭に残るものが大半を占める。その中に数点、縦もしくは横方向に細い棒状の工具痕が残るものがある。これによって、内面が平滑になっているものが多い。また、器壁は全て0.8~1.0cmの厚いものである。

口縁部は、大きく分けて2種類存在している。①外に肥厚したり面をもつもの、もしくは内側に段をもつもの②細くまっすぐに上がるもの、もしくは外反するもの、である。いずれも筒型のもので、白系は①のものが大半を占めている。また、口縁部の1ないし2ヶ所に、口縁部に対して斜めもしくは直交するように刻み目が入るものがある。これは全てのものに入るわけではないが、製塩土器の口縁端部をナデた直後に意図して付けているものもあり、何らかの用途が感じられる。

(2)黄もしくは橙系

黄もしくは橙系（黄系と記述）は破片数にして516点、うち口縁部は161点出土しており、これは総点数の約37%に該当するものである。黄系は非型作りと型作り（内面に布目圧痕をもつもの）があり、胎土が全く異なるのが特徴である。非型作りは332点（うち口縁部は130点）、型作りは184点（うち口縁部は31点）出土している。

非型作りのものは白系同様、硬軟問わず、石英・チャートの角礫もしくは円礫を混入しているものが多く、これらの破片は白系のもと同じ特徴を有しており、生産地が同じである可能性が高い。他に石英・チャートの他にシャモットを有するものも数点出土している。このシャモットは径0.1~0.5cmの範囲に収まる角礫である。また硬質のものに限ると、チャートの細粒を大量に混入しているものや金雲母を若干混入するものが出土している。

内外面の調整は、白系のもと同様に指頭圧痕が明瞭に残るもので、器壁も厚いものが大半を占めている。また口縁部の形態に関しては、①外に肥厚したり面をもつもの②細くまっすぐに上がるもの—といた白系と同じもので筒型のもので以外に、③内面にまげるものが見られる。③の形状については不明瞭であるが、内面のカーブから筒型である可能性が高い。また黄系の製塩土器も、口縁端部に斜め方向に刻み目をもつものが数点出土している。

型作りのものは、全て硬質の胎土をもつもので、布目の幅は肉眼ではわかりにくい極細のもの、幅が0.1~0.3mmにおさまる細かいもの、幅が0.5mm以上ある粗いものの3種類に分けることができる。だが、

布目の幅と胎土の特徴はほとんど関係が見られず、製作時に臨機に応じて布を使用していることがわかる。布目の中には、合わせている部分が見られるものや、上部にひびかれている痕跡が明瞭なものもあり、製作時に型と土器の間にあって、土器とともにひきぬかれていることを示すものであろう。

胎土は、チャート・石英の角礫を混入するもの他、長石の細粒を大量に混入するものが見られる。また、0.1~0.3cmにおさまる金雲母の角礫を混入しているものが多く、この布目を有する製塩土器の特徴の一つともいえよう。器壁は厚いもののみで、口縁部の形態は、全て外側に平滑な面をもつのである。この面は工具を用いて施しているもの以外は、指でおさえているものもある。だが、いずれも外側に面を施すことを意識している。土器の形状は筒型であるが、復元径は、非型作りのものよりも大きい点の特徴といえよう。

(3)茶系

茶系のもは破片数にして521点、うち口縁部は111点出土しており、これは総点数の約37%に該当するものである。茶系も黄系と同様に非型作りと型作りが存在するが、胎土は同じであることから、同地域で2種類製作されている可能性がある。非型作りは451点（うち口縁部は105点）、型作りは70点（うち口縁部は6点）出土しており、非型作りの方が出土数が多い。

非型作りのものは、硬質のものが軟質のものよりもやや多く出土している。硬質のものは、石英やチャートの角・円礫を混入しているものが大半を占めるが、金雲母を大量に混入しているものが多く出土している。この金雲母は0.1~0.3cmの角礫で、他に石英の細粒を混入している。また、金雲母を混入しているものは、器壁が他の胎土をもつ製塩土器に比較して薄いことも特徴といえるであろう。軟質のものも、硬質のものと同様に、石英やチャートの角・円礫を混入しているものが出土量の大半を占めている。また、シャモットを混入しているものも出土している。

内外面の調整に関しては、他の色調を呈する製塩土器と同様、内面に粘土紐の輪積み痕や指頭圧痕が明瞭に残るもの他に、棒状の工具痕が残るものもある。だが内面を平滑にさせているものが大半を占め、輪積み痕が明瞭なものは少ない。口縁部の形態に関しても同様で、外側に肥厚させるものや細くまっすぐに立ち上がるものが多い。また内側に若干内傾するものもある。

型作りのものは、全て硬質の胎土をもち、布目の細かさは黄系同様に3種類存在している。器壁は全て厚いものばかりである。また布と胎土の特徴は関係が見られない。

胎土は、石英やチャートの角・円礫を混入しているものが出土量の大半を占めている。また、0.5cm角以上の石英を混入するものも目立って含まれる。金雲母を大量に混入しているものも多く出土しており、これも非型作りのものと同様、0.1~0.3cmの角礫を混入しているものである。口縁部の形状は、出土数が少ないため確実ではないが、全て外側に平滑な面をもつものである。板状の工具を使用して丁寧に面を施している。土器は全て筒型のものであり、底部が1点出土している。今回井戸424から出土した底部はこの1点のみで、井戸の性格を考える上でも興味深い事実である。

(4)黒系

黒系のもは破片数にして116点、うち口縁部は32点出土しており、これは総点数の約8%に該当するものである。非型作りのものと型作りのものが出土しているが、型作りの土器の内面は他の型作りのものと比べて、非常に磨耗しているのが特徴である。この磨耗していることに加えて、大半のものが外面は黒色で内面は灰色を呈することから、白系の製塩土器が二次的に焼成を受けて黒色を呈している可能性が高い。だが今回は、二次的に焼成を受けていない製塩土器が多く、別系統の色調をもつ製塩土器

として分類を行った。

非型つくりのものは、外面もしくは口縁部のみ黒色を呈しているものが大半を占めている。また断面が非常に黒くなっているのも特徴である。硬軟のいずれも出土しているが、硬質のものは白系もしくは茶系に分類可能なもので、チャートもしくは石英の角・円礫を混入しているものが大半を占める。内外面の調整は、磨耗しているために不明瞭なものが多いが、棒状工具の痕跡を残すものも数点出土している。器壁は厚いものしか出土していない。また軟質のものは、茶系もしくは黄系に分類できるものである。チャートや石英を混入しているものや、金雲母を若干混入しているものが出土している。器壁は厚いものが多いが、中には薄いタイプのものも数点存在している。

口縁部の形態は、硬質のものと軟質のものは若干異なる。硬質のものは外に肥厚させたものが大半を占めており、それに対して軟質のものは、細くまっすぐにあがる形状のものがほとんどである。また口縁端部に斜め方向に刻み目をもつものも数点出土している。

型作りのものは、二次的に黒色になったと思われる製塩土器のほかに、明らかに当初から黒色の胎土であったと考えられるものの2タイプ出土している。二次的に黒色になったと考えられるものは、黄系もしくは茶系の胎土に分類可能なもので、軟質のものが圧倒的に多い。使用している布目の幅は0.1～0.3mm内におさまる細かいものから、0.5mm以上ある粗いものまでである。胎土も他の色系の製塩土器と同様に、チャート・石英の角礫もしくは円礫を混入しているものや、金雲母を大量に混入するものなどが出土している。それに対して、明らかに黒色の胎土を使用していると考えられる製塩土器は、石英の細粒やチャートを大量に混入するものと、石英の粗粒を若干混入しているものがある。使用している布目の幅が、肉眼ではわかりにくいものと0.1～0.3mm内におさまる細かいものを使用していることが確認できた。黒系でかつ型作りの製塩土器の口縁部は出土点数が少ないが、いずれも外側に面をもつものが多く、細くまっすぐにあがる形状のものも若干含まれている。

3. 井戸424から出土している製塩土器の特徴

以上で井戸424から出土している製塩土器の特徴を取り上げたが、ここでもう一度整理を行うことにしたい。

まず胎土の色調であるが、圧倒的に黄系と茶系が多く、白および黒系の出土量は約27%にしか満たない。黄系と茶系は明確に区別することが不可能であることや、井戸内の水分を多く含んでいるため胎土が変質していることなどを加えて考えると、黄系と茶系はほとんど同じ胎土である可能性が高い。それは胎土の特徴にも現れており、いずれもチャート・石英の角礫もしくは円礫を混入しているものや、金雲母を大量に混入しているものが多く出土している。逆に白系は、この2系統の製塩土器とは異なるものである。それは型作りのものがないことや、金雲母を混入しているものが1点も出土していないことから明らかである。このように胎土の色調および特徴から考慮するのであれば、2地域で製作された製塩土器および塩が運ばれているといえるだろう。

口縁部の形態ではどうであろうか。非型つくりのものは大きくみて①外に肥厚したり面をもつもの②細くまっすぐにあがるもの、の2種類に区別することができる。これは色調の区別なくほとんどの製塩土器がこの中に入ることがわかる。型作りのものは、口縁部外面に面を有するのが特徴の一つである。この面は工具を用いて丁寧に仕上げているものもあれば、ユビオサエでかろうじて面を表現しているものも含まれる。

また口縁部端部の1～2ヶ所で口縁部に対して斜めもしくは直交して刻み目の入るものがある。口縁

部を整形してから刻み目をいれているものも存在していることから、この刻み目は製塩土器の製作時に故意につけられている可能性がある。しかし全ての口縁部で観察できるものではなく、またその刻み目も深いものから浅いものまであり、全く規格性がないことから、製塩土器の機能を考える上ではさほど重要なものではないであろう。

型作りに使用されている布は、粗・細・極細の3種類が確認されている。使用している布と胎土の関係はほとんどなく、使用している布に別布が重なっている状況などは、白系をのぞいてどの胎土の製塩土器の内面でも観察できる。

また、今回出土した製塩土器の形状も全て筒型と考えられ、出土している部位は口縁部もしくは体部のみで、底部は1点しか出土していない。この事実も踏まえて次章では今回出土した製塩土器から考えられる消費地と生産地の関係について述べることにしたい。

4. 消費地と生産地の関係—今後の課題—

(1)生産地の製塩土器

塩は人間が生活していくうえで非常に貴重なものである。故に塩を自然界から摂取し、日々の生活に取り入れる方法はかなり早い時期から知られている。その結果、海沿いの生産遺跡はもとより、全国各地の内陸にある集落—消費遺跡から製塩土器が多く出土している。また律令期になると、調として海沿いの国から塩が都に運び込まれるようになり、塩を生産していた地域が文献および木簡などから推定できるようになる。この塩を生産するのに使用した製塩土器は、各地域でその形状や胎土、製作技法などが異なっている。ここで、今回駒ヶ谷遺跡で出土している大量の製塩土器と比較して、酷似している点を取り上げてみることにしたい。

まず形状をみてみたい。駒ヶ谷遺跡からは完形品は出土していないが、約50%復元可能であったものは全て筒型であり、今回出土したものは全て筒型のもと考えてよいであろう。能登地域に特有な底が細くなるものや、瀬戸内沿岸にみられる椀状のもの、もしくは脚柱部がつくものは出土していない。このような筒型の製塩土器は主に東南や紀伊半島¹⁾、北九州、長門付近でよく出土しているものである²⁾。同様のことは口縁部の形状についてもいえる。外に肥厚させて面をもたせるものは、紀伊半島で多く出土している形状である。また型作りのものによく見られる、外側に平滑な面をもたせるのは、北九州で多く出土しているものである。また今回出土した製塩土器に見られるような、口縁部に斜めもしくは直交した刻み目を有するものであるが、これは生産遺跡で出土する製塩土器に多く見られる特徴である。

次に色調・胎土であるが、全国的にみて色調は茶系もしくは黄系のものが多い。これに対して、紀伊半島の製塩土器は白系・黄系のものが多い。胎土は駒ヶ谷遺跡で出土したものと同様に、チャートや石英の角礫もしくは円礫を混入しているものが多い。この胎土が全国的に手に入りやすいものであることは確実であろう。また、茶系の製塩土器に多く混入している金雲母であるが、これは香川の製塩土器に多く混入していることが知られている。だが、明らかに香川のものとは異なり、駒ヶ谷遺跡の製塩土器の方が粒子が大きく、多量に混入している。

布を内面に敷いて製塩土器を整形する型作りであるが、この方法で製塩土器を製作しているものは少なく、九州から長門地域の製塩土器にその痕跡が認められ、この地域の製塩土器の特徴となっている。他の地域のもとは非型作りであり、正確な容量を詰めることができたのかは非常に疑わしい。

以上のように見てみると、今回出土した製塩土器は、2ヶ所以上の製塩遺跡からのものが来ていると推定できる。だが全く同じ製塩土器ということはいえず、消費地で出土している製塩土器と符合させて

いくことが今後の課題の一つといえるであろう。

(2)消費地の製塩土器

律令期を含めて、製塩土器は内陸部の住居址から数点出土することが多い。これは塩は土器に入って内陸部にまでもたらされていたことを示している。今回の駒ヶ谷遺跡のように、1遺構から大量に製塩土器が出土することは少なく、今まで約1,000点以上出土している遺跡の性格は、都城が官衙遺跡と考えられている。ここでは平城京と長岡京で出土する製塩土器に絞って、駒ヶ谷遺跡の製塩土器との関係について考えたい。

平城京内から出土している製塩土器と駒ヶ谷遺跡の製塩土器が大きく異なる点は、平城京内で出土する製塩土器は、明らかに器形が異なり他地域と考えられるものが運ばれてきているという点である。全国各地から租税として運び込まれているために、器形の異なるものが大量に出土することは当然であろう。故に色調、胎土ともに駒ヶ谷遺跡で出土する製塩土器とは異なるものが多い。また平城京で出土する製塩土器は完形のものが多い。本来は完形のまま運びこまれ、固形塩であるために塩を使用する際には、土器を破砕していることがわかる。駒ヶ谷遺跡からは底部が1点しか出土していないことを考えると、破砕した後底部のみ別の場所に廃棄しているか、体部から口縁部にかけてを破砕して、下半分のみを別の場所に移動させている可能性がある。

長岡京から出土している製塩土器は、駒ヶ谷遺跡の製塩土器と酷似した色調、胎土のものが出土している。長岡京からも筒型の形態をもつ製塩土器が出土しているが、その出土する割合が駒ヶ谷遺跡からの出土率よりも低い。泉南～紀伊半島にかけて出土する製塩土器が、駒ヶ谷遺跡で多く出土するのは、消費地と生産地の遠近の差もあるが、塩の流通システムの違い、もしくは塩の優劣があるのかもしれない。口縁部は外に肥厚させるものが出土しているが、これは大阪湾周辺の製塩土器の特徴と考えられている。この口縁部をもつ製塩土器も、平城京内や長岡京内では出土する割合が小さくなる。長岡京でも長石や石英を混入するものが多く出土しており、金雲母を大量に混入しているものも出土している。金雲母を大量に混入する製塩土器を用いる地域は不明であるが、数ヶ所の消費地に運ばれているということは、かなり大きな生産地である可能性が高い。

現状では、製塩土器の研究は、生産地と消費地が別々に行なわれている状況であることは否めない。それはお互いの遺跡の製塩土器が比較できない点にある。これは塩を生産するための土器と、塩を運搬するための土器が異なるという可能性を示すものであろう。各地の製塩土器編年も確立しつつあり、今後、消費地で出土する製塩土器を生産地域別に見ることによって、当時の流通経路や塩の生産地の優劣を知ることが可能になるといえる。

第3節 井戸424下層出土の釣瓶土器について

1. 井戸424から出土している土器

井戸424は古代の掘立柱建物集中しているところに位置しているもので、上面で径約4.8m、深さ約8.5mある井戸である。深さのある井戸であるが、遺物の出土する層は大きく分けて上・中・下の3層に区分することができる。機能していた時期は大きく分けて、上層と中・下層から出土する遺物からはほぼ2時期と考えられる。

上層は土師器・須恵器などが出土している(図56)。土師器の杯は暗文を有さず、外面に指頭圧痕が明瞭に残るものが出土量の大半を占める。土師器の碗の底部に3ヶ所穿孔を行なっているものがある。この土器は焼成後穿孔を行なっていることがわかる。今までの調査例で、土器に穿孔を行なってから井戸に廃棄している例がある。井戸を最終的に埋める際の祭祀と考えられており、今回出土している土師器碗も、井戸424を最終的に埋めている層から出土していることから、祭祀に伴うものと思われる。

中層からは主に製塩土器が集中して出土している(図57)。この製塩土器に関しては第2節で述べたが、複数地域からの塩が運び込まれていることが確認できた。都城・官衙遺跡を除いて、1,000点以上の製塩土器が出土することはめずらしく、当時の胸ヶ谷遺跡の性格を考える上でも興味深い。

下層からは、釣瓶の土器以外に奈良三彩の小壺が出土している(図60)。本来であれば蓋と身が1セットになっているものであるが、今回は身しか出土しなかった。また内容物についても不明である。奈良三彩の小壺は出土例が少なく、都城・官衙遺跡を始めとして、寺院祭祀遺跡などの特別な遺跡から出土することが多い。

釣瓶として確認された土器は、須恵器と土師器である(図58~60)。一般的に当時使用されていた土器と頸部に縄の痕跡がある以外は、異なる点はみられない。いずれも部分的にしか縄は残存していなかったが、頸部に巻き付けた縄を上にもちあげている状況がわかるものが数点出土している。平京城で土師器の壺の頸部に蔓を巻いて、釣瓶にしているものが出土しており³⁾、材の差こそあれ、今回出土した土器群も同じような使われ方をしていたものと推定できる。

2. 釣瓶土器の計測方法

井戸424は現地盤から約8.5mの深さがあり、水は上方まで存在していたとは考えにくい。土器を釣瓶として使用しても、口縁部まで満杯に水を汲むことは不可能であったろう。また水に入る角度によって、汲むことができる容量も違ってきたと思われる。今回釣瓶として使用している土師器、および須恵器が数十点あるが、いずれも器種にまとまりがあり、どの土器でも釣瓶として使用していたわけではないということがわかる。また器種を選定すると同時に、縄を巻き付ける部位が数ヶ所ある場合は、最も水を汲める部分に縄を巻いたであろう。

以上の点を踏まえて、今回出土した釣瓶にどれだけの水が入るか、そしてどの器種が釣瓶としての使用価値が高いかを実験した。実験では、それぞれの器種に対して以下の計測を行った。

- ①重量
- ②普通に置いた状態で入れた、口縁部までの水の容量
- ③頸部に縄を巻き付けた状態で入れた最大容量
- ④普通に置いた状態で入れた、頸部までの水の容量

その他に、石膏復元の有無、頸部に縄が明瞭に残っていたものに関しては、内部の土を取り去っていな

いので、その土の有無などを併せてチェックした。結果は以下の通りである（表1）

3. 釣瓶として使用している土師器

今回出土している土師器は、主に甕が出土している。しかも、いわゆる「河内型」といわれる南河内特有の形態をもつものである。この甕は、球状の体部に緩やかに外反する口縁部が付く。体部外面は指頭丘痕を明瞭に残し、内面はケズリ調整を施している。粘土を積み上げることによって器形を作りあげが、丁寧に整形しないこともあり、痕跡が明瞭に残っている場合が多い。

当然ながら須恵器と比較すると重量は軽いので、釣瓶に水が入ってからでも上げやすく、持ち運びもしやすいと思われる。また在地の土器を使用していることから、土器を破損するようなことがあっても、代替品はすぐに入手することが可能であっただろう。今回出土している土師器は、石膏復元されているにもかかわらず、大半のものが1.0kgを下回る数値しか出なかった。

次に容量を見てみたい。普通に置いた状態で水を入れた容量を比較すると、体部が球状であり、かつ頸部から口縁部までが短いため、水を入れた状態ではほとんど差が見られない。

それに対して頸部に紐を巻き付けて水を汲み上げた際の容量は、全容量の1/3にしか満たない。この土器は、口縁部が開いているために水に対する抵抗が大きく、真上から土器を落として水中に投下することは困難である。故に土器の中に満杯に水を入れることは不可能であった。また最初の段階で土器が空の状態では水を入れることはできず、水を汲む前に釣瓶に水を入れるいわゆる「呼び水」をしなくては

表1 井戸424下層出土釣瓶 容量計測表

図版 NO.	土器 NO.	器種	重量(g)	全容量			石膏・土砂の有無
				口縁部まで(cc)	頸部まきつけ(cc)	頸部まで(cc)	
58	3	土師器・甕	530	1520	420	1220	○
58	4	土師器・甕	540	1760	340	1375	○
58	5	土師器・甕	625	1950	520	1650	○
58	6	土師器・甕	975	2550	880	2200	
58	7	土師器・甕	1130	3630	1200	3055	○
58	10	土師器・甕	500	1355	290	1000	○
58	11	土師器・甕	580	1540	350	1275	○
58	12	土師器・甕	610	2115	315	1860	
58	13	土師器・甕	680	2015	755	1630	○
58	14	土師器・甕	760	2150	580	1720	○
59	1	土師器・甕	460	1510	310	1080	○
59	2	土師器・甕	585	1785	550	1455	○
59	3	土師器・甕	1220	3995	1665	3820	
59	4	須恵器・壺L	1440	1835	1835	1835	△
59	5	須恵器・壺L	1280	1465	1465	1465	
59	6	須恵器・壺L	1200	1810	1810	1715	○
59	7	須恵器・壺L	1130	2080	2080	2055	△
59	8	須恵器・壺L	1175	1800	1795	1740	
59	9	須恵器・壺L	940	1440	1440	1395	
59	10	須恵器・壺L	1180	1665	1665	1620	△
59	11	須恵器・壺L	1335	1840	1840	1765	
59	12	須恵器・壺L	1250	3050	3050	3010	
60	1	須恵器・壺	1135	2340	—	2340	
60	2	須恵器・壺Q	1140	2215	870	1425	○
60	3	須恵器・壺Q	850	2360	985	1435	○
60	4	須恵器・壺Q	960	2160	830	1710	○
60	8	須恵器・平瓶	1010	1055	910	935	○
60	9	須恵器・平瓶	1275	1380	1140	1315	○
60	10	須恵器・平瓶	1550	1425	1290	1330	△
60	11	須恵器・横瓶	2400	3900	3895	3805	○

いけないこともわかった。しかし、「呼び水」を行っても水が満杯になることはなく、高さのある場所から釣瓶を落とすとしても、球状の体部や広がった口縁部に邪魔されて、完全に水を汲み上げることはできない。

今回出土した壺には、内外面に煤が付着しているものが数点出土している。大半のものが未使用のものを釣瓶にしているが、このように数回壺として機能していたものを釣瓶にしていることがわかる。使いやすさ、そして手に入りやすさも含めて、釣瓶として使用する土師器をこの器種に限定していたものであろうか。

4. 釣瓶として使用している須恵器

土師器が河内型壺しか使用していないのに対して、須恵器は壺L・壺Q・平瓶・横瓶といった器種を釣瓶として使用していることがわかった。

その中でも壺Lが最も多く出土している。土器内に土が残っているものがあり重量にばらつきが見られるものの、土師器壺と比較するとその重量は約2倍にもなる。次に容量であるが、正位置で測った場合と、頸部に紐を巻き付けて水を汲み上げた際の容量は、ほとんど同じであることがわかる。また正位置の場合、口縁部までの容量と頸部までの容量もほとんど変わらない。壺Lの体部の最大径は中から下の方にあり、かつ丸みを帯びているためほとんど水の抵抗を受けることのない形状をしている。そして上から水に落とした際に、その最大径を越えるとほとんど抵抗なく口縁部まで水中に沈むことがわかった。また頸部から口縁部までも長さがあまりなく、口縁部にかけて若干開き気味になっていることから、頸部の紐も外れにくい。もう一つの特徴として、口縁部を打ち欠いている痕跡が見られ、端部まで残存しているものはなかった。打ち欠いて破断面を作ることで頸部から上にのびる紐を固定しようとする意図があったのかもしれない。

対して壺Qは器壁が厚くないこともあり、石膏の入っている分を含めても重量は1.0kg前後しかなかった。正位置での容量を見ると、平均して最も容量が多いことがわかる。だが頸部に紐を巻き付けた場合、その容量が全容量の1/3にしか満たないものになる。壺Qの体部の最大径は中から上の方にあり、時期の古いものほど明瞭な稜線をもつ、いわゆる「算盤玉」型のものである。また頸部から口縁部にかけて外反するため、水の抵抗をかなり受けることになる。そのために、これだけの容量差があるのであろう。また、壺Qも壺Lと同様に口縁部を打ち欠いている痕跡が見られ、頸部から上にのびる紐を固定しようとする意図があったことを想定させる。

今回3点出土している平瓶は、把手のあるものとなしもの存在している。一般に「平瓶」として使用する場合は、この把手は必要なのであろう。だが今回出土したものは、頸部に紐を巻き付けている痕跡があった。実験でも同様に、頸部に紐を巻き付けている。

重量は、他の須恵器の釣瓶と同じようなものである。正位置での容量は、壺L・壺Qと比較すると少なく、平瓶の場合は口縁部までの容量と、頸部までの容量はほとんど変わらない。だが頸部に紐を巻いた状態で計測した値は、正位置の容量とほとんど大差はないことがわかる。頸部に紐を巻き付けて上げた場合、約90°傾いて小判型の体部が下にくることになる。その状態ではほとんど水の抵抗を受ける部分がなく、土器の重みも手伝って口縁部まで水中に沈むことになるであろう。逆に把手に紐を巻き付けた場合では、体部が平たいために水の抵抗を受け、逆に水面に浮いてしまった。また平瓶も壺類と同様に、口縁部を打ち欠いているものがほとんどであった。

他に特殊な器形として、横瓶が1点だけ出土している。横瓶は表からもわかるように、重量は他の器

種の約2倍あった。重量だけで考えると、軽くて使いやすさを考えなくてはいけない釣瓶には不適合ということになる。だが容量を見ると、正位置での容量と、頸部に紐を巻き付けた状態で水を汲み上げた時の容量はほとんど違いがなく、釣瓶として使用した際の容量は、他の土器を使用した時と比べて大きい。体部が筒型になっているため水の抵抗をかなり受けるようにも思えるが、重量があるためにほとんど抵抗なく口縁部まで水中に沈むようである。横瓶の口縁部は、完全に残っていた。

5. まとめ

以上で、今回井戸424の下層から出土した釣瓶と、その容量計測値について述べた。またこの井戸の同じ層から木製の釣瓶も出土している(図62-7)。この釣瓶は上に持ち手がつき、底に穴を開けて紐もしくは鉤をかける形態のものである。木製の釣瓶は1点しか出土しておらず、やはり常時釣瓶として使用されていたのは、土器を転用した釣瓶であろう。釣瓶として使用する土器もほぼ限定されていることは明らかであり、それぞれ釣瓶としての良い点と悪い点が混在している。

井戸から出土しているこれらの土器は、他の遺跡の井戸と比較するとその器種構成に関しても酷似しているものが多い。今後調査を行っていく上で、再度その井戸から出土する土器の器種構成などを検討していくことが重要であるといえよう。

註

- 1) 國乗和雄他 1982 「田山遺跡」大阪文化財センター
- 2) 横山浩一・山崎純男 1982 「海の中道遺跡」『福岡市埋蔵文化財調査報告』87
- 3) 奈良国立文化財研究所 1985 「平城京発掘調査報告」Ⅳ

第8章 総括

1. 飛鳥～奈良時代の駒ヶ谷遺跡とその後

(1)立地

第2章でも先述しているが、駒ヶ谷遺跡の位置する羽曳野市飛鳥・大黒は、大阪府を南北に流れる石川の右岸にあたり、しかも石川の東にそって南北方向にのびる大黒丘陵の東麓にあたる。またその大黒丘陵と二上山西麓に連なる鉢伏山を区切って北流する飛鳥川の左岸にも位置している。この飛鳥川沿いには、氾濫低地が形成されており、駒ヶ谷遺跡は、大黒丘陵と飛鳥川に挟まれた下位段丘上に位置していることにもなる。この大黒丘陵は一樣に平坦ではなく、飛鳥川へと流れ込む開析谷によって細かく分断されている。

駒ヶ谷遺跡はこのように平坦面が少なく、かつ開析谷の多く見られる地形の中でも、最も緩斜面で平坦面を多くとれる所に位置している。また、飛鳥川の氾濫や洪水などの影響を受けにくい高所にあり、飛鳥川とそれに平行してはる丹比道を眼下に見下ろす所に位置している。加えて鉢伏山を前に大黒丘陵を背にしていることから、石川以西とは隔絶した閉鎖的な空間に位置していることになる。

(2)飛鳥～奈良時代の遺構

今回検出された掘立柱建物跡のうち、倉庫と考えられる総柱建物跡は8世紀前～中に集中しており、ほとんどの建物は方位を意識しているが、互いに軸を揃えておらず、同時期に存続していなかった可能性がある。また全ての建物の柱穴は重複しているものではなく、焼失した痕跡など見受けられなかった。総柱建物跡の平面規模はいずれも15㎡を越えないもので、一般的に郡衙の正倉が30㎡を越えるものが多いことを考えると小規模の倉庫群になり¹⁾、郡衙の倉庫である可能性は低い。

井戸は数基検出されているが、8世紀前～中頃に該当するものは井戸424しか存在していない。この井戸は径が約4.8m、深さが約8.5mと大規模なものである。井戸は集落と同様に郡衙でも検出されるが、中でも館や厨家においては、井戸はその施設の機能上必要不可欠なものとされ、規模も含めてかなり重要視されるものとなる。

駒ヶ谷遺跡には古墳時代後期まで人の手が入っておらず、蔵塚古墳の築造をもって開発された地域といっても過言ではない。また蔵塚古墳の築造は6世紀中頃と考えられるが、7世紀後～8世紀前以降に掘立柱建物群が構築されるまでは、周辺も含めて居住域になっていた痕跡が見られない。また掘立柱建物を構築する際に蔵塚古墳の周濠を埋め、外堤上に建物を構築しているのが見受けられる。しかし古墳の墳丘を破壊することはなく、周濠を埋めた後に再度墳丘の縁にそって区画溝を設けるなど、以前として古墳として意識していたこともわかる。

このように古墳の墳丘、もしくは墓域を侵して居住空間を確保する理由は2つあげられる。1つは平城京の造成の際に行った市庭古墳を始めとする古墳の削平のように、都城一政治を行う場を造成するために古墳を破壊する場合である。同様に官衙施設を造成するために、古墳を破壊することがあったかもしれない。もう1つは、蔵塚古墳を築造した氏族とは別の氏族が新たに居住した場合である。この場合は、蔵塚古墳や飛鳥千塚古墳群を築造したのが渡来系氏族である飛鳥戸造氏とするならば²⁾、7世紀後～8世紀前頃にその居住域の変動に伴って、新勢力が墓域を侵している可能性もある。また居住域の確保のためにやむなく墓域を侵したことも考えられるが、駒ヶ谷遺跡は居住域には適した場所とはいえず、その可能性は低い。

(3)飛鳥～奈良時代の遺物

遺物の中でも特徴のあるものをとりあげてみたい。井戸424の下層からは奈良三彩小壺が、中層からは凝灰岩切石や製塩土器が出土している。奈良三彩小壺(図60-7)は日本全国で86遺跡からの出土が確認されており(大阪府内では6例³⁾、主として都城、官衙、寺院および祭祀遺跡からの出土例が大半を占めている。

凝灰岩切石(図61-4)は丁寧な加工を行っている大型のもので、1面は欠損しているため形状は不明であるが、3面に大量の煤が付着しており、長時間火に接していたことがわかる。また残る2面は全く煤が付着していないため、構造物の一部であった可能性がある。製塩土器(図57)は破片数にして約2,100点出土しており、その生産地も泉南～紀伊半島のものの他に、内面に布目瓦痕をもつ長門・北九州地域のもが含まれているなど、多地域の製塩土器がこの地で消費されている。このような製塩土器の数量と組成は、平城京および長岡京を始めとする都城のものと酷似しており⁴⁾、駒ヶ谷遺跡の性格を考慮する上でも重要な遺物の一つである。

流路1237(図24-33～37)、土器溜まり851(図23-5)から円面硯が、流路580(図46-21・22)からは転用硯が出土している。円面硯はいずれも精巧なものであり、中には中空円面硯(図23-5)も1点含まれている。またいずれもほとんど磨滅しておらず、至近から廃棄されたものであることは明らかである。このような硯の出土は、周辺に識字層の存在を示すものであり、転用硯よりも円面硯の出土量が多い点は、駒ヶ谷遺跡は直接円面硯が運び込まれる環境にあったことを物語っている。

墨書土器は、井戸424(図56-20)、流路580(図46-3・6・9・13)から数点出土している。流路580から出土した墨書土器は磨滅しておらず、至近から廃棄されたものであろう。文字もしくは記号が記されているが、判読できたものは「古厨」の1点だけであった。「厨」の文字は「厨家」を示すものであり、駒ヶ谷遺跡もしくはその周辺に「厨家」が存在していた可能性がある。また「古」は今まで出土している墨書土器の例から地名である可能性が高い。この点については後述することにした。

他には蔵塚古墳後円部周濠下層から、漆付着土器が数点出土している(図26)。いずれも都からの一次移動に使用された土器ではなく、皿Aなど二次的に移して使用した土器である。駒ヶ谷遺跡で、しかも蔵塚古墳後円部周濠で漆を使用していたことが想定できる。また、都からの一次移動に使用した土器はあまり出土していない。

蔵塚古墳後円部周濠および溝679、土器溜まり851といったいわゆる廃棄遺構から出土する土器は、いわゆる南河内だけではなく、都城の土器と同じような様相を呈するものが多い。また、一般に出土率の高い煮沸・貯蔵用の土器が少ないことも特徴の一つといえる。

石製品の大半は火を受けているが、構造物の一部であったことを示すものか、全く火を受けていないものも出土している。加工された石製品は、都城や官衙、寺院から多く出土している。大半の石製品が火を受けて、かつ大量に煤が付着していることから、構造物が火災にあい、最終的にこの地に廃棄された可能性と、常時火を受けるような場所に置かれていたものが廃棄された可能性が考えられる。

(4)飛鳥～奈良時代の駒ヶ谷遺跡

前述したような遺構および遺物から、飛鳥～奈良時代の駒ヶ谷遺跡の性格を考えてみたい。

立地的に見ると、この地域は周辺とは完全に隔絶した空間であり、現在も溜め池やブドウ畑が多いことからわかるように、水はけが非常に悪く水田耕作に適していない。このような点を考えると、集落を営むにはあまり適していない地域であることがわかる。しかし、古代の官道である丹比道とそれに並

行して流れる飛鳥川を眼下に望むような高所に立地することによって、下を通過する人間を意識している可能性がある。また、丹比道に沿って古代の寺院が構築されていることから、街道沿いには寺院もしくはそれと同等の意味を持つ公的な施設が置かれていた可能性が高い。

今回の調査で検出された掘立柱建物跡は、竪柱建物が大半を占めており、倉庫群が集中しているものと考えられる。遺物は細片であるが、ほぼ8世紀前～中頃に集中している。だがこれらの建物群は整然と並んでおらず、平面規模も15㎡以下と小さいことから、郡衙の正倉とするのは難しい。しかし、今回の調査地より西側の大黒丘陵麓に平坦面が続いており、掘立柱建物群が構築されている可能性がある。また最も西側の地区で検出された井戸424は、この竪柱建物群と関連するものである。かつこの井戸424の規模は、当時の一般的な井戸の中でも一際群を抜いたものであり、この場所に一般集落が存在していたとは考えにくい。

また築造されてから1世紀以上経っているとはいえ、古墳としての意識のあるうちに、藏塚古墳後円部外堤に掘立柱建物を構築している。中世以降は別として、古墳の墓域を侵すことは一般的にあまりなされず、中央からの力が関係している可能性が高い。いずれにしても遺構から考えられる駒ヶ谷遺跡の性格は、一般集落とは異なる性格が考えられる。

井戸424の中層もしくは下層から遺跡の性格を表す遺物が出土している。中層から出土している大量の製塩土器は、駒ヶ谷遺跡で大量の塩を消費していたことを示し、多地域の製塩土器がほぼ同比率で出土していることは、その地域からの製塩土器を供給する流通経路が存在していたことを示している。都城から出土する製塩土器とはほぼ同種類のものが出土しているという点も、看過できない事実である。塩を大量に消費する公的な施設といえ、まず思い浮かぶのが「厨家」であろう。

下層から出土した奈良三彩小壺は、全国で86遺跡からの出土が確認されている。その中でも都城、官衙、寺院および祭祀遺跡といった遺跡から出しているものが多い。その点から考えると、官衙もしくは寺院といった公的な施設があった可能性の高いものとなり、駒ヶ谷遺跡を一般集落とは異なる性格をもつと考える一要因となりうる。

流路580から出土している「古厨」墨書土器であるが、一般的に施設名の前に地名を冠することから考えると、「古」の文字は「古市郡」を示していると考えのが妥当であろう。しかし駒ヶ谷遺跡の在している郡は「安宿郡」にあたり、「古市郡」の東隣の郡になる。隣郡名の墨書土器が出土する例は、静岡県側の志太郡衙とされている御市ヶ谷遺跡にあり、これは饗宴などを行う際に食器類を隣郡から持ってきたためとしている⁵¹。また「料理をする台所」と「饗宴を行う場」が異なる可能性もある。遺構の状況などを考慮すると「厨家」の可能性は低くなり、ただ「饗宴を行う場」として使用された施設であった可能性がある。

駒ヶ谷遺跡は丹比道でいに接していることや、大和との国境に位置していることから、「駅家」といった交通路に関する施設である可能性もある。また、郡司が国司などの役人を国境まで送り迎えを行うことから、その際に饗宴を行うための施設であった可能性もある。大量に廃棄された土器群も、消費された土器量に起因する可能性が大きい。だが今回の調査では、一般集落とは異なる公的施設—郡衙の出先機関—として駒ヶ谷遺跡を位置づけることができるにすぎない。いずれにしても今回検出した掘立柱建物跡の大半が倉庫と考えられるため、今後の調査結果によって、駒ヶ谷遺跡の性格を確定させることが可能になるであろう。

(5)平安時代以降の駒ヶ谷遺跡

8世紀代と同様に9世紀以降も掘立柱建物跡が検出されているが、総柱建物はほとんど検出されていない。また8世紀代に建物が存在していた場所に引き続き構築するのではなく、時期を追うごとに、居住域の標高が下がっていくのも特徴の一つといえるであろう。その中でも蔵塚古墳前方部外堤上に構築されている建物群の平面規模は、いずれも40㎡前後のものであり、軸を揃えて2棟以上構築されているのが確認できる。井戸は蔵塚古墳後円部外堤に数基あるのみで、前方部では1基も検出されていない。蔵塚古墳墳丘を挟んで井戸を利用していたのか、居住域より北西部にあたる流路580付近の井戸を使用していたかが不明である。

この時期に該当する遺物に、流路580から出土している「大林宅」墨書土器がある。「宅」は私的な居宅を示すとされ、その前の文字は人名もしくは地名を示す場合が多い。「大林」は駒ヶ谷遺跡周辺の字に残っておらず、地名を示すものではない可能性がある。また、9世紀初に完成した『新撰姓氏録』にも「大林」という氏族は見いだせず、氏族名を示すものであるかも不明である。だがいずれにしてもこの墨書土器は、蔵塚古墳前方部外堤上に居を構えていた人物と関係があるものと思われ、建物の平面規模も最も大きいことから、文献には記されなかった在地の有力氏族名の可能性が高い。

この地域が、次に居住域となるのは12世紀以降である。蔵塚古墳前方部外堤上に引き続き掘立柱建物を構築しているが、その平面規模は20㎡を下回るものとなる。9世紀の建物群と軸は同じであるが、全く別の位置に構築していることから、別の氏族が入っていると考えてよいであろう。

河内源氏発祥の地と考えられている壺井は、駒ヶ谷遺跡より南側、大黒丘陵の南麓に位置する。そしてそこに位置している通法寺は1043年に、壺井八幡宮は1064年に築造されている。9世紀代には、この河内源氏が壺井で勢力基盤を築くまで、駒ヶ谷に居住域をもつ氏族がいたことを示している。また源頼義・義家親子が活躍した前九年の役は1051年に、後三年の役は1083年から始まっており、平氏が専横を振るうきっかけとなった平治の乱は1159年に起っている。12世紀後になって見られる居住域の小規模化は、この政治のうつりかわりに反映したものであろうか。

駒ヶ谷遺跡は、8世紀代には郡衙の「厨家」に付随する「饗宴施設の場」であり、9世紀になると一転して私的な居宅となり、12世紀になるとまた別の小規模な氏族が居を構えていたと思われる。だが、まだ未調査の部分が多く、今後の調査に期待するところが大きい。

註

- 1) 山中敏史 1994 『古代地方官衙遺跡の研究』 塙書房
- 2) 山尾幸久 1989 「河内飛鳥と渡来氏族」『古代を考える 河内飛鳥』吉川弘文館
江浦 洋 1998 「蔵塚古墳と飛鳥戸造氏」「蔵塚古墳」
『朝大府文化財調査研究センター 調査報告書』第24集
- 3) 愛知県陶磁資料館 1998 「日本の三彩と緑釉」
西口陽一・三好孝一1999「吹田操車場遺跡」
『朝大府文化財調査研究センター 調査報告書』第42集
- 4) 山中 章 1997 『日本古代都城の研究』 柏書房
- 5) 藤枝市教育委員会 1981「志太郎御跡(獅子ヶ谷遺跡・秋合)遺跡」

報告書 掲載遺物一覧

図番(写真番号)	部 種	本文	遺 蹟・層 位	トレンチ	地 区	特 徴	時 期	口 径	部 高	調査値
00-01	00-5	本器・甕?	経路000・下層	4C	G18-g0.0	片断に形残っていた遺跡あり	8 C~	90.8	13.4	
00-11	00-3	本器・大つ臼跡	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	釉料に加工したものの	8 C~	17.3	2.3	0.6
2	本器・大つ臼跡	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	釉料を剥脱して一方を使用			20.0<	1.5<	0.7
3	00-6	本器・大つ臼跡	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	両面を加工した。 膠柱を使用		14.0	2.4<	0.9
4	本器・大つ臼	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	形状のもので、三方開孔			11.4<	2.5<	0.6
5	本器・動物	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	動物の骨部分、焼削加工されている			4.0<	1.4<	0.4
6	00-3	本器・網杓	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	網も食われて、全体に骨を散見				
7	00-4	本器・網杓	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	一本を折り折て、網子部に漆の塊跡				
8	00-2	本器・付帯遺物	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	焼削した穴に穴あり、残の断面明確		27.0	10.4<	0.65
9	00-1	本器・動物	101 井戸024・下層	1C	G19-g1	片断に遺物を散見		21.5	20.7	0.8

④瓦

図番(写真番号)	部 種	本文	遺 蹟・層 位	トレンチ	地 区	特 徴	時 期	口 径	部 高	調査値
00-11	瓦・平瓦	101 経路000前方掘削遺下層・埋土	2A	G17-g.0.5	00面に傾が付き、側面一面のみ残存			13.0<	14.0<	2.4
2	瓦・平瓦	101 掘削01・上層	2A	G17-g.1.0	側面と端部が一面ずつ残存			16.9<	8.9<	2.5
3	瓦・平瓦	101 V・ト002・埋土	3C	G19-g1	側面は一面のみ残存、石灰質土			20.7<	12.1<	1.9
4	瓦・斜平瓦	103 V・ト002・埋土	3C	G19-g7	一面に傾が付き、側面を片一目残存			13.4<	13.1<	2.7
5	瓦・瓦瓦	103 井戸024・土・中層	1C	G19-g1	広端部、側面一部残存、若干数個で00面に布目			13.4<	9.1<	2.3
6	瓦・瓦瓦	103 井戸024・土・中層	1C	G19-g1	広端部残存、若干数個で00面に布目			11.0<	10.0<	1.4
7	瓦・瓦瓦	103 井戸024・土・中層	1C	G19-g1	広端部残存、側面の布目断面に欠け			12.3<	7.9<	1.5

駒ヶ谷遺跡 主要遺構一覽

(1) ビット

遺構 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(cm)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
14	2 C	G19-c5	楕円形	45×31	36	2.5Y/6.3細砂	13C前	51					
16	2 C	G19-c5	方形	60×58	18	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
19	2 C	G19-b6	楕円形	40×34	37	2.5Y/6.3細砂	8 C中	51					
22	2 C	G19-b6	円形	径26	39	2.5Y/4.3細砂		51					
36	2 C	G19-b7	円形	24×20	38	2.5Y/6.3細砂		51, 53					
48	2 C	G19-b6	楕円形	50×38	20	2.5Y/6.3細砂	8 C中	51					
71	2 C	G19-c5	円形	33×30	16	2.5Y/6.3細砂		51					
74	2 C	G19-b5	円形	37×35	22	2.5Y/4.3細砂		51					
90	2 C	G19-a4	円形	径26	18	2.5Y/4.3細砂		51					
97	2 C	F19-j4	円形	24×20	22	2.5Y/4.3細砂							
98	2 C	F19-j5	円形	径22	26	10YR/6.6粗砂混じりシルト		51					獨立柱建物跡7
99	2 C	G19-a4	円形	径30	24	10YR/6.1シルト		51					獨立柱建物跡7
100	2 C	F19-j5	円形	27×25	33	10YR/6.3シルト混じり粘土		51					獨立柱建物跡7
101	2 C	F19-j5	円形	28×23	10	10YR/6.3シルト混じり粘土		51					獨立柱建物跡7
102	2 C	F19-j5	円形	30×24	25	10YR/6.1シルト		51					獨立柱建物跡7
103	2 C	F19-j5	円形	径21	46	10YR/6.3シルト混じり粘土		51					獨立柱建物跡7
104	2 C	G19-a5	円形	径19	44	10YR/6.4シルト		51					獨立柱建物跡7
112	2 C	G19-b6	方形	62×60	54	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
113	2 C	G19-b6	方形	60×54	46	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
114	2 C	G19-b6	方形	64×60	38	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
115	2 C	G19-b6	方形	58×56	38	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
116	2 C	G19-b6	方形	62×56	33	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
117	2 C	G19-c5	方形	62×50	41	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
118	2 C	G19-c5	方形	58×52	36	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
119	2 C	G19-c5	方形	68×47	39	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
120	2 C	G19-c5	方形	63×60	37	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
121	2 C	G19-c5	方形	67×65	47	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
122	2 C	G19-c5	方形	55×50	48	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
123	2 C	G19-c5	方形	57×55	60	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
124	2 C	G19-b5	方形	70×57	47	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
125	2 C	G19-b5	方形	71×65	36	10YR/6.4シルト		51	16-3				獨立柱建物跡1
128	2 C	G19-c5	方形	63×40	35	10YR/6.4シルト		51					獨立柱建物跡2
129	2 C	G19-c5	方形	45×45	37	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
130	2 C	G19-c5	方形	56×50	41	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
131	2 C	G19-c5	方形	60×44	42	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
132	2 C	G19-c5-E	方形	52×51	38	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
133	2 C	G19-c5	方形	60×60	36	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
134	2 C	G19-c5	方形	60×50	25	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
135	2 C	G19-c5	方形	62×47	40	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
136	2 C	G19-c5	方形	52×50	27	10YR/6.4シルト		51	16-3-4				獨立柱建物跡2
140	1+2 C	G19-c5	方形	70×56	28	10YR/6.4シルト	8 C中	51					獨立柱建物跡8
141	1+2 C	G19-d5	方形	51×45	20	10YR/6.4シルト		51					獨立柱建物跡8
142	1+2 C	G19-d5	方形	60×45	24	10YR/6.4シルト		51, 52					獨立柱建物跡8
144	1+2 C	G19-d5	円形	46×35	37	10YR/4.1シルト		52					窠穴住居1
145	1+2 C	G19-d5	円形	45×30	41	10YR/4.1シルト		52					窠穴住居1
146	1+2 C	G19-d5	円形	38×30	42	10YR/5.6細砂混じり粘土		52					獨立柱建物跡2
151	1 C	G19-d5	方形	44×41	16	2.5Y/6.3細砂		52					獨立柱建物跡8
152	1 C	G19-d5	方形	50×40	19	2.5Y/4.3細砂		52					獨立柱建物跡8
153	1 C	G19-d5	方形	46×44	26	2.5Y/4.3細砂	6 C後	52					獨立柱建物跡8
162	1 C	G19-d4	円形	径19	27	2.5Y/6.3細砂		52					
163	1 C	G19-d4	円形	23×20	15	2.5Y/6.3細砂		52					
171	1 C	G19-e4	円形	39×33	32	2.5Y/4.3細砂		52					
175	1 C	G19-e4	円形	43×41	24	2.5Y/6.3細砂		52					
179	1 C	G19-e4	円形	径20	29	2.5Y/4.3細砂	7 C後	52					
186	1 C	G19-e4	方形	61×60	47	2.5Y/5.1シルト		52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
187	1 C	G19-e4	方形	50×46	44	2.5Y/5.1シルト	7 C後	52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
188	1 C	G19-e4	方形	58×50	26	2.5Y/5.1シルト		52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
189	1 C	G19-e4	方形	42×40	30	2.5Y/5.1シルト		52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
190	1 C	G19-e4	方形	70×70	32	2.5Y/5.1シルト		52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
191	1 C	G19-e4	方形	60×60	40	2.5Y/5.1シルト		52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
192	1 C	G19-e4	方形	70×50	34	2.5Y/5.1シルト		52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
193	1 C	G19-e4	方形	70×50	39	2.5Y/5.1シルト		52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
194	1 C	G19-e4	円形	35×30	20	2.5Y/5.1シルト		52	18-1, 19-1				獨立柱建物跡4
199	1 C	G19-e4	円形	37×36	23	2.5Y/6.3細砂		52					獨立柱建物跡4
202	1 C	G19-e4	楕円形	38×29	28	2.5Y/4.3細砂	7 C後	52					
204	1 C	G19-e4	円形	31×27	24	2.5Y/4.3細砂	8 C中	52					
205	1 C	G19-e4	円形	40×36	34	2.5Y/4.3細砂		52					
210	1 C	G19-f4	円形	29×26	26	2.5Y/4.3細砂		52					
212	1 C	G19-f4	円形	32×29	23	2.5Y/4.3細砂		52					
213	1 C	G19-f4	楕円形	51×37	50	2.5Y/4.3細砂	8 C後	52					
214	1 C	G19-f4	円形	35×32	25	2.5Y/4.3細砂		52					
215	1 C	G19-f4	円形	33×29	32	2.5Y/4.3細砂		52					
216	1 C	G19-f4	楕円形	44×29	23	2.5Y/4.3細砂		52					
219	1 C	G19-f4	円形	31×27	28	2.5Y/4.3細砂		52					獨立柱建物跡23
220	1 C	G19-f4	楕円形	60×47	32	2.5Y/6.3細砂		52					
221	1 C	G19-f4	円形	25×24	26	2.5Y/4.3細砂	8 C中	51					

遺構 番号	トレ シツ	地区	形状	規模(cm)		主要 埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
226	1C	G19-e4	方形	70×65	26	2.5Y5/1シルト			52				獨立柱建物跡3
227	1C	G19-e4	方形	70×65	33	2.5Y5/1シルト	7C後		52	18-1-2			獨立柱建物跡3
228	1C	G19-e4	方形	70×65	30	2.5Y5/1シルト			52	18-1-2			獨立柱建物跡3
229	1C	G19-e5	方形	70×70	37	2.5Y5/1シルト			52	18-1-2			獨立柱建物跡3
230	1C	G19-e5	方形	70×60	62	2.5Y5/1シルト			52	18-1-2			獨立柱建物跡3
231	1C	G19-e5	方形	65×60	48	2.5Y5/1シルト			52	18-1-2			獨立柱建物跡3
232	1C	G19-e5	方形	55×55	35	2.5Y5/1シルト			52	18-1-2	63-3		獨立柱建物跡3
233	1C	G19-e5	方形	65×65	17	2.5Y5/1シルト			52	18-1-2			獨立柱建物跡3
234	1C	G19-e5	方形	60×60	35	2.5Y5/1シルト	7C後		52	18-1-2			獨立柱建物跡3
236	1C	G19-e5	円形	40×55	28	2.5Y5/3細砂	7C後		52				獨立柱建物跡3
239	1C	G19-e5	円形	25×24	4	2.5Y6/3細砂	7C後		52				獨立柱建物跡3
242	1C	G19-e4	楕円形	29×24	33	2.5Y4/3細砂	8C後		52				
244	1C	G19-f4	楕円形	71×51	38	2.5Y4/3細砂	7C後		52				
250	1C	G19-f4	円形	27×22	16	2.5Y4/3細砂	8C中		52				
251	1C	G19-e4	円形	23×18	21	2.5Y4/3細砂	8C中		52				
252	1C	G19-e5	方形	70×70	20	2.5Y5/1シルト			52	18-1-3			
253	1C	G19-e5	方形	50×30?	20	2.5Y5/1シルト			52	18-1-3			
254	1C	G19-e5	方形	60×60	38	2.5Y5/1シルト	8C中		52	18-1-3			
255	1C	G19-e5	方形	60×55	28	2.5Y5/1シルト			52	18-1-3			
256	1C	G19-e5	方形	60×50	32	2.5Y5/1シルト			52	18-1-3			
257	1C	G19-e5	方形	60×55	31	2.5Y5/1シルト			52	18-1-3			
261	1C	G19-d5	円形	33×28	12	2.5Y6/3細砂			52				
268	1C	G19-h4	円形	38×26	17	2.5Y4/3細砂	8C後		52				竈穴住居1
269	1C	G19-d5	円形	30×25	51	2.5Y5/2細砂直じりシルト			52				
270	1C	G19-g3	円形	35×30	61	2.5Y4/3細砂	中世		52				
271	1C	G19-g3	円形	50×40	35	2.5Y4/3細砂	9C後		52				
273	1C	G19-e5	円形	径24	34	2.5Y4/3細砂			52				
277	1C	G19-f3	円形	43×38	38	2.5Y6/3細砂	9C後		52				
278	1C	G19-f4	円形	32×27	25	2.5Y4/3細砂	8C後		52				
281	1C	G19-f4	円形	径22	5		8C後		52				
282	1C	G19-f4	楕円形	32×25	12	2.5Y4/3細砂			52				
283	1C	G19-f4	方形	51×47	25	2.5Y4/3細砂			52				
284	1C	G19-f4	円形	24×22	20	2.5Y4/3細砂			52				
285	1C	G19-f4	円形	25×22	8	2.5Y6/3細砂			52				獨立柱建物跡24
287	1C	G19-f4	円形	25×24	15	2.5Y4/3細砂			52				獨立柱建物跡24
289	1C	G19-f4	楕円形	41×29	16	2.5Y4/3細砂			52				獨立柱建物跡24
291	1C	G19-e5	方形	45×45	23	2.5Y5/1シルト			52	18-1-3			獨立柱建物跡5
292	1C	G19-e5	方形	45×40	22	2.5Y5/1シルト			52	18-1-3			獨立柱建物跡5
293	1C	G19-e5	方形	20×20<	27	10YR5/1シルト			52	18-1-3			獨立柱建物跡5
302	1C	G19-f5	方形	65×50	20	10YR5/2シルト			52	19-3			獨立柱建物跡6
303	1C	G19-f5	方形	60×50	30	10YR5/2シルト	8C中		52	19-3			獨立柱建物跡6
304	1C	G19-f5	方形	65×60	30	10YR5/2シルト			52	19-3			獨立柱建物跡6
305	1C	G19-f5	方形	45×40	27	10YR5/2シルト			52	19-3			獨立柱建物跡6
306	1C	G19-f5	方形	50×50	26	10YR5/2シルト			52	19-3			獨立柱建物跡6
307	1C	G19-f5	方形	50×40	33	10YR5/2シルト			52				獨立柱建物跡9
308	1C	G19-f5	方形	50×40?	30	10YR5/2シルト			52				獨立柱建物跡9
309	1C	G19-f5	方形	45×40	22	10YR5/2シルト			52				獨立柱建物跡9
310	1C	G19-f5	方形	45×40	33	10YR5/2シルト			52				獨立柱建物跡9
311	1C	G19-f5	楕円形	54×38	18	2.5Y6/3細砂			52				
323	1C	G19-f6	円形	径24	5	2.5Y6/3細砂			52				
326	1C	G19-f6	円形	66×65	25	2.5Y6/3細砂	8C中		52				
327	1C	G19-g6	楕円形	42×42?	30	2.5Y6/3細砂	8C中		52				
329	1C	G19-g5	円形	28×25	13	2.5Y6/3細砂	8C中		52				
330	1C	G19-f4	楕円形	50×30	27	2.5Y4/3細砂			52				獨立柱建物跡23
338	1C	G19-f3	円形	30×27	61	2.5Y4/3細砂	9C後		52				獨立柱建物跡23
343	1C	G19-f3	円形	径23	22	2.5Y4/3細砂	8C後		52				
344	1C	G19-g3	楕円形	52×30	52	2.5Y4/3細砂	9C後		52				獨立柱建物跡23
354	1C	G19-g4	円形	32×29	25	2.5Y4/3細砂	8C中		52				獨立柱建物跡23
375	1C	G19-g4	円形	40×35	32	2.5Y6/3細砂			52				
378	1C	G19-g4	隅丸方	53×53	33	2.5Y4/3細砂	7C後		52				
382	1C	G19-g3	楕円形	38×26	18	2.5Y6/3細砂	8C中		52				
386	1C	G19-g3	円形	22×21	17	2.5Y4/3細砂	8C後		52				
388	1C	G19-g3-4	円形	径25	21	2.5Y6/3細砂			52				
390	1C	G19-g4	円形	32×30	8	2.5Y6/3細砂	8C中		52				
391	1C	G19-g4	円形	30×27	31				52				
392	1C	G19-g4	円形	26×24	28	2.5Y4/3細砂			52				
393	1C	G19-g4	方形	50×41	23	2.5Y4/3細砂	8C後		52				
394	1C	G19-g4	楕円形	36×29	5	2.5Y6/3細砂			52				
406	1C	G19-g4	楕円形	60×54	7	2.5Y6/3細砂	8C後		52				
418	1C	G19-g5	楕円形	39×32	7	2.5Y6/3細砂			52				
427	1C	G19-f3	円形	24×19	19	2.5Y4/3細砂			52				
428	1C	G19-f3	楕円形	53×26	31	2.5Y4/3細砂	9C後		52				
430	1C	G19-f3	円形	29×23	8		8C後		52				
443	1C	G19-g3	円形	33×29	25	2.5Y4/3細砂			52				
454	1C	G19-f3	円形	38×34	19	2.5Y4/3細砂			52				
458	2C	G19-a7	円形	32×30	23	2.5Y4/3細砂	12C後		51,53				
461	1C	G19-g4	方形	53×52	24	2.5Y4/3細砂	8C中		52				
462	2C	G19-a6	楕円形	55×38	22	2.5Y6/3細砂			51,53		63-4		
463	2C	G19-a6	楕円形	46×27	10	2.5Y6/3細砂			51,53				
473	1C	G19-g4	円形	84×78	53	2.5Y4/3細砂	8C後		52				
476	1C	G19-e4	円形	27×26	9	2.5Y4/3細砂			52		55-10		
479	1C	G19-f4	円形	23×21	40	2.5Y4/3細砂			52				

遺構 番号	トレ ノチ	地区	形状	規模(cm)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺 蹟		出土遺物		備 考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
482	1 C	G19-f3	円形	27×24	27	2.5Y/3細砂			52				
483	1 C	G19-f3	円形	26×23	21	2.5Y/3細砂	8 C後		52				
484	1 C	G19-f4	楕円形	39×22	35	2.5Y/3細砂			52				
486	1 C	G19-g3	楕円形	46×35	50	2.5Y/3細砂	9 C後		52				
489	1 C	G19-h4	円形	15×13	15	2.5Y/3細砂			52				
494	1 C	G19-h4	楕円形	42×30	12	2.5Y/3細砂	7 C後		52				
495	1 C	G19-h4	円形	18×20	12	2.5Y/3細砂			52				
496	1 C	G19-g5	円形	18×21	14	2.5Y/3細砂			52				
506	1 C	G19-f5	円形	24×22	19	2.5Y/3細砂			52				
520	1 C	G19-h4	円形	28×26	26	2.5Y/3細砂	8 C後						
522	1 C	G19-h4	円形	26×23	24	2.5Y/3細砂	8 C後		52				
594	4 C	G18-b10	円形	28×26	17	5Y5/1シルト	8 C中		50				
595	4 C	G18-b10	楕円形	39×25	28	5Y5/1シルト	8 C中		50				
601	4 C	G18-b10	円形	18×25	24	2.5Y/3細砂	9 C後		38, 39				
604	4 C	G18-e10	円形	18×18	23	2.5Y/3細砂	12 C後		38, 39				
606	4 C	G18-e10	楕円形	37×26	51	2.5Y/3細砂	8 C後		38, 39				
610	4 C	G18-e10	楕円形	37×27	19	2.5Y/3細砂	8 C中		38, 39				
611	4 C	G18-e10	楕円形	46×33	42	2.5Y/3細砂	8 C後		38, 39				
612	4 C	G18-e9	楕円形	29×19	10	2.5Y/3細砂	9 C後		38, 39				
614	4 C	G18-e9	円形	22×20	22	2.5Y/3細砂			38		43-2		
615	4 C	G18-e10	円形	22×20	23	2.5Y/3細砂			38, 39				
617	4 C	G18-e9	円形	54×49	85				38, 39	22-3			掘立柱建物跡10
618	4 C	G18-e9	円形	49×44	53		12 C後		38, 39	22-3	43-1		掘立柱建物跡10
619	4 C	G18-e9	楕円形	43×34	46				38, 39	22-3	43-1		掘立柱建物跡10
620	4 C	G18-e9	円形	30×27	24	2.5Y/3細砂	8 C中		38, 39				
625	4 C	G18-e9	円形	37×35	6				38				
624	4 C	G18-e9	円形	18×22	16	5Y5/1シルト			38				
625	4 C	G18-e9	円形	22×20	3	5Y5/1シルト			38				
626	4 C	G18-e6	円形	25×22	23	2.5Y/1シルト	12 C後		38				
631	4 C	G18-e6	方形	46×40	28	2.5Y/1シルト			38				
641	4 C	G18-d9	楕円形	49×33	30	5Y5/1シルト	12 C後		38				
642	4 C	G18-e9	円形	18×24	18				38, 39	22-3			掘立柱建物跡10
653	4 C	G18-e9	円形	18×16	32				38, 39	22-3			掘立柱建物跡10
662	2 A	G17-j6	楕円形	52×40	23	10YR4/2シルト			12				
665	2 A	G17-j6	円形	32×30	24	10YR4/2シルト			12				
666	2 A	G17-j6	円形	18×24	20	10YR4/2シルト	9 C前		12				
668	2 A	G17-j6	楕円形	45×32	20	10YR4/2シルト	9 C前		12				
670	2 A	G17-j6	円形	36×34	40	10YR4/2シルト			12				
671	2 A	G17-j6	円形	34×22	45	10YR4/2シルト			12				
674	2 A	G17-j6	円形	30×28	5	10YR4/2シルト			12				
675	2 A	G17-j6	楕円形	59×40	40	10YR4/2シルト			12				
681	2 A	G17-j6	楕円形	32×28	20	5Y5/3細砂			12				
683	2 A	G17-j6	楕円形	56×38	18	5Y5/3細砂			12				
685	2 A	G17-j6	楕円形	33×24	17	10YR4/2シルト			12				
689	2 A	G17-j6	円形	23×22	26	10YR4/2シルト	12 C中		12				
690	2 A	G17-j6	円形	18×26	26	10YR4/2シルト			12				
696	2 A	G17-j7	円形	18×17	19	10YR4/2シルト			12				
697	2 A	G17-j7	円形	38×46	38	5Y5/3細砂			12				
698	2 A	G17-j7	円形	26×20	28	10YR4/2シルト			12				
700	2 A	G17-j7	円形	27×26	25	10YR4/2シルト			12				
702	2 A	G17-j7	楕円形	46×25	8	10YR4/2シルト			12				
703	2 A	G17-j7	楕円形	55×27	18	10YR4/2シルト	12 C中		12				
706	2 A	G17-j7	円形	28×27	34	10YR5/2シルト	10 C中		12				
707	2 A	G17-j7	円形	23×18	31	10YR5/2シルト	8 C中		12				
709	2 A	G17-1-j6	楕円形	43×22	22	10YR5/2シルト			12				
710	2 A	G17-j7	円形	28×22	19	10YR5/2シルト			12				
711	2 A	G17-1-j7	楕円形	53×27	30	10YR5/2シルト	8 C中		12				
712	2 A	G17-j7	円形	31×29	30	10YR5/2シルト			12				
713	2 A	G17-j7	円形	30×25	31	10YR5/2シルト			12				
714	2 A	G17-j7	方形	53×46	7	10YR5/2シルト			12				
715	2 A	G17-j7	楕円形	30×23	31	10YR4/2シルト			12				
716	2 A	G17-j7	楕円形	42×33	38	10YR5/2シルト			12				
717	2 A	G17-j7	楕円形	58×30	30	10YR5/2シルト			12				
718	2 A	G17-j7	楕円形	77×42	10	10YR5/2シルト	8 C中	26			15-6		
719	2 A	G17-j7	楕円形	53×32	36	10YR5/2シルト	8 C中		12				
721	2 A	G17-j7	円形	36×28	35	10YR5/2シルト	8 C中		12				
723	2 A	G17-j7	円形	26×23	28	10YR5/2シルト	12 C中	26			15-5		
724	2 A	G17-j7	楕円形	36×26	23	10YR5/2シルト			12				
725	2 A	G17-j7	楕円形	36×30	6	10YR5/2シルト			12				
726	2 A	G17-j7	円形	32×30	31	10YR5/2シルト			12				
728	2 A	G17-j7	円形	18×33	39	10YR5/2シルト			12				
729	2 A	G17-j7	楕円形	67×43	8	10YR5/2シルト			12				
732	2 A	G17-j7	楕円形	54×32	32	10YR5/2シルト			12				
733	2 A	G17-j7	楕円形	54×30	18	10YR5/2シルト	12 C中		12				
735	2 A	G17-j7	円形	14×13	11	10YR5/2シルト			12				
738	2 A	G17-j7	円形	32×27	28	10YR5/2シルト			12				
739	2 A	G17-j7	方形	55×48	15	10YR5/2シルト			12				
740	2 A	G17-j6	楕円形	52×43	20	10YR4/2シルト	12 C中		12				
743	2 A	G17-j7	方形	53×38	13	5Y5/3細砂			12				
744	2 A	G17-j7	楕円形	53×36	33	5Y5/3細砂			12				
746	2 A	G17-j7	楕円形	61×50	31	10YR5/2シルト			12	6-2			掘立柱建物跡12
747	2 A	G17-j7	円形	35×33	40	10YR5/2シルト	12 C後		12				

遺構 番号	トレ シテ	地 区	形 状	規模(cm)		深 さ	主 要 埋 土	時 代	本 文 ページ	遺 構		出 土 遺 物		備 考
				平 面	縦 横(cm)					図	写真	図	写真	
751	2 A	G17-7	楕円形	60×45	28	5Y5/3細砂				12	6-2			獨立柱建物跡12
753	2 A	G17-7	円形	45×42	19	5Y5/3細砂				12				
755	2 A	G17-7	楕円形	65×58	38	5Y5/3細砂				12	6-2			獨立柱建物跡12
756	2 A	G17-7	円形	13×12	30	10YR5/2シルト				12				
757	2 A	G17-7	楕円形	30×22	43	5Y5/3細砂		8 C中		12				
760	2 A	G17-7	円形	22×20	11	10YR5/2シルト				12				
761	2 A	G17-7	円形	径20	9	10YR5/2シルト				12				
762	2 A	G17-7	円形	24×23	17	10YR5/2シルト				12				
763	2 A	G17-7	円形	27×25	28	5Y5/3細砂		8 C後		12				
773	2 A	H17-a7	円形	37×31	30	10YR5/2シルト				12				
779	2 A	H17-a7	円形	径25	17	10YR5/2シルト				12				
780	2 A	G17-7	円形	径20	9	10YR5/2シルト		8 C中	26	12	15-3			
782	2 A	G17-7	楕円形	70×30	40	10YR5/2シルト				12				
783	2 A	G17-7	楕円形	53×35	36	10YR5/2シルト				12	6-2			獨立柱建物跡12
784	2 A	G17-7	楕円形	45×37	14	5Y5/3細砂		12C中		12	8-4		41-1	
785	2 A	G17-7	円形	28×26	26	5Y5/3細砂				12				
786	2 A	G17-7	楕円形	30×22	18	5Y5/3細砂				12				
787	2 A	G17-7	円形	27×25	29	10YR5/2シルト		8 C中	26	12	15-36			
789	2 A	G17-7	円形	30×27	27	10YR5/2シルト				12				
791	2 A	H17-a7	楕円形	35×27	32	10YR5/2シルト				12				
792	2 A	H17-a7	円形	32×28	24	10YR5/2シルト				12				
793	2 A	H17-a7	円形	26×24	26	10YR5/2シルト				12				
794	2 A	H17-a7	楕円形	40×28	40	10YR5/2シルト				12				
797	2 A	H17-a7	楕円形	64×40	24	10YR5/2シルト		9 C前		12				
798	2 A	H17-a7	円形	35×30	16	10YR5/2シルト				12				
803	2 A	H17-a8	円形	22×20	14	10YR5/2シルト				12				
806	2 A	H17-a8	円形	29×27	14	10YR5/2シルト				12				
807	2 A	G17-8	円形	22×20	40	10YR5/2シルト		8 C中		12				
809	2 A	H17-a8	方形	70×50	34	10YR6/3シルト				12	6-1・3			獨立柱建物跡11
810	2 A	H17-a8	方形	60×60	20	10YR6/3シルト				12	6-1			獨立柱建物跡11
811	2 A	H17-a8	方形	60×60	36	10YR6/3シルト				12	6-1			獨立柱建物跡11
812	2 A	G17-8	方形	60×60	24	10YR6/4シルト		8 C中		12	6-1			獨立柱建物跡11
813	2 A	G17-8	方形	50×40	26	10YR4/1シルト		8 C中		12	6-1			獨立柱建物跡11
825	2 A	G17-7	円形	36×23	19	10YR4/2シルト				12				
826	2 A	G17-7	円形	37×26	23	10YR4/2シルト				12				
828	2 A	G17-8	方形	45×40	30	10YR6/4シルト		8 C中		12	6-1	15-1・2		獨立柱建物跡11
829	2 A	G17-8	方形	45×45	23	10YR6/4シルト				12	6-1			獨立柱建物跡11
830	2 A	G17-8	方形	55×50	16	10YR6/4シルト				12	6-1			獨立柱建物跡11
832	2 A	G17-8	方形	50×40	36	10YR6/4シルト				12	6-1			獨立柱建物跡11
835	2 A	H17-a9	円形	径35	9	10YR4/3シルト		8 C後		12				
840	2 A	G17-8	楕円形	46×35	14	10YR4/3シルト				12	6-2			獨立柱建物跡12
845	2 A	G17-7	方形	60×40	28	2.5Y4/2シルト				12	6-2			獨立柱建物跡12
846	2 A	G17-7	楕円形	50×45	26	5Y4/2シルト				12	6-2			獨立柱建物跡12
847	2 A	H17-a9	円形	28×24	20	10YR4/3シルト		8 C中	26	12	15-4			
858	2 A	G17-7	楕円形	34×22	51	2.5Y3/3シルト				12				
867	2 A	G17-7	楕円形	66×40	7	10YR4/2シルト				12				
872	2 A	G17-7	円形	30×26	6	2.5Y3/3シルト		8 C中		12				
874	2 A	G17-8	方形	62×57	36	2.5Y3/3シルト				12				
899	1 B	G18-j4	円形	径34	17	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡21
900	1 B	G18-j4	円形	径18	3	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡21
903	1 B	G18-j4	円形	26×22	30	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡21
905	1 B	G18-j4	円形	28×27	42	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡21
906	1 B	G18-j4	円形	26×24	25	10YR5/2シルト				30.31				獨立柱建物跡21
907	1 B	G18-j4	円形	28×25	10	10YR5/2シルト				30.31				獨立柱建物跡21
908	1 B	G18-j4	円形	径20	4	10YR5/2シルト				30.31				獨立柱建物跡21
911	1 B	G18-j4	円形	径22	18	10YR5/2シルト				30.31				獨立柱建物跡21
912	1 B	G18-1-j4	円形	54×45	15	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡22
913	1 B	G18-j4	円形	24×23	32	10YR4/3細砂		9 C後	56	30.31				
914	1 B	G18-j4	円形	18×16	26	10YR4/3細砂				30.31				
915	1 B	G18-j4	円形	26×18	50	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡22
916	1 B	G18-j4	円形	17×16	15	10YR4/3細砂				30.31				
917	1 B	G18-j4	円形	20×17	20	10YR4/3細砂				30.31				
918	1 B	G18-1-j4	楕円形	57×44	13	10YR4/3細砂				30.31				
919	1 B	G18-j4	円形	20×16	29	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡22
923	1 B	G18-j4	円形	25×20	30	10YR4/3細砂		9 C中	56	30.31				
927	1 B	G18-j4	円形	24×20	24	10YR4/3細砂		9 C後	56	30.31				
930	1 B	G18-j4	円形	28×27	20	10YR4/3細砂		10C中	56	30.31				
931	1 B	G18-j4	円形	43×38	40	10YR4/3細砂				30.31	11-1			獨立柱建物跡13
932	1 B	G18-j4	円形	28×26	45	10YR4/3細砂				30.31	11-1			獨立柱建物跡13
933	1 B	G18-j4	円形	28×26	35	10YR4/3細砂				30.31	11-1			獨立柱建物跡13
934	1 B	G18-j4	円形	40×36	39	10YR4/3細砂				30.31	11-1			獨立柱建物跡13
935	1 B	G18-j4	円形	径30	41	10YR4/3細砂				30.31	11-1			獨立柱建物跡13
936	1 B	G18-j4	円形	46×36	36	10YR4/3細砂				30.31	11-1			獨立柱建物跡13
937	1 B	G18-j4	円形	37×30	38	10YR4/3細砂				30.31	11-1			獨立柱建物跡13
938	1 B	G18-j4	方形	57×39	52	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡20
942	1 B	G18-j4	円形	30×24	38	10YR4/3細砂				30.31				獨立柱建物跡20
944	1 B	G18-j4	円形	30×26	10	10YR4/3細砂								
945	1 B	G18-j4	円形	径23	13	10YR4/3細砂								
949	1 B	G18-j4	円形	32×26	45	10YR4/3細砂				30.31				
951	1 B	G18-b4	円形	径20	15	10YR4/3細砂				30.31				
954	1 B	G18-b4	円形	径30	26	10YR4/3細砂				30.31				
956	1 B	G18-b4	円形	18×16	30	10YR5/2シルト								

通称 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(cm)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺 蹟		出土 遺物		備 考
				平面	高さ				図	写真	図	写真	
957	1 B	G18-h4	円形	径26	38	10YR5/2シルト			30				獨立柱建物跡20
958	1 B	G18-h4	円形	21×30	28	10YR5/2シルト			30,31				獨立柱建物跡20
962	1 B	G18-h4	円形	32×31	40	10YR4/2細砂			30,31				獨立柱建物跡20
969	1 B	G18-h4	楕円形	28×17	17	10YR4/2細砂			30,31				獨立柱建物跡20
976	1 B	G18-h4	楕円形	26×21	17	10YR4/2細砂			30,31				獨立柱建物跡22
977	1 B	G18-h4	円形	25×22	22	10YR4/2細砂			30,31				獨立柱建物跡20
984	1 B	G18-h3	円形	14×15	9	10YR5/2シルト	9 C中		30,31				獨立柱建物跡20
985	1 B	G18-h4	円形	径22	15	10YR4/2細砂			30,31				獨立柱建物跡20
986	1 B	G18-h3	円形	径16	13	10YR5/2シルト	10C前		30,31				獨立柱建物跡20
991	1 B	G18-h2	不定形	68×49	17	10YR5/2シルト							
992	1 B	G18-h2	楕円形	94×75	15	10YR5/2シルト	12C中						
993	1 B	G18-h2	楕円形	92×60	15	10YR5/2シルト							
994	1 B	G18-h2-3	円形	75×35	18	10YR5/2シルト							
995	1 B	G18-h2	円形	28×26	22	10YR5/2シルト			30				
996	1 B	G18-h3	楕円形	46×40	18	10YR5/2シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1007	1 B	G18-h4	円形	26×24	14	10YR5/2シルト			30,31		11-1		獨立柱建物跡13
1008	1 B	G18-h4	円形	50×48	12	7.5YR6/1細砂			30,31				獨立柱建物跡13
1007	1 B	G18-h4	円形	径21	17	2.5Y6/1細砂			30,31				獨立柱建物跡13
1008	1 B	G18-h4	円形	60×50	13	7.5YR6/1細砂			30,31	11-1			獨立柱建物跡13
1010	1 B	G18-h4	円形	径26	23	2.5Y5/1細砂			30,31				獨立柱建物跡20
1011	1 B	G18-h4	円形	44×38	24	7.5YR6/1細砂			30,31	11-1			獨立柱建物跡13
1013	1 B	G18-h4	円形	37×36	25	7.5YR6/1細砂			30,31	11-1			獨立柱建物跡13
1014	1 B	G18-h4	円形	40×38	32	7.5YR6/8シルト			30,31	11-1			獨立柱建物跡13
1015	1 B	G18-h4	円形	径24	13				30,31				
1016	1 B	G18-h4	円形	径24	13	2.5Y5/2細砂混シルト			30,31				獨立柱建物跡22
1017	1 B	G18-h4	円形	27×26	14	2.5Y5/2細砂混粘土	10C前	56	30,31				
1018	1 B	G18-h4	円形	26×24	25	2.5Y5/1細砂			30,31				
1019	1 B	G18-h4	円形	40×38	46	10YR4/4細砂			30,31	11-1			獨立柱建物跡13
1021	1 B	G18-h4	円形	径43	46	7.5YR6/8シルト			30,31	11-1			獨立柱建物跡13
1033	1 B	G18-h5	円形?	35×24?	10	10YR3/3細砂混シルト	9 C後	56	30,31				
1044	1 B	G18-h4	楕円形	23×19	7	10YR5/1細砂混シルト			30,31				獨立柱建物跡20
1085	1 B	G18-h9	円形	38×36	10	10YR5/6シルト			36	11-3			獨立柱建物跡17
1086	1 B	G18-h9	円形	30×28	20	10YR4/6シルト			36	11-3			獨立柱建物跡17
1087	1 B	G18-h9	円形	36×34	23	10YR4/6シルト			36	11-3			獨立柱建物跡17
1089	1 B	G18-h9	円形	42×37	30	10YR4/6シルト			36	11-3			獨立柱建物跡17
1090	1 B	G18-h9	方形	68×58	41	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1091	1 B	G18-h9	隅丸方形	39×36	15	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1092	1 B	G18-h9	楕円形	65×43	29	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1094	1 B	G18-h9	楕円形	40×30	8	10YR5/6シルト			36				
1095	1 B	G18-h10	隅丸方形	65×61	14	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1096	1 B	G18-h10	円形	径32	13	10YR6/6シルト			36	11-3			獨立柱建物跡17
1097	1 B	G18-h9	隅丸方形	51×51	22	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1098	1 B	G18-h10	楕円形	68×53	24	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1099	1 B	G18-h10	隅丸方形	38×37	4	10YR6/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡16
1100	1 B	G18-h10	円形	32×30	18				36	11-4			獨立柱建物跡16
1101	1 B	G18-h10	円形	32×30	14				36	11-4			獨立柱建物跡16
1102	1 B	G18-h9	楕円形	64×48	30	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1104	1 B	G18-h10	楕円形	29×24	20				36	11-4			獨立柱建物跡16
1105	1 B	G18-h9	円形	57×55	27	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1108	1 B	G18-h9	円形	44×43	29	10YR5/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡14
1109	1 B	G18-h9	隅丸方形	68×60	42	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1110	1 B	G18-h9	方形	76×46	36	10YR6/6シルト			36	11-3-4			獨立柱建物跡14
1112	1 B	G18-h9	隅丸方形	46×41	27	10YR5/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡15
1113	1 B	G18-h9	隅丸方形	47×40	30	10YR5/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡15
1114	1 B	G18-h9	楕円形	55×42	27	10YR5/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡15
1123	1 B	G18-h5	円形	径30	30				30,31				
1127	1 B	G18-h5	円形	40×38	27	10YR5/6シルト			30,31				
1128	1 B	G18-h5	円形	32×30	37	10YR5/6シルト			30,31				
1150	1 B	G18-h9	方形	70×40	22	10YR5/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡15
1151	1 B	G18-h9	方形	69×53	20	10YR5/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡15
1152	1 B	G18-h9	方形	70×68	12	10YR5/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡15
1155	1 B	G18-h9	方形	62×52	34	10YR5/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡15
1157	1 B	G18-h10	円形	34×32	6				36	11-4			獨立柱建物跡16
1158	1 B	G18-h10	円形	52×50	22	10YR4/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡17
1159	1 B	G18-h10	円形	径52	20	10YR4/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡17
1160	1 B	G18-h10	円形	50×46	10	10YR4/6シルト			36	11-4			獨立柱建物跡17
1165	1 B	G18-h3	円形	25×24	14	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1166	1 B	G18-h2	円形	29×26	11	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1167	1 B	G18-h2	円形	26×21	21	10YR4/4シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1169	1 B	G18-h2	円形	28×26	16	10YR4/4シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1169	1 B	G18-h2	円形	径30	12	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1170	1 B	G18-h2	円形	径22	15	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1171	1 B	G18-h2	円形	径28	36	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1172	1 B	G18-h2	円形	径30	37	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1173	1 B	G18-h2	円形	24×22	11	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1174	1 B	G18-h2	円形	24×22	30	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1175	1 B	G18-h2	円形	25×21	23	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1176	1 B	G18-h2	円形	径24	23	10YR4/3シルト			30	11-2			獨立柱建物跡18
1183	1 B	G18-h2	円形	27×25	9	10YR4/3シルト			30				
1221	5 C	G19-c2	円形	径25	13	10YR4/3シルト			39	22-2			獨立柱建物跡19
1222	5 C	G19-c2	円形	径61	5	10YR5/6シルト			39	22-2			獨立柱建物跡19
1224	5 C	G19-c2	円形	40×38	19	10YR4/3シルト			39	22-2			獨立柱建物跡19

遺構 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(cm)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
1227	5 C	G19-c2	円形	径22	14	10YR4/3シルト			39				掘立柱建物跡19
1228	5 C	G19-c2	円形	25×34	21	10YR4/3シルト			39				掘立柱建物跡19
1229	5 C	G19-c2	円形	28×27	19	10YR4/3シルト			39				掘立柱建物跡19
1230	5 C	G19-c2	円形	径37	38	10YR4/3シルト			39				掘立柱建物跡19
1253	1 B	G18-14	円形	径30	6	10YR5/1細砂シルト			30,31				掘立柱建物跡20
1256	1 B	G18-14	円形	径21	10	2.5Y5/1細砂			30,31				掘立柱建物跡22

(2) 溝

遺構 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(cm)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
1	2 C	F19-1-f		310	175	10YR5/2シルト	9 C後	87	51,53	23-1・2	55-1・2		
2	2 C	F19-1-f		28	7	10YR5/6シルト			51,53				
3	2 C	F19-1-f		50	20	10YR4/3細砂			53				
4	2 C	F19-f		150	18	2.5Y4/2細砂	6 C後		53				
5	2 C	F19-f		63	18	2.5Y4/2細砂			53				
6	2 C	G19-a7		65	20	2.5Y4/2細砂			51,53				
7	2 C	G19-a7		60	15	10YR4/3シルト			51,53				
8	2 C	G19-a7		20	4	2.5Y4/2細砂			51,53				
9	2 C	F19-f		270	13	2.5Y4/2細砂		64	51,53		37		
10	2 C	G19-b6		77	15	2.5Y4/2細砂	TK43		51		19-4		
11	2 C	G19-b5		96	11	2.5Y6/3細砂	8 C中		51				
12	2 C	G19-c5		83	14	2.5Y4/3細砂			51				
17	2 C	G19-b5		23	5	2.5Y6/3細砂			51				
18	2 C	G19-b6		34	17	2.5Y6/3細砂			51				
20	2 C	G19-b5		50	27		6 C		51				
21	2 C	G19-c5		93	15	2.5Y6/3細砂			52				
23	2 C	G19-b6		46	11	2.5Y4/3細砂	8 C中		51				
126	2 C	G19-b5		24	9	2.5Y4/3細砂			52				
155	1 C	G19-d4		90	21	2.5Y6/3細砂			52				
156	1 C	G19-d4		46	10	2.5Y6/3細砂			52		55-12		
159	1 C	G19-d5		78	17	2.5Y4/3細砂	8 C中		52		55-11		
160	1 C	G19-e4		79	17	2.5Y4/3細砂	7 C後		52				
225	1 C	G19-e4-5		99	11	2.5Y6/3細砂	7 C後		52		55-4・5		
241	1 C	G19-e4-5		32	13	2.5Y6/3細砂			52				
316	1 C	G19-f5		50	16	2.5Y6/3細砂	6 C後?		52				
366	1 C	G19-g4		30	5	2.5Y6/3細砂	8 C中		52				
412	1 C	G19-f-g5		22	9				52				
425	1 C	G19-e4-5		49	10	2.5Y6/3細砂	8 C中		52				
435	1 C	G19-h-2		28	5	2.5Y4/3細砂			52				
437	1 C	G19-h-2		47	18	2.5Y6/3細砂			52				
438	1 C	G19-h-2		50	8	2.5Y6/3細砂			52				
527	3 C	G19-g1		52	18	7.5Y5/1細砂			42				
538	3 C	G18-g10		150	10	5Y5/2細砂			42				
529	3 C	G19-g1		18	8	7.5Y5/1細砂			42				
545	3 C	G19-f1		140	30	5Y5/2シルト							
546	3 C	G19-e1		60	38	7.5Y5/2シルト							
565	2 B	G18-f3		40	9	10YR4/4細砂							
579	4 C	G18-e4-5 B		75	30	2.5Y5/4シルト			38				
581	4 C	G18-c-d9		13	5	10YR4/1細砂							
582	4 C	G18-d9		23	7	10YR4/1細砂							
583	4 C	G18-d9		21	9	10YR7/1細砂							
589	4 C	G18-d-e8		142	49	2.5Y6/1細砂	12 C後	67	38	23-4			
591	4 C	G18-e8		575	86	2.5Y7/2細砂	12 C後	67,72,79	38	23-3・4	43-3・4, 61-3		
596	4 C	G18-b10		24	6	2.5Y4/3細砂					38,29		
599	4 C	G18-b10		23	9	2.5Y4/3細砂					38,29		
605	4 C	G18-c10		28	6	2.5Y4/3細砂					38,29		
607	4 C	G18-c10		34	6	2.5Y4/3細砂					38,29		
608	4 C	G18-b-c10		22	9	2.5Y4/3細砂					38,29		
609	4 C	G18-b-c10		15	7	2.5Y4/3細砂					38,29		
639	4 C	G18-e7		47	28	2.5Y4/1シルト			38				
661	2 A	G17-e6		38	15	7.5Y4/1細砂	8 C中		12				
679	2 A	G17-i-f		158	11	10YR3/1シルト		22,31,47	11・13	6-4	18・19・63-2	30-32	
680	2 A	G17-i-f		36	10	5Y5/3細砂							
781	2 A	G17-f		45	10	10YR4/2シルト	8 C中		12				
831	2 A	G17-f		567	19	10YR4/2シルト							
834	2 A	H17-a9		25	6	10YR4/3シルト							
844	2 A	G17-b		56	20	10YR4/3シルト	8 C中						
883	2 A	G18-g-h1, G17-h10		232	52								
886	1 B	G18-a2-3		60	31	2.5Y5/6シルト							
896	1 B	G18-j4		114	28	10YR4/3細砂	9 C後	51,55	30,31			32-13	
906	1 B	G18-j4		65	18	10YR4/3細砂	12 C前	51	30,31				32-11
909	1 B	G18-j4		92	11	10YR4/3細砂			51,55	30,31			32-6
920	1 B	G18-14		30	12	10YR4/3細砂	10 C前	54	30,31				32-4・5
925	1 B	G18-14		19	5	10YR4/3細砂	9 C		30,31				
926	1 B	G18-14		46	8	10YR4/3細砂	10 C中	54	30,31				32-1~3

遺構 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(m)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
947	1 B	G18-b4		50	14	10YR5/2シルト	9 C中	51,55	30,31			32-7 ~10	
952	1 B	G18-b3+4		22	7	10YR4/3細砂		55	30,31				
970	1 B	G18-b3+4		74	22	10YR4/2細砂		55	30,31				
989	1 B	G18-b+e2		49	10	2.5Y5/2シルト		55	30				
990	1 B	G18-i2		73	7	2.5Y5/2シルト		55	30				
1025	1 B	G18-b+4+5		80	13	10YR6/2細砂	不明	51	30,31				
1036	1 B	G18-b+4+5		136	10	10YR4/2細砂		51,55	30,31				
1038	1 B	G18-i+5		25	9	10YR5/2シルト		51	30,31				
1048	1 B	G18-b+5		166	10	5Y5/1細砂		51,55	30,31				
1144	1 B	G18-gd+7		147	43	2.5Y5/3シルト	12C中						
1193	1 A	H17-a+b4+5		94	23	7.5YR4/1シルト		22	11	4-1+2			
1195	1 A	H17-a+b4+5		97	16	2.5Y5/2シルト		22	11	4-1+2			

(3) 土坑

遺構 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(m)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
13	2 C	G19-b5	不定形	116×72	7	2.5Y6/3細砂		51					
15	2 C	G19-c5	不定形	96×66	8	2.5Y6/3細砂		51					
25	2 C	G19-e6	不定形	392×205<	13	2.5Y6/3細砂	6 C	51					
42	2 C	G19-b6	楕円形	95×70	22	2.5Y4/3細砂		51					埋土に炭化物多し
56	2 C	G19-d6	楕円形	31×31<	5	2.5Y4/3細砂		51					
182	1 C	G19-e4	不定形	204×120	32	2.5Y6/3細砂	7 C後	52					埋土に糠多し
389	1 C	G19-g4	不定形	420×140	9	2.5Y4/3細砂		52			55-7~9		
433	1 C	G19-e+f+3-4	不定形	500×200<	29	2.5Y6/3細砂		52					
439	1 C	G19-b3	隅丸方形	67×40	9	2.5Y6/3細砂		87	53	17-1+2			
523	1 C	G19-b4	楕円形	116×96	8	2.5Y4/3細砂		87	52,53	17-3			石炭安山岩片が 多量に入る 断面は炭火により 赤褐色化、土 坑815に切られ る
660	2 A	G17-i7	方形	138×141	28	10YR5/3砂礫混じりシルト		22,26	12,13	5-1+2	15-10		
669	2 A	G17-i+6	円形	80×70	30	5Y5/3細砂		12					
695	2 A	G17-j7	方形	110×64	26	5Y5/3細砂		12					
704	2 A	G17-i6	楕円形	102×43	40	10YR4/3シルト	8 C中	12					
705	2 A	G17-i6	不定形	143×89	10	10YR4/3シルト	8 C中	12					
708	2 A	G17-i7	方形	91×67	12	10YR4/3シルト	8 C中	12					
720	2 A	G17-j7	隅丸方形	102×68	28	10YR4/3シルト	12C中	12					
796	2 A	H17-a7	楕円形	290×230	11	5Y5/3細砂	12C中	26	12			15-11+ 12	
815	2 A	G17-i+7	隅丸方形	544×366	13	2.5Y5/2細砂混じりシルト	12C中	22,26, 44,47	12,13	5-1	15-13+ 14-33	41-2	
870	2 A	G17-j7+8	不定形	115×45	4	2.5Y3/3シルト		12					
878	2 A	G18-i2	長方形	460×80	30	7.5Y5/1シルト	古墳	55	30				埋土施設?
885	2 B	G18-j3	円形	235×214	30	10GY4/1粘土	古代	51,56, 58		10-3		45+46	
897	1 B	G18-j4	円形	165×123	28	10YR4/3細砂		52,55	30+31				
1003	1 B	G18-b4+5	不定形	175×72	10	2.5Y5/1シルト混じり粘土	10C中	55	30,31			32-14~ 16	
1026	1 B	G18-i5	円形	242×207	35		9 C後	52,55	30,31			32-17	
1035	1 B	G18-i+5	不定形	780×350	42			52,55	30,31			32-18	
1062	1 B	G18-b5	不定形	—	5	10YR3/2シルト	8 C前						
1077	1 B	G18-i7	方形	290×138	30	2.5Y6/4シルト		55	30,31				土坑蓋?
1119	1 B	G18-i5	楕円形	210×48	5	2.5Y6/3シルト		51,55	30,31	10-4			
1124	1 B	G18-b5	楕円形	131×103	44	2.5Y4/3シルト		51,55	30,31	10-4			
1188	1 A	H17-a+b6	楕円形	460×320	20	7.5YR4/1粗砂混じりシルト		22,26, 44	11	4-3	15-7+8+ 9+29-9+ 10	41-3+4	

(4) 井戸

遺構 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(m)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
356	1 C	G19-g3+4	素掘り	径2.35	0.58	10YR4/4シルト		88, 92	52	17-4			56-60+ 61-1,4+ 62+63- 57
424	1 C	G19-g+b4	素掘り	径4.86	8.5<	5Y5/1粘土		93,99, 101, 103	52,54	20			55-63
657	4 C	G18-d8	井桁	径0.49	0.23	2.5Y7/1細砂		67	38,40	24-3+4			
658	4 C	G18-d8	素掘り	径1.00	1.73	5Y5/1細砂		67,79	38,40	24-4			48-1~4
672	2 A	G17-j6	素掘り		1.15	7.5YR4/1シルト	12C後	23,26, 44,47	12,14	8-1+2			15-15+ 34+27-41-9+10

遺構 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(m)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考
				平面	深さ				図	写真	図	写真	
678	2 A	G17-β	素掘り		3.07	N3/1粘土	12C 中～後	23,26, 44,47	12,14	7		40	
1000	1 B	G18-α5	曲物	径0.29	0.94	5Y4/1粘土	12C前	32,56, 61	30,31	12,13		32-19～ 21-35	
1187	1 A	H17-β7	曲物	径0.39	1.14	5CY3/1粘土	12C中	23,25, 26,47	11,14	8-3		41-6-8	
1189	1 A	H17-β8	曲物	径0.56	0.59	5Y4/1シルト	9 C前	25,26, 47	11,14	5-3,4		15-31- 32	41-5
1191	1 A	H17-β8	井桁	径0.72	0.71	N3/0シルト	8 C中	25,26, 47	11,14	5-3			

(5) その他の遺構

遺構 番号	トレ ンチ	地区	形状	規模(m)		主要埋土	時代	本文 ページ	遺構		出土遺物		備考	
				平面	深さ				図	写真	図	写真		
245	1 C	G18-α4	不定形	13.5×4.0			8 C後				55-6		落ち込み245	
555	2 B	G18-α2-3- h2-3	直線	幅7.7	0.8	5Y6/2シルト	古墳						前方部周産	
578	2 B	G18-α6- α4-β-β5-6	蛇行	幅17.0	1.04		8 C後		38				流路578	
580	4 C	G18-α4-β9- G19-β1	蛇行	幅13.0	1.46		古墳～ 中世	68,73, 79,90, 101	38,42			44-47・ 49・50・ 61-2・ 43-5-8- 16-17	50-54	流路580
590	4 C	G18-α6	方形	2.0×1.5	0.2	N5/0粗砂	中世		38				落ち込み590	
638	4 C	G18-α8	方形	2.1×2.3	高さ0.3		中世	67,68, 73	38,40	24-1,2		43-9- 15・48- 9-13		木組み遺構638
643	2 B	G18-α6	開口?				古代		38				土器附643	
654	4 C	G18-α8	直線	長さ4.1	0.4		古代	68	38,41	21-1			しからみ654	
655	4 C	G18-α8	合掌形	1.4×1.6	高さ0.6		古代	68	38,41	21-2,3			木組み遺構655	
656	4 C	G18-α8	直線	長さ1.1	高さ0.5		中世?	68	38,40	24-3			藤原遺構656	
659	2 A	G17-β7- β8-9	円形	幅8.0	0.7	5Y5/1粘土	古墳	19,22, 28,44, 47	12			16・17・ 25-1-5- 7・8・63 -1・10 -15-17	26-29	後円部周産下層
851	2 A	G17-β7	不定形	4.5×3.0			古代	22,34, 35	12	4-4		20-23	33-36	土器附まり851
884	2 B	G18-β3	不定形	2.4×2.2			古代	31,58, 60	30			34	47・48	土器附まり884
1237	1 A	H17-β5-7- α5-7	蛇行	幅15.1	0.25			16,25, 40	11,25			10-1-9- 24・26- 6	37・38	流路1237

駒ヶ谷遺跡 掘立柱建物跡一覧

掘立柱建物跡 1	方向	N-28°-W		構造	桁行 梁行	ピット	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行 梁行		直径 範囲	55~71cm	
				規模	桁行 梁行	ピット	直径 平均	63cm	ピット123 土師器・甕片出土
				面積	27.36m ²		深さ 範囲	33~60cm	
				時期	—	備考	深さ 平均	43cm	破片につき時期不確定
				図	51		写真	16-3	
				本文	83,90				図 — 写真 —
掘立柱建物跡 2	方向	N-37°-W		構造	桁行 梁行	ピット	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行 梁行		直径 範囲	45~63cm	
				規模	桁行 梁行	ピット	直径 平均	56cm	ピット16 土師器・甕片出土
				面積	17.55m ²		深さ 範囲	18~42cm	
				時期	—	備考	深さ 平均	34cm	破片につき時期不確定
				図	51		写真	16-3・4	
				本文	83,90				図 — 写真 —
掘立柱建物跡 3	方向	N-10°-E		構造	桁行 梁行	ピット	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行 梁行		直径 範囲	55~70cm	
				規模	桁行 梁行	ピット	直径 平均	66cm	ピット226・228・234 飛田の土師器出土
				面積	10.54m ²		深さ 範囲	17~62cm	
				時期	7世紀後~8世紀前	備考	深さ 平均	36cm	ほぼ時期確定
				図	52		写真	18-1・2	
				本文	83,90				図 — 写真 —
掘立柱建物跡 4	方向	N-16°-W		構造	桁行 梁行	ピット	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行 梁行		直径 範囲	35~70cm	
				規模	桁行 梁行	ピット	直径 平均	57cm	ピット186・187・190~194 土師器・杯C、鉢片出土
				面積	8.40m ²		深さ 範囲	26~47cm	
				時期	7世紀後~8世紀前	備考	深さ 平均	36cm	ピット189形状不明 ほぼ時期確定
				図	52		写真	18-1・19-1	
				本文	83,90				図 — 写真 —
掘立柱建物跡 5	方向	N-7°-E		構造	桁行 梁行	ピット	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行 梁行		直径 範囲	20~70cm	
				規模	桁行 梁行	ピット	直径 平均	51cm	ピット252・254~257 土師器・甕頸部、杯片出土
				面積	8.99m ²		深さ 範囲	20~38cm	
				時期	7世紀後~8世紀前	備考	深さ 平均	27cm	ほぼ時期確定
				図	52		写真	18-1・3	
				本文	83,90				図 — 写真 —
掘立柱建物跡 6	方向	N-29°-W		構造	桁行 梁行	ピット	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行 梁行		直径 範囲	45~65cm	
				規模	桁行 梁行	ピット	直径 平均	57cm	ピット303・304・306 土師器・甕体部片出土
				面積	11.22m ²		深さ 範囲	20~30cm	
				時期	8~9世紀	備考	深さ 平均	27cm	時期確定できず
				図	52		写真	19-3	
				本文	83,90				図 — 写真 —

掘立柱建物跡	7	方向	N-25°-W	構造	桁行	梁行	形状	円形	出土遺物
				規模	桁行	梁行			
				面積	25.56m ²	備考	破片につき時期不確定 北側に底を設ける	ピット99 羽釜片出土	
				時期	9世紀以降				直径
掘立柱建物跡	8	方向	N-43°-W	構造	桁行	梁行	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行	梁行			
				面積	24.19m ²	備考	破片につき時期不確定	ピット140 土師器・壺体部片出土	
				時期	8世紀				直径
掘立柱建物跡	9	方向	N-20°-W	構造	桁行	梁行	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行	梁行			
				面積	?m ²	備考	ほぼ時期確定	ピット307-310 土師器・鍋把手、壺体部片 出土	
				時期	8世紀				直径
掘立柱建物跡	10	方向	N-12°-W	構造	桁行	梁行	形状	円形	出土遺物
				規模	桁行	梁行			
				面積	?m ²	備考	ほぼ時期確定	ピット618・619 Ⅲ-1(尾上編年)?の瓦器 2点出土	
				時期	12後~13世紀				直径
掘立柱建物跡	11	方向	N-26°-W	構造	桁行	梁行	形状	隅丸方形	出土遺物
				規模	桁行	梁行			
				面積	12.95m ²	備考	ほぼ時期確定	ピット828 土師器・甕片など出土	
				時期	8世紀前~中				直径
掘立柱建物跡	12	方向	N-8°-W	構造	桁行	梁行	形状	円形	出土遺物
				規模	桁行	梁行			
				面積	7.92m ²	備考	746.751.783-深さなし	ピット746・751・755・783 845・846	
				時期	9世紀以降				直径
				図	12				
				写真	6-2				
				本文	19,26				

掘立柱建物跡 13 方向 N-8°-W		構造	桁行 梁行	6 1	ピット	形状	円形	出土遺物 ピット931・933・937・1021 黒色土器片出土
		規模	桁行 梁行	12.1 4.3		直径 範囲	30~60ca	
		面積		52.03㎡		直径 平均	50ca	
		時期		9世紀以降		深さ 範囲	12~46ca	
		図		30・31		深さ 平均	34ca	
掘立柱建物跡 14 方向 N-29°-W		構造	桁行 梁行	3 2	ピット	形状	隅丸方形	出土遺物 ピット1095・1098・1102 土師器・杯、壺・サスカイト 片出土
		規模	桁行 梁行	5.7 3.6		直径 範囲	39~76ca	
		面積		20.52㎡		直径 平均	70ca	
		時期		8~9?世紀		深さ 範囲	14~42ca	
		図		36		深さ 平均	28ca	
掘立柱建物跡 15 方向 N-19°-W		構造	桁行 梁行	2 2	ピット	形状	隅丸方形	出土遺物 出土遺物なし
		規模	桁行 梁行	3.5 3.2		直径 範囲	44~70ca	
		面積		11.20㎡		直径 平均	58ca	
		時期		8~9世紀		深さ 範囲	12~34ca	
		図		36		深さ 平均	24ca	
掘立柱建物跡 16 方向 N-14°-W		構造	桁行 梁行	2< 1	ピット	形状	円形	出土遺物 ピット1100 土師器・壺片出土
		規模	桁行 梁行	3.1 3.2		直径 範囲	29~38ca	
		面積		9.92㎡		直径 平均	33ca	
		時期		9世紀以降?		深さ 範囲	4~20ca	
		図		36		深さ 平均	12ca	
掘立柱建物跡 17 方向 N-9°-W		構造	桁行 梁行	3 2	ピット	形状	円形	出土遺物 遺物出土せず
		規模	桁行 梁行	4.6 2.7		直径 範囲	30~52ca	
		面積		12.42㎡		直径 平均	42ca	
		時期		—		深さ 範囲	10~30ca	
		図		36		深さ 平均	19ca	
掘立柱建物跡 18 方向 N-1°-E		構造	桁行 梁行	5 1	ピット	形状	円形	出土遺物 ピット995
		規模	桁行 梁行	11.5 3.4		直径 範囲	20~46ca	
		面積		39.10㎡		直径 平均	28ca	
		時期		9世紀以降?		深さ 範囲	11~36ca	
		図		36		深さ 平均	20ca	
		写真	11-2	備考	西側に庇を設ける 破片につき時期不確定			
		本文	62					

掘立柱建物跡	19	方向	N-18°-W		構造	桁行	梁行	ビット	形状	円形	出土遺物	
					規模	桁行	梁行		直径	範囲		22~61cm
					面積	8.16m ²			直径	平均	34cm	
					時期	9世紀以降?			深さ	範囲	5~38cm	
					図	39			深さ	平均	18cm	
					写真	22-2			時期不明		遺物出土せず	
					本文	67, 72			備考			
									図	—	写真	—
掘立柱建物跡	20	方向	N-2°-W		構造	桁行	梁行	ビット	形状	円形	出土遺物	
					規模	桁行	梁行		直径	範囲		23~57cm
					面積	48.38m ²			直径	平均	31cm	
					時期	9世紀以降			深さ	範囲	6~52cm	
					図	30・31			深さ	平均	28cm	
					写真	—			破片につき時期不確定		ビット938・949・957 黒色土器・瓦器片出土	
					本文	49, 54			備考			
									図	—	写真	—
掘立柱建物跡	21	方向	N-2°-E		構造	桁行	梁行	ビット	形状	円形	出土遺物	
					規模	桁行	梁行		直径	範囲		18~54cm
					面積	17.15m ²			直径	平均	26cm	
					時期	12世紀前~中			深さ	範囲	15~42cm	
					図	30・31			深さ	平均	25cm	
					写真	—			破片につき時期不確定		ビット912・917 土師器片出土、 黒色・瓦器なし	
					本文	49, 50, 51			備考			
									図	—	写真	—
掘立柱建物跡	22	方向	N-2°-W		構造	桁行	梁行	ビット	形状	円形	出土遺物	
					規模	桁行	梁行		直径	範囲		20~35cm
					面積	14.05m ²			直径	平均	26cm	
					時期	12世紀前~中			深さ	範囲	10~50cm	
					図	30・31			深さ	平均	25cm	
					写真	—			破片につき時期不確定		ビット915・919・976・1018 土師器破片出土 黒色・瓦器なし	
					本文	60, 54			備考			
									図	—	写真	—
掘立柱建物跡	23	方向	N-25°-E		構造	桁行	梁行	ビット	形状	円形	出土遺物	
					規模	桁行	梁行		直径	範囲		32~64cm
					面積	30.45m ²			直径	平均	38cm	
					時期	9世紀以降			深さ	範囲	15~61cm	
					図	—			深さ	平均	29cm	
					写真	—			備考		ビット215・330・338・344 354・479・484 黒色土器あり	
					本文	87			備考			
									図	—	写真	—
掘立柱建物跡	24	方向	N-21°-E		構造	桁行	梁行	ビット	形状	円形	出土遺物	
					規模	桁行	梁行		直径	範囲		22~41cm
					面積	11.55m ²			直径	平均	27cm	
					時期	9世紀以降?			深さ	範囲	5~21cm	
					図	—			深さ	平均	14cm	
					写真	—			破片につき時期不確定		ビット251・281・282・285 287・289・508	
					本文	87			備考			
									図	—	写真	—